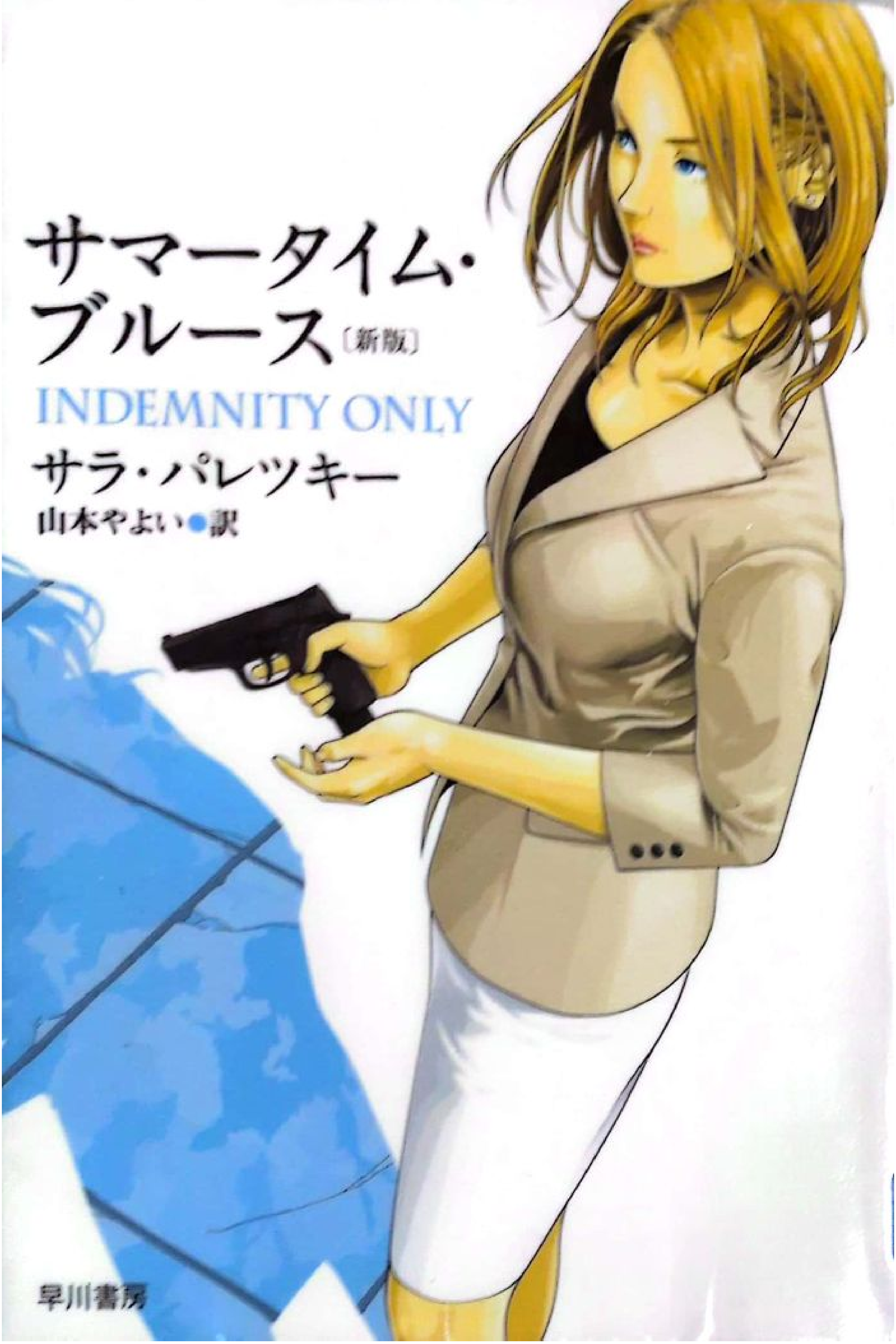
サマータイム・ブルース〔新版〕

INDEMNITY ONLY

サラ・パレツキー

山本やよい◉訳



早川書房

CamScannerでスキャン

目次

1 サマータイム 9
2 大学を離れて 24
3 プロの手並み 52
4 わたしを歓迎してくれたため
（わたしは組合から目を離さない） 67
5 ゴールド・コースト・ブルース 103
6 夜の冷気のなかで 116
7 友人の小さな協力 139
8 ノックをしない客もいる 169
9 保険金の支払請求 190
10 うるわしき一族 203
11 友情ある説得 227

CamScannerでスキャン

12　酒場をさがして　251
13　キキの番長　282
14　夜の熱気のなかで　305
15　紅金の乙女　326
16　保険金請求の代価　362
17　ニコルズ通りの決闘　377
18　血と黄金と[illegible]　399
あとがき　4[illegible]
解説　[illegible]　4[illegible]

登場人物

V・I・ウォーショースキー……………………私立探偵
ジョン・L・セイヤー……………………信託銀行の専務
ピーター……………………ジョンの息子
スーザン・ソーンデイル……………………ジョンの長女
ジャック……………………スーザンの夫
ジル……………………ジョンの次女
ヤードリー・マスターズ……………………保険会社の部長
ラルフ・デヴロー……………………ヤードリーの部下
アンドリュー・マグロー……………………国際労組の委員長
アニタ……………………アンドリューの娘
アール・シュマイセン……………………暗黒街のボス
ジョー／フレディ／トニー・ブロンスキー……………………アールの手下
マリ・ライアスン……………………新聞記者
ジョン・マゴニガル……………………部長刑事
ボビー・マロリー……………………警部補
ロティ・ハーシェル……………………医者

1 サマータイム

夜の空気はねっとりと湿っていた。わたしはミシガン湖沿いに南へ車を走らせながら、よどんだ大気のなかにほのかな香水のごとく漂う、腐りかけたエールワイフ（ニシン科の食用魚）の臭いを嗅いだ。夜遅いバーベキューの小さな火が、公園のあちこちで輝いていた。湖上では、緑や赤の航海灯が、涼を求めて蒸し暑い大気から逃れた人々を示していた。陸の上では車が混みあい、街は休むことなく動きつづけ、呼吸しようとしている。シカゴはいま、七月だった。

ランドルフ通りでレイク・ショア・ドライヴを離れると、高架鉄道の鉄のアーチの下を通ってウォバッシュ・アヴェニューを南下した。モンロー通りとの交差点で停車して、車を降りた。

湖から離れると、街はけっこう静かだ。サウス・ループはのぞき、ショーをやっている数

CamScannerでスキャン

軒の店と市の拘置所以外にはなんの娯楽施設もない地域で、いまは人影もまばらである——千鳥足で危なっかしく通りを行く酔っぱらいが、わたしのただ一人の連れだ。わたしはウォバッシュを渡り、モンロー通りの煙草屋の隣にあるプルトニー・ビルに入っていった。夜になると、ここは事務所を置くには物騒すぎる場所のように思えてくる。モザイク模様のタイルをはめたホールの壁はあちこち欠けて、薄汚れている。すり減ったリノリウムの床をいままでに磨いた人間は、はたしているのだろうか。ロビーには、依頼人となるかもしれない人々を安心させる雰囲気が漂っていなければならないのに。

わたしはエレベーターのボタンを押した。反応がなかった。もう一度やってみた。やはり反応なし。吹抜けの階段へ出るための重いドアを押しあけて、のろい足どりで四階まで上がった。吹抜けはひんやりとしていて、わたしはそこで二、三分涼んでから、照明の薄暗い廊下をビルの東端に向かって歩きはじめた。こちらの端はオフィスがいずれもウォバッシュの高架鉄道に面しているため、賃貸料が割安になっている。薄暗い照明の下で、ドアの文字が読めた。〈V・I・ウォーショースキー、私立探偵〉

さきほど、ノース・サイドのガソリン・スタンドから応答サービスに電話を入れてみた。シャワーと、エアコンと、遅い夕食の待つわが家へ帰る途中で必ずおこなう確認である。誰かから電話があったといわれて驚き、その男がどうしても名前を明かさなかったと告げられて気が滅入った。電話口で名前を告げない人間は厄介なものだ。たいてい何かを隠し

ていて、しかもそれが犯罪に関係している場合が多く、隠していることをこちらに前もって知られないための用心に、名前をいわずに電話を切ってしまう。

今日の男は九時十五分に訪ねてくるという。それじゃ食事の時間もとれない。わたしは千五百ドル貸しのある印刷業者の居所を突き止めようと、オゾンに満ちた熱気のなかで無益な午後をすごしたところだった。彼の会社が去年の春に全国チェーンから除名されそうになったのを救ったのだが、わたしはいま、それを後悔していた。わたしの当座預金が青息吐息の状態でなかったなら、こんな電話は無視していただろう。しかし実際には、肩を怒らせてドアの鍵をあけたのだった。

明かりをつけると事務所はスパルタ風に見えたが、決して不快な感じではなく、わたしはわずかに元気をとりもどした。いつも散らかり気味のアパートメントと違って、事務所のほうはたいていきちんと片づいている。大きな木製デスクは警察の競売で買ったもの。オリヴェッティのポータブル・タイプライターは、緑色の書類キャビネットの上にかかっているウフィッツィ美術館の絵の複製と同じく、母の形見である。複製のほうはここを訪れる客に、うちが一流の事務所であることを印象づけるためにかけてあるのだ。ほかに背もたれのまっすぐな依頼人用の椅子二脚、以上が備品のすべてである。わたしはここで長時間すごすわけではないので、それ以外の調度は必要ないと思っている。

数日ぶりに事務所へ寄ったため、選り分けるべき請求書や広告類が山のようにたまって

いた。コンピュータ会社からは、コンピュータを使えばどれほど仕事が楽になるかを実地に説明したいので、都合のいい日を知らせてほしいといってきていた。すてきなデスクトップ型のIBMに、金払いのいい客を見つけてくる能力があるのだろうか。

室内はむっとしていた。請求書に目を通し、どれが急を要するかを調べた。自動車保険――これは払ったほうがいい。あとの分は捨てた。大部分が初めての請求書で、二回目のも少し混じっていた。わたしは三回目の請求書が送られてくるまで支払いをしない主義である。向こうだってどうしても金が欲しければ、忘れるはずはない。保険の請求書をショルダー・バッグに突っこむと、窓ぎわに寄ってエアコンのスイッチを〈強〉にした。部屋がまっ暗になった。プルトニーの頼りにならない電気系統のヒューズが飛んでしまったのだ。まぬけ。こんなビルでエアコンをいきなり〈強〉にするほうが間違っている。わたしは自分自身とビルの管理会社とを半々に呪い、ヒューズ・ボックスのある備品室は夜もあいているだろうかと考えた。このビルで過ごした何年かのあいだに、月にほぼ一回のわりでトイレの水が逆流する七階の洗面所も含めて、わたしはビル内の故障の大部分を修理できるようになっていた。

廊下をもときたほうへもどり、階段を使って地下まで降りた。たった一個の裸電球が階段の一番下を照らしていた。明かりのなかに備品室のドアの南京錠が見える。このビルの無愛想な管理人トム・チャーニックは、どんな人間も信用していないらしい。わたしは何

種類かの錠前をあけることができるが、いまはアメリカ式南京錠に費やす時間はない。そのうち、折りを見て試してみよう。イタリア語で十まで数えてから、前よりもさらに熱意を失ってさきほどの階段をのぼりはじめた。

前方に足音が聞こえたので、たぶんわたしを訪ねてきた匿名の客だろうと考えた。四階までのぼると、吹抜けのドアをノックしている男を観察した。男はわたしの事務所のドアをそっとあけているところだった。薄暗い照明を受けた男を観察した。男は強引にノックを続けたが、いくら叩いても応答がないとわかると、躊躇なくドアをあけて、なかに入った。わたしも廊下を歩いてゆき、彼に続いた。

通りの反対側にある〈アーニーのステーキ店〉で高さ五フィートのネオンが赤や黄色にまたたいて、わたしの事務所にちかちかした光を投げかけていた。ドアをあけると同時に、客があわてて振り向くのが見えた。「V・I・ウォーショースキーに会いたいのだが」その声はハスキーだが、自信にあふれていた――自分の意見を押し通すことに慣れている男の声だ。

「はい」とわたしは答え、彼の横をすり抜けてデスクの向こうにすわった。

「はい？　なんのことだ」男が尋ねた。

「つまり、わたしがV・I・ウォーショースキーです。応答サービスに電話を入れて、ア

ポイントをおとりになった方ですね」
「そうだ。しかし、四階分の階段を歩いてのぼったあげく、まっ暗なオフィスへ入ること
になろうとは思わなかった。どうしてエレベーターが使えないんだ」
「このビルを借りてる人たちはフィットネス狂いなんです。エレベーターはやめようって、
みんなで決めました——階段をのぼるのが心臓発作の予防になることは、よく知られてま
すから」
アーニーの店で光がまたたいた瞬間、彼が腹立たしげなしぐさをするのが見えた。「わ
たしがここへきたのは、喜劇女優のせりふを聞くためではない」ハスキーな声をこわばら
せて、彼はいった。「わたしが質問するときには、きちんと答えてもらいたい」
「でしたら、まともな質問をしてください。なぜ私立探偵が必要なのか、その理由を話し
ていただけます？」
「待ってくれ。むろんわたしには助けが必要だが、この部屋では——ひどすぎる——どう
してこんなに暗いんだ」
「照明が消えてるからです」わたしは怒りがつのるのを感じた。「事務所の様子がお気に
召さないなら、どうぞお引きとりください。わたしも匿名で電話なさる方は好きになれま
せん」
「わかった、わかった」彼はなだめすかすようにいった。「そうカッカしないで。しかし、

暗闇のなかにすわらねばならんのかね」

わたしは笑った。「あなたがいらっしゃる二、三分前に、ヒューズが飛んでしまったんです。明かりをお望みでしたら、〈アーニーのステーキ店〉へ行きましょう」わたしのほうも、彼をじっくりながめるのに異存はない。

彼は首を横に振った。「いや、ここでかまわない」あたりをせかせかと見まわしてから、客用の椅子のひとつにすわった。

「お名前は？」彼が考えをまとめているあいだの沈黙を埋めるために、わたしは訊いた。

「あ、これは失礼」といって、彼は札入れをさぐった。名刺を一枚抜いて、デスクごしに渡してよこした。わたしはそれをかざし、アーニーの店の閃光で文字を読んだ。〈フォート・ディアボーン信託銀行・信託部専務取締役、ジョン・L・セイヤー〉わたしは口をすぼめた。わたしがラ・サール通りまで出かけることはあまりないが、ジョン・セイヤーはシカゴ最大の銀行でも特に評判の実力者だ。すごい幸運。この魚をうまく料理するのよ、ヴィク――わたしは自分にいいきかせた。部屋代がやってきた！

名刺をジーンズのポケットにしまった。「どうも、ミスタ・セイヤー。ところでどのようなご用件ですか」

「じつは息子のことなんだ。いや、息子のガールフレンドのことだ。とにかく、その娘のおかげで――」彼は不意に黙りこんだ。多くの人間、特に男たちは自分の悩みを打ち明け

CamScannerでスキャン

るのに慣れていなくて、先へ進むのに時間がかかる。「まあ、きみの感情を害するつもりはないんだが、きみに話していいものかどうか決心がつかんのだ。共同経営者とか、そういった人がいないことにはね」

わたしは何も答えなかった。

「共同経営者はいるのかね」彼はしつこかった。

「いいえ、ミスタ・セイヤー」わたしは冷ややかに答えた。「共同経営者はおりません」

「そうか、こいつは若い女が一人でできる仕事じゃないんだ」

わたしの右側のこめかみで、血管がどくどくと脈打ちはじめた。「わたしは暑いなかで長い一日をすごしたあげく、ここであなたに会うために、夕食まで抜いたんですよ」怒りのために、声がかすれていた。咳払いして怒りを静めようと努めた。「こちらが無理に訊き出すまでは、名前を明かそうともなさらなかった。この事務所とわたしを選んでおきながら、直接には何ひとつ頼めないというわけですね。わたしが正直で、金持ちで、タフかどうかを、それとも何かほかのことを調べようというおつもりですか。人物を保証するものがほしければ、そうおっしゃってください。でも、こんなふうにわたしの時間をつぶすのはやめてもらえませんか。あなたと言い争ってまで仕事をもらう必要はありませんもの

——夜遅くに無理やり会おうとなさったのは、あなたのほうよ」

「きみの正直さを疑っているわけではない」あわてて彼はいった。「いいかね、きみを怒

らせるつもりはないんだ。しかしきみは若い女だ、仕事が手に負えなくなるかもしれん」
「わたしは一人前の女性です、ミスタ・セイヤー、ですから、自分の身は自分で守れます。それができなければ、こんな職業を選んだりしません。事態が手に負えなくなれば、なんとか切り抜ける方法を考えだすか、最後まで徹底的にやり抜くかのどちらかです。それはわたしの問題で、あなたには関係ないことです。では、息子さんのことをお話しくださいますか。それともわたし、家に帰ってエアコンをつけてもいいでしょうか」
彼はしばらくのあいだ考えこみ、わたしは心を静めて喉の緊張をやわらげるために、数回深呼吸した。
「弱ったな」ようやく彼はいった。「気は進まんが、選択の余地はなさそうだ」顔を上げたが、わたしにはその顔が見えなかった。「いまから話すことすべてについて、秘密厳守をお願いする」
「いいですとも、ミスタ・セイヤー」わたしはうんざりした口調でいった。「あなたと、わたしと、〈アーニーのステーキ店〉だけの秘密です」
彼は息を止めたが、わたしを手なずけようとしていたのを忘れていなかった。「じつは息子のガールフレンド、アニタのことなんだ。もっとも、ピートのほうも――わたしの息子だ――問題がないわけではないが」
麻薬だ、わたしは不快な気分で考えた。こうしたノース・ショア・タイプの連中が気に

かけるのは麻薬のことだけだ。妊娠なら中絶費用を与えて、かたをつける。しかし、いまのわたしは選り好みできる立場にはないので、低くぼやいて自分を元気づけた。

「まあ、このアニタって娘はじつをいうと、あまり望ましい相手ではなくて、その子とつきあうようになってから、ピートは妙な考えにとりつかれてしまった」彼のハスキーな声で聞くと、その言葉は奇妙に堅苦しい響きを持っていた。

「わたしはただの探偵にすぎないんですよ、ミスタ・セイヤー。男の子の考えてることをどうこうしろといわれても、それは無理です」

「いやいや、そんなことはわかっている。とにかく聞いてくれ――二人はどこかの汚らわしいコミューンみたいなところで、一緒に暮らしている。二人がシカゴ大学の学生だってことはもう話したかね。それはさておき、息子、つまりピートは、労働組合の組織員（オルグ）になりたい、ビジネススクールへ進むのはやめる、といいだすようになった。そこでわたしは娘と話しあうために出かけていった。こっちの立場もなんとかわかってもらおうと思ってな」

「彼女の苗字はなんですの、ミスタ・セイヤー」

「ヒルだ。アニタ・ヒル。いいかね、わたしはいまもいったとおり、こっちの立場をわかってもらいたくてわざわざ出かけていったんだ。すると――その直後に娘は姿を消してしまった」

「じゃ、あなたの悩みは解決したわけね」

「それならどんなにいいか。困ったことにピートのやつ、わたしが彼女を金で追っ払った、金を渡して姿を消すよう命じた、といいだしたんだ。娘がもどってこなければ、名前を変えて自分も蒸発するといって脅かすのだ」

だいたいの事情はわかったとわたしは思った。人間を一人見つけ出して、彼女のボーイフレンドをビジネススクールへ行かせるために、わたしは雇われたのだ。

「ところで、彼女が姿を消したのはあなたの差し金だったんですか、ミスタ・セイヤー」

「わたしの？　だったら、この手で彼女を呼びもどせるはずだ」

「そうとは限りません。彼女はあなたから五万ドル脅しとり、それを奪い返されないよう、自分の意志で遠くへ逃げたのかもしれません。完全に姿を消すという条件で、あなたが彼女に金を渡したのかもしれません。または彼女を殺すか、誰かを雇って殺させるかして、その罪をなすりつける人間を捜しているのかもしれません。あなたのような人は、いろんな手づるをお持ちのはずです」

それを聞いて、彼はかすかに笑ったようだった。「ああ、そのどれが真実でもおかしくはない。とにかく彼女を見つけてもらいたいのだ——アニタを」

「ミスタ・セイヤー、せっかくの仕事をお断わりするのはなんですけど、警察に頼んだほうがいいんじゃないですか——こういう仕事ですと、警察のほうがうちなどよりはるかに

敏速にやってくれます」
「警察とわたしは――」といいかけて、彼は口をつぐんだ。「家庭内のいざこざを警察に知られるのはごめんだ」と重苦しい声でいった。
そこには真実の響きがあった――しかし、何をいおうとしたのだろう。「それに、なぜそんなに、事態が手に負えなくなることを心配なさったんでしょう」思ったことがつい口に出てしまった。
彼は椅子のなかでわずかに身体を動かした。「ああいう学生のなかには、かなり暴力的な者もいるのでな」とつぶやいた。わたしは疑いをこめて眉を吊り上げたが、暗いので彼には見えなかった。
「わたしの名前はどこでお聞きになりました?」と訊いてみた。まるで広告の調査だ――うちの名前をお知りになったのは《ローリング・ストーン》で? それともお友達を通じて?
「職業別電話帳（イエロー・ページ）で見つけた。ループに事務所を持つ人物、しかもわたしの――商売仲間とは関わりのない人物を捜してたんだ」
「ミスタ・セイヤー、うちの料金は一日百二十五ドル、それに経費が加わります。それから前金として、五百ドルいただきます。調査報告書は作成しますが、お客さまから調査方法の指図を受けることはお断わりします――あなたが未亡人や孤児たちから、フォート・

ディアボーンの信託部の運営方法を教わる必要がないのと同じことです」
「では、仕事を引き受けてくれるんだね」
「ええ」わたしは短く答えた。その娘が死んでいないかぎり、見つけだすのはそう骨の折れる仕事ではないだろう。「大学での息子さんの住所を教えてくださいな」もうひとつつけ足した。「娘さんの写真をお持ちでしたら、それも一枚」
彼はこの言葉にためらいを見せ、何かいいかけたが、結局は教えてくれた。サウス・ハーパー五四六二。わたしはそれが正しい住所であることを願った。彼はまた、アニタ・ヒルの写真も渡してくれた。ちかちか点滅する光のなかではどうにも見分けにくかったが、それは学校の同期生アルバムから切り抜いた写真のようだった。わたしの依頼人は、調査の進みぐあいについてはオフィスではなく自宅のほうへ電話してほしいといった。わたしはさっきの名刺に彼の自宅の電話番号を書きとめて、ポケットにもどした。
「何かつかむまでに、どのくらいかかるかね」
「調査にかかってみないことには、なんとも申し上げられません、ミスタ・セイヤー。でも、明日一番にこの仕事にかかります」
「今夜のうちに向こうへ行ってみればいいのに」彼は頑固にいった。
「ほかに用がありますので」と、そっけなく答えてやった。たとえば、夕食や酒など。
彼はなおも議論を続けたが、それはわたしの気持ちが変わるのを期待してというよりも、

自分の意見を押し通すのに慣れているせいだった。ついに彼はあきらめて、百ドル札を五枚差しだした。

わたしは目を細めて、アーニーの店の明かりでそれらを見た。「小切手でいただきたいんですが、ミスタ・セイヤー」

「私立探偵を訪ねたことをオフィスの連中に知られたくないのだ。それに、わたしの小切手帳は秘書が金額の照合をおこなっている」

わたしは一瞬啞然としたが、意外だとは思わなかった。驚くべき数の重役たちが秘書にその仕事を押しつけている。わたし個人の感覚では、わたしの財政事情を知る権利のあるのは神と、国税庁と、わたしの銀行だけであるべきだった。

彼は帰ろうとして席を立ち、わたしも彼と一緒に部屋を出た。ドアの鍵をかけたとき、彼はすでに階段を降りはじめていた。その顔をもっとよく見ておこうと思い、あわててあとを追いかけた。依頼人をもう一度確認するために、シカゴじゅうの男を明滅するネオンの下で見るはめになってはたまらない。吹抜けの照明はさほど明るくはなかったが、明かりを受けた彼の顔は四角くていかつい感じだった。アイルランド系の顔立ちで、どちらかといえば、ディアボーン砦の副司令官と聞いてわたしが想像するような人物ではない。彼のスーツは高価そうで仕立ても上等だが、全国第八位の銀行よりエドワード・G・ロビンソンの映画から出てきたというほうが似合いだった。しかし、それなら、わたしは探偵ら

しいといえるだろうか。考えてみれば、女たちが何で生計を立てているかを、その外見から判断しようとする人間はほとんどいない——わたしの職業を聞くと、人々はたいてい絶句する。

わたしの依頼人は東へ折れ、ミシガン・アヴェニューに向かった。わたしは肩をすくめ、通りを渡ってアーニーの店に入った。店主はジョニー・ウォーカーの黒のダブルと、彼専用にとりわけてあるサーロインを出してくれた。

2　大学を離れて

朝早く目をさますと、今日もきのうと同じく、蒸し暑い一日になりそうな気配だった。一週間のうち四日は、無理にでも何か運動をしようと心がけている。この二日間、暑さが衰えることを願いつつさぼってきたが、今朝はそろそろ腰を上げたほうがいいと決心した。三十代をなつかしむ年齢になったとき、運動せずにすごした日々が多くなればなるほど、ふたたび運動を始めるときの辛さが増すものだ。それにまた、わたしはダイエットより運動のほうが楽だというほど鍛えぬいているわけではなく、ランニングは体重を落とす手助けにおこなっているだけである。べつにこれが好きでたまらないというのではない。今朝のような場合はとくに。

ジョン・セイヤーがくれた昨夜の五百ドルはわたしをかなり元気づけてくれて、うきうきした気分で、カットオフ・ジーンズとTシャツを身につけた。おかげで、表に出たときも不快な大気を忘れることができた。五マイルを軽く走った――湖に出てベルモント・ハーバーをまわり、ホールステッド通りに面した広くて安いわたしのアパートメントへもど

るコースである。まだ八時半だというのに、暑いなかを走ったおかげで、汗だくになっていた。トールグラスでオレンジジュースを飲み、シャワーを浴びる前にコーヒーをいれた。ランニング用の衣類は椅子の上に脱ぎすて、ベッドは放っておくことにした。どうせ仕事に出るのだし、時間もない――それに、誰がここをのぞいたりするだろう。

コーヒーを飲み、燻製ニシンをつまみながら、わたしは行方不明のガールフレンドの件につき、どうやってピーター・セイヤーに近づくかを決めようとした。彼の家族が娘を敵視しているのなら、彼はおそらく、父親が彼女の失踪を調査させるために私立探偵を雇ったことに怒りをぶつけるだろう。大学関係の人間になりすます必要がある――彼女と同じクラスのひとつを受講している学生がノートを借りに寄った、というのはどうか。いや、わたしは大学生にしてはひねすぎている。それに、彼女が夏期講座に登録していなかったらどうするのだ。ならば反体制派の機関誌の人間に化けて、彼女に記事を頼みたくてやってきた、といってみてはどうだろう。労働組合に関する記事がいい――セイヤーの話では、彼女はピーターを組合の組織員(オルグ)にしようと必死だそうではないか。

わたしは皿を流しの横に積み重ね、それらをながめて考えこんだ。あと一日したら、洗わなくては。しかし、生ごみはきちんと捨てた。わたしは散らかし屋だが、無精者ではない。しばらく前からの新聞がたまっていたので、二、三分をさいて外のごみバケツの隣に運んだ。ビルの管理人の息子がアルバイトに新聞紙の回収をやっているのだ。

ジーンズをはき、黄色い木綿のセーターを着て、鏡のなかの姿を点検してから、きびしい目で合格点をつけた。夏はわたしが一番きれいに見える季節だ。イタリア人の母からオリーヴ色の肌を受けついだおかげで、日焼けするとてもきれいになる。わたしは自分に笑いかけた。母の言葉が聞こえてくる。「ええ、ヴィク、きれいよ——だけど、きれいなだけじゃだめ。若い娘は誰だってきれいだもの——それより、一人でちゃんと生きていこうと思ったら、頭を使わなきゃ。そして仕事を持たなきゃ、専門的な仕事をね。働かなきゃいけないわ」母はわたしがオペラ歌手になることを望んでいて、根気よく仕込んでくれた。娘が探偵になったことを知ったら、さぞかし嘆くにちがいない。父だってそうだろう。父自身も警官で、アイルランド系社会に生きるポーランド人だった。部長刑事より上に昇進できなかったのは、一部には野心の欠けていたせいもあろうが、祖先の血も原因だったにちがいない。しかし、父はわたしには大きな期待を寄せていた……鏡のなかの笑顔がかすかに苦くなり、あわてて顔をそむけた。

サウス・サイドへ向かう前に、銀行に寄って五百ドルを預金した。大事な用は最優先。窓口の係はまばたきもせずに金を受けとった。みんながみんな、この金を見てわたしみたいに感激するとはかぎらない。

レイク・ショア・ドライヴに通じるベルモント・アヴェニューの入口にゆっくりとわたしのシェヴィ・モンザを乗り入れたのは、十時半だった。空はすでにまっ青に晴れわたり、

この時刻に戸外に出ている唯一の人種だった。わたしは湖岸を走って二十三分でハイド・パークに着き、ミッドウェイ・プレザンスに車を駐めた。

大学へきたのは十年ぶりだが、わたしの変わりように比べれば、あたりの風景はほとんど変わっていなかった。何かで読んだのだが、薄汚れた貧乏たらしい大学生たちの格好は五〇年代の端正な服装に道をゆずりつつあるという。その風潮はきっとシカゴをよけて通ったのだ。性別のはっきりしない若者たちが手をつなぎ、あるいはグループになって、髪をぼさぼさに乱したまま、おんぼろのカットオフ・ジーンズや破れたワークシャツを見せびらかすようにぶらついていた――たぶん、このワークシャツが彼らと労働との一番の接点だろう。全学生の五分の一が年収五万ドル以上の家庭の子供といわれているが、どの学生が五分の一かを外見だけで判断するのは差し控えたい。

ぎらぎら照りつける日ざしを逃れてひんやりした石造りの校舎に入り、構内電話の横で足を止めて、教務課を呼び出した。「こちらの学生さんの一人を捜してるんですが。ミス・アニタ・ヒルとかいう名前の」電話の向こうから響いてくる年老いたきいきい声が、しばらく待つようにといった。紙をめくる音が聞こえる。「綴りをいってくださいますか」わたしはいわれたとおりにした。さらに紙をめくる音。きいきい声が、そのような名前の学生はいないと告げた。夏期講座に登録してないって意味ですか。いいえ、そういう名前の

学生は最初からおりません。わたしはピーター・セイヤーの分も訊いてみて、相手の女がハーバー・アヴェニューの住所を教えてくれたときにはいささかびっくりした。アニタが存在しないのに、どうして若者だけが存在しているのか。

「お手数をかけて申しわけありませんが、わたし、彼の叔母なんです。あの子が今日どのクラスに出てるか、お教えくださいませんか？　アパートのほうは留守でしたし、わたし、ハイド・パークへは日帰りの予定でまいりましたので」わたしの声は善意にあふれていたにちがいない。なぜなら、ミズ・きいきい声がピーターは今年の夏は登録していないが、政治学部に行けば彼の居所がわかるかもしれないと、恩着せがましく教えてくれたのだ。わたしは善意にあふれた声で彼女に礼をいって、受話器を置いた。

しかめっ面で電話を見ながら、次にとるべき行動を考えた。アニタ・ヒルが存在しないのなら、どうして彼女が見つけられよう。そして、アニタ・ヒルが存在しないのなら、どうして彼女の捜索をわたしに頼んできた人物がいるのだろう。教務課にはそんな娘の記録などないのに、彼はなぜ二人がこの大学の学生だといったのだろう。いや、ひょっとすると、彼女がシカゴ大学の学生だというのは彼の勘違いかもしれない。ルーズヴェルト・ロード（イリノイ大学がある）に通っていて、ハイド・パークに住んでいるのかもしれない。アパートメントを訪ねて、誰かいるかどうか確かめてみることにした。

車にもどった。車内は窒息しそうな暑さ、ハンドルにさわって指をやけどしかけた。う

しろの席に散乱している紙くずのなかに、二、三週間前、砂浜へ持って行ったタオルがあるはずだ。紙くずをひっかきまわしてタオルを捜しだし、ハンドルにかぶせた。この界隈にきたのは久しぶりなので、一方通行の道路でまごまごしたが、ようやくハーパー・アヴェニューにたどり着いた。五四六二番地はもともとは黄色いレンガ造りの、三階建てのビルだった。入口の通路は高架鉄道の駅に似た臭いがした——かびくさく、かすかな小便の臭気が漂っている。〈ハロルドのチキン小屋〉と文字の入った紙袋がくしゃくしゃに丸めて片隅に捨ててあり、肉をかじったあとの骨がそばに何本かころがっていた。奥に見えるドアは枠のなかでだらしなくたわんでいた。錠はかなり前からなくなっているのだろう。かつて茶色だったペンキはあちこち傷つけられ、はげ落ちていた。わたしは鼻にしわを寄せた。セイヤー家の者たちが息子の住む家を気に入っていないからといって、彼らを非難することはできない。

呼鈴パネルに並んだ名前は、手書きの索引カードをテープで壁に貼りつけたものだった。セイヤー、バーン、スタイナー、マグロー、そしてハラタ、以上が三階のアパートメントの住人。これがわたしの依頼人を怒らせていた汚らわしいコミューンにちがいない。ヒルの名はない。彼がアニタの苗字を聞き違えたのだろうか。あるいは彼女が偽名を使っていたのだろうか。呼鈴を鳴らして待った。返事はない。もう一度鳴らした。やはり返事はない。

ちょうど正午になったので、休憩しようと決めた。近くのショッピング・センターにあったと記憶しているハンバーガーの〈ウィンピーズ〉は、ギリシャ風を模した涼しくて魅力的なレストランに変わっていた。わたしはおいしいカニサラダを食べ、シャブリを一杯飲んで、歩いてアパートメントへもどった。学生たちはたぶん夏のアルバイトに出ていて、五時まで帰ってこないだろうが、この日の午後、わたしは料金を踏み倒した印刷業者を捜す以外に何もすることがなかった。

さきほどと同じく返事はなかったが、呼鈴を鳴らしている最中に、だらっとした感じの若い男が出てきた。「セイヤーさんとバーンさんが借りてる部屋に、誰かいるかどうか知らない？」と訊いてみた。彼は生気のない目でわたしを見てから、この数日誰も見かけていないとつぶやいた。わたしはポケットからアニタの写真を出して姪を捜しているのだといった。「この時刻には帰ってなきゃいけないんだけど、わたしの聞いた住所がまちがってるのかしら」とつけ加えた。

彼は退屈そうな顔でわたしを見た。「ああ、この子ならここに住んでる。名前は知らないけどさ」

「アニタよ」とわたしはいったが、彼はすでによろよろした足どりで表に行ってしまった。わたしは壁にもたれてしばらく考えこんだ。夜まで待って、帰ってきた人物に会うのもいいだろう。逆に、いますぐなかに入れば、質問によって得られるよりも多くのことを、こ

の手でじかにつかむことができるかもしれない。

さっききたとき、奥のドアには錠がついていないのを目にしていたので、そのドアをあけて、急いで三階まで駆け上がった。セイヤーとバーンのアパートメントのドアをがんがん叩いた。応答なし。ドアに耳を押しあてると、ウィンドー・エアコンのかすかなうなりが聞こえた。ポケットから鍵束をひっぱり出し、二、三回失敗したのちに、錠をかちりと押しもどせる鍵を見つけ出した。

なかに入り、そっとドアをしめた。狭い玄関のすぐ奥が居間になっている。デニムでくるんだ大きなクッションがむき出しの床にいくつかころがり、ステレオのセットが置いてあるだけの、がらんとした部屋だった。ステレオに近づいて、見てみた——ケンウッドのターンテーブルと、JBLのスピーカー。ここの住人は金持ちなのだ。わたしの依頼人の息子にちがいない。

居間を抜けると廊下があって、両側に部屋が並んでいた。貨車タイプである。廊下を奥へ進むと、腐りかけた生ごみかネズミの死骸のような異臭が鼻をついた。ひとつひとつの部屋に頭を突っこんでみたが、何もない。廊下の突き当たりに台所があった。臭いはそこが一番強烈だったが、その原因はすぐさま理解できた。若い男がキッチン・テーブルにうつぶせに倒れている。彼に近寄った。ウィンドー・エアコンが効いているにもかかわらず、彼の身体は腐敗の初期の段階にさしかかっていた。

CamScannerでスキャン

臭いは強烈で、甘ったるく、吐き気を誘った。カニの肉とシャブリが胃のなかで抗議の行進を始めたが、わたしは吐き気をこらえ、細心の注意を払って若者の両肩を持ち上げた。額に小さな穴があいていた。そこから血が一筋流れ出て顔の途中で乾いているが、顔そのものは傷ついていない。後頭部が無残に砕かれていた。

わたしは注意深く彼をテーブルに横たえた。女の直感とでもいうべきものが、目の前にあるのはピーター・セイヤーの残骸であると告げていた。ここを出て警察に電話すべきであることはわかっていたが、そうすればアパートメントを調べる機会は二度とないだろう。若者がかなり前に死んだことは明らかだ――警察をあと二、三分待たせたところで罰は当たるまい。

流しで手を洗い、寝室を順々に調べてみようと廊下に引き返した。死体はいつからあそこにあったのだろう。また、同居人たちが誰一人警察に通報しなかったのはなぜだろう。第二の疑問は、電話のそばにテープで貼ってある、バーン、スタイナー、ハラタの夏の住所を記した紙片によって、部分的に解決した。本や書類はあるが服の見当たらない二つの寝室は、この三人のいずれかの組み合わせが使っていたものにちがいない。

三番目の部屋は、死んだ若者と、アニタ・マグローという娘のものだった。無数の本の見返しに、彼女の名前が大きな流れるような文字で記されていた。傷だらけの木製デスクの上には、死んだ若者と娘が湖のそばで撮った写真が額に入れずに飾ってあった。娘は赤

かに見える。依頼人が昨夜渡してくれた同期生アルバムのスナップよりも、こちらのほうがずっとよく撮れていた。こういう娘のためなら、若い男はビジネススクールはおろか、もっと多くのことすら投げ捨ててしまうかもしれない。アニタ・マグローに会ってみたいと思った。

書類にざっと目を通してみたが、ごく一般的なものばかりだった。反労組企業で製造されたシーツの不買運動を呼びかけるビラ、マルクス主義の文献、学生のアパートメントにつきものの大量のノートと学期末レポート。引出しのひとつに、エイジャックス保険会社からピーター・セイヤーにあてた給与明細書二枚が突っこんであるのが見つかった。若者は夏休みのアルバイトをしていたらしい。わたしは掌の上でしばらく明細書を揺らしてから、ジーンズの尻ポケットにねじこんだ。明細書の下にはさらに何枚かの紙片が突っこんであって、ウィネッカの住所が記された有権者登録カードもその一枚だった。それも失敬した。先々何が役に立つかわからない。写真をつまみ上げて、アパートを出た。

外に出るや、オゾンに満ちた空気をむさぼるように吸いこんだ。空気がこんなにいい香りだとは知らなかった。歩いてショッピング・センターまでもどり、二十一管区の所轄署に電話した。父が死んで十年になるが、電話番号はまだ暗記している。

「こちら殺人課、ドラッカーです」不機嫌な声がした。

CamScannerでスキャン

「サウス・ハーバー・アヴェニュー五四六二番地のアパートメントの三階で人が死んでます」

「誰だ、あんた」彼はどなった。

「サウス・ハーバー・アヴェニュー五四六二番地、アパートメントの三階」わたしは繰り返した。「わかった？」電話を切った。

車にもどり、現場を離れた。いずれ、黙って立ち去ったことで警察にうるさくつきまとわれるかもしれないが、いまはとにかく、いくつかのことを整理する必要がある。二十一分で家に着き、ピーター・セイヤーの頭の光景を心から洗い流そうと、時間をかけてシャワーを浴びた。白い麻のパンツと黒い絹のシャツに着換えた――生ける者たちの世界の中心部に自分を置くための、清楚で上品な装いだった。盗んできたさまざまな紙片をジーンズの尻ポケットから出し、写真と一緒に大きなショルダー・バッグに入れた。ふたたびダウンタウンに向かい、事務所に寄って証拠の品々を壁の金庫にしまってから、応答サービスへ問い合わせをおこなった。伝言は何も入っていなかったので、セイヤーがくれた番号にかけてみた。ベルが三回鳴ったところで女の声が答えた。「おかけになった番号、六七四-九一三三は現在使われておりません。番号をお確かめになって、もう一度おかけなおしください」その単調な声によって、昨夜の訪問者の身元についてわたしがかろうじて持ちつづけていたわずかな信頼までもが打ち砕かれた。彼がジョン・セイヤーでないことは

確かだ。では、何者か。そして、なにゆえわたしにあの死体を発見させようとしたのだろう。また、なにゆえ若い娘の話を持ち出し、彼女を偽名で呼んだのだろう。

身元不明の依頼人と身元のわかった死体を抱えて、わたしは自分に与えられた役割はなんだったのかと考え続けた──死体発見者となるべきお人好しの女、それはまちがいない。だが……この数日、ミズ・マグローの姿が見えないという。わたしの依頼人は死体が発見されることを望んだだけかもしれないが、わたしはその娘に強い好奇心を抱いた。

ピーターの父親が息子の死をまだ知らないとしても、父親にそのニュースを知らせることがわたしの仕事に含まれているとは思えなかった。しかし、昨夜の訪問客はジョン・セイヤーにあらずと決めつける前に、氏の写真を手に入れたほうがよさそうだ。〈念には念を入れて〉がわたしのこれまでのモットーである。わたしはしばし下唇を引っぱりながら苦しい思案に頭を悩ませ、どこで写真を手に入れれば騒ぎと面倒を最小限にとどめられるか、そしてわたしが写真を入手したことを誰にも知られずにすむかを、ようやく考えだした。

事務所に鍵をかけ、徒歩でループを横切ってモンローとラ・サールの交差点に出た。フォート・ディアボーン信託銀行は、交差点のそれぞれの角に建つ四つの巨大なビルを占領している。わたしはドアに金色の文字のついたビルを選び、守衛に広報部はどこかと尋ねた。

「三十二階です」守衛はぼそぼそつぶやいた。「約束はおありですか」わたしは清純な微笑を浮かべて、ええ、と答え、彼が吸いさしの葉巻をもう一度くわえるあいだに、すべるように三十二階まで上がってしまった。

広報部の受付にすわっているのはたいてい、容姿端麗で、きれいにマニキュアをした、流行の先端を行く服装の女たちである。ここの受付嬢が着ている身体にぴったりの薄紫のジャンプスーツは、おそらくこの銀行でもっとも突飛な衣装であろう。彼女は人工的な微笑を浮かべ、最新の年次報告書を愛想よく差しだした。わたしも人工的な笑みを絶やさずにエレベーターにもどり、守衛に鷹揚にうなずいてから、ゆったりした足どりで表に出た。

胃袋がまだ少々ひきつっている感じなので、年次報告書を持って〈ロージーのデリ〉へ行き、アイスクリームとコーヒーを頼んでそれに目を通した。信託部専務取締役ジョン・L・セイヤーの写真はほか何人かのお偉方とともに、内表紙に大きく出ていた。ほっそりしていて、肌は日に焼け、銀行家らしいグレイの服装をしている。そして、昨夜の訪問客と似ても似つかないことを確かめるのに、ネオンの光の下で彼を見る必要はなかった。

わたしはふたたび唇をひっぱった。いまごろ、警察は隣近所の聞き込みにまわっているだろう。わたしが持ち去ったために警察にはつかめない手がかりがひとつある。若者の給与明細書だ。エイジャックス保険はループの、ここからあまり遠くない場所に本社を構えている。いまは午後の三時、企業を訪問するのに遅すぎる時刻ではない。

エイジャックスはガラスと鋼鉄でできた現代的な超高層ビルの、六十のフロアすべてを占めている。外から見たかぎりではダウンタウンで一番みにくいビルのひとつだと、わたしはつねづね思ってきた。一階のロビーはくすんだ鴇色で、内装にはわたしの第一印象を変えたくなるようなものは何もなかった。ここの守衛は銀行のときより居丈高で、通行証がなければ通すわけにはいかないといいはった。わたしはピーター・セイヤーと約束があるのだと告げ、彼のいる階を訊いた。

「そうせかさんでもらいたいね」守衛はつっけんどんにいった。「階上に電話するからさ、いいかい、もしもその人が社にいるんなら、あんたを許可するはずだ」

「わたしを許可する？　わたしが社に入るのを許可するって意味でしょ。わたしの存在そのものを許可する権利なんかないはずだわ」

守衛は荒々しい足どりで詰め所に入り、階上に電話した。ミスタ・セイヤーは今日は出社していないと知らされても、わたしは驚かなかった。彼のオフィスの誰かと話をさせてほしいと要求した。女らしく猫をかぶることに飽きてしまい、すさまじい見幕で食ってかかったおかげで、秘書と話す許可を得ることができた。

「V・I・ウォーショースキーと申します」わたしは歯切れよくいった。「ミスタ・セイヤーと会う予定になっているのですが」

電話の向こうで、しとやかな女らしい声が謝った。「セイヤーは今週ずっと休んでおり

ます。自宅のほうへも電話を入れましたが、応答がございません」
「それじゃ、そちらのオフィスにいらっしゃる、どなたか別の方とお話ししたほうがよさそうね」わたしは硬い声をくずさなかった。秘書はなんの用件かを知りたがった。
「探偵事務所の者です。不都合な事態が持ち上がったのでそのことで話をしたいと、ミスタ・セイヤーにいわれたんです。ご本人がいらっしゃらないなら、彼の仕事をご存じのほかの方に話をうかがいたいわ」われながら見えすいた口実だと思ったが、彼女はわたしを電話口に待たせておいて、誰かに相談しに行った。五分後、守衛が相変わらずわたしをにらみつけて拳銃をいじっているさなかに、しとやかな声の女が少々息を切らせながら、電話口へもどってきた。損害査定部長のマスターズ氏が会ってくれるとのことだった。
守衛はわたしを階上に通すことに猛反対だった――わたしが嘘をついているのを期待して、〈しとやかな声〉嬢に電話しなおしたぐらいである。しかし、ついにわたしは四十階に通された。エレベーターを降りたとたん、緑色の絨毯に足が深く沈んだ。絨毯をかき分けつつ、廊下の南端に見える受付めざして進んだ。退屈そうな顔の受付嬢が小説を中断し、片側にタイプライターののったチーク材のデスクで仕事をしている、しとやかな声の若い女のところへわたしを連れていった。そして今度は、彼女がマスターズのところまでわたしを案内してくれた。
マスターズはベアアーズが練習できるぐらい広々とした、湖の眺望のすばらしいオフィス

を持っていた。彼の顔には典型的なビジネス界の成功者が四十五年かかって身につける、充分に満たされた血色のよい表情が浮かんでいて、仕立てのよいグレイの夏物スーツの上からにこやかにわたしを見た。「電話はとりつがないでくれ、エレン」と、部屋を出ようとする秘書にいった。

固い握手をかわしてから、わたしは彼に名刺を渡した。

「で、ご用件はなんでしたかな、ミス――ええと――」彼は恩着せがましく微笑した。

「ウォーショースキーです。ピーター・セイヤーに会うつもりでした、ミスタ・マスターズ。ところが彼は欠勤とかで、代わりにあなたが会ってくださったわけです。で、彼が私立探偵を雇おうとした理由をお訊きしたいと思いまして」

「正直な話、お答えできることはありません、ミス――ええと――別の呼び方をしてはいけませんか」彼は名刺を見た。「Vはなんの略でしょう？」

「わたしのファースト・ネームです、ミスタ・マスターズ。ミスタ・セイヤーがここでどんな仕事をしているのか、話していただけますね」

「わたしのアシスタントです」彼は愛想よく応じてくれた。「ジャック・セイヤーはわたしの親しい友人でしてな、息子が――シカゴ大学の学生ですが――夏休みのアルバイトを捜しているというので、力を貸した次第です」彼は自分の表情を憂いを帯びたものに変えた。「むろん、私立探偵の手を借りて解決せねばならんような厄介事にあの子が巻きこま

れているのなら、わたしも知っておく必要があります」
「ミスタ・セイヤーはあなたのアシスタントとして、どんな仕事をしてるんですか。保険金の支払査定？」
「まさか」彼はにこやかに笑った。「それはすべて、わが社の現地支社のほうでおこないます。いや、事務的な面の処理がわれわれの仕事でしてな──予算とか、そういうたぐいのことです。彼は数字の合計を出してくれてます。それから、補助的な仕事も丁寧にやってくれます──報告書の点検なんかをね。いい青年ですよ──学校のほうでつきあってるヒッピー連中と、ごたごたを起こしてるんでなきゃいいが」彼は声をひそめた。「ここだけの話だが、ジャックに聞いたところでは、あの連中、ビジネスの世界についてゆがんだ考えを彼の頭に吹きこんだらしい。ここで夏休みのアルバイトをさせることにしたのは、まず第一に、ビジネスの世界を内側からじっくりながめてほしいからだったのです」
「で、うまくいきました？」
「そう願っています、ミス──ええと──まあ、そう願っています」彼は両手をこすりあわせた。「あなたのお力になれればいいのですが……あの子を悩ませておった事柄について、何か手がかりでもお持ちですか」
わたしは首を振った。「何もいいませんでした……わたしに電話してきて、今日の午後寄ってもらえるだろうかと訊いただけです。私立探偵が必要だと彼が考えるようなことが、

ちょくちょくあることです」マスターズはもったいぶって眉をひそめた。「こっちは雲の上の存在ですからね、社員は何も打ち明けてくれません」ふたたび笑顔にもどった。「だが、打ち明けられたら、かえって驚きますよ」

「なぜ、わたしに会う気になられましたの」

「ああ、息子をしっかり監視しておくと、ジャック・セイヤーに約束したからです。私立探偵が彼を訪ねてきたとなれば、不吉な予感を覚えますよ。といっても、さほど心配しているわけではありませんがね、ミス――ええと――なんなら、うちであなたを雇って、ピーターの行方を捜してもらってもいい」彼は自分の冗談に、くくっと笑った。「この一週間ずっと欠勤していて、家に電話しても連絡がとれんのです。ジャックには内緒にしてありますー―いまでさえ、ジャックは息子にかなり失望してますからね」

彼はわたしと一緒に廊下に出て、さっきのエレベーターのところまで送ってくれた。わたしは三十二階に下がってエレベーターを降り、ふたたび階上(うえ)にもどった。廊下をゆっくりと引き返した。

「ミスタ・セイヤーの席を見せてもらえないかしら」と、秘書のエレンにいった。彼女は指示を仰ごうとマスターズのオフィスのドアに目をやったが、ドアはしまっていた。

こちらで起きてるわけじゃないでしょうね」「うーん、部の責任者が自分の部で何が起きているか知らずにいるのは、

「わたくしの一存ではちょっと——」

「そりゃそうよね」わたしは彼女の言葉をさえぎった。「でもとにかく、彼のデスクを見せてもらうわ。場所を教えてくれる人は、ほかにいくらだっていますからね」

彼女は苦りきった表情を見せたが、パーティションで仕切られた小部屋にわたしを案内した。「あのう、ミスタ・マスターズが出てらしてあなたをごらんになったら、わたくしが困った立場に立たされます」

「あら、どうして?」わたしは彼女にいった。「あなたの責任じゃないわ。あなたがわたしを追い返そうと精一杯やったことは、彼にちゃんと話してあげる」

ピーター・セイヤーのデスクには、鍵はかかっていなかった。エレンはそばに立ったまま、わたしが引出しをあけて書類をひっかきまわすのを、しばらくのあいだじっと見ていた。「わたしが帰るときに身体検査をやって、盗んだものがあるかどうか確かめればいいじゃない」顔も上げずに、わたしはいった。彼女は鼻を鳴らしたが、自分のデスクにもどっていった。

ここにある書類もアパートメントにあったのと同じく、興味の湧かないものばかりだった。各部のさまざまな要求が集計された無数の元帳用紙、労働者補償の個別見積りを取り扱ったコンピュータのプリントアウトの束、エイジャックスの保険金支払係宛の通信文——

——〝誰それ殿、下記の請求者に対する個別見積りを検査されたし〟。若者を殺す原因にな

りそうなものはひとつもない。

取るに足りないこまごました戦果を前に、頭をかきながら次はどうしようと思い悩んでいたとき、誰かにじっと見られていることに気づいた。顔を上げた。秘書ではなかった。

「きみなら、セイヤーの坊やよりはるかに目の保養になる」わたしの観察者はいった。

「彼の後任？」

話し手はワイシャツ姿の、いかにハンサムかを人から教えてもらう必要のない三十代の男だった。わたしは彼の細いウエストと、ブルックス・ブラザーズのズボンが身体にぴったり合っている様子を、賞賛の目で見つめた。

「ピーター・セイヤーをよく知ってる人はいないかしら」わたしは訊いた。

「ヤードリーの秘書が彼に恋わずらいしてるけど、彼女が彼をよく知ってるかどうかは疑問だね」彼が近づいてきた。「どうして彼に興味があるの？　きみ、国税庁の人？　あの坊や、親からゆずられた巨大な地所の税金をごまかしたのかな。それとも、損害査定部の資金を持ち逃げして、革命委員会に寄付したんだろうか」

「まあ、だいたいそんなところかしら」わたしは調子を合わせた。「そして、そのまま姿を消してしまったみたい。わたし、彼とはまだ一度も話してないのよ」用心深くつけ加えた。

「彼をご存じ？」

「ここにいる大部分の連中よりはくわしくね」彼は陽気な笑みを浮かべ、態度が横柄なわ

りには人好きのする印象を与えた。「たしか、ヤードリーのために雑用をやっていたはずだ――ヤードリー・マスターズ――さっき、きみが彼と話してたとこを見かけたよ。ぼくはヤードリーのとこの予算担当責任者なんだ」

「一杯いかが？」と誘ってみた。

彼は腕時計を見て、またもや笑みを浮かべた。

「おつきあいしましょう、お嬢さま」

彼の名前はラルフ・デヴローといった。郊外族だったのが、離婚してダウナーズ・グローヴの家を妻に譲り、先ごろ都心部に引っ越してきたばかり、といった話をエレベーターのなかでしてくれた。彼がループのなかで知っている酒場は、損害査定部の溜り場となっている〈ビリーの店〉だけだった。わたしは彼の知りあいたちを避けるために、もうすこし西の〈ゴールデン・グロー〉へ誘った。アダムズ通りを行く途中、《サン・タイムズ》を買った。

〈ゴールデン・グロー〉はサウス・ループの変わり種だ。前世紀に建てられた小さな酒場で、本格的な酒飲み連中のすわる、馬蹄形をしたマホガニーのカウンターがいまも残っている。壁ぎわには小さなテーブルとブースが八つか九つぎっしりと並び、店が建ったときに飾られた本物のティファニー・ランプが二個、くつろげる光を放っている。バーテンダーのサルは身の丈六フィートに近い、堂々たる黒人女である。たった一言とひとにらみで

乱闘を中止させたところを、わたしは前に見ている――サルに楯突こうとする客は一人もいない。この日の午後、彼女は銀色のパンツスーツを着ていた。目のさめるような装いだ。彼女は挨拶がわりにうなずくと、黒ラベルのストレートをブースに運んできた。ラルフはジントニックを注文した。四時という時刻は〈ゴールデン・グロー〉をひいきにしている本格的な飲み助たちにとってさえ、少々早すぎるようで、店内にはほとんど人影がなかった。

デヴローはテーブルの上に、サルに払う五ドル札を置いた。「さて、きみのように華麗な貴婦人がなぜピーター・セイヤーごときひよっ子に興味を持つのか、その理由(わけ)を聞かせてもらおうか」

わたしは紙幣を彼に返した。「ここはつけがきくから」と説明した。新聞のページをめくった。ニュースが新聞社に届いたのは第一面にはもはや間に合わない時刻だったが、第七面の二段と四分の一がその記事にあてられていた。〈過激派の銀行家子息、射殺される〉との見出し。セイヤーの父親のことが最後のパラグラフに短く出ていた。四人のルームメイトと彼らの急進主義的行動が大々的に扱われていた。エイジャックス保険会社の名前はどこにもなかった。

わたしは新聞を折り返して、デヴローに記事を見せた。彼はそれにちらりと目をやり、次にぎょっとした顔で見直して、わたしの手から新聞をひったくった。彼が記事を読むの

を、わたしはじっと見つめた。記事は短く、彼はそれを数回読み返したにちがいない。やがて彼は顔を上げ、困惑の表情でわたしを見た。
「ピーター・セイヤーが？　死んだ？　どういうことだ」
「さあ。こっちが訊きたいぐらいよ」
「新聞を買ったとき、すでに知ってたのか」
わたしはうなずいた。彼はふたたび新聞に目を落とし、そのあとわたしを見た。表情豊かな顔に怒りを浮かべていた。
「どうして知ったんだ」
「わたしが死体を発見したからよ」
「ぼくにこんな謎々ごっこをさせる前に、どうしてエイジャックスで打ち明けてくれなかったんだ」と、彼は詰問した。
「だって、どの人にも犯人の可能性があるもの。あなたとヤードリー・マスターズ、ピーターのガールフレンド……ニュースを知ったときのあなたの反応を確かめたかったの」
「きみ、いったい何者なんだ」
「わたしの名前はV・I・ウォーショースキー。私立探偵で、いまはピーターの死を調査してるところ」彼に名刺を差しだした。
「きみが？　きみが私立探偵なら、こっちがバレリーナでもおかしくない」彼は叫んだ。

「タイツとチュチュをつけたあなたにお目にかかりたいものね」わたしはそういって、プラスチックのケースに入った私立探偵許可証のコピーをひっぱり出した。彼はそれをしげしげとながめてから、無言で肩をすくめた。わたしはそれを札入れにもどした。

「ひとつはっきりさせておきたいんだけど、ミスター・デヴロー、ピーター・セイヤーを殺害したのはあなた？」

「まさか、ぼくが殺すわけないじゃないか」彼の顎が腹立たしげに動いた。さらに何か続けようとしたが、感情を言葉にすることができなくて黙りこんだ。

わたしがサルにうなずいてみせると、彼女はお代わりの二杯を運んできた。帰る前に軽く一杯という勤め人たちで、カウンターが混みはじめた。デヴローは二杯目のジンを飲んでいくらか落ちついていた。「きみがヤードリーにピーターを殺したかどうか訊いたときの、彼の顔が見たかったよ」彼は乾いた口調でいった。

「彼には訊いてないわ。ただ、彼がなぜわたしと話そうって気になったのか、どうしても理解できないの。彼、ほんとにピーターの保護者みたいにしてた？　遠回しにそういってたけど」

「いや」彼は質問の意味をじっくり考えた。「それほど気にかけちゃいなかった。だけど、家族ぐるみのつきあいだからね……ピーターが面倒に巻きこまれたとなれば、ヤードリーとしてはジョン・セイヤーへの義理から、善処しなきゃならんと思うだろう……あいつ、

死んだのか……考えることは過激だが、すごくいいやつだった。まったく、ヤードリーにはショックだろうな。それからあいつのおやじさんにとっても。セイヤーは息子がああいうとこに住むのさえいやがってたんだ——それがどうだ、今度はどっかの麻薬中毒（ジャンキー）に撃ち殺されて……」
「父親がいやがってたって、どうしてわかるの」
「誰でも知ってることだよ。ピートがうちで働きはじめてまもなく、ジャック・セイヤーがすごい見幕で飛びこんできて、激昂した銀行専務にふさわしくわめき散らしたことがあるんだ。労働組合に熱を上げて一家を裏切ったとか、なぜちゃんとしたところで暮らせないんだとか。ひょっとしたら、息子のためにコンドミニアムでも買ってあったんじゃないかな。息子は立派にそれに耐えた。どなり返しも何もしなかった」
「彼はエイジャックスの——あのう、マル秘っていうのかしら——そのような書類は扱ってなかった?」
デヴローは驚いた。「彼の死をエイジャックスと結びつけるつもりじゃないだろうね。彼を撃ったのがハイド・パークでしょっちゅう人を殺してるヤク中の一人だってことは、すでにはっきりしてると思ってたが」
「それじゃまるで、ハイド・パークが〝トンの抗争〟（サンフランシスコ、ロサンゼルスなどで一八五〇～一九二〇年にかけて頻発した、中国系秘密結社の抗争）の舞台みたいじゃないの、ミスタ・デヴロー。二十一管区が去年扱った三十二件

の殺人のうち、ハイド・パークで起きたのはわずか六件――二カ月に一件のわりなのよ。ピーター・セイヤーがあの地区の七、八月分の統計にすぎないとは思えないわ」

「それじゃ、どういう理由でエイジャックスと関係があると思ったんだい？」

「そうは思ってないわ。ただ、可能性を除去していこうとしてるだけ……あなた、死体を見たことある？　弾丸に生命を奪われた死体を、ひとつでもいいから見たことはある？」

彼は首を振り、身を守ろうとするかのように、椅子の上で身体を動かした。「あのね、わたしは何度も見てるの。死体の状況を見れば、被害者が犯人に抵抗しようとしたかどうか、だいたいわかるものよ。ところで、今日の若者はワイシャツ姿でキッチン・テーブルについていた――たぶん、月曜日の朝、会社に出る支度をしてたんでしょうね――そして誰かが彼の額のちょうどまん中に、小さな穴をあけた。直接手を下したのはプロの殺し屋かもしれないけど、たとえそうだとしても、若者を安心させるために、彼の知っている誰かが一緒にこなきゃならなかったはずだわ。それはあなたかもしれないし、マスターズかもしれないし、彼の父親かもしれないし、彼のガールフレンドかもしれない……いまのわたしは、あなたじゃないって証拠を見つけようとしてるだけなの」

彼は頭を振った。「証拠なんて何も見せられないよ。しいていえば、銃の使い方を知らないことぐらいかな――だが、きみの前でそれを証明できるかどうかわからないけど」

わたしは笑った。「たぶん、できるでしょうね……マスターズのほうはどうかしら」

に」

「ヤードリー？　ご冗談を！　わがエイジャックスで最高の尊敬を集めている一人なのに」

「だからって、彼が人殺しじゃないという証拠にはならないわ。ピーターが会社でやってた仕事のこと、もうすこしくわしく話してもらえない？」

彼はなおしばらく抗議を続けたが、ついに折れて、マスターズの仕事と、ピーター・セイヤーが彼のもとでやっていた仕事について話してくれることになった。殺人に結びつきそうなものは何もなかった。マスターズは損害査定業務や準備金管理などの財務面の責任者で、ピーターは彼の下で数字を合計したり、振出手形の社内控を、種々の支払請求のうち支払通知済分の備金額と照合したり、各営業所の総項目を合計して予算を超過しているのはどこかを調べたり、つまり、ビジネスを円滑に進めるために必要な、おもしろくもない日常業務をすべておこなっていたという。ところが……ところがだ……マスターズは未知の人間でおまけに探偵でもあるわたしに会うことを、一瞬にして承知した。ピーターが面倒に巻きこまれたことを知らなければ――いや、さらに勘ぐって、彼が死んでいることを知らなければ、いくらジョン・セイヤーに義理があるとはいえ、そんなことをするとは思えない。

わたしはデヴローをじっと見つめた。ただのハンサムな男にすぎないのだろうか。それとも何か知っているのだろうか。彼の怒りは、若者の死を知ったさいの偽りなきショック

と混乱から生じたもののように、わたしには思われた。だが、怒りはほかの感情を隠すのにもってこいの隠れみのでもある……とりあえずは、彼を罪なき傍観者のグループに入れておこうと決めた。

デヴローの生まれ持ったアイルランド的な明るさが、そろそろよみがえってきた――わたしの職業をからかいはじめた。もっと多くをつかんで、いまよりましな質問ができるようになるまで、彼からはもう何も引き出せそうになかったので、事件のことは忘れて軽めの話題へ移っていった。

サルのためにバーの勘定書にサインして――彼女は月に一回、わたしのところへ請求書を送ってくる――遅くなってしまった夕食をとろうと、デヴローと〈オフィサーズ・メス〉へ出かけた。ここはインド料理の店で、私見では、シカゴでもっともロマンチックなレストランのひとつである。ここで出されるピムズカップの味も抜群だ。スコッチにそれが加わったものだから、あとはノース・サイドのディスコを次々と踊ってまわった朦朧とした記憶しか残っていない。さらに二杯か三杯飲んだかもしれない。一人でアパートメントにもどったときは、午前一時をまわっていた。ご機嫌な気分で、着ているものを椅子にひっかけて、そのままベッドに倒れこんだ。

3　プロの手並み

　ピーター・セイヤーはエイジャックスの廊下をがむしゃらに駆けまわって、資本家どもの圧力に抗議し、一方、アニク・マグローはピケの看板を持って微笑みを浮かべながら、廊下の隅に立っていた。ラルフ・デヴローが彼のオフィスから出てきて、セイヤーを罵った。銃の轟音が廊下に響きわたった。音は次から次へとこだまして、わたしがデヴローから銃を奪いとって遠くへ投げ捨てようとしても、まだ鳴りやまず、そこでわたしははっと目をさました。ドアの呼鈴がすさまじい叫びを上げていた。大きなノックが響くのを聞きながらベッドをすべり降りて、ジーンズとシャツをひっかけた。目と口のはれぼったい感覚が、昨夜遅すぎる時刻にスコッチを一杯か二杯余分に飲みすぎたことを告げていた。よろよろと玄関ホールに出て、頑丈そうなこぶしがまたもやドアを乱打しはじめるのを聞きながら、のぞき穴に目を当てた。

　表には筋骨たくましく、袖の短すぎる上着を着て髪をクルー・カットにした二人の男が立っていた。右側の若いほうは知らないが、左の年とったほうは二十一管区の殺人課警部

CamScannerでスキャン

補、ボビー・マロリーだった。わたしはごそごそと錠をいじってドアをあけ、太陽のような微笑を浮かべようとした。
「いらっしゃい、ボビー。なんてすてきな驚きだこと」
「おはよう、ヴィッキー。ベッドから引きずり出しちまって悪かったな」マロリーは皮肉なユーモアをこめていった。
「どういたしまして、ボビー——いつだって大歓迎よ」ボビー・マロリーは父のトニーが警察で一番親しくしていた友達だ。二人ははるか昔の三〇年代に同じ巡回区域でスタートを切り、ボビーは昇進して警官としての父の人生から離れて行ったが、その後もトニーのことは忘れなかった。感謝祭がくると、わたしはたいてい彼と、暖かな母性愛にあふれた彼の妻アイリーンのところで、ディナーをごちそうになる。彼の六人の子供と四人の孫も一緒だ。
ほとんどの場合、ボビーはわたしが働いていないか、たとえ働いていても探偵の仕事だけはしていない、と思いこんでいるふりをしようとする。いま、彼はわたしではなく、わたしを通り越したところを見ていた。「こいつはジョン・マゴニガル部長刑事」とまじめな声でいうと、マゴニガルのいる方向へ漠然と手を振った。「なかに入って、二、三質問させてくれないか」
「ええ、どうぞ」頭のあちこちで髪の毛が好き勝手な方向にはねていないことを祈りつつ、

わたしは行儀よく答えた。「お会いできて光栄です、部長刑事さん。わたし、V・I・ウォーショースキーです」

マゴニガルと握手をかわし、一歩下がって狭い玄関に二人を通した。わたしたちの背後の廊下はまっすぐ奥の洗面所へ通じていて、右側に寝室と居間が、左側にダイニング・ルームと台所がある。このおかげで、わたしは毎朝よろめきつつも、寝室から洗面所を経て台所へと一直線に進むことができる。

わたしはボビーとマゴニガルを台所へ案内して、コーヒーを沸かした。キッチン・テーブルのパンくずを何食わぬ顔で払い落とし、黒パン(プンパーニッケル)とチェダー・チーズを求めて冷蔵庫をひっかきまわした。うしろでボビーがいった。「このごみためを掃除したことはあるのかね」

アイリーンは狂信的なきれい好きである。彼女が人の食事姿を見るのが好きでなかったら、あの家で汚れた皿にお目にかかることは決してないだろう。「だって、仕事をしてるんだもの」わたしはかき集められるだけの威厳を集めて答えた。「それに、家政婦を雇うだけの余裕もないし」

マロリーは憮然たる表情であたりを見まわした。「弱ったもんだ。トニーがきみを甘やかしてだめにしちまうかわりに、膝に抱えて尻をぶつ回数をふやしてくれてれば、きみだっていまごろは、探偵ごっこをやってわしらの仕事をやりにくくするかわりに、家庭の主

婦におさまって幸福に暮らしてるはずなのに」
「あら、わたし探偵になって幸福よ、ボビー、主婦をやってたときはみじめなものだったわ」それは真実だった。八年前に短期間だけ経験した結婚生活は、十四ヵ月ののち憎悪に満ちた離婚で幕を閉じた。世の中には、距離を置いてしか自立した女を崇拝することのできない男たちがいるものだ。
「探偵ってのはきみみたいな女のやる仕事じゃない、ヴィッキー——遊びやおふざけじゃないんだ。口がすっぱくなるほどいって聞かせたはずだぞ。なのに今度は、殺人事件に首を突っこんでひっかきまわす始末だ。ここへは本来ならオールサンズがくるはずだったのを、わしが上役の圧力でもって割りこんだんだぞ。それだけでも、きみには正直に話す義務がある。なんのためにセイヤーの息子を嗅ぎまわってたのか、教えてもらいたい」
「セイヤーの息子？」わたしはおうむ返しにいった。
「やんちゃはやめろ、ヴィッキー」マロリーが忠告した。「こっちはな、きみがあの建物へ入る途中で話をした二階の麻薬（くすり）漬けの標本から、きみの人相を事細かに聞き出したんだ。たれこみ電話を受けたドラッカーはその人相を聞いたとたん、きみの声だったかもしれんと思ったそうだ……まだある、台所のテーブルに親指の指紋が残ってたぞ」
「犯罪はひきあわないって、わたしいつもいってるのよ、ボビー。おじさまがた、コーヒーか卵か何か、召し上がります？」

「めしならもうすんだよ、道化くん。労働者は眠れる森の美女みたいに、ベッドにもぐりこんじゃいられんのだ」

裏口のドアの横にかかった木の時計を見て、まだ八時十分なのにと思った。頭がこんなにぼけているのも無理はない。チーズ、ピーマン、玉ねぎを順々に薄切りにして、黒パンにのせ、そのオープンサンドを天火に入れた。ボビーと部長刑事に背中を向けたままチーズが溶けるのを待ち、それから全部を皿に移して、自分のためにコーヒーを注いだ。ボビーの息づかいから、彼の癇癪が破裂しそうになっていることが推察できた。わたしが料理をテーブルに置き、ボビーの向かい側の椅子にまたがるころには、彼の顔はまっ赤になっていた。

「セイヤーの息子のことはほとんど知らないのよ、ボビー」と、わたしは弁明した。「知ってるのは彼がシカゴ大学の学生で、いまは死んでるってことだけ。彼が死んだことをどうして知ってるかっていうと、《サン・タイムズ》で読んだから」

「人をおちょくるのもいい加減にしろ、ヴィッキー。死んだことを知ってるのは、きみが死体を発見したからだろ」

わたしは口一杯のとろけたチーズとピーマンを呑みこんだ。「そりゃまあ、《サン・タイムズ》の記事を読んだあとで、あの子がセイヤーだったのかって気がついたけど、死体を見たときは、そんなこと思いもしなかったわ。わたしにとっては、ただの平凡な死体に

すぎなかった。青春の盛りに生命の灯(ひ)を消された死体」わたしは敬虔につけ加えた。
「彼に捧げる弔辞は省略して、わざわざあんなとこまで出かけた理由を話してくれ」マロリーが要求した。
「わたしって人間をご存じでしょ、ボビー。犯罪を本能的に嗅ぎつける力があるのよ。悪の栄える場所にはつねに、悪撲滅の使命をみずからに課したわたしがいるってわけ」
マロリーはますます赤くなった。マゴニガルが遠慮がちに咳をして、彼の上司が脳出血をおこす前に話題を変えた。「依頼人のような人はいるんですか、ミス・ウォーショースキー」と訊いた。
この質問が出ることはもちろん予想していたが、どう受け答えすべきかはまだ決めていなかった。しかしながら、返事につまる女に探偵稼業はつとまらない。そこで一部だけ打ち明けることにした。
「じつは、ピーター・セイヤーを説得して、ビジネススクールへ行くことを承知させるようにっていう依頼を受けてたの」マロリーがむせた。「嘘じゃないったら、ボビー」わたしは真剣にいった。「とにかく坊やに会おうと思って、あそこへ出かけたの。そしたら、彼のアパートメントのドアがあいてたんで、わたし――」
「それはきみが着いたときかね、それとも錠をこじあけたあとかね」マロリーが横からいった。

「そこで、なかに入ったの」わたしは続けた。「どっちみち、わたしの仕事は失敗だったようね。だって、ピーター・セイヤーがこの先ビジネススクールに行くとは考えられないもの。こんなんで依頼人がいる状態といえるかどうか、あんまり自信ないわ」

「きみを雇ったのは誰なんだ、ヴィッキー」マロリーの話し方はこれまでより穏やかになっていた。「ジョン・セイヤーか」

「あら、どうしてジョン・セイヤーがわたしなんかを雇おうとするの、ボビー」

「そいつを説明するのがきみの役目だ、ヴィッキー。もしかしたら、わが子をあそこのマリファナ中毒どもから引き離すためのてこ代わりに、どっかのクズが入り用だったのかもしれん」

わたしはコーヒーの残りを飲みほして、真正面からマロリーを見すえた。「一昨日の夜、男が訪ねてきて、ジョン・セイヤーだと名乗ったの。息子のガールフレンド、アニタを見つけてくれって。アニタ・ヒルを」

「あの住まいには、アニタ・ヒルなんて娘はいませんよ」マゴニガルが自発的に意見を述べた。「アニタ・マグローだったらいますけど。被害者はその娘と同じ部屋を使ってたようですが、とにかく男女の区別のつかない部屋ばっかりなんで、ほかに誰が誰の同室だったかはわかっていません」

「誰と」わたしはうわの空でいった。マゴニガルはぽかんとした。「誰が誰と同室かはわ

からないっていうのよ、部長刑事さん」と、わたしは解説した。マロリーが爆発寸前のうなり声を上げた。「とにかく」わたしはあわててつけ加えた。「大学に出かけてアニタ・ヒルが存在しないと知ったとき、わたし、あの男のために獲物のいない追跡に駆り出されたんじゃないかって、疑いはじめたの。あとであらためてそれを確信したわ」
「なぜ？」マロリーが詰問した。
「フォート・ディアボーン信託銀行へ行って、セイヤーの写真のコピーをもらってきたの。わたしの依頼人とは別人だったわ」
「ヴィッキー」マロリーはいった。「きみにはほとほと手を焼かせられるよ。トニーがきみのやってることを知ったら、墓のなかでさぞかし嘆くだろう。ところで、きみもバカじゃない。身分証明になるものを男に求めなかったとはいわせんぞ」
「彼の名刺と、自宅の電話番号と、前金をもらったわ。連絡は簡単にとれると思ってた」
「名刺を見せてもらおう」マロリーが命令した。疑り深いおじさん。
「名刺はセイヤーのよ」
「かまわないから、とにかく見せてくれないかね」父親が強情な子供をどなりつけたいのを、かろうじて抑えているといった感じ。
「わたしにわからなかったことは、あなたにだってわかりゃしないわ、ボビー」
「男から名刺をもらったなどと、わしゃ信じんぞ」マロリーはいった。「じつは、男と知

りあいで、かばってるんだろ」

わたしは肩をすくめ、寝室へ行って、たんすの一番上の引出しから名刺を出した。指紋をスカーフできれいに拭きとってから、それを持ってマロリーのところへもどった。フォート・ディアボーンのロゴが左下の隅に入っている。〈信託部専務取締役、ジョン・L・セイヤー〉と中央に印刷されていて、電話番号もついている。一番下に、自宅の電話番号なるものをわたしが走り書きしていた。

マロリーは納得したのか何やらつぶやいて、その名刺をポリ袋に入れた。名刺について いる指紋がいまのところわたしのだけであることは、彼にはいわなかった。数すくない彼の楽しみのひとつを、どうしてとりあげられよう。

マロリーが身を乗り出した。「次は何をやらかすつもりだ」

「さあ、知らない。女の子を捜す料金を少々もらってるから、まずその子を捜さなきゃって気もするけど」

「神のお告げを待つつもりかね、ヴィッキー」マロリーは皮肉なユーモアをこめていった。

「それとも、何か手がかりでもあるのかね」

「何人かにあたってみるの」

「ヴィッキー、この殺人に関して、いま話してくれた以外のことを知ってるのなら――」

「まっ先にあなたに話すわ、ボビー」わたしは誓った。それは必ずしも嘘ではない。エイ

ジャックスが殺人に関係しているかどうか、わたしにはまだはっきりわからないからだ——とにかく、われわれはみな、何が何に関係しているかについて、独自の意見を持っているものだ。

「ヴィッキー、捜査を担当してるのはわしらだぞ。きみがいかにキュートか、あるいはお利口かを、証明してもらう必要はないんだ。しかし、ひとつだけ頼みを聞いてくれ——トニーのために——殺人犯を見つけるのは、マゴニガル部長刑事とこのわしにまかせるんだ」

わたしは澄んだまなざしでボビーを見つめた。彼は真剣な表情で身を乗り出した。「ヴィッキー、死体を見てどんなことに気がついた?」

「撃ち殺されてたわ、ボビー。解剖はしなかったけど」

「ヴィッキー、二セントと引換えに、そのかわいい小さなケツを蹴っとばしてやりたいよ。きみはまともな娘なら見向きもせんようなことを商売にしとるが、決して抜けちゃいない。あのアパートメントに忍びこんだとき——まあ、どうやって入ったかはこのさい見逃してやるが——育ちのいいお嬢さんと違って、悲鳴も上げなきゃ、吐きもしなかったろうってことは、ちゃんとわかってるんだ。アパートをざっと調べたに決まっとる。それから、死体を見てぴんときたことは何ひとつなかったというんなら、きみ、外に出て頭を吹っ飛ばされちまうがいい」

わたしは溜息をつき、椅子にぐったり寄りかかった。「わかったわよ、ボビー。あの子、計画的に殺されたのよ。麻薬にいかれた過激分子に撃たれたんじゃないわ。あの子の知ってる誰か、あの子が椅子を勧めてコーヒーを出そうとした相手が、あの場にいたに違いない。わたしのにらんだところ、銃を撃ったのはプロね。だって、仕事が完璧。一発で命中してるもの。でも、あの子の知りあいが誰かついてきたに違いないわ。あるいは彼と親しい人間で、天才的な射撃の名手なる人物が殺ったのかもしれない……彼の家族のこと、調べてみた？」

マロリーはわたしの質問を無視した。「たぶん、そこまで読んでると思ってたよ。わしはな、この一件がいかに危険かを悟るだけの頭脳がきみにあると思うからこそ、事件に首を突っこまんように頼んでおるのだ」わたしはあくびをした。マロリーは癇癪を起こすまいと固く決心していた。「いいか、ヴィッキー、ごたごたから手を引いてくれ。どうも、組織犯罪というか、労組のからむ事件というか、そういう臭いがするんだ。きみには太刀打ちできん大きな組織がからんでおるかもしれん」

「あの坊やが過激派の友達とつきあって、ビラを振りまわしてたために、労組がらみの犯罪に巻きこまれたっていうの？　いい加減にしてよ、ボビー！」

セイヤー事件からわたしを遠ざけたいとの願いと、捜査上の秘密を口外してはならないという義務のあいだで、マロリーが苦悩している様子が、その表情にあらわれていた。つ

いに彼はいった。

「うちでつかんだ証拠だがな、あのガキども、ナイフグラインダーズの印刷物の大部分を引き受けてる業者に、連中のビラの一部を頼んでるんだ」

わたしは悲しげに頭を振った。「そりゃ物騒ね」ナイフグラインダーズ国際労組は暗黒街との結びつきで悪名を馳せている。三〇年代という騒然たる時代に腕っぷしの強い連中を雇い入れ、それ以来どうしても、彼らと縁を切ることができなくなった。その結果、組合の選挙の大部分と財政業務の多くが腐敗してしまった――そのとき突然、わたしの正体不明の依頼人が何者であったか、アニタ・マグローの名前になぜ聞き覚えがあったか、そして、男が職業別電話帳からなぜわたしを選び出したかが、脳裏にひらめいた。わたしは椅子にさらに深くもたれたが、沈黙を守り続けた。

マロリーの顔が赤くなった。「ヴィッキー、今度の事件でわしの行く手を横切るようなまねをしてみろ。きみのためを思って、監獄にぶちこんでやるからな!」彼は乱暴に立ち上がって椅子を倒してしまった。マゴニガル部長刑事に身ぶりで合図して、二人でドアを叩きつけて出て行った。

わたしは二杯目のコーヒーを注いでから、それを持って浴室へ行き、アジュリー浴用剤を浴槽にたっぷり投げこんで、熱い湯を出した。浴槽に身を沈め、深夜の飲酒の後遺症が骨のなかからにじみ出ていくのを感じながら、二十年以上も前の夜を思い出していた。母

がわたしを寝かしつけようとしていたとき、玄関の呼鈴が鳴って、うちの真下のアパートメントに住む男がよろめきながら入ってきた。頑丈な男で、年齢は父と同じぐらい、いや、もうすこし若かったかもしれない——幼い少女の目には、大人の男はみんな老けて見えるものだ。家のなかが大騒ぎになったので、わたしはドアの陰からこっそり顔を出して、血まみれになった男の姿を見たが、まもなく母が飛んできて、わたしを寝室に押しこめてしまった。母はそのままわたしのそばを離れず、わたしたちの耳にとぎれとぎれの話し声が聞こえてきた。男は撃たれていて、犯人はどうやら経営者側に雇われたごろつきらしいが、彼自身もごろつきを雇っているため、警察に訴えて表沙汰になることを恐れ、父の助けを求めてきたのだった。

トニーは傷の手当てをして男を助けてやった。しかし、ふだん穏やかな父にしては珍しく、このアパートから出て行け、われわれの前に二度と姿を見せるな、と男に向かって命令した。その男はアンドリュー・マグローといった。

わたしはそれ以後二度と彼に会わなかったし、現在一〇八支部長であり、つまり実質的には組合全体の指導者であるマグローなる人物と、彼を結びつけて考えたことすらなかった。しかし、向こうは明らかにわたしの父を覚えていたのだ。警察の父と連絡をとろうとして、父がすでに死亡したことを知らされ、職業別電話帳でわたしの名前を調べたのだろう。わたしをトニーの息子だと思いこんで。残念ながら予想ははずれた。わたしは彼の娘

で、父のような お人好しではない。イタリア人の母の激しさを受け継ぎ、戦いは最後まで続けるものだという母の主義に負けまいと努めている。しかし、わたしがどんな種類の人間かはさておき、マグローは現在、お人好しのトニーの力をもってしても救い出すことのできない窮地に追いこまれているのかもしれない。

わたしはコーヒーをもうすこし飲んで、湯のなかで足先を曲げた。浴槽の湯はトルコ石の色に揺らめきながらも、透きとおっていた。湯を通して自分の足をじっと見ながら、わかったことを整理しようとした。マグローには娘がいる。娘はたぶん父親を愛しているのだろう。労働運動に打ちこんでいるのがその証拠だ。子供が親を憎んでいれば、その主義や職業を信奉するはずがない。娘は自分から身を隠したのだろうか。それとも、彼が娘を隠しているのだろうか。彼がピーター殺しの犯人を知っていて、それが原因で娘が失踪したのだろうか。それとも、彼は娘が若者を殺したと考えているのだろうか。わたしは自分にいいきかせた——大部分の殺人は愛しあう者のあいだで起きるものだ。つまり、統計的に見れば、彼女が有力な本命馬なのだ。国際労組がぬくぬくと共存している雇われ用心棒たちと、マグローはどのような関係にあるのだろう。あの弾丸を撃った人物を、彼ならどの程度簡単に雇うことができるのだろう。彼と若者が互いにどういう感情を持っていたにせよ、彼が訪ねてくれれば若者は室内に通して話しあおうとするだろう。マグローはガールフレンドの父親だもの。

浴槽の湯は暖かかったが、わたしはコーヒーを飲みほしながら思わず身震いした。

4　わたしを脅迫してもだめ
（わたしは組合から目を離さない）

ナイフグラインダーズ＝シアー・エッジャーズ＝ブレード・シャープナーズ国際労組の本部は、エヴァンストンのすぐ南のシェリダン・ロードに位置している。十階建てのビルは五年前にできたもので、壁面はイタリア産の白大理石でおおわれている。シカゴでこれだけ贅を尽くしたビルというと、あとはスタンダード石油の本社しかない。それはつまり、組合の超過利潤が石油産業と肩を並べている証拠であろうと、わたしは推測した。

一〇八支部の中枢部は九階にあった。わたしは九階の受付係に名刺を渡した。「マグロー氏と会う約束になっています」と告げた。北側の廊下にまわるよう指示された。ルイ十四世が満足しそうな控えの間にマグローの秘書がいて、湖に面したオフィスを守っていた。国際労組の面々が自分たちの組合費で造られたものを見たら、いったいどう感じるだろう。いや、下っ端の組合員をもてなす場合は、もっと下の階におんぼろのオフィスがいくつか用意してあるのかもしれない。

白髪まじりの髪をソーセージ形にカールさせ、赤と白のドレスを着て、そのドレスから

二の腕の見苦しいたるみをのぞかせている中年の秘書に、名刺を渡した。わたしは前々から、三頭筋を引き締めるために五ポンドのダンベルで鍛えなくてはと思っていた。彼女を目にして、帰りに〈スタンのスポーツ用品店〉に寄ってダンベルを何個か買う時間はあるだろうかと考えた。

「マグロー氏と会う約束なんですけど」

「お名前は予定表にありませんが」彼女はこちらをろくに見もせずに、無愛想にいった。わたしの今日の装いはネイヴィ・ブルーの絹のスーツ、上はブルゾンである。これを着るととびきり美人に見えるのだから、もうすこし注目してくれてもいいのにと思った。わたしの三頭筋もたるんでいるせいに違いない。

　わたしは微笑を浮かべた。「もちろんご存じでしょうけど、ミスタ・マグローは個人的な用件をいくつか抱えてらっしゃるのよ。わたしとは個人的に会う約束なの」

「ミスタ・マグローが娼婦と親しくなさることも、そりゃたまにはあるでしょうよ」彼女は顔を赤らめ、デスクの表面に視線を据えたままでいった。「でも、オフィスにまでお呼びになったのは、今日が初めてだわ」

　わたしは卓上スタンドで彼女の頭を叩きつぶしてやりたい衝動を抑えた。「あなたみたいにきれいな方が彼の本拠地にいらっしゃれば、外部の人材は必要じゃないわ……ねえ、わたしがきたことを、ミスタ・マグローに伝えてくださらない?」

CamScannerでスキャン

厚化粧の下で、彼女のみっともない顔がゆがんだ。「ミスタ・マグローはただいま会議中で、どなたもお通ししないようにいわれております」彼女の声が震えた。わたしは自分がいやがらせの名人になったような気がした——娘や殺人犯を見つけることはできないくせに、中年の秘書をいたぶるこつは心得ている。

マグローのオフィスは防音装置つきだったが、会議中のわめき声が控えの間まで聞こえてきた。派手な会議だ。すわって待たせてもらうという意志を伝えようとした矢先に、あるひとつのセンテンスが騒音を圧し、紫檀のドアを突き抜けて響いた。

「ちくしょう、よくも息子を罠にかけたな！」

この四十八時間のあいだに罠にかけられた可能性のある息子がいて、しかもナイフグラインダーズと関わりのある人間は、いったい何人ぐらいいるだろう。もしかしたら一人以上かもしれないが、その確率はきわめて低い。ソーセージ・カールが抗議の言葉をわめき散らすのもかまわず、わたしは奥のオフィスのドアをあけた。

マスターズのところほど広くないが、決してむさ苦しいとはいえないそのオフィスは、ミシガン湖ときれいで小さなプライヴェート・ビーチを眼下に望んでいた。いまのところ、とうていなごやかとはいえない雰囲気だ。隅の丸テーブルに二人の男がいたが、片方は立ち上がり、自分の意見を通そうとわめいている。怒りに顔をゆがめていてさえ、その男がフォート・ディアボーン信託銀行の年報にあった写真の主だと見分けるのに、なんの苦労

もいらなかった。そして、わたしが入っていくと同時に立ち上がってどなり返した男は、わたしの依頼人に違いなかった。小柄でずんぐりしているが、肥満体ではなく、てらてら光るねずみ色のスーツを着ている。
わたしを見たとたん、二人ともぴたりと口をつぐんだ。
「きみ、いったい何しにきたんだ！」わたしの依頼人がわめいた。「ミルドレッド！」ソーセージ・カールが目をぎらつかせ、不格好な足どりで入ってきた。「お会いにならないでしょうと申し上げたんですが、だめでした。無理やり飛びこんでしまわれて、まるで――」
「ミスタ・マグロー、わたし、V・I・ウォーショースキーです」わたしは騒音に負けまいと声を張り上げた。「それから、あなたはわたしに会うのがおいやでしょうけど、もうじきあなたを追いかけることになる二人組の殺人課刑事に比べれば、わたしなんか天使みたいなものよ……あの、ミスタ・セイヤーですね」とつけ足して、片手を出した。「息子さんのこと、お気の毒に思います――ご遺体を見つけたのはわたしなんです」
「もういい、ミルドレッド」マグローが弱々しくいった。「このご婦人はわたしの知りあいだ。大事な話をしなけりゃならん」ミルドレッドはすさまじい表情でわたしをにらみつけ、踵を返してゆっくり出て行くと、不必要と思われるぐらい乱暴にドアをしめた。
「ミスタ・セイヤー、何を根拠に、ミスタ・マグローが息子さんを罠にかけたとお考えな

訊いた。
銀行家はすでに自分をとりもどしていた。怒りは顔からきれいに拭い去られ、あとにいかめしさと無表情だけが残っていた。「マグローの娘はわしの息子とつきあっていた」わずかに笑顔を見せていった。「息子の死を、銃で撃たれたことを知らされて、マグローなら何か知っているのではと思い、寄ってみたのだ。この男が息子を罠にかけたなどと、そんなことは考えてもおらん」
マグローはかなり頭にきていたので、セイヤーに調子を合わせることができなかった。
「よくもぬけぬけと」ハスキーな声を張り上げて叫んだ。「アニーが青びょうたんみたいな、あのノース・ショアのろくでなしと出歩くようになってから、あんたはしょっちゅうここに顔を出して、娘の悪口やわたしの悪口を並べたじゃないか。今度は息子が死んだものだから、うちの娘に罪をなすりつけようとしおって！　ふん、そんなことをして無事にすむと思ってるのか！」
「ようし！」セイヤーがどなり返した。「そっちがその気なら、このさい徹底的にいわせてもらおう。あんたの娘はな——わしはあんたの娘に初めて会ったときから、どういう種類の人間か見抜いていたんだ。ピーターにはそれがわからなかった——あいつは世間知らずの若者で、理想が高くて、男と簡単に寝るような娘にそそのかされて、あれの母親とわ

しが計画してやったことをすべて投げ捨ててしまったんだ」

「娘の悪口をいうときは、言葉に気をつけてもらいたい」マグローが低い声でいった。

「娘をしっかり監督してほしいと、膝をついてマグローに頼んだことすらあった」セイヤーは続けた。「自尊心を守り続けたほうがまだましだった。こういうタイプの男は、人間的な感情にはまるで反応を示さんものだ。ピーターが金持ちの息子だと知って、こいつと娘は息子に目をつけ、何事か企んだ。ところが、息子からはビタ一文とれんとわかって、殺してしまったのだ」

マグローの顔は紫色に変わっていた。「そのご意見、警察にお話しになりました、ミスタ・セイヤー？」わたしは訊いた。

「そんなことをしてみろ、セイヤー、名誉毀損できさまのケツを法廷に引っぱり出してやる」マグローが横からいった。

「脅迫はよせ、マグロー」セイヤーが低くいった。ジョン・ウェインの物真似だ。

「警察にお話しになったんですか、ミスタ・セイヤー」わたしは繰り返した。

彼は丹念に焼いた肌の下で、かすかに赤面した。「いや、そんなことを新聞にでかでかと書き立てられるのはごめんだった——息子がどういう生活をしていたか、隣人たちには知られたくなかったんだ」

わたしはうなずいた。「でも、ここにおいでのミスタ・マグローと娘さんの双方、また

は片方がピーターを罠にかけ、射殺させたという意見には、確信がおありなんですね」
「あるとも、おおありだ！」
「では、その主張を裏づける証拠をお持ちですか」わたしは訊いた。
「フン、そいつが持ってるわけがない！」マグローがわめいた。「そんなくだらん、できそこないの主張を誰が信じるもんか！　アニタはあのノース・ショアの礼儀知らずに惚れこんだ。そいつはどえらい間違いだと、わたしは娘にいってやった。支配者連中とかかりあいになれば、いずれはケツに火傷する。まったく、いわんこっちゃない」
この場合、火傷したのは支配者連中のほうではないかという気がしたが、それを口に出したところで役に立つとも思えない。
「前にここへいらしたとき、ミスタ・マグローに名刺を渡されましたか」わたしはセイヤーに訊いた。
「知らん」彼はいらだたしげに答えた。「たぶん、着いたときにやつの秘書に渡したと思う。とにかく、なんの権利があってそんなことを訊くんだ」
わたしは微笑を浮かべた。「わたし、私立探偵をしております、ミスタ・セイヤー。ここにおいでのミスタ・マグローに頼まれて、個人的な事柄を調査している最中なんです。先日の夜、氏からあなたの名刺を見せられましたので、どこで手に入れたものだろうと不思議に思っていました」

マグローが落ち着かなげに身動きした。セイヤーは信じられないという表情で彼を見つめた。

「この女にわしの名刺を見せた？　なんでそんなことをしたんだ。だいたい、なんの理由があって私立探偵などに会いに行ったんだ」

「こっちにはこっちの理由がある」マグローの顔に狼狽が浮かんだが、同時に、獰猛さも浮かんでいた。

「そりゃそうだろう」セイヤーは痛烈な口調でいった。わたしのほうを向いた。「マグローに頼まれて、どういう仕事をしているんだ」

わたしは首を振った。「うちの料金には、依頼人の秘密を守る代金も含まれております」

「きみのところはどういう種類の調査を扱っているんだね」セイヤーは訊いた。「離婚？」

「私立探偵に会うと、ほとんどの方は離婚だとお考えになります。正直にいって、離婚の調査はすごく汚い仕事です。うちでは会社関係の仕事を数多く手がけています……以前〈トランシコン〉の会長だった、エドワード・パーセルをご存じでしょうか」

セイヤーはうなずいた。「一応、名前だけは」

「わたしがあのときの調査をしたんです。彼がわたしを雇ったのは、可処分所得がどこに

消えているか調べるべきだ、と役員会にせっつかれたためでした。不運なことに、彼は自分の不正の跡をうまくごまかしきれないうちに、わたしを雇ってしまったのです」そのあとに続いたパーセルの自殺と、大きな痛手を負った〈トランシコン〉の再建は、シカゴにおける十日間の不思議であった。

セイヤーはわたしのほうへ身を乗り出した。「だったら、マグローに頼まれて何を調べてるんだ？」マグローの持つむきだしの凄味には欠けているものの、彼もまた他人を怯えさせることに慣れた、迫力ある男だった。彼という人物の持つ力がわたしを直撃し、わたしはそれに抵抗するため、背筋を伸ばしてすわりなおした。

「なんの権利があって、そんなことをお訊きになるんです、ミスタ・セイヤー」

彼は信託部の部下たちを服従させるときの苦々しい顔で、わたしを見た。「この男がきみにわしの名刺を渡したのなら、わしにも権利がある」

「あなたとはいっさい関係のない調査です、ミスタ・セイヤー」

「そのとおりだ、セイヤー」マグローが低くいった。「さあ、とっととこのオフィスから出て失せろ」

セイヤーがマグローのほうに向き直ったので、わたしはわずかに緊張をゆるめた。「おまえの薄汚い仕事のどれかを、わしになすりつける気じゃあるまいな、マグロー」

「言葉に気をつけろ、セイヤー。わたしの名前と活動はこの国のあらゆる法廷において、

潔白を証明されてるんだ。議会においてもな。そういうたわごとはいわんことだ」

「ふん、議会が潔白を証明しただと。上院の公聴会が始まる直前にデレク・バーンスタインが死んでくれて、幸運だったじゃないか」

マグローはつかつかと銀行家に歩み寄った。「この下司野郎。いますぐここから出てけ。さもなきゃ人を呼んで、横柄な取締役の威厳がはじけ飛んじまうやり方で、きさまを放り出してやる」

「おまえんとこの殺し屋なんか怖くもないさ、マグロー。わしを脅迫するのはやめろ」

「ちょっと、いい加減にしてよ」わたしはどなった。「二人とも確かにタフね。おかげで、こっちはビビってしまった。だから、小さな坊やみたいな喧嘩はやめてくれない？　ミスタ・セイヤー、どうして名刺の件にそんなにこだわるんです？　そりゃ、マグロー氏はあなたの名刺を勝手に使ったかもしれません。でも、彼の汚い仕事を──彼が汚い仕事をしてればの話ですけど──あなたになすりつけるような真似はしていません。そんなに狼狽なさるなんて、何か良心にやましいことでもあるんですか。それとも、どんなグループのなかでも自分が一番タフだってことを証明しなきゃ、気がすまないんですか」

「わしにものをいうときは、気をつけるんだな、お嬢さん。この街には有力者の友人が大勢いて、彼らなら──」

「ほら、いまいったとおりだわ」わたしは口をはさんだ。「有力者のお友達なら、わたし

の免許をとりあげることができるっていうんでしょ。確かにそうね。だけど、どうしてこだわるんです？」
　彼は一瞬黙りこんだ。最後にこういった。「こんなマグローみたいな男を相手にしていたらどういうことになるか、気をつけるがいい。法廷は彼を潔白だといったかもしれんが、ずいぶんとあくどいことをやってきた男だぞ」
「わかりました。充分気をつけます」
　彼はムッとした表情をわたしに向けて、出て行った。
　マグローは満足そうにわたしを見た。「うまくあしらったものだな、ウォーショースキー」
　わたしはそれを無視した。「あの晩、わたしの前で偽名を使ったのはなぜなの、マグロー。それから、どうしてお嬢さんの名前まで偽名にしたの」
「その前にまず、どうやってわたしを見つけた？」
「マグローって名前を見た瞬間、その名前が心の奥でざわざわいいはじめたの。あなたが撃たれたあの晩から、あなたのことはずっと覚えてたわ——マロリー警部補がナイフグラインダーズの名前を出したとき、あの晩の記憶がよみがえったのよ。最初に訊きたいんだけど、どうしてわたしのところにきたの。あの晩のように、父が救い出してくれるかもしれないと思ったの？」

「なんの話だ?」

「あら、とぼけないで、マグロー。わたし、あそこにいたのよ。あなたは覚えてないかもしれないけど——わたしはちゃんと覚えてるわ。あなたが血だらけの身体で入ってくると、父は肩の手当てをして、あなたをあの建物から追い出したんだわ。今回だって、どんな窮地に陥っているにせよ、父に頼めば助けてもらえると思ってたんでしょ。父が死んでることを知るまでは。それからどうしたか——職業別電話帳でわたしの名前を見つけて、トニーの息子だと思いこんだのね。ところで、どうしてセイヤーの名前を使ったの」

彼のなかで、わずかに闘志が衰えた。「わたしが何者かを知っても、きみが仕事を引き受けてくれるかどうか、自信がなかったんだ」

「でも、なぜセイヤーの名前を? なぜシカゴ最大の銀行の取締役の名前を使ったりしたの? ジョー・ブローとでも名乗ればすむことなのに」

「さあ、わからん。とっさの思いつきだよ、たぶん」

「とっさの思いつき? あなた、それほどバカじゃないはずよ。彼の名前をあんなふうに使ったりしたら、名誉毀損か何かで訴えられても仕方ないのよ」

「じゃ、どういう理由で、わたしが名前を騙ったことをやつに教えたりしたんだ。きみはわたしに雇われた身なんだぞ」

「いいえ、違うわ。あなたはわたしに料金を払って、ある独立した専門的な仕事を頼んだ

だけで、決してわたしを雇い入れたわけじゃない。それじゃ初めの質問にもどるけど、そもそも何が目的でわたしに仕事を頼んだの？」
「娘を見つけてもらうためだ」
「だったら、なぜお嬢さんを偽名で呼んだのかしら。いったいどうやって捜し出せっていうのよ。違うわ。あなたは死体を見つけさせるために、わたしを雇ったんだわ」
「いや、待ってくれ、ウォーショースキー」
「待つのはそっちよ、マグロー。あの坊やが死んだのをあなたが知ってたのは明らかだわ。いつ知ったの？　それとも、あなた自身が彼を撃ったの？」
彼の目がいかつい顔のなかで細められ、彼はすごい見幕でわたしに詰め寄った。「生意気な口を利くんじゃない、ウォーショースキー」
心臓が早鐘のように打ちはじめたが、わたしは引き下がらなかった。「いつ死体を見つけたの？」
彼はさらに一分ほどわたしをにらみつけ、やがて薄笑いを浮かべた。「どう見ても柔な人じゃないな。度胸のすわったレディには逆らえない……じつはアニタのことが心配だったんだ。月曜の晩には必ず電話をくれるのに、何の連絡もなかったものだから、わたしのほうから出かけて娘の無事を確かめたほうがいいと思ったんだ。あの近辺がいかに危険かは、きみも知ってるだろう」

「ねえ、ミスタ・マグロー、毎度のことながら、シカゴ大学が物騒な場所にあると思いこんでいる人の多さには驚かされるわ。なぜ親がそんな大学へ子供を行かせるのかと、ただただあきれるばかり。さあ、もうすこし正直になりましょうよ。わたしに会いにきたとき、あなたはすでにアニタの失踪を知ってたんだわ。でなきゃ、彼女の写真をくれるはずがないもの。あなたはいま、娘の身を案じて、無事に見つかることを願っている。自分の娘があの坊やを殺したと考えてるの？」

この質問は激情的な反応を引き出した。「ばかな、考えたこともない、とんだ言いがかりだ。どうしてもというなら教えてやるが、娘は火曜日の夜仕事から帰って、やつの死体を見つけたんだ。あわてふためいてわたしに電話してきて、そのあとで姿を消した」

「お嬢さんは、あなたが彼を殺したんだと非難したの？」

「なぜ娘がそんなことをしなきゃならん？」彼は喧嘩腰だが、どうも落ち着かない様子だ。

「理由ならいくらでも思いつけるわ。あなたはセイヤーの息子を憎み、自分の娘が資本家側に寝返ることを心配した。そのため、父親としての懸念がゆがんだ形で爆発した瞬間に、若者を殺してしまい、これでようやく娘をとりもどせると考えた。ところが、案に相違して——」

「ふざけるな、ウォーショースキー！　そんな異常な親などいやしない」

わたしはもっと異常な親もたくさん見てきたが、その点の議論はやめることにした。

—あらそう、お気に召さないのなら、これはどう？　ピーターはひょんなことから、あなたとナイフグラインダーズが関係しているうさんくさい、もしかしたら法に触れるかもしれない出来事を嗅ぎつけた。自分の心配をアニタに打ち明けるが、彼女を愛しているため、あなたを警察に密告することは思いとどまる。ところが一方では、若くて理想に燃えているため、あなたと対決しないことには気がすまない。しかも、金で買収される子ではない。そこであなたはピーターを撃つ——または誰かを雇って撃たせる——アニタはあなたが犯人に違いないと知った。そして、逃げ出した」

ふたたびマグローの神経がとがってきたが、彼はどなり散らし、大声でわめき、わたしの悪口を並べたてた。最後にこういった。「娘がわたしを密告する結果にしかならないのなら、なぜわざわざきみに娘を捜してほしいと頼んだりするんだ」

「さあね。もしかしたらあなたは賭けをしたのかもしれない——仲のいい親子なのだから、娘が自分に牙をむくはずはないと考えて。困ったことがあるわよ。警察がもうじきあなたとアニタの関係を突き止めそうな気配なの。学生たちが労働組合となんらかのつながりを持ってるってことは、すでにばれてるわ。だって、おたくに出入りしてる印刷屋で作ったビラが部屋中散らかってたもの。刑事だってバカじゃないし、あなたが組合の指導者だってことは誰もが知ってるし、あのアパートメントにマグローって人物がいたこともわかっている。

CamScannerでスキャン

警察がここにくるときはね、お嬢さんの身やお嬢さんとあなたの関係なんか気にかけちゃくれないわよ。殺人事件を抱えててそれを解決しなきゃならないから、喜んであなたに罪をなすりつけるでしょうね——セイヤーのような地位の男が圧力をかけていれば、とくに。ねえ、知ってることを正直に話してくれたら、なんとかして——確約はできないけど、でもなんとかして、あなたとお嬢さんを救ってあげられるかもしれない——もちろん、あなたが犯人でなければの話だけど」

マグローはしばらく床を凝視した。わたしは話をしながら椅子の肘掛けをきつく握りしめていたことに気づき、慎重に手の力をゆるめた。ようやく彼がわたしを見上げていった。

「何か話しても、警察にはいわないと約束してくれるか」

わたしは首を横に振った。「何も約束できないわ、ミスタ・マグロー、犯罪の事実を知りながら隠していたとなれば、探偵免許をとり上げられてしまうもの」

「そういう話じゃないんだ、くそ！　たいがいにしろよ、ウォーショースキー、まるで、こっちが罰当たりな人殺しか何かやったみたいな言い方じゃないか」彼は二分か三分、肩で息をした。ようやく、こういった。「わたしがきみに話したいのは、ただ——きみが正しいってことだ。わたしだ——このわたしなんだよ——わたしがやつの死体を見つけたんだ」苦しげにここまでいうと、あとの言葉はもっとすらすら出てきた。「アニーは——アニタは——月曜の夜、いつものように電話をくれた。アパートメントからではなかったし、

どこにいるかもいわなかった」彼は椅子のなかでわずかに身動きした。「アニタは分別のあるいい子なんだ。わがままいっぱいに甘やかされて育った子ではないし、大きくなるにつれて、いかに自立すべきかを学んでいった。娘とわたしは、まあ、親密な親子で、娘はつねに組合に目を向けてきたが、決して父親べったりの子供ではない。わたしだって、娘にそんな子になってほしいとは思わなかった。

火曜の夜に電話があったときは、とうてい娘だとは思えない声だった。まさにヒステリーの一歩手前で、支離滅裂なでたらめをさんざんわめき立てていた。しかし、男が殺されたことには触れなかった」

「何をわめき立てたのかしら」わたしはさりげなく訊いた。

「いや、埒もないたわごとさ。まるで意味がわからなかった」

「同じ歌の二番ね」わたしはいった。

「なんだと?」

「最初の話と同じだっていってるのよ」わたしは説明した。「一番のときよりすこし声が大きくなって、すこしへたになってるわ」

「もう一度だけいおう。娘はわたしがピーター・セイヤーを殺したなどという非難はしていない!」彼は声を限りに叫んだ。

事態の進展はあまり速くない。

「わかったわ。お嬢さんはあなたがピーターを殺したという非難はしなかったのね。じゃあ、彼が死んでるって話をしたの？」

彼は一瞬、返事につまった。答えがイエスなら、次は、娘がマグローを殺人犯だと思っていないのなら、なぜ姿を消したのかと訊いてみよう。「いや、さっきもいったように、娘はヒステリックになっていただけだ。あの子は——いや、それはともかく、あとになってこの目で死体を見たあと、わたしはようやく、娘が電話をよこした原因が、つまり——つまり、それだったことを悟ったんだ」彼はふたたび口をつぐんだが、今度はいくつかの記憶をかき集めるためだった。「娘のほうから電話を切ってしまったので、かけなおしてみたが、誰も出ない。そこで様子を確かめようと、出かけて行った。そして死体を見つけたのだ」

「どうやって入ったの？」好奇心から尋ねてみた。

「合鍵を持っている。アニーがあそこへ移ったときにくれたんだが、それまで一度も使ったことがなかった」彼はポケットをさぐって、鍵を取りだした。わたしはそれに目をやり、肩をすくめた。

「それが火曜日の夜のことね？」彼はうなずいた。「そしてわたしに会いにくるのに、水曜の夜まで待ったわけ？」

「誰かほかのやつが死体を見つけてくれるよう願って、一日中待ち続けたんだ。事件の二

ュースがどこにも出ないとわかって——あとはきみの推測どおりだ」彼が悲しげに微笑すると、顔全体がずっと魅力的になった。「トニーがまだ生きてくれればいいがと思った。もう何年も音信不通だった——ステリネックの事件がもとで、完全に出入り禁止になってしまったからな。トニーがそれをまだ根に持っているかどうかはわからなかった。しかし、力を貸してくれそうな人物として、トニーしか思いつけなかったんだ」

「どうして自分で警察に通報しなかったの？」わたしは訊いた。

彼の表情がふたたび硬くなった。「気が進まなかった」と、そっけなくいった。

わたしはその返事について考えた。「今回の件に関して、あなたはたぶん、独自の情報源がほしかったんでしょ。それから、あなたが警察のなかに持ってる情報源じゃ役に立たない、と思ったのね」彼は否定しなかった。

「ナイフグラインダーズは、フォート・ディアボーン信託と年金の契約をしてるの？」わたしは訊いた。

マグローはふたたび顔を紅潮させた。「うちの年金制度によけいなくちばしを突っこむのはやめてくれ、ウォーショースキー。いまだってスパイどもがうろちょろ嗅ぎまわって、うちの年金がこの先百年間は最高の清浄さを保ち続けることを証明してくれてるんだ。きみの出る幕はない」

「あなた自身は、フォート・ディアボーン信託と何か財政取引をしてる？」

CamScannerでスキャン

彼のすさまじい怒りように、わたしは自分がどの神経に触れたのかといぶかったが、彼は強い口調で否定した。

「エイジャックス保険会社とは?」

「おい、いったいなんの話だ?」

「さあ、何かしら、ミスタ・マグロー――あそこの保険に入ってらっしゃる?」

「知らん」彼は顔をこわばらせ、鋭い冷ややかな目でわたしを見ていた。カンザス・シティ四三一八支部のティミー・ライト青年が、支部で公正選挙をおこなう件について話しあおうとしたときも、マグローはきっとこんな目で青年を見たに違いない(ティミーは二週間後に、ミズーリ川に浮かび上がった)。その目は紅潮した顔でどなり散らすよりも、はるかに凄みがあった。わたしは感心した。

「じゃあ、おたくの年金のほうはどう? エイジャックスは年金関係も大々的に扱ってるでしょ」

「調子に乗るな、ウォーショースキー、いますぐオフィスから出てけ。きみが雇われたのはアニタを捜し出すためで、そっちになんの関係もない質問を次から次へとするためじゃない。いいか、出てって二度ともどってくるな」

「アニタを捜す件はどうするの」

マグローは突然しょげ返って、両手で頭を抱えた。「くそ、ちくしょう、どうすりゃい

いんだ」

わたしは同情の目で彼を見た。「誰かがあなたを脅迫してるの？」

彼は首を振っただけで、答えようとしなかった。わたしたちはしばらくのあいだ、沈黙のなかですわっていた。やがて彼がわたしを見たが、その顔は青ざめていた。「ウォーショースキー、アニーがどこにいるかわたしは知らない。また、知りたいとも思わない。しかし、きみの手で娘を見つけてもらいたい。見つかったら、娘が無事かどうかだけ知らせてくれ。あと一週間きみを引き止めておくために、もう五百ドル上乗せしよう。この金がなくなったら、わたしのところにきてくれ」それは正式な謝罪ではなかったが、わたしはそれを受け入れて、彼のもとを辞した。

昼食をとるために〈バーブのバーBQ〉に寄り、応答サービスに電話してみた。エイジャックスのラルフ・デヴローから、今夜七時半に〈カートウィール〉で会いたいという伝言が入っていた。わたしは彼に電話をかけ、ピーター・セイヤーの仕事について何かわかったかどうか尋ねた。

「ちょっと待って」彼はいった。「ファースト・ネームを教えてくれない？　誰かさんを〝V・I〟と呼び続けるなんて、無理な話だ」

「イギリス人はいつもそうしてるけど。何かわかったかしら」

「何も。調査なんかしてないよ――見つけるべきことがないんでね。あの子は機密事項を

扱ってたわけじゃないんだ。なぜだかわかるかい——V・I？　保険会社には機密事項というものがないからさ。保険という商品は、その開発についても、価格についても、およそ六十七の州と政府の出先機関によって監督されているんだ」

「ラルフ、わたしのファースト・ネームはヴィクトリアよ。友達からはヴィクって呼ばれてるわ。ヴィッキーじゃなくてね。保険がいわゆる最高機密を要する仕事でないことはわかったわ——だけど、横領へ走る甘美な機会はいくらでもあるんじゃないかしら」

意味深長な沈黙。「ないね」ようやく、彼がいった。「すくなくとも——ここでは。われわれには、小切手を振り出したり、代理権を行使したりする権限は与えられていないんだ」

この問題はこれで終わりだと思った。「エイジャックスがナイフグラインダーズの年金を扱ってるかどうか、知らない？」

「ナイフグラインダーズ？」彼はおうむ返しにいった。「あのごろつき集団とピーター・セイヤーと、いったいどんな関係があるんだ」

「わからない。でも、あそこの年金、おたくで扱ってないかしら」

「ないんじゃないの。うちは保険会社で、ギャングの溜り場じゃないからね」

「それじゃ、わたしのために調べてくれない？　ついでに、あそこがおたくの保険のどれかに加入してるかどうかも」

「うちではあらゆる種類の保険をセールスしてるよ、ヴィク——だけど、組合が入ってくれそうなやつは、あんまりないんだ」
「どうして」
「そうだな……」彼はいった。「話すと長くなる。七時半に〈カートウィール〉で会ってくれたら、くわしく説明してあげよう」
「いいわ」わたしは承諾した。「でも、とにかく調べてみて、お願い」
「Ｉはなんの略？」
「なんだっていいじゃない」わたしは電話を切った。Ｉはイフィゲネイアの略。わたしのイタリア人の母は、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世に傾倒していた。この情熱とオペラへの愛が組み合わさって、わたしは母からヴィクトリア・イフィゲネイアという風変わりな名前をつけられることになった。
　わたしはフレスカを飲み、シェフ・サラダを注文した。スペアリブとフライド・ポテトにしたかったが、ミルドレッドのたるんだ腕を思い出してやめたのだ。サラダは腹の足しにならなかった。フライド・ポテトを容赦なく頭から払いのけて、数々の出来事に思いをめぐらした。
　アニタ・マグローは父親に電話をかけ、殺人の件を一応は告げたのだ。きっと、父親がからんでいることを非難したに違いない。つまり（エルゴ）、ピーターはナイフグラインダーズに関

してある不名誉なことを発見し、それを彼女に話したのだ。おそらくエイジャックスで発見したのだろうが、ことによると銀行のほうかもしれない。わたしは年金という発想が気に入った。ナイフグラインダーズの年金を扱っている点では、というか、扱いをしくじっている点では、ロイヤル・アライアンス年金基金が世間に名を知られているが、二千万ドルかそこらの金なら、簡単に大手の銀行または保険会社に移せるはずだ。それに年金には、詐欺をおこなう余地が充分にある。

マグローがアパートメントまで出かけた理由は何か。ええと、まず第一に、セイヤーが見つけた不名誉な秘密がなんであれ、その件はマグロー自身知っていることだった。アニタも知っているのではないかと、不安になった——若い恋人どうしが秘密を自分一人の胸にしまっておくことはあまりない。アニタが電話をかけてきたのが、頭に風穴をあけられた恋人を見つけたせいだとすれば、マグローはおそらく、わが子であろうがなかろうが次に狙われるのは彼女だと判断しただろう。だからこそ、娘の死体も転がっているのではないかとの恐怖にかられて、ハイド・パークへ駆けつけたのだ。ところが、娘は消えていた。ここまでは筋が通っている。

さて、アニタを見つけることができたら、わたしにもその秘密がわかる。秘密がわかれば、わたしの手でそれを公表して、娘にかかっている圧力をとりのぞき、家に帰るよう説得することができる。なかなかうまい考えだ。

ところで、セイヤーのことはどう考えるべきだろう。なぜマグローが彼の名刺を使い、なぜセイヤーがあれほど激怒したのだろう。礼儀の問題というだけのことだろうか。一度、セイヤーと二人きりで話をする必要がある。

わたしは勘定を払い、ふたたびハイド・パークへ向かった。政治学部は古めかしい校舎のひとつの四階にあった。うだるような夏の日の午後、入口ホールはがらんとしていた。吹抜けの階段に沿って続く窓から、学生たちのグループがあちこちで芝生に寝ころがって、ある者は本を読み、ある者は昼寝をしている姿が見えた。元気いっぱいの若者が二、三人、フリスビーで遊んでいた。アイリッシュ・セッターが円盤をくわえようと、近くを走りまわっている。

学部の事務室では、一人の学生が窓口の番をしていた。年齢は十七ぐらい、長いブロンドの髪が額にかぶさっているが、髭はない――髭を伸ばすにはいささか幼すぎる感じだ。左の腋の下に穴があいたTシャツを着て、本の上に背中を丸めてすわっていた。わたしが声をかけるとしぶしぶ顔を上げたが、膝の上にひらいた本はそのままだった。

わたしは愛想よく笑みを浮かべて、アニタ・マグローを捜しているのだと告げた。学生はとげとげしい目でわたしを見ると、ものもいわずに本にもどった。

「ねえ、ちょっと。彼女の居所を訊いてどこが悪いのよ。彼女、この学部の学生なんでしょ、そうね?」彼は頑として顔を上げない。わたしは怒りがこみ上げてくるのを覚えたが、

もしやわたしの前にマロリーがきたのではないかと考えた。「警察がアニタの居所を訊きにきたのね」

「知ってるくせに」彼は顔も上げずにつぶやいた。

「だらしないブルー・ジーンズをはいてないっていうただそれだけの理由で、わたしを警察のまわし者だと思ってるわけ?」と訊いてやった。「学部別の講座一覧表を出してもらえないかしら」

彼は動かなかった。わたしはデスクの彼のいる側にまわって、引出しを引っぱった。

「ああ、わかったよ」彼はむっとしたようにいった。ひらいた本をそのままデスクに伏せた。マルクーゼ著『資本主義と自由』。なるほど、似合いだ。彼は引出しをひっかきまわして、〈カレッジ時間割一覧表・一九七九年夏〉と銘打った、タイプしてガリ版で印刷された九ページのリストを引っぱり出した。

わたしはそれをぱらぱらめくり、政治学部の項を見つけた。この学部の夏期スケジュールは一ページを埋めていた。講座名には〝アリストテレスとプラトンにおける市民の概念〟〝デカルトからバークリーまでの理想主義〟〝超大国の政治と世界終末論(ヴェルトフェアシュヴィンデン)〟などが並んでいる。魅惑的だ。ついに、もうすこし期待できそうな響きを持つものを見つけ出した。〝資本家の孤立・大労組対大企業〟こういう講座を担当する人間なら、アニタ・マグローのような若き組合組織員を惹きつけるに違いない。それに、アニタの友人たちの

名前も知っているかもしれない。担当者の名前はハロルド・ワインシュタインだった。

わたしは若者に、ワインシュタインのオフィスはどこかと尋ねた。彼はますます背中を丸めてマルクーゼに没頭し、聞こえないふりをした。わたしはもう一度デスクをまわり、彼と向きあう形でその上に腰をかけてから、相手のシャツの襟をつかみ、その顔をぐいと仰向かせて彼の目をのぞきこんだ。「アニタの居所を警察の犬どもに白状しないことが、革命に対する大いなる貢献だと思ってるようね」わたしは愛想よくいった。「彼女の死体が車のトランクから見つかったら、あなた、苛酷な弾圧のもとで紳士の作法を守り抜いたことを自賛するパーティを開いて、わたしを呼んでちょうだい」軽く彼を揺さぶってやった。「さあ、どこにハロルド・ワインシュタインのオフィスがあるのか、いいなさい」

「何もいう必要はない、ハワード」わたしの背後で誰かがいった。「それから、きみ」男はわたしに話しかけてきた。「学生たちが警察とファシズムを同一視しても、驚いてはいかん――きみ、いまその学生に暴力をふるったね」

声の主は熱っぽい茶色の目と、始末に負えないぼさぼさの髪をした、やせた男だった。ブルーのワークシャツを着ていて、裾はカーキ色のジーンズのなかに行儀よくたくしこんである。

「ミスタ・ワインシュタイン？」わたしはハワードのシャツを離しながら、愛想よくいった。彼は両手を腰に当て、じっと考えこむ様子でわたしを見ている。なかなか威厳のある

光景だ。「わたしは警察の者じゃありません——私立探偵です。それから、こちらが礼儀正しい質問をしたときは、横柄に肩をすくめるのではなくて、礼儀正しい返事をしてもらいたいものです。

アニタの父親であるアンドリュー・マグローが、娘を捜してほしいとわたしに依頼してきました。彼女が恐ろしい災難に巻きこまれているような気がしてなりません。父親も同じ不安を抱いています。どこかへ行って、そのことで話しあいたいのですが」

「気がするというんだね」彼は重々しくいった。「だったらどこかよそへ行って、そういう気になるといい。われわれは警察に——公的なものであろうと私的なものであろうと——この構内に入ってこられるのが好きじゃないんでね」彼はこちらに背中を向け、もったいぶって廊下を引き返そうとした。

「みごとな演技ね」わたしは拍手した。「アル・パチーノを研究してたんでしょ。じゃあ、演技が終わったところで、アニタの話に移りません？」

彼のうなじが赤くなり、その色は耳にまで広がったが、足を止めた。「彼女のどんなことを？」

「失踪したことはもちろんご存じね、ワインシュタイン先生。彼女のボーイフレンドのピーター・セイヤーが死んだことも、ご存じじゃないかしら。わたしはアニタが彼と同じ運命をたどるのを防ぎたくて、彼女を捜しまわっているのよ」彼にその意味を理解させるた

めに、わたしは間をおいた。「たぶんどこかに身を隠していて、誰がピーターを殺したにせよ、自分は見つかりっこないと思ってるんだわ。でも、アニタは卑劣な殺人者にとって、邪魔な存在になってしまった。金を充分に持っていて、どんな隠れ家も金の力で捜し当ててしまう殺人者なのよ」

彼が向きを変えたので、その横顔を見ることができた。「心配いらんよ、フィリップ・マーロウ——ぼくは買収されて彼女の居所を教えるような人間じゃない」

拷問にかけたら口を割るだろうか、と希望をこめて考えた。口に出しては、次のようにいっただけだった。「アニタの居所をご存じなの？」

「答えられん」

「彼女と親しい友達を誰かご存じ？」

「答えられん」

「すてきね、とっても参考になったわ、ワインシュタイン先生——わたしの好みにぴったりの教授。わたしの在学中に、ここで教えてらっしゃればよかったのに」わたしは名刺を抜いて彼に渡した。「何か答える気になったら、ここに電話してください」

外のうだるような暑さのなかへもどって、わたしは滅入ってしまった。ネイヴィ・ブルーの絹のスーツはしゃれているが、この陽気には暑苦しすぎる。汗が流れている。たぶん、腋の下の生地をだめにしてしまうだろう。その上、出会った人間のすべてと仲たがいして

いるみたいだ。ハワードの顔をひっぱたいてやればよかった。

円形の石のベンチが、カレッジの校舎と向かいあって置かれていた。そこへ歩いて行き、腰を降ろした。こんなばかげた事件は投げ出したほうがいいのかもしれない。腐敗した組合や横柄なガキどもよりも、産業スパイのほうが性に合っている。マグローのくれた千ドルは、ミシガン半島で夏をすごす費用にしようか。そしたら彼はかんかんに怒って、セメントの錘（おもり）を持った誰かにわたしを追いかけさせるかもしれない。

わたしのすぐうしろに、神学部の校舎があった。わたしは溜息をつき、重い腰を上げて、石の壁に囲まれた涼しさのなかに入って行った。昔、地下のコーヒーショップでは、沸かしすぎのコーヒーと、生ぬるいレモネードを出してくれたものだ。階段を降りると、そこはいまも営業を続けていた。昔と同じたたずまいと、間にあわせのカウンターの向こうに見える昔と同じ若者たちの顔には、どこかしらほっとするものがあった。思いやり深く純真で、暴力的な教義を数多く説き、盗人は社会から迫害されているがゆえに盗んだ物に対して権利を持つのだと信じ、そのくせ、誰かから機関銃を握るよう命令されれば、歯の根も合わないほど震え上がってしまいそうな若者たちだった。

わたしはコークをもらい、それを持って薄暗い隅に引っこんだ。椅子のすわり心地はよくなかったが、膝を顎まで上げて壁にもたれた。ぐらぐらするいくつかのテーブルを囲んで、一ダースほどの学生が腰を降ろし、暗い照明のなかで本を読もうとする者もいたが、

CamScannerでスキャン

大部分は雑談に時間をすごしていた。会話がとぎれとぎれに聞こえてくる。「もちろん、それを弁証法的に見れば、彼らにできることはただ――」「彼女にいったのよ。断固たる態度に出なきゃ、男なんてのは――」「うん、でもさ、ショーペンハウエルの言葉だと――」わたしはうとうとした。

数秒後、「ピーター・セイヤーのこと聞いた？」という大きな声に、わたしはびくっと目をさました。顔を上げた。声の主は赤いぼさぼさの髪をして、身体に合わないペザント・ブラウスを着た小肥りの若い女で、コーヒーショップに入ってきたばかりだった。床の上にどさりとカバンを投げ出し、三人の人間がすわっている部屋の中央のテーブルに加わった。「教室を出ようとしたとき、ルース・ヨンカーズが教えてくれたのよ」

わたしは立ち上がり、コークをもう一杯買って、赤毛のうしろのテーブルにすわった。同じようにぼさぼさの、しかし黒い色の髪をしたやせ形の若者が、こういっていた。「うん、そうさ、おまわりどもが今日の朝、政治学部の事務室にうじゃうじゃしてた。ほら、あいつ、アニタ・マグローと暮らしてただろ。その彼女が日曜日から行方不明なんだってさ。ワインシュタインがすげえ見幕で連中に食ってかかってた」彼は賞賛をこめてつけ加えた。

「あいつら、アニタが彼を殺したと思ってるの？」赤毛が訊いた。

色の黒い、幾分年上の女が鼻を鳴らした。「アニタ・マグローが？　わたし、あの子と

は二年前からのつきあいよ。おまわりを殺すことはあっても、自分のボーイフレンドを撃つような子じゃないわ」
「彼とも知りあいなの、メアリ?」赤毛が訊いた。
「ううん」メアリはそっけなく答えた。「会ったこともないわ。アニタが女子学生連盟の会員だから、わたし、その関係で彼女を知ってるの。そうだ、彼女のもう一人のルームメイトでジェラルディン・ハラタって子も会員よ。でも、ジェラルディンはこの夏ずっとアパートを留守にしてるわ。でなきゃ、おまわり連中は彼女に容疑をかけたに決まってる。あいつら、いつだって最初に女を疑うんだもの」
「彼女にボーイフレンドがいるってのに、きみが彼女のUWU(女子学生連盟)への入会を認めたなんて、驚きだね」髭を生やした若い男が話に割りこんだ。でっぷりしていて、ブヨブヨ体型。Tシャツがはだけて、みっともない出っ腹がのぞいている。
メアリは横柄な表情で彼を見て、肩をすくめた。
「UWUのみんながみんな、レズビアンてわけじゃないわよ」赤毛が喧嘩腰でいった。
「ボブみたいな男がまわりにわんさといると、どうしてみんなレズビアンにならないのか理解に苦しむわ」メアリが物憂げにいった。デブの若者はまっ赤になって何やらつぶやき、〝去勢〟という一言だけがわたしの耳に届いた。
「ところで、あたし、アニタには一回も会ったことないのよ」赤毛が続けた。「UWUの

会合には、五月から行きはじめたばかりだもの。ほんとに失踪しちゃったの、メアリ？」

メアリはふたたび肩をすくめた。「豚どもがピーター・セイヤー殺しを彼女になすりつけようとしてても、わたしは驚かないわ」

「家に帰ったのかも」ボブが意見を出した。

「違うよ」やせた若者がいった。「家に帰ってりゃ、警察（サツ）が彼女を捜してここらをうろつくはずないだろ」

「ともかく」メアリがいった。「わたしだけは警察が彼女を逮捕しないことを祈ってるわ」彼女は立ち上がった。「バートラムが中世文化についてくどくどしゃべるのを聞きに行かなきゃ。魔女とはヒステリーを起こした女たちであった、なんてあと一言でもいったら、あの先生、講義のあとで何人かに襲われることになるわよ」

彼女はナップザックを左肩にかつぐと、ゆっくりした足どりで出て行った。あとの者たちはテーブルに身体を寄せあい、ゲイ関係対異性愛関係という活気のある討論に移った。気の毒なボブは後者が好みらしいが、それを積極的に立証するための機会を数多くものにしているようには見えなかった。やせた若者は熱心にレズビアンを弁護した。わたしは楽しく拝聴した。学生たちは数多くの話題について、熱烈な意見を持っていた。四時になり、カウンターの奥の若者がそろそろ閉店の時間だと告げた。学生たちは自分の本をかき集めはじめた。わたしが耳を傾けていた三人はその後も何分か議論を続け、ついにはカウンタ

ーの男から、「おい、そこのみんな、こっちは早く帰りたいんだぜ」と大声でどなられた。

彼らはしぶしぶカバンをとって、階段のほうへ歩きだした。わたしは紙コップを投げ捨ててから、ゆっくりと彼らに続いて出て行った。階段の一番上で、赤毛の腕に手を触れた。彼女は立ち止まり、親しみのこもった純真な顔でわたしを見た。

「あなたがUWUのことをいってるのが聞こえたものだから」わたしはいった。「どこで集会を開くのか、教えてくれない？」

「ここの大学に入ったばかりなの？」彼女が訊いた。

「卒業生よ。でも、今年の夏はここでしばらく過ごさなきゃならない事情ができたの」わたしは本当のことを答えた。

「あのね、ユニヴァーシティ・アヴェニュー五七三五番地の建物に、専用の部屋があるの。その建物、大学が管理してる古い住宅のひとつなの。UWUは毎週木曜の夜にそこで集会を開いて、あとの女性運動はそれ以外の曜日にやってるのよ」

わたしは彼女に、現在の女子学生センターについて尋ねてみた。たいして大きくなさそうだが、何もないよりはましで、過激派の女子学生たちでさえウーマンリブを汚い言葉として扱っていたわたしの大学時代にあったのと、ほぼ同程度の規模だった。彼女たちは女性の健康相談グループや護身術のコースを設け、対話集会や週一回の女子学生連盟の集会を主催していた。

わたしたちはキャンパスを横切ってミッドウェイ・プレイザンスのほうに向かっていた。そこに私の車が置いてある。家まで車で送ろうというと、彼女はまるで小犬のように助手席に飛び乗って、無邪気だが熱っぽい口調で、女たちの受けている迫害について語りはじめた。わたしがどんな仕事をしているかも知りたがった。
「フリーの仕事よ。企業関係がほとんどだけど」さらに突っこんだ質問がくるものと覚悟して答えたが、彼女はそれだけで充分に満足して、写真も撮るのかと訊いてきた。どうやら、わたしのことをフリー・ライターだと思いこんだらしい。ここで真実を話せば、彼女はUWUの全員にそれを伝え、わたしがアニタについてなんらかの答えを得るのが不可能になってしまう。かといって、しらじらしい嘘はつきたくない。真実がばれたとき、これら若い急進的な女たちはますます敵意をつのらせるだろうから。そこで、「写真は撮らない」と答え、「あなたは写真をやるの？」と訊いてみた。彼女のアパートメントの前で車を停めたときも、彼女はまだ陽気にしゃべりまくっていた。
「あたし、ゲイル・シュガーマンよ」車から降りようとぶざまな格好で悪戦苦闘しながら、彼女はいった。
「よろしくね、ゲイル」わたしは丁寧に答えた。「わたしはV・I・ウォーショースキー」
「ヴィーアイ！」彼女は叫んだ。「なんて珍しい名前かしら。アフリカの名前？」

「いいえ」わたしは大まじめに答えた。「イタリアよ」車で遠ざかりながら、アパートメントの正面階段をのぼって行く彼女の姿を、バックミラーでとらえることができた。彼女のおかげで、自分が信じられないぐらい老けこんだような気がした。二十歳のときでさえ、わたしにはあんな純真な、はずむような人なつっこさはなかった。そしていま、その人なつっこさがわたしを皮肉で孤独な気分にしている。要するに、彼女をだましたことが少々恥ずかしいのだ。

5　ゴールド・コースト・ブルース

長年にわたって穴ぼこだらけだったレイク・ショア・ドライヴは、掘り返しと補修を進めている最中だった。北行きは二車線があいているだけで、何マイルにもわたって渋滞が続いていた。西行きのスティーヴンスン高速に乗り換え、それから、ノース・サイドの工業地帯を空港へ向かうケネディ高速で北へもどることにした。息のつまりそうな金曜の晩に街から逃げ出そうとする大勢の人々のおかげで、ラッシュ時の車の流れはいっそう悪くなっていた。悪戦苦闘しながらベルモントの出口にたどり着いて、さらにわたしのアパートメントまでの十五ブロックを走るのに、一時間以上もかかってしまった。ようやく帰り着いたとき、わたしの頭にあったのはトールグラスに注がれた冷えた飲物と、長い気持ちのいいシャワーのことだけだった。

　誰かがうしろから階段をのぼってくることにも気づかずに、鍵穴に鍵を差しこんでまわしかけたそのとき、自分の肩に手が置かれるのを感じた。前に一度、ここの入口ホールで辻強盗に襲われたことがある。わたしは反射的に振り返るなり、とっさに膝を折って蹴り

上げ、襲撃者の無防備な脛の骨を直撃した。男はうめいてあとずさったが、わたしの顔めがけて強烈なパンチで逆襲してきた。身を屈めたわたしは左肩にパンチをくらった。パンチの威力はかなり衰えていたものの、軽くよろめいてうしろに下がった。

相手は背の低いいかつい男で、身体に合わないチェックのジャケットを着ていた。すこし息切れしている様子に、わたしはほくそ笑んだ。それはつまり男が運動不足だという意味で、運動不足の男が相手なら、女でも勝ち目がある。わたしは相手が動くか逃げるかするのを待った。男は代わりに拳銃を抜いた。わたしは立ちすくんだ。

「ピストル強盗のつもりなら、財布には十三ドルしか入ってないわよ。人殺しをする値打ちはないわ」

「あんたの金には興味ねえよ。一緒にきてもらいてえんだ」

「一緒にって、どこへ？」わたしは訊いた。

「向こうに着きゃ、わかる」彼はわたしに銃を向け、もう一方の手で階段の下のほうを差し示した。

「高給とりのギャングが決まってだらしない格好をしてるのには、がっかりだわ」と、わたしは批評した。「ジャケットは身体に合ってないし、ワイシャツの裾がズボンからはみ出してるし――みっともないわね。あなたが警官だったら、それもわかるけど。だって、警官は――」

　彼は怒気を含んだわめき声で、わたしの言葉をさえぎった。「くそったれのあまに、服の着方を教えてもらう必要はねえ！」必要以上の力でわたしの腕をつかむと、わたしを乱暴にせき立てて、階段を降りようとした。しかし、わたしをつかんだ腕に力が入りすぎていた。そこで、わずかに身体の向きを変えて片手を振り上げ、銃を握った彼の手首の下へ、強烈な空手チョップを見舞ってやった。男はわたしを離したが、銃は落としていない。わたしはそのまま半回転するなり、右肘を彼の腋の下に当てて、右のこぶしと前腕で楔を作った。開いた左手を添えて相手の肋骨にその楔を打ちこむと、ポキッと小気味よい音がした。第五と第六肋骨のあいだに命中して、その二本をへし折ったというしるしだ。男は痛さに悲鳴を上げ、銃を落とした。わたしはすかさず手を伸ばしたが、向こうにもわたしの手を踏みつける程度の知恵はあった。彼のみぞおちに頭突きをくらわすと、彼は足を引っこめたが、わたしもバランスをくずして勢いよく尻餅をついてしまった。誰かがわたしの背後の階段を荒々しく駆け上がってくる。振り向いてそれが誰かを確かめる前に、片足を引いて銃を蹴とばすだけで精一杯だった。

　騒音に目をさました近所の人間だろうと思ったのに、どうやらその男も仲間らしく、最初のちんぴらと似たり寄ったりの服装だったが、体格はもっとすごかった。相棒が壁にもたれてうめいているのを見て、猛烈な勢いでわたしに飛びかかってきた。わたしたちは床に転がり、わたしは彼の顎の下に両手を突っこんで、その首を押しもどそうとした。男は

離れたが、わたしの頭の右側をしたたかに殴りつけてきた。痛みが身体を突き抜けたが、そんなことでへこたれるわたしではない。そのまま転がり、壁に背中をつけて勢いよく立ち上がった。男に拳銃を抜くひまを与えてはならじと、うしろの羽目板を支えにして、男の胸めがけて片足を蹴り上げてみごとバランスを失わせたが、こちらも彼の上に倒れこんでしまった。身をくねらせて彼から逃れる前に、二発目の強烈なパンチが顎をわずかにかすめてわたしの肩に命中した。力では男のほうが勝るものの、ふだんの鍛え方と機敏さではわたしのほうが上で、相手の機先を制して起き上がり、左の腎臓のあたりを思いきり蹴りつけてやった。たまらずくずおれる男に、もう一度蹴りをくれてやろうと身体を引いたとき、相棒が正気にもどり、彼の拳銃を拾ってわたしの左耳の下を殴りつけた。わたしの蹴りも同時に命中し、やがてわたしはずんずん墜落していったが、墜落しながら世界の端から転げ落ちていくのを記憶していた。

気を失っていたのは長い時間ではないが、男たちがわたしを階段の下まで引きずり降ろすには充分な時間だった。部分的に痛めつけられた二人の男にしては、よくやったものだ。近所の誰かが物音を聞きつけたとしても、たぶんテレビのボリュームを上げて、音をかき消してしまったことだろう。

男たちの手で車に押しこめられている最中に、吐き気を覚えながら意識をとりもどした。なんとか我慢しようと思ったのだが、片方の男に胃の中身を吐き散らして、ふたたび意識

を失ってしまった。二度目はもっとゆっくりと意識がもどってきた。車で走っている最中だった。肋骨を折られた男が運転している。わたしが吐いたのはもう一人の男のほうで、その臭いときたら、まことに強烈。男の顔はひどくこわばり、いまにも泣き出すのではないかと思われた。男が二人がかりで一人の女を追っかけて、肋骨と腎臓をだめにしたあとでようやく彼女をつかまえ、そのあとジャケットの前身頃にヘドをまき散らされて、身動きすることもそれを洗い流すこともできないというのでは、いい気分はしない――わたしだってそんなのはごめんだ。クリネックスはないかと、ジャケットのポケットを捜してみた。吐き気はまだ続いていて、とてもしゃべれる状態ではなかったし、わざわざ拭いてやる気にもなれなかったので、彼の身体にティッシュを落としてシートにもたれた。彼は小さく怒りの叫びを上げて、ティッシュを床に投げつけた。

車が停まったのはノース・ミシガン・アヴェニューに近い、ディヴィジョン通りとアスター通りの交差点をすこしはずれた場所で、金のある連中が美しいヴィクトリア様式の古い邸宅やアパートメントとか、巨大な超高層の現代的コンドミニアムなどで暮らしている地域だった。わたしの右側の相棒がドアから飛び出し、ジャケットを脱いで通りに投げ捨てた。

「拳銃が見えてるわよ」と教えてやった。彼はそれを見て、次にジャケットを見た。顔がまっ赤になった。「クソ女」わたしをもう一度いたぶろうと車に身体を突っこんだが、角

度がよくなくて、腕の力だけではパンチにも勢いがなかった。
〈肋骨〉が大声でいった。「やめとけ、ジョー――遅くなっちまった。アールは待たされるのが好きじゃねえんだ」たったこれだけの言葉がジョーに絶大な効果をもたらした。腕を振りまわすのをやめて、わたしを車から引きずり降ろし、〈肋骨〉が横からわたしを押してそれを手伝った。

タンカーでもうけた億万長者を国際誘拐団の手から救い出して、謝礼に一生遊んで暮らせるだけの金をもらうようなことがあったら、ぜひともわが物にしたいとわたしがつねづね思っていた堂々たる古い邸宅のひとつに、わたしたちは入って行った。渋い赤レンガの造りで、石段の脇と正面の窓の周囲には、優美な鋳鉄の柵がついている。もとは一家族用の住居として建てられたものだが、いまはフラット三つのアパートメントに変わっていた。入口ホールと吹抜けは、派手な黒と白の柄の壁紙におおわれていた。階段の手すりはクルミ材と思われる木でできていて、彫刻がなされ、つややかに磨き上げてある。わたしたち三名は絨毯を敷きつめた階段をのぼって二階まで、ぶざまな行進をおこなった。〈肋骨〉は腕を動かすのがつらそうだし、ジョーは腎臓を蹴られたおかげで足を引きずっているようだ。わたし自身はどうも気分がすぐれない。

二階のアパートメントのドアは、拳銃を構えたさらに別の男によってひらかれた。服のサイズは前の二人よりも身体に合っていたが、決してこの地域に属する階級の人間には見

えなかった。針金の茂みのように頭のまわりに突っ立った、ごわごわの黒い髪。右頬には、ほぼZの形に刻まれた深くて赤い傷痕。傷の色はひどく濃くて、まるで誰かが口紅で描いたように見える。

「何を手間どってやがったんだ。アールがかんかんだぜ」わたしたちを広い玄関ホールに招き入れながら、男はなじるように訊いた。床には豪華な茶色の絨毯、ルイ十五世様式のしゃれた小さなサイド・テーブル、そして、壁には何点かの絵。魅力的だ。

「このワーチョッチーのあまが小利口な女だってことまでは聞いてなかったぜ」こういったのは〈肋骨〉。「くそ生意気なカラテの達人だってこたあ、アールから注意されてたけどよ」

彼はわたしの名前を〝ワーチョッチー〟と発音した。わたしは慎ましやかに、両手に視線を落とした。

「ジョーとフレディか」鼻にかかったテノールの甲高い声が、なかから聞こえた。「おまえたち、いったい何をぐずぐずしてたんだ」声の主がドアのところに姿を見せた。ちびでずんぐりした禿頭のその男は、わたしがシカゴの法執行機関で仕事を始めたころからの顔なじみだった。

「アール・シュマイセン。お目にかかれてうれしいわ。でもね、アール、わたしに電話して会いたいと一言いってくれれば、こんな惨事を起こさずに会えたんじゃないかしら」

「まったくだ、ウォーチョスキー、確かにそうだ」彼は重々しくいった。アールは会議で

この街を訪れる連中を当てこんだ高級売春組織や、ささやかな恐喝などを武器に、ノース・サイドでかなりの地位を築き上げた男である。麻薬商売にも手を出しているし、噂によると、価格の折り合いさえつけば、友人の頼みに応じて殺しの手はずまで整えるという。

「アール、すばらしいとこに住んでるじゃないの。インフレもお仕事にはたいして影響なさそうね」

彼はわたしを無視した。「おまえのジャケットはどこなんだ、ジョー。パトロールの警官一人一人にそのはじきを見せながら、シカゴじゅうほっつき歩いてたのか」

ジョーはふたたび赤くなって、何やらつぶやきかけた。わたしが割って入った。「わたしの責任なのよ、アール。あなたのお友達ときたら自己紹介もしなきゃ、あなたの使いだってこともいわずに、うちの玄関先でいきなり襲いかかってきたの。そこでわたしたち、軽い立ち回りを演じて、フレディの肋骨が折れてしまったってわけ――でも、この人、みごと元気を回復して、わたしをノックアウトしたのよ。意識がもどったとき、わたし、ジョーのジャケットに吐いちゃった。だから、ジャケットをほっぽり出したことで、この気の毒な人を叱らないでね」

アールは憤怒の表情でフレディに向き直り、フレディはホールの隅へとあとずさりした。

「たかが女一人に肋骨をへし折られたってのか」彼は突如きいきい声になって、わめいた。

「金はたっぷり払ってあるのに、たかがあま一人連れてくるだけのケチな仕事もできねえ

のか」
この仕事をしていてうんざりさせられるもののひとつに、安っぽい悪党どもがしきりに使う安っぽい悪態がある。〝あま〟という言葉にもうんざりだ。
「アール、お仲間への批判は、わたしが帰るまで遠慮してもらえないかしら。わたし、今夜約束があるの——ちんぴら二人を迎えによこしてまでわたしに会おうとなさった理由を話してくれたら、恩に着るわ。そしたら、デートの時間に間に合うもの」
アールはフレディに険悪な顔を向けて、医者へ行ってこいと追い出した。あとに残ったわたしたちに、居間に入るようにと身振りで示して、ジョーが足を引きずっているのに目をとめた。
「きさまも医者が必要なのか。この女に足でも折られたのか」と、嫌味たっぷりに訊いた。
「腎臓よ」わたしは遠慮がちに答えた。「技を知ってるものですから、つい……」
「ああ、あんたの手並みなら知ってるさ、ウォーチョスキー。どんなに利口なねえちゃんかも知ってるし、どんなふうにジョー・コレルをやっつけたかも聞いている。フレディがあんたをノックアウトしたんなら、やつにメダルをやることにしよう。おれがあんたにわかってもらいてえのはな、おれの縄張りを荒らすなってことなんだ」
わたしはゆったりした肘掛椅子に身を沈めた。頭がずきずきしていて、彼に目の焦点を合わせようとすると頭を痛みが突き抜けた。「あなたの縄張りなんか荒らしてないわ、ア

ール」わたしは熱心にいった。「興味がないもの。売春にも、高利貸しにも、それから——」

　彼がわたしの口を横ざまに殴りつけた。「黙りやがれ」その声は甲高い金切り声に変わり、ぶよぶよした顔のなかで目が小さくなった。わたしはまるで他人事のように、血が自分の顎をしたたり落ちるのを感じた。この男、指輪で殴りつけたに違いない。

「じゃあ、これは一般的警告なの？　あなた、シカゴじゅうの私立探偵を引っぱってきて、『さあ、よく聞け——アール・シュマイセンの縄張りを荒らすんじゃねえ』っていってるの？」

　アールがまたもや殴りかかってきたが、今度はわたしの左腕でブロックした。彼は何事が起きたのかといぶかるように、びっくりした顔で自分の手をながめた。

「おふざけはやめろ、ウォーチョスキー——手下どもを大勢呼び入れて、その気どった笑いを顔から拭きとってやってもいいんだぜ」

「そんなに大勢は必要ないと思うけど」わたしはいった。「それより、おたくの芝生ののあたりを踏み荒らしたのか、わたし見当もつかないのよ」

　アールがドアマンに合図すると、彼が部屋に入ってきてわたしの肩を椅子に押しつけた。ジョーは好色そうな表情で背後をうろついている。わたしの胃袋がかすかにむかついた。

「わかったわ、アール、わたしいま、恐怖のどん底よ」といった。

彼はふたたびわたしを殴りつけた。明日になったら、二日と見られぬ顔になっているだろう。身体が震えていないことを祈った。神経の消耗で胃が締めつけられていた。緊張を和らげるため、何回か深い腹式呼吸をくりかえした。

最後の平手打ちでアールは満足したようだ。わたしの椅子のそばにある濃い色のカウチに腰かけた。

「ウォーチョスキー」と甲高い声でいった。「あんたをここに呼んだのはな、セイヤー事件から手を引けというためさ」

「あなたが坊やを殺したの、アール?」わたしは訊いた。

彼はふたたび立ち上がった。「すてきな傷をつけてやろうか。ほかの連中がおまえの顔を二度と見たがらねえほどの、すてきなやつを」とわめいた。「いいか、おれのいうとおりにしろ。事件から手を引くんだ」

彼と議論するのはやめることにした。彼と、さっきからわたしの肩を押えつけているドアマンの両方を相手にできるほど、元気ではない。この大騒ぎで男の傷痕もさらに赤味を増したのではないかと思ったが、彼に訊くのは遠慮した。

「わたしを脅せば引っこむと思ってるの? 警察のほうはどうするのよ」と反論した。

「ボビー・マロリーが必死に事件を追ってるわ。ボビーにどんな欠点があるにしても、買収することだけはできないわよ」

「マロリーなんざ、怖くもない」アールの声がふだんの音域にもどっていたので、錯乱の嵐は過ぎ去ったのだろうと判断した。「それから、あんたを買収するつもりもない——おれはあんたに話をしてるんだ」

「誰に頼まれてこんなことしてるの、アール。大学生はあなたの商売とは無関係でしょ——もっとも、セイヤーの坊やがおたくの麻薬の縄張りに首を突っこんだのなら、話は別だけど」

「おれ個人の事柄にはくちばしを入れるなと、たったいま話して聞かせたはずだぜ」彼はそういいながら、ふたたび立ち上がった。わたしを叩きのめそうと決めたのだ。このまま何時間も彼の好きにさせておくより、早いとこやっつけて逃げ出したほうがよさそうだ。アールが襲いかかってくると同時に、わたしは片足を引いて、股間を真正面から蹴り上げた。彼は激痛に泣きわめき、カウチに倒れこんだ。

「女をつかまえろ、トニー、早く」と、きいきいわめいた。

ドアマンのトニーが相手では、勝ち目がない。彼は借金の返済を怠った者たちを、傷痕ひとつ残さずに痛めつける術を心得ている。彼が仕事を終えると、アールが足を引きずってカウチからやってきた。「いまのはほんの小手調べだ、ウォーチョスキー」と、かすれた声でいった。

「セイヤー事件から降りろ。いいな?」

わたしは何もいわずに彼を見た。この男ならわたしを殺しておいて、まんまと罪を逃れることができる。何度もそうしてきたのだ。市庁舎に強力なコネがあるし、たぶん警察にもあるだろう。わたしは肩をすくめてたじろいだ。彼はそれを承諾のしるしと受けとったようだ。「女を叩き出せ、トニー」

トニーはいとも無造作に、わたしを正面玄関の外へ投げ出した。わたしは熱気のなかで小刻みに震え、心を落ち着けようと努力しながら、二、三分のあいだ石段の上にへたりこんでいた。鉄柵にもたれて激しい勢いで吐くと、頭痛がわずかにおさまった。男と連れ立って通りかかった女がいった。「夜になったばかりだっていうのに、いやあねえ。ああいう人たちが近所をうろつかないように、警察のほうで気をつけてくれなきゃ」同感。立ち上がるとかなりふらついたが、歩くことはできた。腕をなでてみた。ズキズキするが、折れたところはない。レイク・ショア・ドライヴとの一ブロック内側を並行して延びている通りまで、よろめきながら歩いて行き、家に帰ろうとタクシーに手を上げた。一台目はわたしを一目見て走り去ったが、二台目がわたしを拾ってくれた。運転手はユダヤ人の母親そこのけに心配して騒ぎ立て、いったい何をしでかしたのかと訊きたがり、病院か、警察か、またはその両方へまわろうといってくれた。わたしは彼の気づかいに感謝しながらも、このままで大丈夫だといいはった。

6　夜の冷気のなかで

フレディと格闘したさい、うちの玄関ドアの横でバッグを落としてしまったので、金を払うから階上（うえ）まで一緒にきてほしいと、タクシーの運転手に頼んだ。わたしの部屋は最上階なので、バッグがまだそこに転がっていることにはかなり自信があった。バッグはやはりそこにあり、鍵束はドアに差しこまれたままだった。

運転手は最後にもう一度だけ抗議を試みた。「ありがとう」わたしはいった。「でも、わたしに必要なのは熱いお風呂とお酒だけ。それでもう大丈夫よ」

「わかったよ、お客さん」運転手は肩をすくめた。「あんたが決めるこった」彼はタクシー代を受けとり、もう一度だけわたしを見てから、階下（した）に降りて行った。

わたしのアパートメントはアールのところのきらびやかさに欠けている。狭い玄関ホールには、床一面に敷きつめた絨毯の代わりに小さなラグがあるだけで、ルイ十五世様式のテーブルの代わりに傘立てが置いてある。しかし、ここにはちんぴらどもはいない。

まだ七時だと知って驚いた。今夜一回目に外の階段を上がってから、一時間半しかたっ

CamScannerでスキャン

ていないのだ。別の時間帯の世界をさまよってきたような気がした。この日二回目の湯を風呂に入れながら、スコッチを一インチ、グラスに注いだ。我慢の限界ぎりぎりの熱い湯に身体を沈め、濡れタオルを髪に巻いて暗いなかに寝そべった。しだいに頭痛が消えていった。疲れてぐったりだった。

浴槽につかり、途中で熱い湯を足して三十分が過ぎたころ、ようやく、身体を動かしても大丈夫だという自信ができた。大きなタオルを身体に巻きつけて、筋肉がこわばるのを防ぐために、アパートメントのなかを歩きまわった。本当はただただ眠りたいだけだったが、いま眠りこんだら一週間は歩けなくなることがわかっていた。黒ラベルで元気をつけながら、用心深くエクササイズをした。不意に時計に目が行き、デヴローとのデートを思い出した。すでに遅刻だ。彼はまだ待っていてくれるだろうか。

やっとの思いで、電話帳でレストランの名前を見つけて、番号をまわした。支配人（メートル・ドテル）はとても協力的で、バーへ行ってデヴロー氏を捜してくるといってくれた。二、三分が過ぎて、ラルフはきっと帰ってしまったのだと思い始めたとき、彼が電話に出た。

「もしもし、ラルフね」

「言い訳だったら、気の利いたやつにしてくれ」

「説明しようと思ったら何時間もかかるし、それでもあなたは信じてくれないと思うわ」

と、わたしは答えた。「もう三十分くれる？」

CamScannerでスキャン

彼は返事をためらった。たぶん、だめだということに慣れていないのだろう。ハンサムな男たちは、デートをすっぽかされるためのプライドを捜しているのだろう。そう答えた。「ただし、八時半までにこられなきゃ、一人で帰ってもらうことになる」ようやく、

「ラルフ」わたしはつとめて声を抑えながらいった。「今日はさんざんな一日だったのよ。せめて夜ぐらい愉快に過ごして、保険のことをすこし教わって、今日一日のことは忘れてしまいたい。そうできる?」

彼は当惑していた。「もちろんだよ、ヴィッキー——いや、ヴィク。バーで会おう」

電話を切り、〈カートウィール〉にふさわしいエレガントなドレス、ただしゆったりして裾の長いものはないかと洋服だんすを見まわした。忘れていた派手な色のメキシカン・ドレスを見つけ出した。床までの長いスカートと、ウェストできゅっと絞って裾を広げた四角い襟ぐりの手織りのブラウスとを組み合わせたツーピース。長い袖が腫れ上がった腕を隠してくれるし、パンティストッキングもスリップも必要ない。コルクのサンダルで装いの仕上げをした。

浴室の照明の下で自分の顔を点検してみて、人前に出るのを考え直したくなった。アールの小指の指輪になでられた下唇は脹れ上がり、左顎には紫色のあざができていて、そこから目にかけて、ひび割れた卵のような静脈の線が頬に赤く浮き出ている。

すこし化粧をしてみた。わたしのファンデーションはあまり濃くないので、紫色の一番

ひどい部分は隠せなかったが、くもの巣状の赤い傷痕はどうにか隠すことができた。濃いアイシャドーは黒いあざになりかけた目から注意をそらしてくれるし、いつもの化粧よりどぎつく塗った暗い色の口紅は、腫れ上がった唇にすねたセクシーな表情を与えてくれる――というか、照明が充分に暗ければ、そうなる可能性もある。

足がひどくこわばってきていたが、毎日のランニングがここで役に立ったようだ――足もとがわずかに震える程度で、どうにか階段を降りることができた。タクシーが一台、ホールステッド通りを走ってきた。そのタクシーがオーク通りにあるハノーヴァー・ハウス・ホテルの正面でわたしを降ろしたときは、八時二十五分になっていた。

〈カートウィール〉に入るのは今夜が初めてだ。わたしから見ると、ここはセンスよりも金に恵まれた、頭がからっぽの陽気なノース・サイド族が好んで食事をしたがる、独創性に乏しい店の代表といえそうだった。入口を入って左手にあるバーは薄暗く、アンプで音を大きくしすぎたピアノが、エール大学の卒業生たちをほろりとさせそうな曲を演奏していた。シカゴの金曜の夜とあって、店内は混んでいた。ラルフが酒を前に、カウンターの端にすわっている。わたしが入って行くと、顔を上げて微笑を浮かべ、手を振るしぐさをしたが、席を立とうとはしなかった。わたしはなめらかに歩くことに全神経を集中し、ようやく彼のすわっている席にたどり着いた。彼は腕時計を見た。「すべりこみセーフ」

いろんな意味でね、とわたしは思った。「あら、お酒を飲み終えないうちは、ぜったい

に帰らない人でしょ」空いたスツールはひとつもない。「わたしよりずっと気前のいいところを見せて、その席とスコッチをゆずってくれない?」

彼はにやっと笑ってわたしを抱き寄せ、膝にすわらせようとした。肋骨に激痛が走った。

「だめ、よして、ラルフ! いや!」

彼はあわててわたしを離すと、こわばった表情で無言のまま立ち上がり、カウンターのスツールを指し示した。わたしは気まずい思いで立っていた。けんか騒ぎはごめんだし、ラルフを落ち着かせるためにエネルギーを使う気にもなれなかった。彼は日の照るときしかご機嫌になれない男のようだ。もしかしたら、離婚の経験で女に対して自信が持てなくなったのかもしれない。彼に真実を話して、相手の同情に耐えなくてはならないことを覚悟した。今日の夕方シュマイセンにいかに手ひどく痛めつけられたかを話すのは、つらいことだ。あの男が一日二日、痛々しげに足を引きずって歩こうとも、わたしにはなんの慰めにもならない。

わたしは無理にラルフに注意をもどした。「家までお送りしましょうか」と、彼が訊いていた。

「ラルフ、すこしは弁解するチャンスも与えてほしいわ。一時間も遅刻してきて、おまけにこの態度じゃ、まるで最初っからきたくなかったみたいに見えるでしょうけど。あなた、わたしの弁解なんか聞きたくないほど、頭にきてる?」

「とんでもない」彼は丁重にいった。

「じゃあ、どこか席を見つけてすわりましょう。立ったまま説明するには話が少々複雑だし、それに疲れるから」

「テーブルがあるか訊いてくるよ」彼がいなくなると、わたしはほっとした気分でカウンターの椅子に腰かけて、ジョニー・ウォーカーの黒ラベルを注文した。酒と疲労した筋肉が混ざりあってわたしを眠りに引きずりこむまでに、何杯ぐらい飲めるだろう。

十分ほど待てばテーブルが空くという知らせを持って、ラルフがもどってきた。十分が二十分に延び、そのあいだわたしは怪我していないほうの頰に片手をつき、彼のほうはうしろでぎごちなく立っていた。わたしはスコッチをちびちび飲んだ。バーは冷房が効きすぎている。普通のときなら、厚地のコットン・ドレスがけっこう暖かさを保ってくれるだろうが、いまのわたしはわずかに震えはじめていた。

「寒いの？」ラルフが訊いた。

「すこしね」わたしはうなずいた。

「ぼくの腕で包んであげようか」彼はためらいがちに申し出た。

わたしは彼を見上げて微笑んだ。「うれしいわ」といった。「ただし、そうっとよ、お願い」

彼はわたしの胸のあたりで両腕を交差させた。わたしは最初びくっとしたが、暖かさと

圧迫感が心地よく感じられた。彼の身体にもたれた。彼はわたしの顔を見下ろして、いぶかしげに目を細めた。
「ヴィク、その顔どうしたんだ」
わたしは眉を吊り上げた。「どうもしないわ」
「嘘つけ、ほら」といって、彼はかがみこんだ。「切り傷がある。おまけに、頬にも傷があって腫れ上がってるじゃないか」
「そんなにひどい？」わたしは訊いた。「お化粧でけっこう隠せたと思ってたのに」
「いや、今週の《ヴォーグ》の表紙には使ってもらえそうにないが、ひどすぎるわけでもない。ただね、以前保険金の支払係をやってた関係から、事故の被害者を大勢見てるんだ。まるできみもその一人みたいだ」
「自分でもそんな気がするわ」わたしは同意した。「でも、じつは事故じゃなくて――」
「医者に診てもらった？」彼はわたしの言葉をさえぎった。
「その言い方、夕方うちまで乗せて帰ってくれたタクシーの運転手にそっくりだわ。あわててパサヴァント病院へ連れて行こうとしたのよ――ひょっとしたらアパートメントまで入ってきて、チキン・スープを作りはじめるんじゃないかと思ったくらい」
「車もめちゃめちゃにこわれたの？」彼が訊いた。
「車はどこもこわれてないわ」わたしは癇癪を起こしかけていた――理屈に合わないこと

はわかっている――しかし、探りを入れられると、つい警戒心が先に立つ。

「こわれてない？」彼はわたしの言葉を繰り返した。「だったら、どうして――」

　そのとき、わたしたちのテーブルが用意できたと、バーに知らせが入った。わたしは立ち上がり、酒の代金を払っているラルフをあとに残して、給仕長に近づいた。給仕長はラルフを待たずにわたし一人を席へと案内し、わたしがちょうどすわろうとしたところへ、わたしたちを追ってラルフがやってきた。わたしの突然の不機嫌が彼にまで伝染していた。彼はいった。「エスコートの男を待たずに、ご婦人を連れ去るような給仕は気に入らないね」ちょうど給仕長に聞こえる大きさの声だった。「これは失礼を、お客さま――こちらのマダムのお連れさまとは存じませんで」給仕長は立ち去る前に、重々しい威厳をこめていった。

「だめよ、ラルフ、八つ当たりしないで」わたしは穏やかにいった。「すこしばかりエゴをむきだしにしすぎてるわ――わたしもだけど、あなたもそう。そんなのやめて、事実をはっきりさせて、最初からやりなおしましょう」

　不意に給仕があらわれた。「ディナーの前のお飲物はいかがいたしましょう」

　ラルフはいらだたしげに顔を上げた。「このテーブルが空くのを待って、バーで何時間過ごしたかわかってるのか。いいよ、飲物はほしくない――すくなくとも、ぼくのほうは」彼はわたしに顔を向けた。「きみは？」

CamScannerでスキャン

「いえ、結構よ」わたしも同意見だった。「これ以上飲んだら、寝てしまいそう。そしたらたぶん、あなたと過ごす夜から逃げようとしてるわけじゃないってことを、あなたに信じてもらえるチャンスが永久につぶれてしまうわ」

ご注文はお決まりですか、と給仕がしつこく訊いた。ラルフは五分間向こうへ行っててくれと、高飛車にいった。しかし、わたしのいまの言葉で、生まれついての陽気な性格をとりもどしはじめていた。「ようし、V・I・ウォーショースキー——今夜のデートを台無しにして、ぼくが二度ときみを誘う気になれないようにしてやろう、というつもりのないことをぼくに証明してごらん」

「ラルフ」彼をじっと見つめながら、わたしはいった。「アール・シュマイセンを知ってる？」

「誰？」彼は怪訝な顔で訊いた。「これ、探偵さんの推理ゲームか何か？」

「まあ、そんなとこかしら」わたしは答えた。「昨日の午後から今日の午後にかけて、わたしはピーター・セイヤーか失踪中の彼のガールフレンドのどちらかを知ってるさまざまな人たちに、片っ端から会って話を聞いたわ。そのなかには、あなたもあなたのボスも含まれてるのよ。

でね、今日の夕方家にもどったら、金で雇われたちんぴらが二人、わたしを待ち伏せしてたの。たちまち格闘。しばらくは向こうの攻撃をかわせたけど、ついに男の一人にノッ

クアウトされてしまった。男たちはわたしをアール・シュマイセンの邸へ連れて行った。アールを知らないなら、彼に会おうなんてしないことね。十年前にわたしが国選弁護人をやってたころ、あの男は恐喝、売春といった商売のトップにのし上がりつつあるところだった。それ以後もずっと順調に進み続けたみたいね。現在は銃を持ち歩く物騒なお兄さんたちを、一団体抱えてるの。好人物とはいえないわ」

わたしは説明を組み立てるために、一息ついた。目の端に、またしても給仕の姿がちらついたが、ラルフは手を振って彼を追い払った。「とにかく、彼はセイヤー事件から手を引けとわたしに命じて、説得力を加えるために、お抱えギャングの一人にわたしを攻撃させたの」わたしはそこで黙りこんだ。そのあとアールのアパートメントで起きたことは、心に生々しい傷を残している。わたしはあのとき慎重に計算して、アールがますます残忍な攻撃を加えてくるなかで一晩中じっとしているよりも、即刻すべてを終わらせ、わたしが怯えきっていることをアールに信じこませたほうが、得策だと判断したのだった。とはいえ、自分の無力さを痛感させられ、いうことを聞かない娼婦か借金を踏み倒した客ででもあるかのように、トニーにぶちのめされた——あんなに簡単に痛めつけられたことが、わたしには耐えがたかった。無意識のうちに左手でこぶしを作り、気がつくと、それをテーブルの表面に叩きつけていた。ラルフはどうすればいいのかわからないという表情で、わたしを見つめていた。彼の職業と郊外での暮らしは、こうした感情に対処する術を教え

てくれなかったのだ。

わたしは頭を振って、もっと軽い調子に変えようとした。「とにかく、胸郭がすこしずきずきしてるの。だからバーであなたに抱きすくめられたとき、飛び上がって悲鳴を上げたってわけ。ところで、わたしを悩ませてる疑問は、わたしがあちこち訊き歩いてることを、アールに話したのは誰かってことなの。もっと正確にいうと、わたしがうろついているのが目ざわりでならず、わたしを脅して追っ払うようアールに頼むか金を積むかしたのは誰かってこと」

ラルフはまだすこし呆気にとられている様子だった。「警察に届けた？」

「いいえ」いらいらしながらわたしは答えた。「こんなことで警察に駆けこむわけにはいかないわ。わたしが今回の事件に興味を持ってることを、警察の連中も知ってるんだもの――手を引けっていってきたのよ。ただし、もっと礼儀正しくだけど。わたしがアールに叩きのめされたことを、ボビー・マロリーに――この人、事件担当の警部補なんだけど――話したとしても、シュマイセンは知らぬ存ぜぬで通すだろうし、こちらが法廷で証拠を挙げたとしても、あの男のことだから、暴力をふるった理由はほかにあるといって、百もの事柄を並べ立てるに違いないわ。おまけに、マロリーはこれっぽっちも同情してくれないだろうし――わたしを事件から遠ざけようと必死なんだもの」

「ねえ、きみ、その人のほうが正しいと思わない？　殺人はやはり警察の仕事だよ。おま

けに、そのグループ、きみが相手にするにはいささか手ごわすぎるようだ」
怒りの波が急速に脹れ上がるのを感じた。外部の圧力を感じたときに必ず味わう怒り。無理に笑ってみせた。「ラルフ、わたし疲れてるのよ。痛みもひどいし。なぜこれがわたしの仕事なのか、今夜はとても説明できそうにないわ――でも、これはわたしの仕事で、警察にまかせて逃げ出すわけにいかないんだってことを、とにかく信じてほしいの。そりゃ、捜査がどう進んでるか、詳しいことは何もわからないけど、シュマイセンみたいな男の性格と反応だったらよく知ってるつもりよ。わたしがふだん相手にするのは、ホワイト・カラーの犯罪者だけ――でも、あの連中だって、シュマイセンみたいなゆすりの名人とたいして変わりゃしないわ」
「なるほど」ラルフは口をつぐんで考えこみ、やがて、いつもの魅力的な笑みを浮かべた。「正直に白状すると、ぼくのほうはいかなる種類の悪党についてもほとんど知識がないんだ――例外といえば、たまに保険会社をだまそうとするぺてん師ぐらいかな。だけど、そういう連中とは一騎打ちはやらないで、法廷で戦うことにしている。まあ、きみについては、自分のやってることを心得てる人なんだと信じるよう努力するよ」
わたしは戸惑い気味に笑った。「ありがとう。馬にまたがって四方八方へ突撃するジャンヌ・ダルクみたいな行動は、なるべく慎むことにするわ」
恐る恐るといった表情で、給仕がもどってきた。ラルフはカキのオーヴン焼きとウズラ

料理を注文したが、わたしはセネガル風スープとほうれん草サラダだけにしておいた。疲れがひどくて、食欲が湧かないのだ。

それからしばらくは、当たり障りのない話題を選んで会話を続けた。わたしはラルフに、カブスが好きかどうか訊いてみた。「なんの因果か、わたしはとんでもないファンなの」と説明した。ラルフは息子を連れてたまに試合を見にいくことはあるといった。「しかし、どうしてああいう熱狂的カブス・ファンになれるのか、ぼくには理解できない。いまはカブスもまあまあの線でがんばってるよ――レッズをやっつけたし――だけど、例年のごとくそのうち沈んじまうよ。いや、野球はなんたってヤンキースさ」

「ヤンキースですって！」わたしは説教を始めた。「どうしてあんなチームを応援できるのか、理解できないわね。コーザ・ノストラを応援するようなものよ。いいこと、あそこは札束の力で、勝つための選手をかき集めてるのよ――それじゃ、応援する気になれないわ」

「ぼくはうまいプレーの試合を見るのが好きなんだ」ラルフは頑固にゆずらない。「シカゴのチームお得意の道化芝居にはうんざりだ。見てみろよ、ヴィーク（シカゴ・ホワイトソックスのオーナー）のおかげで、今年のホワイトソックスはどろ沼じゃないか」

わたしたちがさかんに議論を戦わせているところへ、給仕が最初の料理を運んできた。スープはとびきりおいしかった――あっさりしていて、なめらかで、カレー風味がかすか

ルフのウズラが運ばれてきたとき、わたしはスープのお代わりとコーヒーを注文した。

「それじゃあ、組合がなぜエイジャックスの保険に入らないのか、説明してちょうだい」

「いや、入る可能性はあるよ」料理を口いっぱいにほおばったまま、ラルフはいった。それから、嚙んで吞みくだした。「しかし、入るとしても、本部の分だけだろう——建物にかける火災保険とか、秘書連中の労災保険とか、まあその程度だね、保険の対象になりうる人間はそうたくさんはいない。それに、ナイフグラインダーズのような組合の場合——いいかい、組合員はそれぞれの職場で保険に入ってるんだ。大きいのは労災保険だね。そして、それを支払うのは企業であって、組合ではない」

「労働障害にかかった支払いを補償するものね」わたしは訊いた。

「そうだ。または就業中の事故なら、死亡の場合も含まれる。それから医療費。たとえ労働者が就業を制限されなくてもね。この制度はちょっとおかしいと思うんだが。雇用者側の負担する保険料率は職種によって変わってくる——たとえば、工場は事務所より多額の支払いをすることになっている。ところで、ある人間が就業中の事故で障害者となった場合、保険会社は週一回の支払いを何年にもわたって背負込まされることになる。わが社にも、一九二七年からずっと支払いを続けてる例がいくつかある——幸い、そう多くはないけれど。さて、いいかい、労働障害にかかる多額の支払いをこちらが背負込まされた場合

でも、被保険者はそれ以上の払い込みはしないんだ。もちろんこちらから保険契約を解約することもできるが、それでも、すでに給付を受けている障害者への支払いは続けなきゃならない。

おや、話が脱線してしまったね。要するに、怪我もしてないのに障害者のふりをしつづける連中が大勢いるってことなんだ——結構な収入になるし、悪徳医者はごろごろしてる。しかし、それを利用して、ほかの誰かに大きな利益をもたらす大規模な詐欺行為ができるかどうかとなると、ちょっと考えられないな」彼はふたたびウズラを食べた。「いや、きみの一番の関心は、昼間もいってたけど年金だよね、または、たぶん生命保険。しかし、生命保険詐欺をやるなら、保険会社自体がほかの誰よりも一番やりやすい立場に置かれている。エクイティ・ファンディング事件がそのいい例だ」

「それじゃあ、あなたのボスがそういうことに首を突っこんでる可能性はないかしら。ナイフグラインダーズに名前だけの被保険者を用意させて、偽の保険証券をでっち上げるとか」と、わたしは訊いた。

「ヴィク、なぜそんなにむきになって、ヤードリーを悪者に仕立てようとするんだ。彼はぜったいに悪い人間じゃない。彼の下で働きはじめて三年になるが、ぼくはまだ一度も彼が悪くいわれるのを聞いたことがない」

わたしはそれを聞いて笑い出した。「ヤードリーがあんなに簡単に会ってくれたことが、

どうにも不思議でならないの。わたし、保険業界のことはあまり知らないけど、これまでにいくつもの大企業を訪ねた経験があるわ。彼はひとつの部門をあずかる責任者だし、そういう人たちは婦人科医に似ている――彼らの予定表はつねに、じっさいに処理できる量のほぼ二倍の約束でぎっしり埋まってるものなのよ」

ラルフは頭を抱えた。「きみとつきあってるとめまいがしてくるよ、ヴィク、しかも、きみはわざとそうしてる。損害査定部の部長が婦人科医に似てるなどと、よくもいえたもんだね！」

「あら、だって理由は説明したじゃない。なぜわたしに会うことを承知したのかしら。わたしの名前なんて聞いたこともないし、約束はぎっしりつまってるはずなのに――ところが、わたしと話をするあいだ、電話にも出ようとしなかったのよ」

「そりゃそうだが、きみはピーターが死んだことを知ってて、彼のほうは知らなかったんだ。きみは相手がどことなく怪しい行動をとることを期待して、そういう目で彼を見てしまったんだ」ラルフは反対意見を述べた。「彼はあいつのことが――ピーターのことが心配でたまらなかったんだよ。だって、息子のことは責任を持つって、ジャック・セイヤーに約束したんだもの。ヤードリーがきみに会ったからって、ぼくはそう意外だとは思わない。ピーターがただの迷子なら、そりゃ意外だろうが、昔から家族ぐるみでつきあってる友人の息子じゃないか。あいつ、この四日間欠勤したままだったし、電話しても出なかっ

た——ヤードリーは腹を立てると同時に、責任も感じてたのさ」

わたしはじっと考えこんだ。ラルフのいうことは筋が通っている。わたしは自分の感情に押し流されたのではないだろうか。にこやかすぎるビジネスマンへの本能的な嫌悪感が先に立ち、ありもしない場所に亡霊を見ただけではないだろうか。

「わかったわ、あなたのいうとおりかもしれない。でもどうして、マスターズが生命保険詐欺にかかりあうわけがないっていいきれるの」

ラルフはウズラをきれいにたいらげて、コーヒーとデザートを注文していた。わたしは大盛りのアイスクリームを頼んだ。「ああ、それはね、保険会社の機構のせいなんだ」給仕がふたたび姿を消すと、彼は答えた。「うちは大会社だ——収入保険料では国内第三位だ。その金額は年間およそ八十四億ドル。それにはすべての直系会社分と、エイジャックス・グループを構成する全部で十三の関連会社分が含まれている。法律の関係上、財産保険と災害保険を扱う会社が生命保険も扱うことは許されない。そこで、〈エイジャックス生命〉が生命保険と年金保険をすべて扱い、一方、〈エイジャックス災害〉およびそれより小規模な社のいくつかが、財産保険と災害保険を扱うというわけだ」

給仕がわたしたちのデザートを持ってもどってきた。ラルフが頼んだのは、何やらべたべたした感じのトルテだった。わたしはアイスクリームにカルーア（コーヒーリキュール）をかけることにした。

「結局、うちみたいに大きな会社になると」ラルフは続けた。「災害保険——ええと、労災保険、一般的な賠償責任保険、自動車保険の一部なんかが含まれてるけど——そういうのを扱う人間、すなわち、ヤードリーやぼくのような人間は同じ社内のことでも、生命保険の方面にはあまり詳しくないんだ。もちろん、生命保険を担当してる連中とは親しくしてるし、食事に行く機会もけっこうあるが、あちらはあちらで別の管理機構を持っていて、保険金の支払請求なんかも独自に処理している。もしも、ぼくらがあちらの業務内容を分析できる距離に近づいたとしたら、詐欺を働くどころか、もうそれだけで社内政治的な非難が高まって、一時間もしないうちに放り出されるに決まっている。保証するよ」

わたしは不承不承うなずいて、アイスクリームにもどった。エイジャックスには見込みがなさそうだ。ここに希望をかけていたのに。「ついでに訊きたいんだけど」と、いった。「エイジャックスの年金関係も調べてくれた？」

ラルフは笑った。「しぶとい人だね、ヴィク、それだけは認めるよ。調べたとも。その方面を担当してる友人に電話で訊いてみた。残念だけど、ヴィク、まったく扱っていないそうだ。もうすこし詳しく調べて、第三者を通じて扱ってる分がないか確かめてみるといってた」わたしは怪訝な顔をした。「たとえば、ロイヤル・アライアンスの連中がある程度の金をドレフュスに預けて管理を任せ、その一部をドレフュスがうちにまわす、というようなケースだ。ただし、友人がいうには、エイジャックスが十フィートの棒でナイフグ

ラインダーズにさわることすら、原則的にはあり得ないとのことだった。ぼくとしては、たいして驚きもしないが」

わたしは溜息をつき、アイスクリームを食べ終えながら、ふたたび急激な疲労に襲われるのを感じた。人生のすべてが簡単に運ぶのなら、自分のやりとげたことを誇らしく思う気持ちは味わえない――わたしがピアノを練習するあいだ、母はいつも横に立ってこういっていたものだ。母が生きていれば、おそらくわたしの仕事に非難の目を向けるだろうが、事が思いどおりに運ばないといってディナーの席でうなだれて愚痴をこぼすようなことは、ぜったいに許してくれないだろう。しかし、今夜のわたしは疲労しきっていて、今日調べ上げた事柄すべての意味と取り組む元気はなかった。

「そろそろ冒険の後遺症が出てきたみたいだよ」ラルフがいった。

疲労の波が襲いかかり、わたしを眠りに誘いこもうとするのが感じられた。「そうなの、意識をなくしてしまいそう」すなおに認めた。「ベッドに入ったほうがよさそうね。でも、眠っちゃいけないって気持ちもあるのよ。朝起きたときに、身体がずきずきして大変だろうから。踊りに行くぐらいの元気ならあるわ。身体を動かしとけば、そうひどい痛みにもならないと思うの」

「ディスコの床で、いますぐにでも寝入ってしまいそうな様子だよ、ヴィク。そしたら、ぼくはきみを殴った罪か何かで逮捕されてしまう。どうして身体を動かすことが役に立つ

の？」

「血液の循環をうながせば、関節ががちがちにこわばるのを防いでくれるから」

「だったら、両方いっぺんにできるかもしれない――つまり、寝るのと身体を動かすのと」彼の目に浮かんだ笑いはなかば照れていて、なかば愉快そうだった。

アールやトニーとあんな夕方を過ごしたあとだけに、わたしは急にベッドのなかで誰かにあやしてもらいたくなった。「いいわよ」と答えて、笑顔を返した。

ラルフは給仕を呼んで勘定を頼み、両手をかすかに震わせながらそそくさと金を払った。彼を説き伏せてわたしが勘定を持つことにしようか、必要経費として請求すればいいのだからとも考えたが、今日はもう、これ以上の争いごとはしたくなかった。

外に出て、ドアマンが車をまわしてくれるのを待った。ラルフはわたしのすぐそばに、身体は触れていないが緊張した様子で立っていた。こうなることを最初から計画していたくせに、うまく持っていける自信がなかったのだろうと思い、わたしはひそかに笑みをもらした。車がまわされてきたので、助手席に乗りこみ、彼に身をすり寄せた。「わたしの家はホールステッド通りよ。ベルモント・アヴェニューのすぐ北」というと、彼の肩にもたれて眠ってしまった。

ベルモントとホールステッドの交差点で彼がわたしを起こし、住所を訊いた。わたしが住んでいるところは市内でもわりに閑静な区域の北西にあたっていて、通りには車を駐め

る場所がいつも充分あいている。彼はわたしのアパートメントのドアの向かいに、駐車場所を見つけた。

車から自分の身体を引きずり出すのにひどく手こずった。夜の空気は暖かくて心地よく、ラルフの震える手に支えられて、二人で通りを渡り、正面の入口をくぐった。階段を三つものぼるのがとてつもなく遠い道のりに思えて、突然、父が仕事から帰ってわたしを抱き上げて階上まで運んでくれるのを待ちながら、玄関先の石段にすわっていた幼い姿を思い浮かべた。ラルフに頼めば、彼もわたしを抱いて階上に運んでくれるだろう。しかし、それでは二人の関係における自立のバランスが大きくくずれてしまう。わたしは歯を食いしばって階段をのぼった。てっぺんで待ち伏せしている者はいなかった。

台所に入り、棚からマーテルのボトルをとりだした。グラスを二個降ろした。母からもらったヴェネチアン・グラスのなかの二個で、母が結婚するときに持ってきたささやかな嫁入道具の一部である。グラスの色は透き通ったきれいな赤で、脚の部分がねじり模様になっている。このアパートメントに誰かを招いたのは久しぶりのことなので、不意に、自分がはにかみ屋の弱虫になったように感じた。今日は男たちにこの身をさらしすぎた一日で、ベッドでもう一度それを繰り返す用意はまだ整っていなかった。

ボトルとグラスを持って居間にもどると、ラルフはカウチに腰を降ろし《フォーチュン》のページを読むともなしにめくっていた。立ち上がってわたしからグラスを受けとり、

それに見とれた。わたしは大戦が勃発する直前に母がイタリアを離れたことを、語って聞かせた。母方の祖母はユダヤ人で、家族はせめて母だけでも迫害の手を逃れるようにと望んだのだった。八個の赤いグラスを母は下着で丁寧にくるんで、母の荷物であったたったひとつのスーツケースに入れて運び、そして、それらのグラスはいかなる祝宴の席でも、つねに最高の座を占めてきた。わたしはブランディを注いだ。

ラルフは自分の家族はアイルランド系だといった。「だから、デヴローの綴りにAが入ってないんだ。Aがつくのはフランス系さ」わたしたちはしばらくのあいだ黙ってすわって、ブランディを飲んだ。向こうもやや緊張しているらしく、それがわたしの気分を楽にした。突然、彼はにこやかに笑い、顔を輝かせていった。「女房と別れてから都心部に引っ越したのは、ひよっこ――失礼、女性を手に入れるなら都心に限るというのが、ぼくの持論だったからだ。でも、正直に白状すると、こっちへ移ってから半年になるけど、デートに誘った女性はきみが初めてなんだ――それに、きみはぼくがいままでに会ったどの女性にも似ていない」彼はかすかに顔を赤らめた。

「毎晩、女をとっかえひっかえ寝てるわけじゃないってことだけ、わかってもらいたかったんだ。でも、きみとなら、一緒にベッドに入りたい」

わたしは何も答えずに立ち上がり、彼の手をとった。五歳の子供どうしのように手をつないだまま、二人で寝室に入っていった。ラルフはわたしが服を脱ぐのを恐る恐る手伝い、

腫れ上がった腕をやさしくなでてくれた。わたしは彼のワイシャツのボタンをはずした。彼が着ているものを脱ぎ、二人でベッドにもぐりこんだ。わたしはさきほどから、彼に手を貸さねばならないのではと危ぶんでいた。離婚して間もない男性は何事にも自信が持てず、困った問題を抱えることがよくあるものだ。幸いにも、彼は大丈夫だった。なぜならこちらもくたくたで、人に手を貸す余裕はなかったからだ。最後に覚えているのは彼が荒々しく息をついたことで、やがてわたしは眠りに落ちていった。

7　友人の小さな協力

目がさめたとき、室内は寝室の厚いカーテンを通して広がる、遅い朝の柔らかな日の光にあふれていた。ベッドにいるのはわたし一人、じっと横になったまま、頭を整理しようとした。昨夜の記憶が徐々によみがえってきたところで、ベッドの横の時計を見ようと、用心深く首を動かした。首筋がひどくこわばっていて、時刻を見るには全身で寝返りを打たねばならなかった――十一時半。ベッドの上に起き上がった。腹筋は大丈夫だが、腿とふくらはぎがうずいていて、まっすぐ立つのが苦痛だった。二カ月間外に出なかった人間がいきなり五マイル走った翌日に経験するような、のろのろと足を引きずる歩き方で浴室に行き、蛇口を全開にして浴槽に熱い湯を入れた。

ラルフが大声で居間からわたしを呼んだ。「おはよう」わたしも大声を返した。「わたしと話したかったら、こっちにきて。わたし、もう一歩も歩けない」きちんと服を着たラルフが浴室に入ってきて、洗面台の上の鏡でげんなりしながら顔を調べているわたしのそばに立った。黒ずみはじめていた目のあざは、黄色や緑の筋のついた、濃い黒みを帯びた

紫に変わっている。被害をまぬがれた左の目は血走っている。顎も灰色に変色。全体として、魅力的な印象ではない。
　ラルフもわたしと同じように感じているらしい。わたしは鏡に映った彼の顔を観察していた。少々辟易しているようだ。ドロシーが目にあざを作って帰宅することなど、一度もなかったに違いない。郊外の暮らしはきわめて退屈なものだ。
「しょっちゅう、こんなことしてるのかい」ラルフが訊いた。
「自分の身体を詳しく点検すること？　それともなに？」わたしは訊いた。
　彼は両手をあいまいに動かした。「格闘だよ」といった。
「子供のときほどじゃないわ。わたしね、サウス・サイドで育ったの。九十丁目とコマーシャル・アヴェニューが交差するあたり、ご存じかしら——製鋼所で働くポーランド人の工員が大勢住んでて、肌の色や生まれた国の違う人間が越してくるといい顔しなかったわ。そうなると相手だって同じ感情を持つものよ。わたしが通った高校はジャングルの掟に支配されてたわ——強力な蹴りやパンチが使えないなら、黙って引っこむべし」
　わたしは鏡から振り向いた。ラルフは頭を振っていたが、なんとか理解しよう、あとずさりしないようにしようと努力していた。「まるで別世界だ」と、ゆっくりいった。「ぼくの育ったのはリバティヴィル、本当の喧嘩なんて一度もした覚えがない。妹が目にあざをこしらえて帰ってきたら、母は一ヵ月間ヒステリーの発作をおこしただろうね。きみの

家の人は心配しなかったの」
「そりゃあ、母はいやがったけど、わたしが十五のときに死んじゃったの。父はわたしが自分で自分の身を守れることを喜んだわ」それは真実だ。ガブリエラは暴力を憎んでいた。しかし、負けん気の強い人で、わたしの喧嘩好きなところは、大男だが気性は穏やかだった父からではなく、母から受け継いだものだ。
「学校の女の子たちはみんな、取っ組みあいの喧嘩をしたの？」ラルフは知りたがった。
わたしはその答えを考えながら、熱い湯に身体を沈めた。「ううん、怖がって逃げ出しちゃう子もいたわ。それから、ボーイフレンドを作って守ってもらう子もいた。それ以外の子は自分で身を守る術を学んだわ。わたしが一緒に学校へ通ってた女の子なんか、いまでも喧嘩が大好きよ――赤毛のすごい美人で、酒場に出かけて、彼女をひっかけようとする男たちをノックアウトするのが大好きなの。びっくりするわよ」
わたしは湯のなかに寝そべって、顔と首を熱い濡れタオルでおおった。ラルフはしばらく無言だったが、やがていった。「器具の隠し場所を教えてくれたら、コーヒーをいれてくるよ――どうやればいいのか見当がつかなくて。それから、あの皿、クリスマス用においてあるのかどうかわからなかったから、洗っといたよ」
わたしは口の部分のタオルをめくったが、目のほうはかぶせたままにしておいた。昨日家を出るときは、いまいましい皿のことなどすっかり忘れていた。「ありがとう」ほかに

どういえばいい？　「コーヒーはフリーザーのなか――豆のままよ。カップ一杯にスプーン一杯の割りで使ってね。コーヒー・ミルはガス台の横――電動式よ。フィルターはその真上の戸棚、それからポットはまだ流しのなか――あなたが洗ってくれてないのなら」

彼は身をかがめてわたしにキスしてから、出て行った。わたしは熱い湯のなかで洗面用タオルを温めなおし、両足を曲げてみた。しばらく続けるうちに両方とも楽に動くようになり、二、三日すれば完全によくなるという確信が持てた。ラルフがコーヒーを持ってもどってくる前に、関節のこわばりをかなりほぐすことができた。浴槽から上がると、大きなブルーのバスタオルで身体を包み、居間まで――前よりはずっと楽に――歩いて行った。

ラルフがコーヒーを運んできた。わたしのバスタオル姿に見とれたが、わたしの顔をしげしげとのぞきこむことはできなかった。「天気がしのぎやすくなったよ」といった。「新聞を買いに出たら、外はすごくさわやかなんだ――よく晴れてて涼しくて。インディアナ砂丘までドライヴしない？」

わたしは首を横に振ろうとしたが、痛みがそれを止めた。「だめよ。すてきなお誘いだけど、仕事があるもの」

「待てよ、ヴィク」ラルフは異議を唱えた。「事件は警察に任せとけばいい。きみの身体はいま、がたがたにこわれてる――一日ぐらい休暇をとらなきゃ」

「ごもっともよ」わたしは怒りを抑えようと努力しながらいった。「でも、その議論なら、

ゆうべのうちにけりがついたと思ってたけど。とにかく、休暇はとらないわ」
「それじゃ、相棒を雇うってのはどう？　車の運転をする人間がいるんじゃない？」
わたしはじっとラルフの顔を見たが、そこにあるのは親しみのこもった気づかいだけだった。不意に男の保護本能に駆られただけだろうか、それとも、わたしを仕事から遠ざけておきたい何か特別の理由でもあるのだろうか。相棒になれば、彼はわたしの用件を監視することができる。そして、アール・シュマイセンにそれらを報告するのでは？
「ピーター・セイヤーの父親と話をしに、ウィネッカへ行ってみようと思ってるの。たしかおたくのボスも近所のはずだから、あなたがくっついてくるのは、あんまりよくないんじゃないかしら」
「それもそうだ」彼はうなずいた。「どうしてきみが彼に会わなきゃならないの？」
「アンナプルナについて語った人と同じよ、ラルフ。なぜなら、彼がそこにいるから」ほかにもいくつか、しなければならないことがある。わたし一人でしなければならないことが。
「今晩、夕食でもどう？」彼が誘った。
「ラルフ、やめてよ、あなたったらまるで盲導犬みたい。だめ。今夜はつきあえないわ。あなたは魅力的で、一緒にいれば楽しいけど、たまには自分一人の時間がほしくなるものよ」

「わかった、わかったよ」彼はぼやいた。「親切にしようとしただけなのに」

わたしは立ち上がり、痛みをこらえながら、彼がすわっているカウチに近づいた。「はいはい」片方の腕で彼の身体を抱いて、キスした。「わたしは不親切にしようとしてるだけ」彼はわたしを膝の上にすわらせた。その顔からは不満の色がきれいに消え去り、今度は彼のほうからキスしてくれた。

数分してからわたしはやさしく身体を離し、足をひきずりながら、着換えのために寝室にもどった。ネイヴィ・ブルーの絹が椅子にかかっていた。かぎ裂きが二カ所、そして、かなりの量の血と泥。行きつけのクリーニング屋に頼めばきれいにしてくれるだろうが、それを着たくなることは二度とないだろう。その服を捨て、緑色の麻のパンツをはいて、淡いレモン色のシャツとジャケットを組み合わせた。郊外族にはうってつけだ。顔のことは気にしないことに決めた。化粧をして太陽の下に出たら、いまでさえ毒々しい顔がよけいひどく見えるだろう。

ラルフがトーストにジャムを塗って食べているあいだに、わたしは自分でクリーム・オブ・ウィート（フスマ入りのシリアル食品）をこしらえた。「さあて、郊外へ出発する時間だわ」

ラルフはわたしと一緒に階下まで降りながら、支えの手を貸そうとした。「ううん、いいの」わたしはいった。「自分一人でするのに慣れなくちゃ」一番下まで降りると、彼は別れをぐずぐず引き延ばさないことによって、点数をかせいだ。短いキスをした。彼は陽

気に手を振るしぐさをしてから、通りを渡って彼の車に近づいた。わたしは彼が視界から遠ざかるのを待って、通りがかりのタクシーを呼び止めた。

運転手はシェフィールド・アヴェニューをアディスン通りより北に行ったところで、わたしを降ろした。このへんはプエルト・リコ人が主な住民で、わたしの住むあたりよりずっと荒廃している。ロティ・ハーシェルのところの呼鈴を鳴らし、応答があったときはほっとした。「どなた？」インターコムから、ロティの不明瞭な声が聞こえた。「わたしよ。ヴィク」と答えて、ブザーが鳴るあいだに正面のドアを押した。

ロティの住まいは二階にある。階段の上までようやくたどり着くと、彼女がドアのそばでわたしを待っていた。「いらっしゃい、ヴィク――ちょっとあなた、どうしたっていうの？」ロティはわたしを迎えながら、驚きの気持ちを強調するために、濃く黒い眉を吊り上げた。

ロティとは何年も前からのつきあいだ。職業は医者、年齢は五十歳ぐらいだと思うが、生き生きした知的な顔と、均整のとれた活力あふれる身体からは、年齢の見当がつけにくい。彼女はウィーンですごした子供時代のどこかで、絶え間なく動き続けるこつを発見したのだ。多くの事柄に対して過激な意見を持っていて、医療のなかでそれらを実践に移しては、しばしば医者仲間のひんしゅくを買っている。中絶が法律違反で、大部分の医者にとって汚れた言葉であった時代に、彼女はわたしがシカゴ大学で所属していた地下の医師

紹介機関に協力して、中絶をおこなってくれた医者の一人だった。現在は通りをすこし先に行ったところにあるむさ苦しいビルの表側で、診療所をひらいている。最初に開業したときは、無料診療をやっていくつもりだったが、やがて、付近の住民たちが金を払う必要のない医療は信用しようとしないことを悟った。それでもなお、ここは市内で一番安い診療所のひとつで、わたしはときどき、彼女がどうやって食べていけるのか不思議に思うことがある。

さて、彼女はわたしの背後のドアをしめて、居間へ案内してくれた。ロティ自身に似て、家具はほとんどないが、強烈な色彩で燃えるようだ——カーテンはあざやかな赤とオレンジのプリント模様、そして、壁には炎のような抽象画。ロティはわたしをソファベッドにすわらせて、彼女が主食にしている濃いウィンナ・コーヒーを持ってきてくれた。

「ところで、ヴィクトリア、年寄りみたいに足を引きずって上がってきたり、顔に青黒いあざを作ったりして、いったい何があったっていうの？　車の事故じゃないことは確かね。それじゃおとなしすぎるもの——正解？」

「いつものとおり正解よ、ロティ」とわたしは答え、冒険談をかいつまんで話した。

シュマイセンの話に彼女は唇をすぼめたが、警察へ行くべきだとか、事件から手を引くべきだとか、今日一日ベッドに寝ているべきだとかいった議論で、時間を無駄にしたりはしなかった。いつもいつもわたしに賛成するとはかぎらないが、わたしの決断は尊重して

くれる。寝室へ行き、実用一点張りの黒い大きなカバンを下げてもどってきた。わたしの顔の筋肉を引っぱり、検眼鏡を使ってわたしの目を見た。「時間に治せないものはひとつもなし」と診断を下して、足と筋肉の反射神経を調べた。「うん、なるほど、痛そうね。痛みはしばらく続くわよ。でも、あなたは丈夫だから、安静にしてたら、じきによくなるわ」

「やっぱりね、そういうと思ってた」わたしは同意した。「でも、足の筋肉が回復するのを、のんびり待ってるわけにはいかないの。おまけに、いまだってずきずきしてて、動くのがとっても億劫。用件を片づけて考えをまとめるあいだだけでも、痛みを忘れる手助けになるものがほしいわ——といっても、人事不省に陥るコデインのようなのは困るけど。何かない？」

「ええ、あるわよ、奇跡の薬が」ロティの顔は面白がっていた。「医者や薬をそんなに信用しちゃいけないわ、ヴィク。でも、フェニルブタゾンを打ってあげる。競走馬が走るときに痛み止めに打つ薬よ。わたしから見ると、まるで馬みたいにそこらじゅう跳ねまわってる人なんだもの」

ロティはしばらくのあいだ姿を消し、冷蔵庫の扉のあく音が聞こえてきた。やがて、注射器とゴム栓をした小さな壜を持ってもどってきた。「じゃ、横になって。すぐに血管に入って体内を循環するように、お尻に打ちますからね。パンツをすこし下げて、そうそう。

すごい薬よ、ほんとなんだから、略して〝ブート〟、半時間もしないうちに、ダービーに出る準備が整うわよ」ロティは話しながら、手早く注射をした。ちくっとかすかな痛みを感じて、それで終わりだった。「はい、すわって。いまから診療所についてすこし話をしてあげる。ネペンテスを何錠かあげるから持っていって。すごく強い薬よ、鎮痛剤なの。これを飲んだときは、車の運転は控えてね。それからお酒も。錠剤のブートもすこし包んでおくわ」

わたしは大きなクッションに寄りかかり、くつろいだ気分になりすぎないよう気をつけた。横になって眠りたいという誘惑が強烈だった。ロティの才気あふれる早口のおしゃべりに無理についていこうとして、いろいろ質問したが、突拍子もない彼女の意見に論争を挑むだけの元気はなかった。しばらくすると、薬が効きはじめるのが感じられた。首筋がかなり楽になった。素手で戦闘を始めたいとは思わなかったが、自分の車を運転する自信はついた。

ロティはわたしが起き上がるのを止めようとはしなかった。「一時間近く休息できたわね——ほんとはもうしばらく休んでくといいんだけど」ブートの錠剤をプラスチックの壜に詰め、ネペンテスの壜も渡してくれた。

わたしは礼をいった。「いくら払えばいいのかしら」

彼女は首を振った。「いらない、全部見本だもの。とっくに期限切れになってる健康診

断を受けにきたら、そのときは、ミシガン・アヴェニューの腕利きの医者たちが請求する金額をいただくわ」

彼女はドアまで送ってくれた。「まじめな話だけど、ヴィク、さっきのシュマイセンて男に嫌がらせでもされるようなら、いつでもいいから、うちの空いてる部屋にいらっしゃい」わたしはロティに感謝した――ありがたい申し出だ。いずれ必要になるかもしれない。

ふだんなら、歩いて車をとりにもどるところだ。ロティの住まいは、わたしのところからわずか八ブロックしか離れていない。しかし、注射を打ってもらってさえ、いつもの元気が出ないので、のろのろとアディスン通りまで歩いてタクシーをつかまえた。それで事務所へ行き、ウィネッカの住所が記入されたピーター・セイヤーの有権者登録カードをとってから、別のタクシーに手を上げてノース・サイドにあるわたしの車までもどった。マグローは必要経費を記した途方もない額の請求書を受けとることになるだろう――これら全部のタクシー代、それから、ネイヴィ・ブルーのスーツは百六十七ドルもした。

大勢の人々が楽しそうな顔で戸外に出ていて、澄んださわやかな大気に、わたしの心までうきうきしてきた。二時にはエデンズ高速道路に入り、ノース・ショアに向かっていた。モーツァルトの《どうしてあなたを忘れられよう(キオ・ミ・スコルディ・ディ・テ)》の一節を歌いはじめたが、胸郭が異議を唱えたので、WFMTでやっているバルトークの協奏曲で我慢することにした。

どういう理由か、金持ちの家々に近づくにつれて、イーデンズは美しい高速道路ではな

くなってくる。シカゴの近くでは、緑の芝生ときれいなバンガロー風の住宅にふちどられているのに、郊外へ行くに従ってショッピング・センターが顔を出し、工業団地やドライブインがやたらと多くなる。だが、右折してウィロー・ロードに入り、湖に向かったとたん、あたりの風景はいままでよりずっと印象的なものに変わった——広々とした、手入れの行き届いた芝生の奥に、威風堂々たる大邸宅が建っている。わたしはセイヤーの住所を見なおし、南に折れてシェリダン・ロードに入ると、目を細めて郵便受けの番地を見ていった。彼の邸は東側に、つまり、多くの家々がミシガン湖に面していて、グロトンやアンドーヴァーで学ぶ子供たちが帰省したときに、プライヴェート・ビーチやボートの繋留所を使うことのできる側にあった。

わたしのシェヴィは対をなす石の門柱をくぐったとたん尻込みを始め、車寄せの片側の奥に並んだ小型のメルセデス、アルファ、アウディ・フォックスを見てからは、特にそれがひどくなった。弧を描く車寄せを進んでいくと、いくつかのみごとな花壇を過ぎて、石灰岩の邸の正面に到着した。玄関扉の横に小さな貼り紙がしてあって、配達にきた店員は裏口へまわるようにと書いてあった。わたしは店員だろうか、それとも女店員だろうか。配達するものがあるのかどうか、自分でもよくわからなかったが、この邸の主人のほうにはたぶんあるだろう。

財布から名刺を出して、短いメッセージを書き添えた。"ナイフグラインダーズとの関

係についてお聞かせください〟。呼鈴を鳴らした。
玄関先に出てきた、こざっぱりした制服を着けた女の顔に浮かんだ表情を見て、わたしは自分の黒あざになった目を思い出した。ブートのおかげで、しばらくそれを忘れていた。女に名刺を渡した。「セイヤー氏にお目にかかりたいのですが」と、冷たくいった。
女はうさんくさそうにこちらを見たが、名刺を受けとり、わたしの鼻先でドアをしめた。道路のずっと先のほうの湖岸から、はしゃぎまわる声がかすかに聞こえてきた。何分かが過ぎ、車道のもう一方の側にある花壇をもっと詳しく観察しようと思って、玄関を離れた。扉があく音に振り返った。さきほどのメイドがむずかしい顔でこちらを見ていた。「花を盗むつもりはないわよ」彼女を安心させた。「でも、待合所には雑誌もないし、そしたら何か眺めてるしかないじゃない」
彼女は息を吸いこんだが、口に出したのは、「こちらへ」の一言だけだった。「どうぞ」は省略、礼儀も何もあったものではない。しかし、いまは家中が喪に服しているのだ。大目に見ることにした。
わたしたちはくすんだ緑色の彫像が優雅さを添えている広い入口の間を急ぎ足で突っきって、階段の横を通り、邸の奥へ続く廊下をずんずん進んだ。ジョン・セイヤーが反対側からやってきて、わたしたちを迎えた。白のニットシャツに、灰色のチェックのズボン——郊外族らしい装いだが、やや控えめな感じ。子供の死を悼む父親らしくふるまおうと、

意識的に努力しているかのように、全身に暗い雰囲気を漂わせている。
「ご苦労、ルーシー。さあ、こちらへどうぞ」彼はわたしの腕をとり、快適そうな肘掛椅子や本でぎっしりの本棚の並ぶ部屋へ請じ入れた。本は棚にきれいに並べられていた。このうち一冊でも、彼がいままでに読んだことはあるのだろうか。
セイヤーはわたしの名刺を突きつけた。「どういうことだね、ウォーショースキー」
「そこに書いたとおりです。あなたとナイフグラインダーズの関係について、お尋ねしたいと思いまして」
彼はおもしろくもなさそうな笑顔を見せた。「最小限の関わりを持ったにすぎん。ピーターが——いなくなったんだから、これからはまったくの無関係だ」
「マグロー氏がそれに賛成するかどうか、疑問ですね」
セイヤーは拳を固め、名刺を握りつぶした。「やっと本題に入ったな。マグローはわしをゆするためにきみを雇った。違うかね?」
「やっぱり、あなたとナイフグラインダーズはつながりがあるんですね」
「ない!」
「だったら、マグロー氏はどうやってあなたをゆすれるんです?」
「ああいう男は何事も平気でやるものだ。やつのまわりをうろつくときは気をつけろと、昨日警告したはずだぞ」

「ねえ、ミスタ・セイヤー。昨日は、マグローがあなたの名前を出したと知ってひどくうろたえておいでてでしたね。今日は今日で、彼が脅迫しているのではないかと恐れてらっしゃる。これでほぼ想像がつきます」

彼の顔がこわばり、きつい不自然な輪郭を描いた。「どういうことだ？」

「あなたがた二人のあいだに、人に知られては困る何かが進行中だったということです。ご子息がそれを発見し、あなたがたは口封じのために彼を殺害した」

「でたらめだ、ウォーショースキー、とんでもないでたらめだ」彼はわめいた。

「証明してください」

「今朝、ピーターを殺したやつが逮捕された」

わたしはめまいを覚え、革椅子にくずれるようにすわりこんだ。「なんですって」わたしの声は悲鳴に近かった。

「警察から電話があった。あそこに盗みに入った麻薬常習者を、ついに見つけ出したそうだ。ピーターは盗みの現場に出くわして撃たれたらしい」

「嘘よ」

「どういう意味だ、嘘とは。警察はそいつを逮捕したんだぞ」

「違うわ。警察は男を逮捕したかもしれないけど、そんなのでっち上げだわ。盗みを働いた人間なんかいやしない。息子さんは盗みの現場なんか見てやしない。いいこと、ミスタ

・セイヤー、息子さんは台所のテーブルにすわっていて、そこを誰かに撃たれたのよ。盗みの現場を見られた麻薬常習者のやることじゃないわ。それに、何ひとつ盗られてないのよ」
「何を追っかけてるんだ、ウォーショースキー。そりゃ、盗まれたものはないかもしれん。たぶん、怖気づいて逃げ出したのさ。わしとしては、きみの説――つまり、わしが自分の息子を撃ったという説よりも、こちらのほうを信じている」彼の顔は激しい感情に引きつっていた。悲しみ？　怒り？　もしかすると恐怖？
「ミスタ・セイヤー、わたしの顔のすさまじさには、たぶんお気づきでしょうね。昨夜ちんぴら二人がわたしを痛めつけて、息子さんの死を嗅ぎまわるのをやめろと警告したんです。麻薬常習者には、そんな手づるはありません。わたしは陰で糸を引く可能性のある何人かの人々に会いました――あなたとアンディ・マグローもそのなかの二人です」
「おせっかい屋は嫌われるぞ、ウォーショースキー。誰かがきみを叩きのめしたとすると、わしならすぐにその意味を悟るがね」
わたしは腹を立てるには疲れすぎていた。「いいかえれば、あなたも一枚噛んでるけど、尻尾をつかまれる心配はないと思ってるわけね。つまり、あなたの胴体を尻尾から切り離す方法は、わたしのほうで考え出さなきゃならないってことね。おもしろそう」
「ウォーショースキー、きみのためを思っていってるんだ。手を引きなさい」彼はデスク

に歩み寄った。「きみが良心的な女性だということはわかっている。だが、マグローを相手にするのは時間の無駄だ。何も見つかりはせん」彼は小切手を書いてわたしによこした。「さあ。マグローにいくらもらったか知らんが、全額返すがいい。それできみの気もすむだろう」

小切手の額面は五千ドルだった。「あきれた人ね。脅迫だと非難しておいて、次はお金の力で追っ払うつもり?」突然湧き上がった生々しい怒りが、疲れを脇へ押しのけた。小切手を引き裂き、ちぎった紙片を床に落とした。

セイヤーの顔から血の気が引いた。金は彼のむき出しの神経なのだ。「警察が犯人を逮捕したんだぞ、ウォーショースキー。金できみを追い払う必要はない。だが、きみがそのことで愚かしい振舞いをしたいというのなら、これ以上話すことはない。帰ってもらおうか」

ドアがあいて、少女が入ってきた。「ねえ、パパ、ママが呼んでるから――」少女は急に口をつぐんだ。「ごめんなさい、お客さまだってこと、知らなかった」愛らしい十代の女の子だった。茶色のまっすぐな髪は丹念にブラッシングされ、小さな卵形の顔をふちどって背中へ流れている。ジーンズをはき、数サイズ大きめの縞模様の男性用シャツを着ている。兄のものかもしれない。ふだんなら、金の力がもたらす自信に満ちた健康そうな様子を見せていることだろう。いまの彼女はやや沈んでいた。

「ミス・ウォーショースキーはちょうどお帰りになるところだ、ジル。そうだ、この方を玄関までお送りしてくれ。パパはママがなんの用か訊いてくるから」

彼は立ち上がってドアまで行き、わたしが追いついて別れの挨拶をするのを待った。わたしは握手の手は出さなかった。ジルがわたしを案内して先ほどの道筋をもどってゆき、彼女の父親はきびきびした足どりで反対方向へ去っていった。

「お兄さんのこと、心からお気の毒に思ってるわ」緑がかった彫像のそばまできたとき、わたしはいった。

「あたしも」少女はそういって、唇をきっと結んだ。邸の玄関までくると、わたしについて表まで出てきて、立ち止まり、わずかに眉をひそめてわたしの顔を見上げた。「ピーターを知ってたの?」ようやく少女は訊いた。

「いいえ、会ったことはなかったわ」わたしは答えた。「わたしは私立探偵、じつをいうと、このあいだの朝お兄さんを発見したのはこのわたしなの」

「家の人たち、どうしても兄さんに会わせてくれなかったのよ」少女はいった。

「顔はきれいなままだったわ。お兄さんの夢を見てうなされちゃだめよ——顔は傷ついてなかったんだもの」少女はもっと詳しく知りたがった。頭を撃たれたのに、どうして顔がきれいなままだったのか。わたしは言葉を和らげ、臨床講義のような調子で少女にそれを説明した。

「ピーターがいってたわ、相手の顔を見れば信用できる人間かどうかわかるって」しばらくしてから、少女はいった。「だけど、あなたの顔はめちゃめちゃだから、どっちだかわかんない。でも、ピーターのことを正直に教えてくれたし、あたしのこと赤ちゃん扱いせずに話相手になってくれてる」言葉が途切れた。わたしは待った。ようやく少女が訊いた。「パパがあなたに出てけっていったの？」わたしがそうだと答えると、少女はさらに訊いた。「パパ、どうして怒ったの？」

「それはね、お父さんはお兄さんを殺した犯人は警察がすでに逮捕したと思ってるけど、わたしは警察が逮捕したのは真犯人じゃないと思ってるからなの。それでお父さんのご機嫌を損じてしまったのよ」

「なぜ？」彼女は訊いた。「つまりその、なぜパパが怒ってるかじゃなくて、なぜあなたは、それが真犯人じゃないと思ってるの？」

「その理由は相当込み入ってるわね。わたしは誰が真犯人かを知ってるわけじゃないのよ。あなたのお兄さんを発見して、アパートメントを調べて、事件に関係した何人かの人たちに会って、そしてその人たちが、わたしが会いに行ったことに反応を示したからなの。わたしもこの仕事を始めてかなりになるから、真実を耳にしたときは手応えを感じるものよ。麻薬常習者が通りからふらっと忍びこんだなんて説は、わたしが見聞きしてきたことにはまるで当てはまらないわ」

少女は片足で立ち、自分がいまにもわっと泣き出しはしないかと恐れているかのように、顔をゆがめた。わたしは片手で少女を抱いて、ポーチのゆるやかな階段にすわらせた。

「大丈夫よ」少女はつぶやいた。「ただちょっと――家のなかが何から何までおかしくなってるから。だって、ピートは死ぬし、いろんなことが起きるし、めちゃめちゃなの。兄さんは――兄さんは――あのね」彼女はしゃくり上げながらも、泣きくずれるのをこらえた。「気にしないで。変なのはパパなの。きっと前からずっと変で、でも、あたしが全然気づかなかったんだわ。アニタと彼女のお父さんがお金目当てにピートを撃ち殺したんだとか、そんなばかなことばっかりわめいてたと思ったら、今度はピートにとっては当然の報いだなんていい出して、まるで兄さんが死んだのを喜んでるみたいなの」少女は涙をこらえて、片手で鼻をこすった。「パパはいつも、ピーターのやつが家名を汚すとかいって、やきもきしてたのよ。でも、兄さんはぜったいそんなことしない――組合組織員になったとしても、きっとりっぱに成功したはずよ。兄さんは計算して答えを出すのが好きだった。そういうタイプの人だったの。計算して答えを出す、しかも、一番いい方法でそれをやろうとする人だった」ふたたびしゃくり上げた。「それにあたし、アニタが好きなの。もう二度と会えないわね。あたしがアニタに会ってたなんて誰も知らないけど、パパとママが街にいないとき、アニタとピートがよく夕食に連れてってくれたわ」

「アニタは目下、行方不明なのよ」わたしは少女にいった。「どこに姿を隠したか、あな

た、まさか知らないでしょうね」
　少女は心配そうな目でわたしを見上げた。「アニタに何かあったと思ってるの？」
「まさか」わたしは感じてもいない自信をこめて答えた。「たぶん、怖気づいて逃げ出しただけよ」
「アニタはとってもすてきな人よ」少女は熱っぽくいった。「でも、パパとママはアニタに会おうとさえしなかった。そのころだわ、最初にパパの様子が変になったのは。そうよ、ピートとアニタがつきあいはじめたころだった。今日だって警察の人がきたとき、パパは犯人が逮捕されたことを信じようとしなかったの。犯人はマグローだっていい続けたのよ。すごい見幕だったわ」少女は無意識に顔をしかめた。「ああ、この家、まるで地獄みたい。ピートのことを悲しんでる者は一人もいないわ。ママは近所のことを気にしてるだけ。パパはめちゃめちゃ怒ってる。兄さんが死んだことを悲しんでるのは、あたし一人」涙が頬を伝い、少女は涙をこらえようとするのをやめた。「何回か、ばかみたいなことまで考えちゃったわ、もしかしたら、パパが完全に怒り狂って――今日みたいな感じでね――それでピーターを殺してしまったんじゃないかって」
　これが一番の恐怖だったのだ。それを口にしたとたん、少女は発作的にしゃくり上げて身体を震わせはじめた。わたしはジャケットを脱ぎ、少女の肩をそれで包んだ。二、三分のあいだしっかり抱きしめて、泣きたいだけ泣かせた。

わたしたちの背後でドアがあいた。ルーシーがそこに立って、こちらをにらみつけていた。

「お嬢さまはどこにおいでかと、お父さまがお捜しです。それから、そんなところで探偵と無駄話などなさっていては、お父さまがいやがりますよ」

わたしは立ち上がった。「この子を家に連れて入って、毛布にくるんで、何か温かいものを飲ませてやって。いろんなことがありすぎて気が動転してるようだから、すこしいたわってあげなくては」

ジルはまだ震えていたが、すすり泣きはやんでいた。涙ぐんだまま弱々しい笑みを浮かべて、わたしのジャケットを返してくれた。「あたし、大丈夫よ」とささやいた。

わたしは財布から名刺を出して、少女に渡した。「用があったら電話してね、ジル」といった。「昼でも夜でもかまわないから」ルーシーが少女をせき立てて、超スピードで家に押しこめ、ドアをしめてしまった。わたしはこの界隈にはそぐわない人間なのだ――木に邪魔されて隣近所からわたしの姿が見えないのは、いいことなのだ。

肩と足がふたたびうずきはじめていて、のろい足どりで車にもどった。シェヴィの前の右フェンダーに、去年の大雪のときに誰かの車にかすられてできた傷痕が残っていた。アルファ、フォックス、メルセデスはすべてぴかぴかに磨き上げられている。わたしの車とわたしが似ている一方、セイヤー一家は光沢のある、傷ひとつないメルセデスによ

く知っていた。そこにはひとつの教訓が含まれている。都会のど真ん中で暮らすのは、車にとっても人にとってもたぶん悪いことなのだろう。みごとな洞察力ね、ヴィク。

わたしはシカゴ市内にもどってボビーを訪ね、警察が逮捕したという麻薬常習者について内輪の話を聞きたかったが、ロティの鎮痛剤がわたしを支えているあいだにやっておくべきことが、まだ残っていた。イーデンズ高速にもどって、南に向かい、デンプスターの出口をめざした。デンプスターというのはユダヤ人が圧倒的に多いスコーキーの郊外を東西に走る道路で、道路沿いの〈ベーグル・ワークス〉という、惣菜とベーグルを売る店の前で車を停めた。ライ麦パンにコンビーフをのせた特大サンドウィッチとフレスカを注文して、車にもどって腰を降ろし、食べながら、どこで拳銃を購入するかを決めようとした。拳銃の使い方は知っている――父は家庭における銃の暴発事故をいやというほど見てきた。わが家の事故を防ぐ方法は、母とわたしに銃の使い方を教えることだと決心した。母はいつもつっぱねた。拳銃を見ると戦時中の不幸な思い出がよみがえってくるらしく、そんな暇があれば、武器のない世の中がくるように祈りを捧げたほうがいいと、口癖のようにいっていた。しかし、わたしのほうは土曜の午後になると父にくっついて警察の射撃練習場に出かけて行き、射撃訓練をしたものだ。一時は、四五口径のポリス・リヴォルヴァーの分解掃除、装塡、発射までを二分で終えることができたが、十年前に父が死んでからは、射撃の練習に行くこともなくなった。父が死んだときにその拳銃を形見としてボビーに贈

り、それ以来一度も銃を必要としたことはない。一度だけ人を殺した経験があるが、それは不可抗力だった。ある会社の依頼で在庫品の紛失を調べていたとき、倉庫の表で、ジョー・コレルという男がいきなり襲いかかってきたのだ。その腕を振りほどき、顎を思いきり殴りつけてやると、彼は倒れた拍子にフォークリフトの角に頭をぶつけてしまった。彼の顎を砕いたのはわたしだが、彼の命を奪ったのは彼の頭蓋骨がぶつかったフォークリフトである。

ところが、シュマイセンは金で雇ったごろつきを大勢抱えていて、本気で腹を立てたらもっと雇うこともできる。拳銃で完全に身を守れるわけではないが、殺られる確率は低くなるとわたしは考えた。

コンビーフのサンドウィッチはおいしかった。これを食べるのは久しぶりなので、今日の午後だけは体重制限計画を忘れて、もうひとつ食べることに決めた。デリのなかに電話ボックスがあったので、職業別電話帳に指を走らせた。銃砲店は四段にわたって出ていた。リンカーンウッド郊外の、わたしがいまいる店からさほど遠くない場所に、一軒見つかった。電話をかけて、こちらの欲しい品を説明すると、それは扱っていないという。一ドル二十セント分も電話をかけた末にようやく、はるかかなたのサウス・サイドに、中量級のスミス&ウェッスンがあるのを突き止めた。ほうぼうの傷が本格的にうずきはじめていて、街の反対端まで四十マイルも車を走らせる気分にはとうていなれなかった。とはいえ、こ

れらの傷こそ、わたしが拳銃を必要としている理由なのだ。コンビーフ・サンドの代金を払い、ロティがくれた錠剤のうち四錠を二杯目のフレスカで飲みくだした。

南へのドライヴは普通ならわずか一時間ですむところだが、今日はめまいがひどく、首と胴体がしっかりつながっていないような気分だった。シカゴの警官たちの一人に道路の片側へ誘導されるはめになってはたまらない。ゆっくりと車を走らせ、ブートをさらに二錠飲んで、集中力を維持することに全力を傾けた。

インターステート57から南の郊外に出たときは、五時近くになっていた。〈ライリー〉に着くと、店員たちはすでに閉店の準備にかかっていた。買いたい物があるから入れてほしいと、わたしは強硬にねばった。

「欲しい品はもう決めてあるわ。二時間ほど前におたくへ電話したでしょ――スミス&ウェッスンの三八口径」

店員はわたしの顔を疑わしげにながめ、目のまわりの黒あざを凝視した。「月曜日に出直してもらえませんか。銃を買いたいというお気持ちに変わりがなければ、そのときに、スミス&ウェッスンの三八口径よりもうすこしご婦人にふさわしい型を、相談できると思いますが」

「あいにくだけど、わたしはあなたが考えてるような暴力好きの夫の犠牲者なんかじゃないわ。家に帰って亭主を殺すために、銃を買おうと考えてるわけじゃないの。独身で、一

人で住んでて、ゆうべ襲われたのよ。銃の使い方なら知ってるし、どうしても買うことに決めたんだし、いまいったのがわたしの買いたい銃なの」

「少々お待ちを」と、店員はいった。あわてて店の奥に引っこみ、そこに立っていた二人の男とひそひそ声で相談を始めた。わたしは陳列ケースに近づき、銃や弾薬を次々と見ていった。店は新しくて、清潔で、商品がきれいに展示されている。職業別電話帳の広告には、〈ライリー〉はスミス&ウェッスンの専門店と出ていたが、射撃に関してはどのような好みも満足させられるだけの豊富な品揃えがなされている。一方の壁面には、ライフル銃がぎっしり飾ってあった。

わたしの店員が感じのよい顔立ちの中年男と一緒にもどってきた。「ロン・ジャフリーです」男はいった。「ここの店長です。どういったものをお探しでしょう」

「二時間前に電話して、スミス&ウェッスンの三八口径について問いあわせた者よ。わたしが買いたいのはそれなの」と繰り返した。

「前にお使いになったことはありますか」店長が訊いた。

「いいえ、使い慣れてるのはコルトの四五口径」わたしは答えた。「でも、S&Wのほうが軽いし、わたしの求める条件に合ってるから」

店長はケースのひとつに歩み寄って、錠をはずした。さきほどの店員は閉店まぎわの客がこれ以上入ってくるのを防ぐために、ドアのほうへ行った。わたしは店長から拳銃を受

けとり、片手に握ってバランスを確かめてから、警官がよくやる古典的な構えをとった。「買う前に一度撃ってみたいわ」と店長にいった。「射撃練習場はあります?」身体をひねって、標的とされる幅をできるだけ狭くする。拳銃の感触は上々だ。

ジャフリーはケースから弾薬一箱をとりだした。「銃の扱い方は心得ておいでのようですな。練習場でしたら、この裏にあります——銃がお気に召さない場合は、弾薬の代金だけお払いください。お買い上げの場合は、この一箱分がサービスとなります」

「わかったわ」彼のあとに続いて奥のドアをくぐると、そこに小さな射撃練習場があった。

「毎週日曜の午後に、ここで講習会をやってますし、平日は一人で練習したい方々がこられます。装塡の手伝いは必要ですか」

「たぶんね」わたしは答えた。「昔は装塡から発射まで三十秒以内でやってのけたこともあったけど、あれからずいぶんになるから」わたしの両手は疲れと痛みのためにかすかに震えはじめ、八発の弾丸を装塡するだけで数分かかってしまった。店長が安全装置と発射装置を教えてくれた。わたしはうなずき、標的に向かって拳銃を構え、引き金を引いた。

あれから十年ではなく、まるで十日しかたっていないかのように、ごく自然に身体が動いたが、狙いは大きくはずれた。弾丸を撃ちつくしたが、金的には一発も命中せず、わずか二発が内側の輪のなかに当たっただけだった。しかし、銃そのものは上等で、安定した手ごたえがあり、目につくゆがみは見られない。

「もう一度やらせて」

わたしが弾倉を空(から)にすると、ジャフリーが追加分の弾丸を渡してくれた。助言も二、三与えてくれた。「撃ち方は身についているようですが、練習不足だし、悪い癖がいくつか出ています。構えの姿勢はいいのに、肩がいかっている――肩は下げて、腕だけを上げるようにしてください」

わたしは装塡を終え、肩を上げないように気をつけて、ふたたび引き金を引いた。的確な助言だった――二発を除くすべてが赤的(金的の外まわりの大きな的)に当たり、一発は金的をかすめていた。「いいわ。これに決めた。弾薬を二箱と、クリーニング・キットを一揃いつけてちょうだい」わたしは一瞬考えこんだ。「それから、ショルダー・ホルスターも」

わたしたちは店内にもどった。「ラリー!」ジャフリーが呼んだ。さっきの店員が飛んできた。「わたしが請求書を書いてるあいだに、この銃を掃除して包んで差し上げなさい」ラリーは銃を受けとり、わたしはジャフリーとともにレジに行った。レジのうしろに鏡がかかっていて、そこに映った自分の姿を、二、三秒のあいだそれが誰だかわからずにながめていた。顔の左側はいまや完全に紫色に変わって醜く腫れ上がり、一方、右目はパウル・クレイの絵にあるような暗い苦悩をこめて、こちらをにらんでいる。思わず振り返ってこの醜悪な女が誰かを確かめかけたところで、自分自身を見ていることに気がついた。ラリーがわたしを店に入れようとしなかったのもうなずける。

ジャフリーがわたしに請求書を見せた。「四百二十二ドルいただきます」といった。「拳銃が三百十ドル、弾丸二箱が十ドル、ホルスターとベルトが五十四ドル、クリーニング・キットが二十八ドル、残りは税金です」わたしはのろのろと、苦労しながら小切手を書いた。「運転免許証と、大手のクレジット・カード二種、もしくは各銀行共通のキャッシュ・カードを見せていただけますか」と、彼がいった。「それから、この台帳に署名をお願いいします」彼はわたしの運転免許証を調べた。「月曜日に市役所へ出かけて、この銃の登録をすませてください。うちではお買い上げいただいた主な品はすべてリストにして、この管区の警察に提出しております。お客さまのお名前もたぶん、そこからシカゴ警察へ送られると思いますので」

わたしはうなずき、わたしの身分証明となるものを黙って財布にもどした。拳銃のおかげでマグローにもらった千ドルはごっそり減ってしまったが、これを必要経費として堂々と彼に請求できるとも思えなかった。きれいなビロードのケースに収めた拳銃を、ラリーがわたしのところまで持ってきた。わたしはそれを見て、袋に入れてほしいと頼んだ。ロン・ジャフリーは感心にもわたしの顔を無視して、車のところまで礼儀正しく送ってくれた。「かなり遠くにお住まいのようですが、ここまで出向いて練習なさりたいときは、請求書をお持ちください。お買い上げいただいたお客さまには、六カ月間無料で練習していただけます」車のドアをあけてくれた。わたしは礼をいい、彼は店にもどっていった。

ブートのおかげで、いまもまだ激痛から守られていたが、もう疲れてへとへとだった。銃を買うことと、的を狙うことに、エネルギーの最後のひとかけらまで使い果たしてしまった。アパートメントまでの三十マイルを運転して帰るのは無理だった。車をスタートさせ、ゆっくりと通りを走りながら、モーテルを捜した。いま走っている車の往来の激しい通りからすこし引っこんだところに、横丁に面して部屋がいくつか並んでいる〈ベスト・ウェスタン〉というモーテルが目についた。フロントの男は奇妙な表情でわたしを見たが、何もいわなかった。わたしは現金を払って鍵を受けとった。

部屋はけっこう上等で静かだし、ベッドは頑丈にできていた。ロティがくれたネペンテスの壜のコルクを抜き、かなりの量を飲んだ。着ているものを脱ぎ捨てて、時計のねじを巻き、それをベッド脇のテーブルにのせてから、毛布のなかにもぐりこんだ。応答サービスに電話しようかとも思ったが、たとえ何かが持ち上がっていても、いまは疲れ果てて処理に赴く元気もないと判断した。スイッチが〈強〉になったエアコンのおかげで、通りの騒音は締め出され、室内は毛布にくるまるのが心地よい涼しさだった。横になってジョン・セイヤーのことを考えているうちに、眠りに落ちていった。

8 ノックをしない客もいる

ゆっくりと熟睡からさめた。最初は自分がどこにいるのかわからなくて、じっと横になっているうちに、ふたたびうとうとと眠りこんだ。二度目に目ざめたときは、気分爽快で、頭もすっきりしていた。部厚いカーテンが外の光をすべてさえぎっている。ベッドの横のスタンドをつけて、腕時計を見た——七時半。十二時間以上眠り続けたわけだ。

ベッドに起き上がり、脚と首を用心深く動かしてみた。寝ているあいだに筋肉のこわばりがぶり返していたが、昨日の朝ほどひどくはない。ベッドから這い出て窓辺へ行ったが、軽い痛みしか感じなかった。カーテンに小さな隙間を作って外をのぞくと、朝の光が目にまぶしかった。

セイヤーから聞いた警察の逮捕の話がどうにも納得できなくて、朝刊に記事が出ているのではないかと考えた。パンツとシャツを着けて、日曜版の《ヘラルド・スター》を買いにロビーに降りた。階上にもどり、ふたたび服を脱いで、風呂に熱い湯を入れるあいだに新聞に目を通した。〈銀行家子息殺害の容疑で麻薬常習者逮捕〉の見出しが、第一面の右

下に出ていた。

先週月曜日に起きた銀行家子息ピーター・セイヤーさん殺害の容疑で、警察はサウス・エリス・アヴェニュー四三〇二、ドナルド・マッケンジーを逮捕した。ティム・サリヴァン警察本部長は事件担当捜査陣の活躍を称えた後、次のように語っている。逮捕をおこなったのは土曜日の早朝で、ピーター・セイヤーさんと同じアパートメントに住む一人が、最近数回にわたって建物の付近をうろついていた男とマッケンジーが同一人物であると確認したためである。マッケンジーはコカイン中毒で、七月十六日月曜日、留守だと思いこんでセイヤーさんのアパートメントに忍びこんだものと見られている。台所で朝食中のピーター・セイヤーさんを見てうろたえ、発砲するに至った。サリヴァン本部長の発表によれば、凶弾を発射したブローニング・オートマティックの所在はいまだ不明であるが、警察では凶器の発見に全力を傾けているとのこと。

記事は六十三面に続いていた。こちらは一ページ全部がこの事件で埋まっていた。ジルと、姉と、シックなセイヤー夫人が加わったセイヤー一家の写真。ニュー・トライア高校時代の、野球のユニフォームを着たピーター一人の写真。感じよく自然に撮れているアニ

タ・マグローの写真。それに添えられた記事には、〈労働組合指導者の娘、依然行方不明〉とあった。〝警察が犯人を逮捕した現在、ミス・マグローはシカゴにもどるか、または家族に電話を入れるのではないかと期待されている。一方、彼女の写真はウィスコンシン、インディアナ、ミシガンの各州警察に配布中である〟というようなことが書かれていた。

これで事件は一段落したかに見える。わたしは湯のなかで手足を伸ばして、目を閉じた。警察はたぶん、ブローニングを求めてあらゆる場所を捜しまわり、マッケンジーの友達連中を問いつめ、彼のねぐらを捜索していることだろう。しかし、拳銃が見つかるとは思えない。わたしはアールの手下どもが何を持っていたか思い出そうとした。フレッドはコルトだが、トニーはブローニングだったかもしれない。セイヤーはなぜあれほど積極的に、マッケンジーが息子殺しの犯人だと信じようとしたのだろう。ジルの話では、最初はマグローが犯人だといって譲らなかったそうだ。マッケンジーが犯人だという具体的な証拠でもあるのだろうか。逆にいえば、彼が犯人でないという証拠を、わたしは何か持っているだろうか。わたしのこわばった関節、ピーターのアパートメントが荒らされていなかったという事実……でも、それがなんの足しになるだろう？　逮捕に当たったのはボビーだろうか。サリヴァン本部長が惜しみなく賞賛を送ったという仕事熱心な捜査陣のなかに、彼も入ってい

るのだろうか。シカゴに引き返して、彼と話をしなければと決心した。

こうしたことを考えながら、服を着て、モーテルをあとにした。昨日の午後のコンビーフ・サンド二個以来何も食べていなかったことに気づいて、小さなコーヒー・ショップに立ち寄り、チーズ・オムレツとジュースとコーヒーを頼んだ。このところ食べすぎで、おまけに運動にはとんとご無沙汰だ。人目を気にしつつウェストのベルトに指をすべらせたが、きつくなっている様子はなかった。

ロティの薬をさらに何錠かコーヒーで流しこみ、ベルモントの出口でケネディ高速道路を降りたころには、すでに快適な気分になっていた。日曜の朝は道路がすいていて、十時すこしすぎにホールステッド通りに着いた。わたしのアパートメントの向かいに駐車場があって、屋根に警察のアンテナをつけた黒の覆面パトカーが一台駐まっていた。わたしは眉を吊り上げて考えこんだ。山がマホメットのところにきたのだろうか。

通りを渡って、車のなかをのぞいた。マゴニガル部長刑事が新聞片手に、一人ですわっている。わたしを見て彼は新聞を置き、車から出てきた。薄手のスポーツ・ジャケットに灰色のパンツ、ショルダー・ホルスターが右の脇の下に小さなふくらみを作っている。左利きということだ。「おはよう、部長刑事さん」わたしはいった。「いいお天気ね」

「おはよう、ミス・ウォーショースキー。階上までご一緒して、二、三質問させてもらってもかまいませんか」

「まあ、どうしようかな」わたしは答えた。「質問にもよりけりだわ。[illegible]」

「そうです。お訊きしたいことが二つ三つできたので、わたしが使いに出してあなたが無事かどうかを確かめさせようと。警部補が考えたものですから――しかしまあ、すごいあざをこしらえたじゃありませんか」

「まあね」わたしは認めた。建物に通じるドアをあけて彼のために手で支え、わたしもあとからついて入った。「いつごろから待ってたの？」

「昨夜帰ったんですが、お留守でした。そのあと二回電話しました。今朝ここにきたときは、昼まで粘って、あなたが帰ってくるかどうかを見届けるつもりでした。あなたが消えたとの報告でもしようものなら、警部がただちにあなたを全署に手配するんじゃないかと、マロリー警部補は心配しておられました」

「あら、そう。帰ることに決めてよかったわ」

わたしたちは階段の一番上まできた。マゴニガルが立ち止まった。「ドアはいつもあけっ放しなんですか」

「まさか」わたしは彼の脇をすり抜けた。ドアが細めにあいて、酔っ払いのように軽く揺れていた。誰かがなかに入ろうとして、鍵を壊そうとしたのだ――鍵も暴力にはかなわない。マゴニガルは拳銃を抜き、力まかせにドアをあけて部屋に転がりこんだ。わたしはホール

の壁にぴたりと身体をつけてから、彼に続いてなかへ入った。
アパートメントのなかは修羅場だった。何者かがここで暴れ狂ったのだ。ソファのクッションは切り裂かれ、絵は床に投げ捨てられ、本はひらいたまま放り出されて、背としわくちゃのページを見せて転がっている。二人でアパートメントのなかを見てまわった。服が寝室中に散らばり、引出しがいくつも投げ出されている。台所では小麦粉と砂糖が残らず床にぶちまけられ、いたるところに鍋や皿が転がっていて、手荒い扱いで欠けてしまったものもいくつかある。ダイニング・ルームへ行くと、赤いヴェネチアン・グラスがテーブルの上に散乱していた。二個が下に落ちている。一個は運よく絨毯の上に転がっていたが、もう一個は木の床の上で粉々に砕けていた。無事だった七個を拾い集めて棚に並べてから、残る一個のかけらを拾うためにしゃがみこんだ。両手が震え、細かい破片はうまくつかむことができなかった。
「ほかのものにはいっさい手を触れないでください、ミス・ウォーショースキー」マゴニガルの声は優しかった。「マロリー警部補に電話して、指紋係を何人かよこしてもらいます。たぶん何も見つからんでしょうが、一応やってみないことには。それまでのあいだ、部屋のなかはこのままにしておいてください」
わたしはうなずいた。「電話はカウチの――いえ、以前はカウチだったものの横よ」うつ向いたままでいった。あんまりだ、次は何？ ここに忍びこんだのは誰？ そしてな

ぜ？　行き当たりばったりの泥棒であるはずがない。空巣のプロなら、貴重品を捜して家中めちゃめちゃに荒らしまわるかもしれない――しかし、カウチまで切り裂くだろうか。陶器を床にぶちまけるだろうか。母はあのグラスをスーツケースに詰めてイタリアから運んできて、ただの一個も割れなかったのだ。シカゴのサウス・サイドで警官の妻として十九年間も暮らしてきて、ただの一個も割れなかったのだ。わたしが母の望みどおりに歌い手になっていれば、こんなことは起きなかっただろう。溜息をついた。手の震えがおさまってきたので、細かい破片を拾って、テーブルの上の皿に入れた。

「どうか手を触れないように」ドアのところから、またしてもマゴニガルがいった。

「うるさいわね、マゴニガル、黙ってて！」わたしはどなった。「たとえ、部屋のなかから、わたしのでも、わたしの友達のでもない指紋が見つかるとしてもよ、指紋係がこんなガラスのかけらまでいちいち調べると思ってるの？　それから、サヴォイ・ホテルの夕食を賭けてもいいけど、誰がここに忍びこんだにしても、その人間は手袋をはめてたに違いない。指紋なんか見つかりっこないわ」わたしは立ち上がった。「竜巻（トルネード）が通り過ぎたときにあなたが何をしてたか、教えてもらいたいものね。建物の真ん前にすわって新聞を読んでたの？　すさまじい物音はどこかのテレビの音だとでも思ってたの？　あなたがここにいたあいだに、この建物に誰が入って誰が出て行ったのかしら」

彼は赤面した。マロリーも同じ質問を浴びせるに違いない。周囲への警戒を怠っていた

となれば、彼の立場は悪くなる。

「わたしがここにいたあいだの犯行とは思われませんが、とにかく階下の住人たちに、怪しい物音がしなかったかどうか訊いてきます。帰ってきたらアパートメントがめちゃめちゃに荒らされてたんだから、動転する気持ちもわかりますが、いいですか、ミス・ウォーショースキー――犯人を見つける手がかりを得るには、まず室内の指紋を採取しなきゃなりません」

「はいはい、わかったわ」わたしはいった。彼は階下で聞き込みをするために出て行った。わたしは寝室へ行った。キャンヴァス地のスーツケースは口をあけて転がっていたが、幸運にも切り裂かれてはいなかった。キャンヴァス地からは指紋はとれないだろうと思い、裸にされたベッドのスプリングの上にそれをのせて、床に散らばった服やランジェリーをかき集めて詰めこんだ。〈ライリー〉から持ち帰った箱も包装したまま詰めこみ、ベッドの横の電話でロティを呼び出した。

「ロティ、いまは詳しく話せないけど、わたしのアパートメントが荒らされて大変なの。二晩か、三晩、泊めてもらえない？」

「大歓迎よ、ヴィク。迎えに行ってあげましょうか」

「ううん、大丈夫。しばらくしたら、そっちへ行くわ。その前にまず、警察に話をしなきゃならないの」

電話を切り、スーツケースを階下の車まで運んだ。マゴニガルが二階のアパートメントにいた。ドアが半開きになっていて、彼は廊下に背中を向けて話をしている。車のトランクにスーツケースを入れ、階上にもどるために表のドアの錠をあけようとしたちょうどそのとき、マロリーがパトカー二台をすぐうしろに従えて、歩道のへりにすべりこんできた。車はライトを点滅させながら横に並んで停まり、子供たちの一団が通りの角に集まってきて、見とれていた。警察は人前でドラマを演じるのが好きだ――ショーをやるのにほかのものは必要ない。

「あら、ボビー」わたしはできるだけ陽気にいった。

「くそったれめ、何がおっぱじまったんだよ、ヴィッキー」ボビーが訊いた。腹立ちのあまり、女子供の前では悪態をつかないという彼の基本的ルールを忘れてしまっている。

「何が起きたにしても、あんまりすてきなことじゃないわ。誰かがわたしの部屋をずたずたにしたの。ガブリエラのグラスが一個割られたわ」

ボビーは脱兎のごとく階段を駆け上がろうとして、わたしを押しのけたところだったが、それを聞いてぴたりと立ち止まった――あのグラスで何度も何度も新年の乾杯をしてきたのだ。

「なんてことだ、ヴィッキー、気の毒に。しかし、それはともかく、今度の事件に鼻を突っこんで、何をやらかしてたんだ？」

CamScannerでスキャン

「階上へは部下の人に行ってもらうことにして、ここに残って話さない？　あの部屋、腰を降ろす場所もないし、正直いって、見るのが耐えられないから」

ボビーはしばらく考えこんだ。「よし、わしの車んなかにすわって、質問に答えてもらうとするか。フィンチレー！」彼は大声でどなった。若い黒人の警官が進み出た。「みんなを階上に連れてって、室内の指紋を採取して、手がかりが残っていないか捜してくれ」

わたしのほうを向いた。「貴重品が紛失している形跡は？」

わたしは肩をすくめた。「略奪者にとって何が貴重品なのか、わからないわね。宝石ならいいものがすこしあるけど――母の形見なの。一度も着けたことないのよ。型が古すぎるから。ホワイトゴールドのすかし細工にダイヤを一個はめこんだペンダントと、対のイアリング。指輪が二つ。銀の皿がすこし。貴重品かどうかわからないけど――ターンテーブル。まだ何も確かめてないわ。ざっとながめて、目をそむけてしまったんだもの」

「よし、わかった」ボビーはいった。「始めてくれ」手を振ると、四人の制服警官が階段をのぼって行った。「それから、マゴニガルに降りてくるようにいってくれ」彼らの背中に向かって、ボビーは叫んだ。

ボビーの車へ行き、フロントシートに並んでかけた。彼の丸々とした赤ら顔はこわばっていた――怒っている。しかし、わたしに対してではない。「セイヤー事件にはちょっかいを出すなと、金曜日に注意したはずだぞ」

「昨日、警察が犯人を逮捕したそうね——ドナルド・マッケンジーを。まだ、セイヤー事件なんてものが存在してるの？」

ボビーは無視した。「その顔、いったいどうしたんだ？」

「ドアにぶつかったの」

「おどけるのはよせ、ヴィッキー。わしがなぜマゴニガルをここによこして、きみと話をさせようとしたか、わかってるのか」

「わからないわ。彼がわたしに一目惚れしたので、立ち寄って顔を見る口実を与えてあげたとか？」

「今朝はきみと遊んでる暇はない！」ボビーは最大級の声量でがなり立てた。「一人の若者が死んだ、きみの部屋はめちゃめちゃ、顔はまるで地獄、なのに、きみの考えることといったら、わしを怒らせることだけだ。いい加減にしろ。素直にものをいって、話はまじめに聞くんだ」

「はいはい、わかりました」わたしはおとなしくいった。「降参します。部長刑事さんをわたしのところによこしたのはなぜ？」

ボビーは二、三分のあいだ荒い呼吸をくりかえした。自制心をとりもどしたことを確認するかのようにうなずいた。「それはだな、きみがこっぴどく叩きのめされたことと、マッケンジー犯人説を信じようとしないことを、昨夜ジョン・セイヤーが教えてくれたから

だ」

「セイヤーが」わたしはまさかというように繰り返した。「昨日セイヤーと話をしに行ったけど、マッケンジーが殺人犯だっていう彼の言葉をどうしても信じなかったために、邸からつまみ出されてしまったわ。どういう風の吹きまわしで、あなたにそんなこと教えたのかしら。それはそうと、なんで彼と話なんかすることになったの？」

ボビーは苦い笑みを浮かべた。「最終的な質問を二、三するために、ウィネッカまで出かけなきゃならなかったのさ。セイヤー一家が相手のときは、向こうさまのご都合に従うことになってて、そのときがたまたま都合のいいときだったんだ……セイヤーはマッケンジーが犯人だと信じてるが、はっきりした証拠をほしがってるんだ。さて、その顔のことを話しておくれ」

「話すことなんかないわ。見かけがひどいだけ——目の黒あざがどういうものか、あなただって知ってるでしょ」

ボビーは忍耐強さをことさら強調するように、車のハンドルを指で叩いた。「ヴィッキー、セイヤーと話をしたあと、わしはマゴニガルに命じて署の報告書を隅々まで調べさせ、殴られた女について誰かが何か届け出ていないかどうか確かめてみた。するとどうだ、タクシーの運転手がタウン・ホール署に立ち寄って、アスター通りとレイク・ショア・ドライヴの交差点で女を拾い、その女をここの住所で降ろしたって報告をしてるじゃないか。

単なる偶然かね、ええ？　その運転手、きみがあんまりひどい様子だったんですいぶん心配してたが、誰にもどうにもできやしない――本人からの苦情がきてなかったからな」

「それもそうね」わたしはいった。

マロリーは唇をきっと結んだが、癇癪は起こさなかった。「さて、ヴィッキー」と続けた。「マゴニガルはきみがアスターとドライヴの交差点あたりで、そんなひどい格好でいったい何をやってたんだと不審に思った。辻強盗の出るような場所ではない。そして、ステート通り――街の高級住宅地の仲間入りをしてからは、パークウェイとも呼ばれているが――そこから一筋入ったアスターの通りに、アール・シュマイセンがコンドミニアムを持っていることを思い出した。なあ、アールがなぜきみを痛めつけようとしたのか、教えてくれないか」

「それはあなたの勝手な説でしょ。彼がわたしを痛めつけたといってるのはあなたよ。ついでに理由もいってよ」

「たぶん、きみのおふざけにうんざりしたんだろう」ボビーはふたたび声を荒らげた。

「二セントもらえるなら、もう一方の憎たらしい目にも黒あざを作ってやる」

「そんな用事でわざわざここまできたの？　わたしを脅すために？」

「ヴィッキー、わしはアールがきみを痛めつけた理由を知りたいんだ。考えられる理由はただひとつ、やつがセイヤーの息子と何か関わりを持ってるってことだ――ひょっとする

と、ほかの誰かに頼まれて、手下に息子を撃たせたのかもしれん」

「じゃあ、マッケンジーの犯行だとは思ってないのね」マロリーは無言だった。「あなたが逮捕に当たったの？」

「違う」マロリーは硬い声でいった。わたしはこの質問が彼を傷つけたことを知った。

「カールスン警部補だ」

「カールスン？　聞いたことのない名前ね。誰の下で仕事をしてるの？」

「ヴェスプッチ警部」マロリーはそっけなく答えた。

わたしは眉を上げた。「ヴェスプッチ？」わたしの話し方はオウムそっくりになりかけている。ヴェスプッチは父の同僚だった男で、父は彼の話をすることさえいやがっていた。長年にわたって署内での数多くのスキャンダルに関わりを持ち、その大部分は警官がギャングに買収されたとか、管区内でのギャングの暗躍を黙認したとかいうものだった。彼を警察から追い出すに足る充分な証拠は、一度も挙がらなかった。しかし、それも噂によれば、人を黙らせるたぐいのコネを彼が持っていたからだという。

「カールスンとヴェスプッチは相当親しいの？」わたしは訊いた。

「ああ」ボビーはぶっきらぼうに答えた。

わたしはしばし考えこんだ。「誰かが——そうね、たとえばアールなんかが——ヴェスプッチに圧力をかけて逮捕を迫ったんじゃないかしら。ドナルド・マッケンジーはまずい

地域をうろついていたために罠にかかってしまった、あわれな間抜けにすぎないんじゃないの？　アパートメントに彼の指紋がひとつでも残ってた？　拳銃は見つかりそう？　自白したの？」

「いや、しかし、やつには月曜のアリバイがないんだ。それに、ハイド・パークで何回か起きた強盗事件にやつがからんでることは、ほぼ間違いない」

「だけど、セイヤー殺しの犯人だって説には賛成じゃないんでしょ？」

「殺人課に関するかぎり、この事件は完了だ。わしは今朝、マッケンジーと直接話をしてみた」

「それで？」

「成果なし。うちの警部にいわせりゃ、順当な逮捕だそうだ」

「おたくの警部さん、ヴェスプッチに借りでもあるの？」わたしは訊いた。

マロリーはその胴体を乱暴に動かした。「わしに向かってそういう口のきき方はやめろ、ヴィッキー。わしらは目下、未解決の殺人を七十三件も抱えとるんだ。そのなかの一件が一週間で片づいたとなりゃ、警部が有頂天になるのも当然だろ」

「わかったわ、ボビー」わたしは溜息をついた。「謝るわ。カールスン警部補がマッケンジーを逮捕し、ヴェスプッチからおたくの警部さんに、次に警部さんからあなたに、事件は解決したから捜査を打ち切るようにとの命令が出された……ところが、あなたはアール

がなぜわたしを叩きのめしたかを知りたがっている」マロリーはふたたび赤くなった。

「両方を押し通すことはできなくてよ。マッケンジーが殺人犯なら、どうしてシュマイセンがわたしを叩きのめしたりするの？　もし――もしもよ――彼がわたしとピーター・セイヤーに関心を持ったとしても、理由はいくつだってあるわよ。わたしにしつこく言い寄って、肘鉄をくわされたのかもしれない。アールは自分に肘鉄をくわせる女は好きじゃないのよ――前にも二回ばかり、暴力をふるった例があるわ。わたしが初めてアールに会ったのは、理想に目を輝かせた新進弁護士として国選弁護人名簿に名前を連ねてたころよ。アールに暴力をふるわれた女の弁護を引き受けたの。感じのいい若い娼婦で、彼のもとで働かされるのをいやがってたわ。残念ながら、わたしは名誉毀損をおこなったにすぎなかった。彼女、アールが暴力をふるったことを申し立てたんだけど、結局、有罪には持ちこめなかったの」

「すると、今回は告訴せんつもりだな」マロリーがいった。「まあ、そのほうがよかろう。さて、きみのアパートメントのことを話してくれ。わしはまだ見ておらんが、荒らされた模様は省略だ――マゴニガルが簡単に報告してくれたからな。誰かが何かを捜してた。なんだね、それは」

　わたしは首を横に振った。「さっぱりわからない。依頼人から中性子爆弾の秘密とか、歯磨の新製品なんかを預かった覚えはまったくないわ。その種の事件は扱ってないもの。

それに、盗まれる恐れのある証拠品を保管するときは、事務所の金庫に入れることにしてるし……」わたしの声は次第に小さくなって消えた。なぜもっと早く気づかなかったのだろう。誰かが何かを捜してアパートメントを引っかき回したのなら、いまごろは事務所のほうもやられているはずだ。

「住所を教えてくれ」ボビーがいった。わたしが住所を告げると、彼は車の無線でパトカーを呼び出し、事務所へ急行して調べるよう命令した。「なあ、ヴィッキー、ひとつ正直に話してくれ。ここだけの秘密にしとくから――証人もいないし、テープにもとりはせん。誰かが、そうだな、シュマイセンとしておこうか、とりもどそうと躍起になるようなどんな品を、あのアパートメントから持ち出したんだ？」彼は思いやりに満ちた、気づかわしげな、父親のような表情でわたしを見た。写真と給与明細書のことを彼に話して、みすみす損をする必要があるだろうか。

「ボビー」わたしはまじめな顔でいった。「アパートメントのなかは一応調べたけど、アールや誰かほかの特定の人物をほんのすこしでも匂わせるようなものは、何も見かけなかったわ。それどころか、ほかの人間が荒らしまわった形跡もなかったわ」

マゴニガル部長刑事が車に近づいてきた。「あの、警部補――フィンチレーから聞きました。お呼びだそうで」

「ああ」ボビーが答えた。「きみが張りこんどったあいだに、この建物にどんな人間が出

入りした?」

「居住者のうち一人だけです」

「確かか」

「はっ。二階のアパートメントに住む女です。いま話をしてきたばかりですが、そのミセス・アルヴァレスの話ですと、夜中の三時ごろに騒々しい物音がしたが、別に気にもしなかったとのことでした。ミス・ウォーショースキーは妙な客を呼ぶことがちょいちょいあって、彼女が——ミセス・アルヴァレスが——注意しても、ぜったいに感謝してくれない、といっておりました」

あら、感謝してるわ、ミセス・アルヴァレス。この街には、あなたのような隣人がもっと必要ね。その時刻にアパートメントにもどっていなくてよかった。それにしても、わたしの部屋を荒らしまわった人間はいったい何を必死に捜していたのだろう。あの給与明細書はピーター・セイヤーとエイジャックスのつながりを示しているが、それは秘密でもなんでもない。では、アニタの写真は? 警察が彼女とアンドリュー・マグローの関係に気づかなかったとしても、写真がその関係を示しているわけでもない。わたしは両方の品を事務所の隠し金庫にしまった。それは大型金庫の奥の壁に埋めこまれた、爆弾にも火事にもびくともしない小さな金庫。二年前に〈トランシコン〉の会長が何者かを雇って、わたしの金庫から証拠品を奪い返そうとして以来、調査中の事件関係の書類はそこへしまうこ

とにしている。しかし、それが狙われたのだとはどうしても思えなかった。
ボビーとわたしはときおりわたしの戦いの傷に触れながら、家宅侵入事件についてさらに三十分間議論を続けた。最後にわたしはいった。「ところで、ひとつ訊きたいことがあるの、ボビー。マッケンジーが犯人だってことを、どうして信じないの？」
ボビーはフロント・ガラスの外をじっと見つめた。「疑っちゃいないよ。信じてる。拳銃か指紋があればもっとうれしいだろうが、とにかく信じてるさ」わたしは何もいわなかった。
「と、ぼつりといった。「ただ、この手でやつをつかまえたかった」と、ボビーは何も見ない目で前を見続けている。「金曜の夕方、うちの警部んとこへサリヴァン本部長が電話してきて、わしが過労気味のようだから、ヴェスプッチに頼んでカールスンをわしの手伝いにまわすことに決めた、といったんだ。わしは命令に従って家に帰った——睡眠をとるためにな。事件を降りたわけじゃない。ただ寝るためさ。そしたら、次の朝、犯人が逮捕されていた」彼はわたしのほうに顔を向けた。「いまのは聞かなかったことにしてくれ」
といった。
わたしは承諾のしるしにうなずき、ボビーは消えた証拠品についてさらに二、三の質問をよこしたが、どことなく熱意のない訊き方だった。とうとう彼はあきらめた。「話したくなきゃ話さんでいい。ただし、これだけは覚えとけよ、ヴィッキー。アール・シュマイセンは大物だ。法廷に引っぱり出しても有罪にできんことは、身をもって体験してるはず

だ。やっと野球しようなんて気は起こすなよ——きみの太刀打ちできる相手じゃない」

わたしはまじめな顔でうなずいた。「ありがとう、ボビー。心に留めておくわ」車のドアをあけた。

「ところで」ボビーがさりげなくいった。「昨夜、ヘイゼルクレストの〈ライリー銃砲店〉から電話があったぞ。V・I・ウォーショースキーなる人物が小型のピストルを買ったとかいう話で、店主は気をもんでおった——その女、相当に荒っぽい様子だったらしい。まさかきみの知りあいじゃあるまいな、ヴィッキー」

わたしは車を降りてドアをしめ、あいた窓から車内をのぞきこんだ。「うちの一族で、その名前で呼ばれてるのはわたし一人よ、ボビー。でも、この街にはウォーショースキーって家がほかにも何軒かあるわ」

このときだけは、ボビーは怒り出す気配を見せなかった。ひどく真剣な顔でわたしを見つめた。

「きみがいったん心を決めたら、もう誰にも止めることはできん。だがな、その拳銃を使うつもりなら、明日の朝一番に市役所までケツを運んで、登録をすませてこい。そうだ、家の修理が終わるまでどこをねぐらにするつもりか、マゴニガル部長刑事にいっといてくれ」

わたしがマゴニガルに住所を教えているあいだに、マロリーの無線がガーガー鳴って、

わたしの事務所の様子を知らせてきた。事務所も荒らされていたそうだ。休業保険は効くのだろうか。「覚えとけ、ヴィッキー、きみはプロを相手に野球をしてるんだぞ」ボビーが警告した。「乗れ、マゴニガル」二人は走り去った。

CamScannerでスキャン

9　保険金の支払請求

　ロティの家に着いたときは午後になっていた。途中で車を停めて、応答サービスに電話を入れた――ミスタ・マグロー、ミスタ・デヴローなる人物から連絡が入っていて、どちらも電話番号を残していた。小型の電話帳にそれらをメモしたが、ロティの家に着くまでは電話しないことに決めた。ロティは心配そうに頭を振って迎えてくれた。「あなたを叩きのめしただけでは満足できなくて、今度はあなたのアパートメントまで叩きのめしたのね。とんでもない連中を相手にしてしまったわね、ヴィク」しかし、そこには非難もなければ、恐怖もなかった。ロティの性格のなかで、わたしが好きな点のひとつだ。
　検眼鏡でわたしの顔と目を調べてくれた。「順調に回復してるわ。腫れもかなり引いてる。頭痛は？　少々？　それぐらいは仕方ないわ。食事はすんだ？　胃が空っぽだと頭痛がひどくなるわよ。いらっしゃい、ボイルド・チキンがすこしあるから――東欧で出される日曜日のすてきなディナー」彼女はすでに食事をすませていたが、わたしがチキンをたいらげるそばでコーヒーをつきあってくれた。これほど空腹とは、われながら意外だった。

「いつまで居候できるかしら」と、訊いてみた。
「今月は誰も泊まりにこない予定よ。八月十日まで、好きなだけ泊まってらっしゃい」
「長くて一週間よ。たぶん、もっと短くてすむと思うけど。ただね、応答サービスに頼んで、うちにかかった電話をこっちにまわしてもらうことにしたいの」
ロティは肩をすくめた。「だったら、客用ベッドの横の電話もスイッチを切らないでおくわ。うちの電話は四六時中鳴りっぱなし――妊婦が産気づいたとか、男の子が撃たれたとか。九時から五時までの診療時間なんて、誰も守ってくれないの。だから、あなたがわたしあての電話をとる恐れもあるわよ。あなたにかかってきたときは、すぐに知らせるわ」ロティは立ち上がった。
「さてと、わたしは出かけなきゃ。医者として忠告させてもらうと、おとなしくここにいて、お酒でも飲んで、気分を楽にすること。まだ本調子じゃないし、ひどいショックを受けたんだもの。わたしの専門的忠告を無視した場合、医療ミスの訴訟は受けつけませんからね」小さくくすっと笑った。「それから、鍵は流し台の横のバスケットに入ってるわ。わたしの寝室の電話の横に留守番電話がついてるから、もし外出するのなら、それをセットしていってね」彼女はわたしの顔の近くの空気にキスして、出て行った。
わたしは二、三分のあいだ、落ち着かない気分でアパートメントのなかをうろついた。事務所まで出かけて、被害額を見積もらねばならないことはわかっていた。清掃業をやっ

ている知りあいの男に電話して、アパートメントの修復にきてもらわなくてはならない。応答サービスに電話して、わたしあての電話をロティの家に転送してくれるよう頼まなくてはならない。それから、もう一度ピーター・セイヤーのアパートメントに出かけて、わたしの部屋を荒らした人物がわたしの手もとにあると思いこんでいたものが、そちらにあるかどうかを確かめる必要もある。

ロティの意見は正しかった。わたしは最高の状態ではなかった。アパートメントを破壊されたことがショックだった。わたしの心は怒りに煮えたぎっていた——痛めつけられ、反撃もかなわないときに人が抱く怒りに。スーツケースをあけて、拳銃の入った箱をとりだした。包装紙をひらき、スミス&ウェッスンを出した。弾丸をこめながら空想にふけり、何かうまい口実を設けて、シュマイセンを——いや、誰でもいい——わたしのアパートメントにもう一度呼び出し、玄関ホールに立って連中を蜂の巣にする光景を思い描いた。その空想はじつに鮮やかで、それを数回繰り返した。精神を浄化する効果があった。怒りはあらかた消え去り、応答サービスに連絡する元気が出てきた。担当者はロティの電話番号を書きとり、わたしあての電話を転送することを約束してくれた。

最後に、腰を降ろして、マグローに電話した。「もしもし、ミスタ・マグロー」彼が出たので、わたしはいった。「わたしと連絡をとろうとなさってたそうね」

「そうだ、娘の件で」どことなく落ち着きのない声だった。

「お嬢さんのことは忘れてないわ、ミスタ・マグロー。じつは手がかりをつかんだの——お嬢さんに直接関連したものじゃないけど、行方を知ってるかもしれない何人かについての手がかりを」

「どの程度探ったんだ——その連中を」彼は鋭く訊いた。

「与えられた時間内でできるかぎり詳しく。経費の請求書を水増しするために、事件を長引かせるようなまねはしてないわ」

「いや、そんなことを非難してるわけじゃない。ただ、調査はこれで打切りにしてもらいたい」

「なんですって？」わたしは信じられない気持ちでいった。「そっちから勝手に事件を持ちこんどいて、今度はアニタを見つけてほしくないっていうの？　それとも、居所がわかったの？」

「いや、居所はわからない。ただ、娘がアパートメントを飛び出したとき、こっちもいささか自制心を失っていたように思うんだ。セイヤーの息子殺しに、娘がなんらかの形で関係しているような気がしてならなかった。警察が例の麻薬常習者を逮捕してくれたんで、ようやく娘は事件に無関係だとわかったんだ」

怒りの一部がよみがえってきた。「へーえ、そうなの。天から霊感でも受けたわけ？　あのアパートメントには物を盗まれた形跡はなかったし、マッケンジーがなかにいた形跡

もないのよ。彼が殺ったなんて、わたしは信じないわ」

「ちょっと待て、ウォーショースキー、警察にまで聞き込みにまわるとはいい度胸じゃないか。ろくでなしのちんぴらがぶちこまれて、今日で二日目だぞ。やつが殺ったんでなきゃ、いまごろは釈放されてるはずだ。『わたしは信じないわ』などと、よくもぬけぬけといえたものだな」彼は無作法にわたしのまねをした。

「この前あなたと話しあったあとでね、マグロー、わたしを事件から遠ざけようと必死になってるアール・シュマイセンに暴行を受けて、アパートメントと事務所をひっかきまわされたのよ。マッケンジーが犯人なら、どうしてシュマイセンがこんなに関心を持つの？」

「アールが何をしようと、わたしのすることとは無関係だ」マグローは答えた。「わたしは娘の捜索を中止するよう頼んでるだけだ。きみを雇ったのはわたしだから、解雇する権利もある。経費については請求書を送ってくれたまえ。お望みならアパートメントの修理代も入れるがいい。しかし、調査は中止だ」

「ひどい変わりようね。金曜日には、お嬢さんのことを死ぬほど心配してたくせに。あれから何があったのかしら」

「つべこべいわずに手を引け、ウォーショースキー」マグローはどなった。「金は払うといったろう――くだらん抵抗はやめろ」

「わかりました」わたしは冷たい怒りをこめていった。「くびってわけね。請求書は郵送します。でも、ひとつだけ計算違いをしてるわよ、マグロー――アールにも伝えといて――わたしをくびにできても、追っ払うことはできないって」

わたしは電話を切った。おみごと、ヴィク。みごとな啖呵。シュマイセンはわたしを震え上がらせ、手を引かせたと信じこんでいたに違いない。なのにどうしていっぱしのタフな女気どりで、電話に向かって挑戦の言葉を叫んでしまったのか。"行動の前にまず一考"と、百回繰り返して黒板に書く必要がありそうだ。

いずれにしても、マグローはアールを知っていることを、あるいはすくなくともアールが何者かを知っていることを認めた。当てずっぽうでいってみただけなのに。もっとも、ナイフグラインダーズはシカゴのギャングの大部分を知っているから、まったくの当てずっぽうというわけでもないが。彼がアールと知りあいだといっても、わたしのアパートメントを襲うことを、あるいはピーター・セイヤーを殺すことをアールに指示したのが彼だという証拠にはならないが、わたしの手もとにあるなかではこれが一番ましなつながりだった。

ラルフの番号をダイヤルした。留守だった。さらにすこし歩きまわったが、そろそろ行動に移ろうと決めた。事件について考えても、トニーの拳銃から飛んでくる弾丸の迎撃方法に頭を悩ませていても、先へは進めない。緑色のパンツをジーンズとランニング・シュ

ーズにはきかえた。万能鍵の束をとりだして片方のポケットに入れ、車のキー、運転免許証、私立探偵許可証、五十ドルをもう一方のポケットに突っこんだ。ぶかぶかの男物のシャツの上にショルダー・ホルスターをつけて、すばやく自然にできるようになるまで、拳銃を抜く練習を繰り返した。

ロティの家を出る前に、バスルームの鏡で顔を点検した。彼女のいったとおりだ。前よりまともになっている。左半分はまだ変色したまま、正直にいうと、黄色や緑色がさらに広がっている。それでも、腫はかなり引いていた。左目は紫色の部分が以前より広がっているものの、完全にあけることができるし、充血も消えている。おかげですこし元気が出てきた。ロティの留守番電話のスイッチを入れ、ジージャンをひっかけ、ドアの鍵をきちんとかけて出かけた。

カブスがセントルイス・カージナルスとダブルヘッダーをおこなっている最中なので、アディスン通りは第一試合から帰る人々と第二試合に詰めかける人々で混みあっていた。CBSラジオをつけると、ちょうど一回裏、先頭打者のデヘスースがショートへ弾丸ライナーを打ったところだった。一塁で簡単にアウトになったが、幸いダブルプレーをとられるケースではない。

リグレー球場付近の渋滞を抜けると、あとはダウンタウンまでわずか二十分だった。日曜日なので、わたしの事務所のすぐ表に車を駐めることができた。警察はすでに引き上げ

たあとだったが、建物に入ろうとするとパトロール警官が近づいてきた。

「ここにどういうご用でしょう、お嬢さん」警官は訊い、しかし不快ではない訊き方をした。

「わたしはV・I・ウォーショースキー。今朝早く泥棒に入られた事務所の持主よ。被害状況を調べようと思ってきたの」

「身分証明になるものを見せてくれますか」

わたしは運転免許証と、私立探偵の写真入り許可証をとりだした。警官はそれらを調べて、うなずき、返してくれた。「結構です、上がってください。マロリー警部補から、ここをしっかり見張って、ビルのテナント以外はなかへ入れないようにと命令されてるんです。たぶんあなたがいらっしゃるだろうとのことでした」

彼に礼をいってなかに入った。珍しくもエレベーターがまともに動いていたので、階段をやめてそちらを使った——シェイプアップはいずれ、これほどひどい気分でないときに。

事務所のドアはしまっていたが、上半分のガラスが粉々に割られていた。しかし、なかに入ってみると、被害はアパートメントほどひどくなかった。もちろん、書類は手当たり次第床に投げ出されていたが、机や椅子は無事だった。ぜったい破られない金庫なんて、この世に存在しない。大型金庫の奥にある小さな金庫も、何者かの手で破られていた。しかし、すくなくとも五時間はかかったに違いない。わたしのアパートメントに着いたとき、

連中が怒り狂っていたのも無理はない——努力がすべて無に帰したのだから。幸運にも、そのとき金庫のなかには現金も極秘書類も入っていなかったのだ。

散らばった書類は放っておくことにした。明日、ケリー・ガール（人材派遣会社）に頼んで、もう一度全部ファイルしなおしてもらおう。しかし、ドアだけは修繕屋に電話しておいたほうがいい。でないと、泥棒たちのいい餌食にされてしまう。ガブリエラのグラスをすでに一個失っているのだ。オリヴェッティに同じ運命をたどられてはたまらない。二十四時間営業の店に電話して、人をよこしてもらうことに決めて、階下に降りた。わたしのしたことを話すと、パトロール警官はあまりいい顔をしなかったが、ようやく、警部補の了解を求めることに同意した。わたしは彼を電話のそばに残して、さらにサウス・サイドへ車を走らせた。

気候は相変わらず明るくさわやかで、わたしは心地よく南へ走り続けた。湖の水平線に点々とヨットが浮かんでいる。岸辺近くには泳いでいる者も何人かいる。野球は三回の裏に入り、キングマンが三振したところだった。二対〇でカージナルスのリード。カブスもこのところ調子が悪い。正直いって、わたしより落ちこんでいるようだ。

セイヤーのアパートメントの裏にあるショッピング・センターの駐車場に車を停め、ふたたび建物に入って行った。チキンの骨は消えていたが、小便の臭いは残っていた。建物に入る権利を問いただす人間は一人もあらわれず、三階のアパートメントをあける鍵もわ

けなく見つかった。

修羅場にぶつかることは覚悟しておくべきだったのに、わたしは驚きのあまり立ちすくんでしまった。前回きたときに目にしたのは、学生のアパートメントにつきものの乱雑さだけだった。ところがいまは、わたしのところを襲ったのと同じ単数または複数の手が、すでに似たような仕事を終えたあとだった。わたしは首を振って頭をすっきりさせようとした。当然のことだ。連中は何かがなくなっているのに気づいて、真先にここにきたのだ。わたしのところにきたのは、ここで何も見つけることができなかったそのあとなのだ。わたしは低い口笛で《シモン・ボッカネグラ》第三幕の最初の数小節を吹きながら、どうすべきか決めようとした。なくなったものはなんだろうと考え、紙片のたぐいである可能性が一番大きいと思った。詐欺の証拠品か写真かもしれないが、具体的な品物ではなさそうだ。

それがアパートメントに残っている可能性はあまりないような気がした。セイヤーの息子はそれをアニタに預けたのではないだろうか。アニタの手もとにあるのなら、彼女はこれまでに予想されたよりさらに大きな危険にさらされていることになる。わたしは頭をかいた。シュマイセンの手下どもは思いつくかぎりの場所を捜しまわったようだ。ソファのクッションは引き裂かれ、書類や本は床に投げ出されている。どの本も連中が一ページずつ念入りに調べたはずだと信じることに決めた。いまからアパートメントを捜索して何も

見つからなかったら、本に目を通すことにしよう。数百冊の本がある学生のアパートメントで一冊ずつ細かく調べていたら、時間を食って仕方がない。被害を免れているのは器具類と床だけだった。ぐらぐらするはめ板やタイルはないかと、すべての部屋を順々に捜してみた。そうした場所が二、三カ所あったので、台所の流しの下で見つけた金づちを使ってはがしてみたが、白蟻の古い被害以上に興味のあるものは出てこなかった。次は浴室の設備を片っ端から調べてまわり、シャワー・カーテンの棒を降ろしてなかをのぞきこみ、便器や洗面台のパイプ類にも目を通した。面倒な仕事だった。道具をとりに車までもどり、水を止めるために地下室に忍びこまなくてはならなかった。錆びた金具をゆるめてあけられるようにするのに、一時間以上かかってしまった。なかに水しかないことがわかっても、驚かなかった。誰かがそこを隠し場所にしたのなら、もっと楽にあいたはずだ。

時刻は六時半、台所にもどったときは夕日が沈みはじめていた。ピーター・セイヤーがすわっていた椅子はあのとき、ガスレンジに背を向けていた。失われた品が故意に隠されたのではなく、偶然落ちたものだという可能性も充分にある。紙きれ一枚なら、知らないうちにガスレンジの下にすべりこんでいるかもしれない。腹ばいになって、懐中電灯でレンジの下を照らしてみた。何も見えなかったし、隙間はあまりにも小さかった。どこまで徹底的にやろうというのか。筋肉がうずいていて、しかもフェニルブタゾンはロティの家に置いたままだ。だが、わたしは居間へ行き、レンガと板でできた本棚からレンガを何個

かとってきた。車のトランクから出したジャッキを梃子に、レンガを楔にして、ガスレンジを床からゆっくり押し上げようとした。これは至難の業だった。ジャッキは物体をとらえて押し上げるが、レンガを蹴って脇から入れようとすると、とたんにすべって落ちてしまう。最後に、テーブルを引っぱってきてその下でジャッキを固定させたおかげで、ようやく、右側へレンガを押しこむのに成功した。そのあと、左側はもっと簡単に上がった。ガス管が無理に引っぱられていないことを確かめてから、レンガをもう一個使って慎重にガスレンジを持ち上げた。それからふたたび腹ばいになり、下をのぞきこんだ。あった！一枚の紙が油にべっとり汚れてガスレンジの底に貼りついていた。破れないようにゆっくりはがして、窓辺へ持って行き、調べてみた。

それは約八インチ四方のカーボン・コピーだった。左上にエイジジャックスのロゴが入っている。真ん中に〝銀行渡り。譲渡できません〟と書かれ、イリノイ州マティスン、サウス・イングルサイド一三二七のジョゼフ・ギエルチョフスキーあてに振り出されている。この男がこれを銀行に持って行って、本物であるとの確認を受ければ、その時点でエイジャックスから銀行に対し、労災保険の支払金として二百五十ドルが振りこまれるわけだ。

男の名前にはなんの心当たりもないし、振り出された手形には怪しげな点は何ひとつなさそうだ。この紙きれのどこがそんなに重要なのだろう。ラルフならわかるかもしれないが、ここから電話する気にはなれなかった。ガスレンジを降ろして、無事に帰れるうちに帰っ

CamScannerでスキャン

たほうがいい。

もう一度テーブルを楔にしてガスレンジを押し上げ、レンガをどけた。ガスレンジはずしんと鈍い音を響かせて床に落ちた。わたしは階下の連中が留守にしているか、または警察を呼ぶ気も起こさないぐらい他人に無関心であるよう願った。道具をかき集め、保険金支払手形をたたんでシャツのポケットに入れて、部屋を出た。二階を通るさいにドアがひとつ細めにあいた。「三階は今夜一晩水が出ませんので」ドアが元どおりにしまり、わたしは急いで建物を離れた。

車にもどると、試合はとっくに終わったあとで、結果を知るには八時のニュースが始まるまで待たなくてはならなかった。カブスは八回に逆転していた。いとしのジェリー・マーティンが二塁打をかっとばし、次のスティーヴ・オンティヴェロスがシングル・ヒット、そして、すばらしきデイヴ・キングマンの三十二号ホーマーで、三人全部がホームインしたのだ。しかも、これがすべてツーアウトから。今夜のカブスがどんな気分かわたしにはよくわかり、それをあらわすために、帰る道々《フィガロの結婚》をすこしばかり口ずさんだ。

CamScannerでスキャン

10 うるわしき一族

わたしが居間に入って行くと、ロティは濃い眉を上げた。「おや」といった。「歩き方に〝成功〟って書いてある。事務所のほう、無事だったの？」

「ううん、でも、連中の捜してたものが見つかったの」わたしは手形を出して、彼女に見せた。「何かわかる？」

彼女は眼鏡をかけ、唇をすぼめて、熱心にそれを見た。「こういう手形ならときどき見るわ。職場の事故で怪我した患者を治療すると、これが支払いに使われるから。わたしの見たかぎりじゃ、おかしな点はなさそうよ――もちろん、いつもは内容なんか読まずにざっと目を通して、そのまま銀行にまわしてしまうけど。それから、ギエルチョフスキーって名前にも心当たりはないわね。わかるのはポーランド系の名前ってことだけ。怪しい点でもあるの？」

わたしは肩をすくめた。「わからない。わたしにも心当たりなしよ。一応コピーをとって、しまっといたほうがよさそうね。夕食はすんだ？」

「ずっと待ってたのよ、あなたを」
「だったら、外へ食べに行きましょうよ。頼むからそうさせて。だって、これを見つけるのが重労働だったんだもの、肉体的な意味でね。頭を働かせたことも役に立ったけど。大学で論理学を教わってるときとは、ぜんぜん違うやり方だった」
ロティは外食に賛成した。わたしはシャワーを浴びて、仕立てのいいパンツにはきかえた。ドレッシーなシャツとゆったりしたジャケットで装いを完璧に仕上げ、ショルダー・ホルスターを左腕の下にぴったりと収めた。保険金支払手形はジャケットのポケットに入れた。
居間にもどると、ロティがわたしをやけにじろじろ見つめた。「うまく隠したわねえ、ヴィク」怪訝な顔のわたしを見て、彼女は笑い出した。「あなた、台所のごみバケツに空箱を捨てたでしょ。わたしはスミス&ウェッスンをこの家に持ちこんだ覚えなんかないもの。じゃ、出かけましょうか」
わたしも笑い出したが、何もいわなかった。ロティの運転でベルモント・アヴェニューとシェリダン・ロードの交差点まで出て、チェスタトン・ホテルのワイン・セラーであっさりしたおいしいディナーをとった。ここはもともとオーストリア産ワインの貯蔵庫だったのが、拡張されて小さなレストランを置くまでになったのだ。ロティはここのコーヒーがお気に入りで、バターたっぷりのウィンナ・ペストリーを二個食べた。

家にもどったとき、わたしは表と裏の入口を点検すべきだと強硬に主張したが、人の忍びこんだ形跡はなかった。中に入って、友達の清掃業者ラリー・アンダースンに電話をかけ、わたしのアパートメントの修復にきてもらう交渉をした。明日はだめだね——でかい仕事が入ってるから。いいってことよ、喜んでやらせてもらう。けど、火曜日には、腕利きのチームを連れてじきじきに行ってやるよ。いいってことよ、喜んでやらせてもらう。次にラルフに電話して、明日の晩〈エイハブ〉で夕食をつきあうことを承知した。「顔のほうはどう？」彼が訊いた。

「順調に回復中よ。明日の晩はあなたのために、どこへ出しても恥ずかしくない顔にしていくわ」

十一時、眠くてたまらない声でロティにおやすみをいって、ベッドに倒れこんだ。たちまち眠りが訪れ、ブラック・ホールを通って完全な忘却のなかへ落ちていった。かなりたってから夢を見はじめた。赤いヴェネチアン・グラスが母のダイニング・テーブルに一列に並んでいる。「じゃあ、高音部のドを出して、ヴィッキー、そのまま響かせて」と、母がいった。わたしは死にもの狂いでその音を長々と響かせた。恐怖を浮かべた目の前で、一列に並んだグラスが溶けて赤い水たまりに変わっていった。それは母の血だった。死にもの狂いで眠りから這い出した。電話のベルが鳴っていた。

見慣れぬベッドのなかでようやく自分のいる場所を思い出したときには、すでにロティが彼女の電話をとっていた。受話器を耳に当てると、「はい、ドクター・ハーシェルで

す」という、てきぱきした、人の心をなごませる彼女の声が聞こえてきた。わたしは受話器をもどして、ベッドの横にある夜光時計の小さな文字盤に目を細めた。五時十三分。気の毒なロティ、なんて人生だろうと思いつつ、寝返りを打ってふたたび眠りこんだ。

何時間かあとに、うるさい電話のベルがまたしてもわたしを人生へ引きずりもどした。前回の電話をぼんやり思い出し、ロティはもうもどってきただろうかと思いながら、受話器に手を伸ばした。

「もしもし」というと、もう一方の電話にロティの声がした。ふたたび切ろうとしたそのとき、震えるような、か細い声が聞こえてきた。「ミス・ウォーショースキーはいらっしゃいますか」

「ええ、わたしです。どういうご用件でしょう」ロティが受話器をもどすカチリという音が聞こえた。

「あたし、ジル・セイヤーです」か細い声は震えながらも、落ち着いてしゃべろうと努力していた。「あたしの家まできてもらえません？　お願い」

「いますぐ？」わたしは訊いた。

「はい」少女は小声でいった。

「わかったわ、ハニー。すぐ行くわね。何があったのか、それだけ話してくれない？」わたしは右肩と耳で受話器をはさみ、服を着はじめた。時刻は七時三十分、ロティの麻布の

カーテンから日が射しこんでくるおかげで、スタンドのスイッチを手探りしなくても着換えることができた。

「じつは――あの、いまは話せないんです。母が呼んでるから。お願い、きてください」

「オーケイ、ジル。気を確かに持つのよ。四十分でそっちへ行くからね」電話を切り、昨夜着ていたものを、左肩の下の拳銃も省略することなく、そのまま急いで身に着けた。台所に寄ると、ロティがトーストを食べ、お決まりの濃いウィンナ・コーヒーを飲んでいるところだった。

「あらら」ロティはいった。「本日第二の緊急事態発生ってわけね。わたしのほうは、うちにくるのが怖いものだから、怪しげなとこで中絶をやって出血が止まらなくなってしまったバカな子供だったわ」顔をしかめた。「おまけに、母親は当然だけど何も気づいてなかった。で、あなたのほうは？」

「ウィネッカまで遠征。こっちも子供だけど、いい子よ。バカじゃないわ」ロティは《サン・タイムズ》を広げていた。「セイヤー一家のことで、新しい記事でも出てない？　あの子、ひどくおびえた声だったの」

ロティがカップにコーヒーを注いでくれた。わたしはそれをごくっと飲んで舌をやけどしそうになりながら、新聞に目を走らせたが、何も見つからなかった。肩をすくめ、バターを塗ったトーストを一枚ロティから受けとると、彼女の頬にキスして飛び出した。

持ち前の用心深さから、通りへ出る前に階段の吹抜けと正面の舗道を念入りにチェックした。車に乗る前には、不届きな細工はされていないかと、うしろの座席とエンジンを調べさえした。シュマイセンのおかげですっかりビビっている。

ケネディ高速は月曜の朝のラッシュ・アワーと、田舎で週末を過ごしてぎりぎりの時刻によろめきながら帰宅する連中のせいで、ぎっしり混みあっていた。しかし、イーデンズ高速の郊外行き車線に入ってからは、道路をほとんど独占することができた。わたしがジル・セイヤーに名刺を渡したのは、SOSを予想してというよりもむしろ、彼女を気にかけている人間がいることを伝えたかったためで、わたしは心のなかの、スピード監視所を捜していないほうの半分で、ジルが助けを求めてきたのはなぜだろうと考えた。人の死など見たことのない、郊外で暮らすティーンエイジャーは、死と結びつくすべてのことに過剰反応するのかもしれない。だが、わたしの受けた印象では、本質的に分別のある子のようだ。ひょっとすると、父親が怒り狂っているのではあるまいか。

ロティの家を出たのが七時四十二分、ウィロー・ロードに入ったのが八時三分。途中の三マイルがアディスン通りでひどい渋滞にひっかかっていたことを思えば、十五マイルとしてはなかなかの好タイムだ。八時九分に、セイヤー邸の門の前に車を停めた。わたしが近づけたのはそこまでだった。何が起きたのか知らないが、邸内はごった返していた。入口はライトを点滅させたウィネッカのパトカーにふさがれ、庭をのぞくと、見渡せるかぎ

CamScannerでスキャン

りの場所にさらに多くの車と大勢の警官があふれている。わたしはシェヴィをバックさせて道路をすこし引き返し、砂利道のへりに車を駐めた。エンジンを止め、車から降りたとき初めて、土曜日に庭に駐まっていたぴかぴかの黒のメルセデスが目に入った。ただし、いまは庭に駐まっているのではなく、道のはずれに妙な角度で傾いている。おまけに、もはやぴかぴかでもない。前のタイヤはパンクし、フロントウィンドーは一面にひび割れて、放射状の輪のなかにいくつもの破片がひっかかっている。弾丸が、それも数多くの弾丸がこの惨状を引き起こしたのだろう。

わたしの近所だったら、騒がしい野次馬連中が集まってきて、口をぽかんとあけてこの光景に見とれるに決まっている。こちらはさすがノース・ショアだけあって、野次馬が集まっても、ホールステッドとベルモントの交差点にできるであろう人だかりより数はすくなく、静かだった。口髭を生やした痩せぎすの若い警官が、野次馬を車に近づけないよう番をしていた。

「大変、ミスタ・セイヤーの車が襲われたのね」わたしは若い警官に近づいて、話しかけた。

凶悪事件が発生すると、警察はすべてのニュースを自分たちだけの秘密にしておきたがる。何が起きたかぜったいに教えてくれないし、誘導尋問にも答えようとしない。ウィネッカの警官たちも例外ではなかった。「なんの用です」若い警官はうさんくさそうにいっ

た。

わたしは正直に答えようとしたが、それでは車道に群がる警官たちをかき分けて進むことはできないと気づいた。「わたし、V・I・ウォーショースキーといいます」聖女のように見えることを願いつつ、笑顔でいった。「以前、ミス・ジル・セイヤーの家庭教師をしていた者です。今朝トラブルが起きたときに、ジルから電話があって、こちらへきてそばにいてほしいと頼まれたんです」

若い警官は眉をひそめた。「身分証明書を何かお持ちですか」と訊いた。

「もちろん」わたしは当然だというように答えた。わたしの話を裏づけるのに、運転免許証がなんの役に立つのだろうと不思議に思ったが、素直にそれをとりだして彼に渡した。

「いいでしょう」番号を暗記できるぐらい長い時間しつこく見たあとで、ようやく警官はいった。「部長刑事に話してください」

彼はわたしを門のそばまで連れて行くあいだだけ、持ち場を離れた。「部長刑事(サージ)！」と叫んだ。玄関の横にいた男たちの一人が顔を上げた。「セイヤーの娘の家庭教師です！」

警官は口でメガフォンを作ってどなった。

「どうもありがと、おまわりさん」わたしはミス・ジーン・ブロディ（映画「ミス・ブロディの青春」の女性教師）をまねていった。車道を歩いて玄関の前まで行き、部長刑事にさっきの話を繰り返した。

今度は彼が眉をひそめた。「家庭教師がくるなどという話は聞かされてないが。いまは

誰も入れるわけにいかんのだ。あんた、まさかブン屋さんじゃないだろうね」

「とんでもない！」わたしはきっぱりいった。「ねえ、部長刑事さん」わたしだって友好的になれることを示すために、軽く笑いながらいった。「ジル・セイヤーに玄関まで出てきてもらったらどうかしら。本人の口から、わたしに用があるのかないのか聞いてください。ジルがノーといえば、わたしはこのまま帰ります。でも、ジルがわたしを呼んだのは事実ですからね、わたしがお邸へ入れてもらえなかったら、気を悪くするでしょうねえ」

たとえジルのごとき幼い者であっても、セイヤー家の一員が気を悪くすることは、部長刑事にとって不安の種となるらしかった。彼が呼鈴を押してルーシーを呼ぶのではないかとわたしはひやひやしたが、そうする代わりに、部下の一人にジル・セイヤーを連れてくるよう命じた。

ジルがあらわれないまま数分が過ぎ、わたしは、結局はルーシーがわたしの姿を見て、家庭教師の話の嘘を警察にばらしたのではないかと思いはじめた。しかし、ようやくジルがやってきた。卵形の顔は引きつり、不安そうで、茶色の髪にはブラシもかかっていない。わたしを見たとき、その顔がかすかに明るくなった。「わあ、きてくれたのね！」といった。「家庭教師がきてるっていわれて、お年寄りのミセス・ウィルキンズだと思ったの」

「この人、おたくの家庭教師じゃないんですか」パトロール警官が詰問した。

ジルは困惑の表情をわたしに向けた。わたしは邸内に入った。「あなたがわたしを呼ん

だってことだけ、この人にいってちょうだい」

「あの、そう、そうなの、あたしが呼んだの。一時間前にミス・ウォーショースキーに電話して、きてくださいって頼んだの」

パトロール警官は疑わしそうにわたしを見たが、わたしはすでに邸に入っていたし、権力あるセイヤー家の一員がわたしにいてもらいたがっているのだ。彼は、名前の綴りを一字また一字とばか丁寧にいわせてそれを手帳に書きこむことで、ようやく妥協した。わたしが綴りをいっているそばでジルはわたしの腕を引っぱり、わたしは書取りが終わるやいなや、警官からそれ以上質問が出ないうちにジルを軽く叩いてホールのほうへ急がせた。

ジルは大きな緑色の彫像のそばの部屋へわたしを招き入れて、ドアをしめた。

「あたしの家庭教師だっていったの？」彼女はまだその理由を知ろうとしていた。

「本当のことを話したら、なかに入れてもらえないと思ってね」わたしは説明した。「警官は私立探偵に縄張りを荒らされるのが嫌いなのよ。さあ、何があったのか話してちょうだい」

ふたたび暗い表情になった。ジルは顔をゆがめた。「表の車、見た？」わたしはうなずいた。「パパが――あれ、パパだったの、撃たれたの」

「犯行を目撃したの？」

ジルは首を横に振り、鼻と頬を手でこすった。涙が不意に頬を伝った。「銃声を聞いた

の」泣きくずれた。

この小部屋には、中型のソファと、雑誌を何冊かのせたテーブルがあった。南側の芝生を見渡す窓の両側には、頑丈な肘掛けのついた椅子が一脚ずつ置かれている。わたしは椅子をテーブルまで引きずってきて、一方にジルをすわらせた。もう一方には、わたしが彼女と向かいあう形ですわった。「辛い思いをさせて悪いんだけど、できたら、事件が起きたときの様子を話してもらえないかしら。急ぐ必要はないし、泣いたってかまわないのよ」

小さなすすり泣きのなかで、話は始まった。「パパが仕事に出かけるのはいつも——いつも、七時から七時半のあいだなの。もっと早いこともあるわ。銀行で何か特別な——特別なことが——あったりするとね。パパが出てくとき、あたしはたいがい寝てるの。パパの朝食はルーシーがこしらえる——いえ、こしらえてたわ。それからあたしが起きてくと、ルーシーがまた朝食を作るの、ママは自分の部屋でトーストとコーヒーなの。ママは——ママはいつも——ダイエットしてるから」

わたしはこうした細々した事柄はもちろん、ジルがそれを語る理由も理解していることを示すために、うなずいてみせた。「だけど今日は、あなた、寝てなかったのね」

「そう」ジルはうなずいた。「ピートのことでごたごたしてて——昨日、兄さんのお葬式だったでしょ、とっても辛くて、ゆうべはあんまり——あんまり眠れなかったの」泣くの

をやめ、声の高ぶりを抑えようと努力していた。「パパの起きるのが聞こえたけど、あたし降りてって一緒に食事しようなんて思わなかった。だって、このごろ、パパはすごく変だったし、パパの口からまたピートの悪口を聞かされるかと思うと、たまんなかったから」突然、彼女は泣き出した。「あたし、どうしてもパパと一緒に食べようとしなかった。パパが死んじゃったから、二度とそんなことできない」その言葉はすすり泣きの合間合間に堰を切ったようにあふれ出た。同じ言葉を何度も繰り返した。

わたしはジルの手をとった。「ええ、わかるわ、辛いでしょうね、ジル。でも、あなたが一緒に食事しなかったから、お父さんが死んじゃったわけじゃないのよ、わかるわね」彼女の両手を軽く叩いたが、しばらくは何もいわないことにした。すすり泣きが幾分おさまったところで、わたしはいった。「何があったのか話してね、ハニー、それから答えを考えてみましょう」

ジルは気を落ち着けようと懸命に努力してから、話しはじめた。「あとは話すことなんて、たいしてないけど。あたしの寝室はこの真上にあって、家の横手がよく見えるの。あたし、なんとなく、そのう——なんとなく窓のところまで行って、パパを見てたの。パパが車を運転して出ていくのを見てたの」彼女は涙をこらえるために言葉を切ったが、取り乱しはしなかった。「生け垣がこんもりしてるから道路は見えないし、どっちにしても、あたしの部屋からだと庭の端まで見渡すのは無理なんだけど、車の音から、パパがシェリダ

ン・ロードに曲がったのがわかったわ」わたしはジルの両手をしっかり握りしめたまま、励ますようにうなずいた。「それで、ベッドにもどりかけて、着換えたほうがいいかななんて思ってたとき、すごい銃声が聞こえたの。でも、そのときはあたし――あたし、なんの音だかわからなかった」ジルは新たにあふれ出た二筋の涙を、そっと拭った。「ぞっとするような音だった。ガラスの砕けるのが聞こえたと思ったら、次はキキーってすごい音。ほら、カーブを猛スピードで曲がったりするときに、車が立てるあの音よ。だから、あたしパパが事故を起こしたのかもって思った。わかるでしょ、パパはすごく変だったもの。シェリダンを飛ばして、誰かをはねたのかもしれないって思ったわ。

それで、寝間着のままで階段を駆け降りたら、家の奥からルーシーが走ってきたの。何かわめいて、あたしを二階に押しもどして着換えさせようとしたけど、あたしはとにかく外に出て、車道を走ってって、車を見つけたの」ジルは顔をゆがめ、目を閉じて、ふたたび涙をこらえようとした。「ひどかった。パパが――パパが血を流して、ハンドルにおおいかぶさってた」頭を振った。「あたし、そのときもまだ、パパは事故にあったんだと思ってたけど、パパ以外の車は一台も見当たらなかった。たぶん逃げたんだ、キキーってタイヤの音がそうだったんだって思ったわ。だけど、ルーシーは射殺だって気づいたみたい。とにかく、どうしてもあたしを車のそばへ行かせてくれなかった――あたし、靴もはいてなかったし、そのころにはすごくたくさんの車が停まって、パパの車を見てた。でね、彼

女が――ルーシーが、そのなかの一人に頼んで、その人の携帯無線機で警察に連絡してもらったの。ルーシーがあたしを家に連れもどそうとしたけど、あたし、帰らなかった。警察がくるまでは」ジルは鼻をすすった。「パパをあんなとこに一人にしておきたくなかった。わかるでしょ」

「ええ、もちろんよ、ハニー。あなた、とてもよくやったわ。お母さんは出てらした？」

「ううん、警察がきてから、あたしたち家にもどって、あたしは着換えをしようと思って二階に上がったの。あなたのことを思い出して、電話したの。でも、ほら、あわてて切っちゃったでしょ」わたしはうなずいた。「じつはね、ルーシーがママを起こしに行って、パパのこと話したの。そしたら、ママは――ママは泣き出して、ルーシーにあたしを呼びにこさせたの。ちょうどあのときルーシーが入ってきたんで、仕方なく電話を切ったのよ」

「じゃあ、あなた、お父さんを殺した犯人の姿は見てないのね？」ジルは首を振った。

「警察では、走り去る音をあなたが聞いたその車に、犯人が乗ってたと考えてるの？」

「ええ、薬莢がどうとかって話だった。薬莢だかなんだか、そういうのがひとつも残ってなかったんで、車から撃ったに違いないって考えたようよ」

わたしはうなずいた。「筋が通ってるわね。大事な質問をするわよ、ジル。それじゃ、わたしを呼んだのは慰めと支えがほしかったから？――もちろん、喜んで力になるけど――

―それとも、わたしに何かやってほしいから？」
ジルはその年齢にしてはあまりに多くのことを見聞きしすぎた灰色の目で、わたしをじっと見つめた。「どんなことができるの？」と訊いた。
「お父さんとお兄さんを殺した犯人を見つけるために、わたしを雇うこともできるわよ」
わたしは事務的にいった。
「お金がないわ。持ってるのはお小遣だけ。二十一になったら信託基金の一部がもらえるけど、いまはまだ十四だもの」
わたしは笑った。「心配しないで。わたしを雇いたいなら、一ドルちょうだい。そしたら、あなたに領収書を渡して、それで契約成立よ。でも、お母さんにはちゃんとそのことを話してね」
「あたしのお金、二階なの」といって、ジルは立ち上がった。「パパを殺した犯人は、ピートのときと同じだと思う？」
「可能性はあるわね。もっとも、決め手になる事実はまだひとつもつかんでないけど」
「その犯人、もしかしたら――あのう、誰かがうちの家族を皆殺しにしようとしてるんじゃないかしら」
それについて考えてみた。ばかばかしいの一言で片づけられる意見ではないが、皆殺しにしてはあまりに芝居がかっているし、進展が遅すぎる。「賛成できないわね」ようやく、

わたしはいった。「あり得ないわけじゃないけど――でも、犯人がそのつもりなら、どうして、昨日あなたたち全員が同じ車に乗ってたときに狙わなかったの？」

「あたし、お金とってくる」ジルはそういって、ドアに向かった。彼女がドアをあけると、ホールの向こうからルーシーがやってきた。「まあ、こんなとこにいらしたんですか」と、とげとげしくいった。「よくもこんなふうに雲隠れできるものですね。お母さまがお呼びだというのに」部屋をのぞきこんだ。「ええっ、あの女探偵、ここまで上がりこんだんですか！　ちょっと、あんた」わたしに詰め寄った。「出てってよ！　わざわざあんたがかき回さなくたって、このお邸はいま、たいへんな騒ぎなんだから」

「待って、ルーシー」ジルがひどく大人びた口調でいった。「ミス・ウォーショースキーがここへいらしたのはあたしがお呼びしたからだし、帰っていただくときは、あたしからそうお願いするわ」

「さよですか。その件についてはお母さまから一言いっていただきましょう」ルーシーはかみつくようにいった。

「ママにはあたしから話すわ」ジルはどなり返した。「ここで待っててください。お金をとってきますから」と、わたしに向かっていい添えた。「そのあとで、一緒にママに会いにきてくれません？　あたし一人じゃ、うまく説明できそうにないから」

「喜んで」わたしは礼儀正しく答え、励ましの笑顔を送った。

みんなが出て行くと、ルーシーがいった。「これだけはいえるね——セイヤーさまが生きてらしたら、あんたなんか入れちゃくださらないし、あんたを見たらきっとおっしゃるだろうよ——」

「あら、それができないことは、おたがい、よくわかってるじゃない」わたしは彼女の言葉をさえぎった。「だけど、わたしにでも、他の人にでもいいから、ミスタ・セイヤーが胸の内を明かしてくれてれば、今朝だって無事に生きてられたでしょうね。

よく聞いて。わたしはジルが好きで、彼女の力になりたいと思ってるの。今朝ジルがうちに電話してきたのは、私立探偵としてのわたしに何かしてもらおうなんてつもりじゃなくて、わたしなら味方になってくれると思ったからよ。あの子、家のなかでほったらかしにされてると思わない？」

ルーシーはむっとした表情でわたしを見た。「そりゃまあね、探偵さん、そうかもしれないよ。けど、お嬢さまにすこしでも奥さまへの思いやりってものがあれば、ちっとは思いやりが返ってくると思うけどね」

「なるほど」わたしは冷たくいった。ジルが降りてきた。

「お母さまがお待ちです」厳しい声でルーシーがせき立てた。

「わかってるわよ！」ジルはわめいた。「いま行くわ」彼女はわたしに一ドル差し出し、わたしはバッグから出した紙にまじめな顔で受けとりを書いた。ルーシーは唇をきっと結

び、腹立たしげに一部始終を見ていた。それからわたしたちは長い廊下を通って、土曜日にわたしが進んだ順路をふたたびたどった。図書室のドアの前を過ぎて、邸の一番奥にたどり着いた。

ルーシーが左手の部屋のドアをあけて、いった。「お嬢さまをお連れしました、奥さま。お嬢さまからお金を巻き上げようとしている、図々しい探偵も一緒です。土曜日に旦那さまにお邸から追い払われたくせして、また押しかけてきたんです」

ドアの横に立っていたパトロール警官が、ぎょっとした顔でわたしを見た。

「ルーシー！」ジルがかみついた。「嘘だわ」彼女は不服そうな女の脇をすり抜けて、部屋に入った。わたしはルーシーのうしろに立ったまま、彼女の肩越しに室内をながめた。そこは三方が窓になっている、豪勢な部屋だった。東には湖が、北には芝のテニスコートを備えたみごとな芝生が広がっている。白い竹製の家具がそろえられ、クッション、ランプの台座、敷物などの赤や黄色が華やいだアクセントを添えている。ふんだんに飾られた観葉植物が温室のような雰囲気を生み出していた。

この魅惑的な舞台装置の中心にいるのが、セイヤー夫人だった。化粧っ気なしで涙のあとが幾筋か残っていてさえ、たいへんな美人で、昨日の《ヘラルド・スター》に出ていた写真の実物であることが容易に見てとれた。ジルをもうすこし大人っぽくした感じのとてもきれいな若い女性が、夫人の身を気づかうようにその横に腰を降ろし、ポロシャツにチ

ックのズボンというスタイルのハンサムな若い男性が、やや居心地の悪そうな顔で、反対側に腰かけていた。

「お願い、ジル、あなたやルーシーが何をいってるのか、ママにはさっぱりわからないけど、わめき立てるのはやめてちょうだい、ダーリン、神経に響いて耐えられないから」

わたしはルーシーの横をすり抜けて部屋に入り、セイヤー夫人のカウチに近づいた。

「ミセス・セイヤー、このたびのご主人とご子息のこと、心からお悔やみを申し上げます」といった。「わたし、V・I・ウォーショースキーと申します。私立探偵です。今朝、お嬢さんから電話をもらい、こちらへきて、わたしで力になれることがあるかどうか確かめてほしいと頼まれたんです」

若い男性が顎を突き出して答えた。「ぼくはミセス・セイヤーの義理の息子だ。義父(ちち)が土曜日にきみをこの家からつまみ出したのなら、ここにはきみの用事はなさそうだといっても差し支えないと思うが」

「ジル、あなたがこの人を呼んだの？」若い女性はショックを受けた様子で訊いた。

「ええ、そうよ」ジルは答えて、意地っぱりな表情で顎にしわを寄せた。「それから、あなたにこの人をつまみ出す権利なんかないわ、ジャック。あなたの家じゃないんだもの。この人にはあたしが頼んできてもらったんだし、パパとピートを殺した犯人を見つける仕事もお願いしたの。この人の意見では、両方とも同じ犯人だそうよ」

「あきれた子ね、ジル」女性がいった。「事件のことは警察にまかせとけばいいのよ。何も雇われ探偵なんか連れこんで、お母さまをおろおろさせなくたっていいじゃない」

「わたしもそう申し上げようとしたんでございますよ、ミセス・ソーンデイル、なのに、お嬢さまったら聞こうともなさらない」そういったのは、勝ち誇ったルーシー。

ジルの顔がふたたびゆがんで、いまにも泣き出しそうになった。「気にしちゃだめよ、ハニー」わたしはいった。「みんな、すでにかなり興奮してるようだから、これ以上刺激するのはやめましょうね。誰が誰だか教えてくれない？」

「ごめんなさい」ジルは涙をこらえた。「こちらから、あたしの母、姉のスーザン・ソーンデイル、姉の夫ジャック。ジャックはスーザンにいばり散らしてるものだから、あたしにも同じようにできると思ってるの。だけど——」

「落ち着いて、ジル」わたしは少女の肩に手をかけた。

スーザンの顔がうっすら赤く染まった。「ジル、小さいときから甘やかされて、だめな子になってなきゃ、あなただって、自分よりずっと人生経験豊富なジャックのような人に、すこしは尊敬の念を示すはずだわ。パパのこととか、パパが殺された様子やなんかについて、世間の人がどんな噂をするか、あなた、わかってるの？　あれじゃ、あれじゃまるでギャングの殺しじゃない。パパがギャングの仲間だったみたいに思われるじゃない」最後のところで、声が甲高くうわずった。

「マフィアよ」わたしはいった。スーザンは怪訝な顔でわたしを見た。「〝まるでマフィアの殺しだ〟っていうべきよ。ギャングのなかにもそういう処刑方法をとる者はいるでしょうけど、ふつうはそこまでの資金や手段を備えてないわ」

「おい、きみ」ジャックが腹立たしげにいった。「帰るように頼んだはずだぞ。小生意気な言いぐさを並べ立てるかわりに、帰ったらどうなんだ！　スーザンのいったように、ミスタ・セイヤーが殺された状況をうまく説明するだけでも、この先ひと苦労なんだ。その上、私立探偵がしゃしゃり出てきた理由まで説明させられるんじゃたまらないね」

「あなたたち、そんなことしか気にしてないの？」ジルが叫んだ。「世間が何をいうかですって？　ピートが死んで、パパも死んじゃったっていうのに」

「ピーターが撃たれたことを一番悲しんでるのは、このぼくだよ」ジャックがいった。「だけどね、あのあばずれ女とあんな貧民街のぼろ家に住むかわりに、お義父さんのいうことを聞いてちゃんとしたアパートメントで暮らしてれば、そもそも撃たれるようなことにはならなかったはずだ」

「何よ！」ジルは金切り声を上げた。「ピーターのこと、よくもそんなふうにいえたものね！　兄さんは温かくて心のこもったことをやろうとしてただけよ——あんたなんかいかさま師だわ。あんたとスーザンが気にしてるのはお金がいくら入ってくるかとか、近所の人がなんていうかとか、そんなことばっかり！　大っ嫌い！」またも押し寄せた涙の洪水

のなかでこれだけいい終えると、ジルはわたしの腕に飛びこんできた。わたしは彼女を抱きしめ、右手をその身体にまわす一方、左手をバッグに突っこんでティッシュを捜した。

「ジル」彼女の母親が柔らかな、訴えるような声でいった。「ジル、ハニー、お願いだから、ここでそんなふうにわめくのはやめて。ママの神経、とっても耐えられないわ。ビーティが死んで、ママだってあなたと同じように悲しいのよ。でも、ジャックのいうとおりよ、ハニー。あの子がお父さまのいうことを聞いてれば、こんなことにはならなかったでしょうし、お父さまだって、きっと――きっと……」言葉がとぎれ、夫人は声を殺して泣きはじめた。

スーザンが母親の身体に腕をまわして、その肩を軽く叩いた。「ほらごらん、あなたのせいよ」と、悪意をこめていったが、それがわたしに向けられたものか、妹に向けられたものかははっきりしなかった。

「さあさ、もう充分な騒動を起こしたんだから、そこのポーランドの探偵さん、なんて名前だか知らないけど……」と、ルーシーがいいかけた。

「この人にそういう言い方しないで」ジルはわたしの肩で幾分声をこもらせて叫んだ。

「この人の名前はミス・ウォーショースキーなんだから、ミス・ウォーショースキーって呼んでちょうだい！」

「ねえ、お義母さん」ジャックは残念そうな笑い声を上げていった。「こんなことでお義

母さんをわずらわせるのは心苦しいかぎりですが、ジルは実の姉のいうこともぼくのいうことも聞こうとしないんで、この女を邸から追い出すよう、お義母さんの口から直接ジルにいってもらえませんか」

「まあ、困るわ、ジャック」彼の義母はそういって、スーザンにぐったりもたれかかった。彼のほうを見ないで片手だけを差し出し、わたしは彼女の目が涙で赤くなっていないのに気づいて興味深く思った。「ジルが癇癪を起こすと、わたくしの手には負えないのよ」そうはいったものの、一応きちんとすわりなおして、ジャックの手をしっかり握ったまま、ジルに真剣な目を向けた。

「ジル、こんなときにまたいつもの癇癪を起こすなんて、ママ、我慢できないわ。あなたもピーターも、人のお説教なんてまるで聞く気がないのね。人のいうことを聞いてれば、ピーティだって死なずにすんだのよ。ピーティが死んだ上に、今度はジョン、ママにはほかのことは何も考えられないわ。だから、これ以上この探偵さんと話をするのはやめてちょうだい。この人はあなたを利用して、新聞に自分の名前を出そうとしてるだけなのよ。うちのことがこれ以上スキャンダルにされるなんて、耐えられないわ」

わたしが何をいう暇もないうちに、ジルは小さな顔をまっ赤にして、わたしの手を振りほどいた。「あたしにそういう言い方しないでよ！」と甲高く叫んだ。「あたしはピートとパパのこと悲しんでるけど、ママは違う！　うちのなかにスキャンダルを持ちこんでる

のは、ママのほうじゃないの。ママがパパを愛してなかったことは、みんなが知ってるわ！　ママとドクター・マルグレーヴが何やってたか、みんなが知ってるのよ。パパだってたぶん――」

スーザンがあわててカウチから立ち上がり、妹の頬に激しい平手打ちをくれた。「このおしゃべり、黙んなさい！」セイヤー夫人は本物の涙を流しはじめた。ジルも強烈で抑えきれないさまざまな感情に流されて、ふたたび泣きじゃくった。

そのとき、ビジネス・スーツに身を包んだ心配そうな顔の男が、パトロール警官の一人に案内されて部屋に入ってきた。男はまっすぐセイヤー夫人のそばまで行って、その手を握りしめた。

「マーガレット！　知らせを聞いてすぐに飛んできたんだ。大丈夫かね？」

スーザンは赤面した。ジルの泣き声はやんだ。ジャックは剥製になったような顔をした。セイヤー夫人は悲しみに満ちた大きな目を、新しくきた客に向けた。「テッド。なんて親切な方なの」ささやきをわずかに上回る程度の、健気（けなげ）な声でいった。

「ドクター・マルグレーヴですね」わたしはいった。

彼はセイヤー夫人の手首を離して、まっすぐに立った。「いかにも、わたしはドクター・マルグレーヴだ」ジャックを見た。「この方は婦人警官かね」

「いいえ」わたしは答えた。「私立探偵です。ミス・セイヤーの依頼で、父親と兄を殺害

した犯人を捜すことになりました」

「マーガレットの？」信じかねる面持ちで彼は訊いた。

「いいえ。ミス・セイヤー。ジルのことです」わたしは答えた。

ジャックがいった。「ミセス・セイヤーは、この邸から出て行け、娘にはつきまとうなと、きみに命令したんだぞ。きみみたいな悪質な探偵でも、そういうヒントの受けとり方ぐらいはわかると思うが」

「あらら、頭を冷やしたら、ソーンデイル」わたしはいった。「何をいらいらしてるの？ジルがわたしにきてほしいと頼んだのは、死ぬほど怯えてるからよ――次々と事件が続くんですもの、ふつうの人間ならそうなるのが当たり前よね。ところが、あなたたちは防御態勢ばかり整えてる、だからこっちとしてはつい、何を隠してるんだろうと怪しみたくなる」

「どういう意味だ？」彼は険悪な表情になった。

「ねえ、わたしがお義父さんの死を調査するのを、なぜそんなにいやがるの？わたしに何を発見されるのを恐れてるの？貴重品の引出しに指をかけたところをお義父さんとピーターに見つかったものだから、口封じのために二人を殺し屋に始末させたってわけ？」

激怒した彼のあえぎは聞き流した。「そちらはどうかしら、ドクター。セイヤー氏が夫人とあなたの関係に気づいて、夫人に離婚を迫った。しかし、あなたは別居手当もろくに

わたしなんかより、上品な年上の人のほうが望ましいと決心した。いかが？」

「なんという名前か知りたいかね、きみ」わたしはそんなたわごとを聞く耳は持っていない」マルグレーツがいいかけた。

「じゃ、帰ってください」わたしはいった。「ルーシーはもしかしたらこの家を、ノース・ショアの金持ちの家々で盗みを働くための拠点にしてたのかもしれないわね。だって、メイドとして働いていれば、宝石とか証書とかそのほかいろんな品がどういう場所にしまってあるか、ずいぶん耳にするはずだもの」セイヤー氏と息子が彼女の犯行を隠そうと必死になったものだから、彼女は殺し屋を雇った」わたしは何やらぶつぶついいはじめたスーザンに、熱っぽい笑顔を向けた。空想がどんどん広がっていった。「たぶん、あなたにも動機をあたえてあげられるわ、ミセス・ツーンデイル」わたしがいいたいのはつまり、みなさんが敵意をむき出しにしてるのが不思議でたまらないってこと。わたしが殺人事件の調査を引き受けるのをみなさんがいやがればいやがるほど、いまいったような考えにも一理あるかもしれないと思いたくなってくるわ」

わたしが話し終えたとき、一同はしばらくしんと黙りこんだ。マルグレーツはセイヤー夫人の隣に腰かけて、ふたたびその手を握りしめていた。スーザンは床に唾を吐きかけようと身構えた猫そっくりに見えた。わたしの依頼人は両手を膝の上で握りしめ、真剣な表情を浮かべて、竹製のサイド・チェアのひとつに腰かけていた。やがて、マルグレーツ

がいった。「わたしたちを――セイヤー一家を脅迫するつもりかね」

「脅迫によって真実を見つけ出すつもりかとお尋ねになるのなら、答えはイエスです。途中で数多くの薄汚れたがらくたを掘り起こすという意味でしたら、とんでもない言いがかりです」

「ちょっと待って、テッド」自分より年上の男に腕を振って、ジャックがいった。「こういう女をどう扱うべきかはわかってます」わたしにうなずいてみせた。「さあ、金額をいいたまえ」そういって、小切手帳を引っぱり出した。

わたしの指はスミス&ウェッスンをとりだして、それで彼をひっぱたいてやりたくてむずむずした。「ふざけないでよ、ソーンデイル」と、どなりつけた。「この世の中にはね、お金で買えないものがたくさんあるのよ。あなたや、あなたのお義母さんや、ウィネッカのお偉方がどういおうと、わたしはこの殺人を――いえ、これらの殺人を調査していくわ」わたしは低く陰気な笑い声を上げた。「二日前には、ジョン・セイヤーがわたしに五千ドルよこして、事件から手を引かせようとした。ここノース・ショアで暮らすあなたがたは、夢の世界に住んでるようなものね。人生で何か都合の悪いことが起きれば、ゴミ収集人を雇って汚いものを捨てさせたり、ここにいるルーシーに掃除させて表へ運ばせるように、金の力でなんでももみ消してしまえると思ってる。そうはいかないわ。ジョン・セイヤーは死んだ。どんな腐敗にかかりあっていたにせよ、自分のまわりから、ある

いは息子のまわりから、それをとり除くに足る金を支払うことができなかった。二人の死を招いたものがなんであれ、それはもう個人的な事柄とはいえないわ。あなたたちの独占物でもない。望む者は誰でも、それを見つけ出すことができるのよ。わたしはそうする覚悟でいるわ」

セイヤー夫人は低い声ですすり泣いていた。ジャックは気詰まりな様子だった。威厳を崩すまいと努力しながら、彼はいった。「もちろん、きみが自分と無関係のことを嗅ぎまわろうと決心したのなら、ぼくたちにそれを止める力はない。ただ、こちらとしては、警察にすべてまかせたほうがいいと思っているだけだ」

「そうねえ、でも、警察の打率はいまのところ十割じゃないわよ」わたしはいった。「犯人を捕えて拘置所にぶちこんだつもりでいたのに、その犯人が今朝拘置所で朝食を食べてるあいだに、ジョン・セイヤーが殺されてしまったのよ」

スーザンがジルのほうを向いた。「全部あなたのせいよ！　こんな人を連れてきたりして。あたしたち、さんざん侮辱されて恥をかかされたのよ。こんなに恥ずかしい思いをしたのは生まれて初めてだわ。パパが殺されたっていうのに、あなたの考えることといったら、外部の人間を引っぱりこんであたしたちの悪口をいわせることだけじゃない」

マルグレーヴがふたたびスーザンのほうを向き、ジャックと彼女が彼に向かっていちどきにしゃべりはじめた。そのやりとりが続いているあいだに、わたしはジルのそばへ歩み

寄り、膝を突いて彼女の顔をのぞきこんだ。ジルはいまにも失神するか、錯乱してしまいそうに見えた。「ねえ、こんなひどいとこはさっさと逃げ出したほうがよさそうよ。騒ぎが一段落するまであなたのことを預かってくれそうな、友達か親戚はないの？」

ジルはしばらく考えてから、首を横に振った。「ううん、だめ。友達ならいっぱいいるけど、こんなときにあたしが転がりこんだら、どこのお母さんもいい顔しないと思う」弱弱しい微笑を浮かべた。「スキャンダルだものね、ジャックのいったように。アニタがここにいてくれればいいのに」

わたしは一瞬ためらった。「わたしと一緒にシカゴへもどらない？　わたしのアパートメントが泥棒に荒らされたんで、いまは友達のところに居候中だけど、その人、二、三日なら喜んであなたを泊めてくれると思うの」迷子がもう一人ふえたところで、ロティは気にしないだろう。わたしはゆっくり質問のできる場所へジルを連れていきたかったし、家族から隔離してやりたかった。彼女はしっかりした子で、抵抗する力も持っているが、父親の死でショックを受けている最中にそんな戦いをする必要はない。

ジルの顔がぱっと明るくなった。「それ、ほんと？」

わたしはうなずいた。「みんながここで口論してるあいだに、二階へ走ってって、小型の旅行カバンに荷物を詰めてらっしゃい」

彼女が部屋を出て行ってから、わたしは自分がしようとしていることをセイヤー夫人に

説明した。予期したとおり、家族から新たな騒ぎが巻き起こった。しかし、最後にマルグレーヴがいった。「大切なのは、マーガレット——いや、セイヤー夫人を完全な安静状態に置くことだ。ジルがどうしても夫人の神経にさわるようなら、二、三日、家から遠ざけたほうがいいかもしれん。この人に関しては、すこし身元調べをおこなってみよう。信用のおけん人物だとわかったら、いつでもジルを連れて帰ればいい」

セイヤー夫人は殉教者のような笑顔を見せた。「ありがとう、テッド。あなたが大丈夫だというのなら、きっとそうだわ。治安のいいところにお住まいなのかしら、ミス——」

「ウォーショースキーです」わたしはそっけなくいった。「そうね、マシンガンで殺られた人間は、今週はまだ一人もおりません」

マルグレーヴとジャックはわたしに、電話による身元照会先を教えるようにと要求した。わたしはそれが面子を保つためのあがきであることを見てとり、かつて法学部で教えを受けた教授たちの一人の名前を告げた。わたしという人物についての問い合わせを受けたら、教授は驚くだろうが、たぶん味方してくれるだろう。

ジルはもどってきたとき、髪をきれいにとかして、顔も洗っていた。カウチにすわったままの母親に近づいた。「ごめんね、ママ」と小声でいった。「ママにひどいことというつもりはなかったのよ」

セイヤー夫人は弱々しく微笑した。「かまわないわ。あなたにはどうせ、ママの気持ち

なんかわかりっこないもの」わたしを見た。「わたくしの代わりに、この子の面倒をしっかり見てやってくださいね」

「ええ、もちろん」わたしは答えた。

「こたこたは起こさないでくれよ」ジャックが釘をさした。

「心がけておきます、ミスタ・ノーンデイル」わたしがジルのスーツケースを持つと、彼女はわたしにくっついてドアを出た。

ドアの外で足を止めて、家族を見つめた。「じゃあね、さよなら」といった。全員が彼女を見たが、誰も何もいわなかった。

玄関まできたとき、わたしはさきほどの巡査刑事に、ミス・セイヤーには休息と世話が必要なので、二、三日のあいだわたしの家へくることになったと告げ、彼女の供述を全部とり終えたのかどうか訊いてみた。彼はウォーキー・トーキーを使って上司の警部補としばらく話してから、わたしの住所を教えてくれれば、ジルを家から出してもかまわないと認めた。わたしは彼に住所を告げ、二人で車寄せを歩いて表に出た。

イーデンズ高速に向かうあいだ、ジルは一言もしゃべらなかった。まっすぐ前方を見つめたまま、郊外の風景に特に注意を払っている様子も見せなかった。しかし、ケネディ高速の南行き車線に入って渋滞気味の車の列に加わったとき、わたしのほうを見た。「あんなふうにママのところを飛び出しちゃったの、いけないことだったと思う？」

わたしはブレーキを踏んで、五十トンのセミトレーラーを割りこませてやった。「いいこと、ジル、わたしにはあの家のみんなが寄ってたかって、あなたの罪悪感をかき立てようとしてたみたいに思えてならなかったわ。いま、あなたが悪いことをしたと思ってるのなら、それはたぶん、みんなの目論見が成功したってことよ」

ジルは二、三分のあいだ、その意味をかみしめていた。「パパがああいう殺され方をしたのは、スキャンダルなの？」

「たぶん世間の噂になって、ジャックやスーザンはひどく肩身の狭い思いをするでしょうね。だけど、本当に問題にすべきなのは、なぜお父さんが殺されたかってこと——そして、その問いに対する答えが出ても、あなたはそれを恥じる必要はないのよ」わたしは《ヘラルド・スター》の配送用ヴァンの横をすり抜けた。「大切なのは、何が正しいかというあなた自身の考えを、あなたの心のなかに築き上げることよ。マシンガンを使って人殺しをやるような連中と、お父さんが衝突したんだとすれば、それは連中がお父さんの善悪の観念を踏みにじろうとしたからかもしれない。それは恥ずべきことじゃないわ。万一、お父さんが何か怪しげなことに加担していたとしても、あなたのほうは、自分で望まないかぎり、それを恥ずかしく思う必要はないのよ」わたしは車線を変えた。「祖先の罪の報いなんてわたしは信じないし、二十年ものあいだ復讐を心に抱き続ける人々なんてのも信じない」

ジルは怪訝な顔をわたしに向けた。「そりゃね、そういうことだってもちろんあるわよ。ただそれは、自分で望んで招くことなの。あなたのお母さんがそうだわ——不幸な人——違う？」ジルはうなずいた。「お母さんが不幸なのはもしかしたら、三十年も前の事柄が原因なのかもしれない。それはお母さんが選んだことなのよ。あなたも同じ選択をしなきゃならないわ。たとえば、お父さんが何かの犯罪に手を染めてて、そのことがわかったとしたら？ 辛いでしょうけど、それが恥ずべきスキャンダルとなってあなたの人生をみじめにするのは、あなたがそう望んだ場合だけなのよ。あなたが何をしてても、あるいはあなたになんの罪もなくても、生きてれば多くのことが降りかかってくるわ——お父さんとお兄さんが殺されたのも、その一例ね。だけど、それらの出来事をどういう形で人生の一部に加えるかは、あなたが自分で決めること。世をすねるもよし、といっても、あなたはそういう性格じゃなさそうだけど。または、それをこやしにして成長するもよし」

わたしはアディスンの出口を過ぎてしまったことに気づいて、ベルモントの出口ランプに入った。「ごめん——答えがお説教に変わっちゃったわね。おまけに、しゃべるのに夢中になって、出口を通り越してしまった。すこしは参考になりそう？」

ジルはうなずき、わたしがプーラスキ・ロードを北に向かってアディスン通りで東へ折れるあいだ、ふたたび黙りこんだ。「寂しくなるわ、ピーターがいなくなって」と、かなりたってからいった。「うちで——うちであたしのこと心配してくれたのは、ピーターだ

けだった」

「そうね、これから辛い日が続くわよ、ジル」わたしは優しくいって、少女の手を握りしめた。

「きてもらってうれしかったわ、ミス・ウォーショースキー」ジルは小声でいった。

彼女の言葉を聞きとるために、わたしは身を乗り出さねばならなかった。「友達はわたしのことヴィクって呼ぶのよ」といった。

11 友情ある説得

わたしはロティの歓待を濫用したことを彼女に告げるためと、ショックを和らげるものがジルに必要だと思うかどうかを訊くために、アパートメントへ行く前に診療所に寄った。女たちの小さな群れが、大部分は幼い子供を連れて、小さな待合室で順番を待っていた。ジルは物珍しそうにあたりを見まわした。わたしが奥のドアに首を突っこむと、ロティの看護師である若いプエルト・リコ人の女がこちらを見た。「あら、ヴィク」といった。

「ロティは診察中よ。何かほしいものでも?」

「こんにちは、キャロル。わたしが若い友達をロティのアパートメントに連れて帰りたがってるって、伝えてちょうだい。今朝わたしが会いに出かけた相手なの。そういえば、誰のことだかわかるから。それから、その子を急いで診察してもらえないか、訊いてみて。健康な子なんだけど、ここしばらくショックの連続だったの」

キャロルは狭い診察室に入って行って、二、三分話をしていた。「オフィスのほうへどうぞって。ミセス・セギがすんだら、急いで診るそうよ。それからもちろん、アパートメ

ントへ連れてってくれてかまわないって」
前からずっと待っていた人々の不服そうな苦々しい顔に囲まれながら、わたしはジルを連れてロティのオフィスに入った。彼女を待つあいだに、わたしはロティがオーストリアの戦争亡命者で、ロンドン大学医学部の秀才で、反骨精神にあふれた医者で、温かな友達であることを、すこし話して聞かせた。そこへ、ロティ自身があたふたと駆けこんできた。
「そう、あなたがミス・セイヤーね」と、歯切れよくいった。「ヴィクがあなたを静養させるために連れてきたわけね。いいことだわ」彼女は絶えずジルに話しかけながら、その顎を片手で上げて、瞳孔をのぞきこみ、いくつか簡単なテストをおこなった。
「いったい何があったの?」と訊いた。
「父親が撃たれたのよ」わたしが説明した。
ロティは舌打ちして頭を振ると、ジルのほうを向いた。「じゃあ、今度は口をあけて。だめだめ、喉が痛くないことはわかってるけど、これは無料よ。わたしはお医者さんだから、ちゃんと見とかなきゃいけないの。はい、いいわ。どこも悪いとこはないけど、ゆっくり休息して、何か食べる必要があるわね。ヴィク、この子を連れて帰ったら、ブランディをすこし飲ませて。おしゃべりは慎んで、ゆっくり休ませてやって。このあと、出かける予定?」
「ええ、することが山ほどあるから」

彼女は唇をすぼめて、しばらく考えこんだ。「一時間ほどしたら、キャロルを行かせるわ。わたしたちのどちらかが帰るまで、ジルについていてもらいましょう」

その瞬間、わたしは自分がどれだけロティに好意を持っているかを、身にしみて感じた。アールに尾行されている恐れもあるため、ジルを一人残して出かけることが少々気がかりだったのだ。ロティがそれを察したのか、あるいは、怯えた少女を一人にしてはならないと思っただけなのかはわからないが、いまはもう、その不安を口に出す必要もなくなった。

「名案だわ。キャロルがきてくれるまで、出かけずに待ってる」

キャロルが次の患者を呼ぶあいだに、わたしたちは一段と激しくなった憎悪の視線をかいくぐって、診療所を出た。「すてきな人だわ、ねえ?」車に乗りこみながら、ジルがいった。

「ロティ、それともキャロル?」

「どっちもだけど、いまいったのはロティのこと。あたしが突然こうやって押しかけても、ぜんぜん気にしないのね」

「そうよ」わたしはうなずいた。「ロティの本能はすべて、人を助けることに向けられてるの。ただの感傷から、そんなことしてるわけじゃないのよ」

アパートメントに着くと、ジルを車のなかに待たせておいて、表の通りと建物までの通路を点検した。よけいな恐怖を味わわせたくはなかったが、ジルが弾丸をぶちこまれたり

したら大変だ。怪しい気配はどこにもなかった。アールはわたしを脅して追っ払ったと、本気で信じているのかもしれない。あるいは、警察があわれなドナルド・マッケンジーを逮捕したものだから、枕を高くして寝ているのかもしれない。

部屋に入ってから、わたしはジルに、熱い風呂に入るようにいった。いまから朝食をこしらえて、そのあとすこし質問しなければならないが、それがすんだら眠っていいからといった。「その目から判断すると、ここしばらく、ろくに寝てなかったようね」

ジルは照れくさそうにうなずいた。わたしは自分がゆうべ寝た部屋で、彼女が小さなスーツケースの中身を出すのを手伝った。今夜からは居間のソファベッドで眠ればいい。ロティの特大の白いバスタオルを一枚出して、ジルを浴室へ連れて行った。

自分がひどい空腹であることに気づいた。もう十時、しかも、ロティに押しつけられたトーストは結局食べなかった。冷蔵庫をあさってみた。ジュースなし。ロティは罐入りのものは飲まない主義である。オレンジのぎっしり詰まった引出しが見つかったので、小さな水差しにジュースを絞り、厚みがあってふわっとしたロティのヴィエナ・ブレッドをすこしもらって、小さく口笛を吹きながら、フレンチ・トーストをこしらえた。セイヤーが死に、いまだ解明されないいくつかの断片が事件にからみついているにもかかわらず、気分爽快だった。さまざまな事柄がようやく動き出したのだと、本能がわたしに告げていた。

頬をピンクに染めた眠たげな顔のジルが浴室から出てくると、まず彼女に食事をさせ、

CamScannerでスキャン

質問はあとにまわすことにして、ジルに訊かれるままにわたし自身のことをすこしずつしゃべった。彼女はわたしがいつも殺人犯を捕えるのかどうかを知りたがった。

「殺人犯を直接相手にするのは、今回が初めてよ」と、わたしは答えた。「でも、たいていは、そうね、調査を頼まれた事件は根っこのところまで追っかけるわ」

「怖くないの?」ジルが訊いた。「だって、めちゃめちゃ殴られて、アパートメントを荒らされて、しかも、それが——それがパパとビートを撃った犯人だっていうのに」

「そりゃもちろん、怖いわよ」わたしは落ち着いて答えた。「今度みたいな騒ぎに直面しても怖がらないのは、愚かな人間だけよ。ただね、わたしは度を失ったりしないの——怖いときには用心深くなるだけで、判断力を失うようなことは決してないのよ。

さてと、この二、三日にお父さんがどういう人たちと会って、その人たちがどんなことをいったかを、思い出せることとならなんでもいいから話してちょうだい。ベッドへ行ってすわろうね。あなたはロティの命令どおり、ブランディ入りの熱いミルクを飲むのよ。そうすれば、わたしの質問が終わったらすぐに眠れるから」

ジルはわたしのあとから寝室に入ってくると、ベッドにもぐりこんで、いわれたとおりにミルクをすすった。ミルクには赤砂糖とナツメグを放りこみ、ブランディがたっぷり加えてある。彼女は顔をしかめながらも、話のあいだにそれをすこしずつ飲み続けた。

「わたしが土曜日にお宅に押しかけたとき、あなた確か、お父さんは最初のうち、警察に

逮捕されたマッケンジーって男がお兄さんを殺したことを信じようとしなかったけど、近所の人にいわれて考えを変えたんだっていってたわね。誰かしら、その近所の人って」

「ええと、いろんな人がきて、みんな同じようなことをいってたわ。その人たちの名前、全部知りたい？」

「あなたがみんなの名前と、どんなことをいってたかを思い出せるのなら」

わたしたちは約一ダースの人間のリストを完成させた。そのなかには、わたしが知っている唯一の名前であるヤードリー・マスターズと、その妻も含まれていた。わたしは家どうしのつきあいについて、いくつかの長い歴史を聞かされ、ジルはそれぞれがどんなことをいったかを正確に思い出そうとする努力に、顔をしかめた。

「あなた、さっき、『みんな同じようなことをいってた』っていったわね」しばらくしてから、わたしはジルの言葉を繰り返した。「ほかの人よりも特に強い調子でいった人はいない？」

そう訊かれて、ジルはうなずいた。「マスターズさんだわ。アニタのお父さんの犯行に違いないってパパがわめき続けてたら、マスターズさんがこういったの。『いいかね、ジョン、いつまでもそんなことをいい続けるつもりじゃないだろうね。きみが聞きたくないような多くのことが、明るみに出る可能性もあるんだよ』って。そしたらパパ、ものすごく怒って、『どういう意味だ。脅迫する気か』ってどなりはじめたの。マスターズさんは、

『まさか、そんなことするものか、ジョン。われわれは友達だ。忠告してるだけさ』とか、そんなようなことをいったわ」
「なるほど」かなり意味深長だ。「それで全部？」
「そう、でも、マスターズさん夫婦が帰ったあとで、パパは自分が間違ってたようだっていったの。あたし、そのときはそれ聞いてうれしかったわ。だって、アニタがピーターを殺そうなんてするはずないもの。だけど、パパはそれから、ピーターのことを悪くいうようになったの」
「わかったわ、その話はまた今度にしましょうね。気分を落ち着けて、ぐっすり眠ってほしいから。昨日、何か変わったことはなかった？」
「そうね、パパが電話で誰かと喧嘩してたみたい。でも、相手が誰かも、なんの話だったかもわからない。たぶん、銀行の取引かなんかの話じゃないかしら。だって、パパが、『わしはもう、力を貸すつもりはない』っていってたから。あたしが聞いたのはそれだけ。パパ、とっても――変だったわ」彼女は涙をこらえて、ミルクをまたすこし飲んだ。「あのね、お葬式のとき、あたし、なるべくパパに近づかないようにしてたの。だから、電話口でパパがどなりはじめるのが聞こえたときに、こっそり外へ出ちゃったの。どっちみち、スーザンから、ちゃんとドレスを着て、居間にすわって、お葬式のあとでうちに寄ったいやな感じの人たちの相手をするようにって、うるさくいわれてたから、あたし、こっそり

外に出て湖の岸に降りたの」
わたしは軽く笑った。「お利口さんね。いまいった電話での口論の件だけど、向こうからかかってきたの？　それとも、お父さんがかけたの？」
「パパがかけたんだと思う。すくなくとも、電話のベルを聞いた覚えはないわ」
「オーケイ、とても参考になったわ。それじゃ、いまの話は頭から追い出してちょうだい。髪をといてあげるから、そのあいだにミルクを全部飲んで、それから眠りましょうね」
ジルは確かにひどく疲れていた。ブラッシングやブランディで気分がほぐれて、ベッドに横になった。「そばにいて」と、眠そうな声でいった。わたしは麻布のカーテンの外側にある日よけを引っぱり、ジルの横に腰を降ろして、その手を握ってやった。彼女の何かがわたしの心臓を貫いて、一度も持ったことのない子供への憧れをかきたて、わたしは彼女が深い眠りに落ちるまでじっとその姿を見守っていた。
キャロルを待つあいだにいくつか電話をした。最初の相手はラルフだった。秘書が彼の所在を突き止めるまで、二、三分待たなくてはならなかったが、電話口に出た彼はいつものように陽気だった。「調子はどうだい、シャーロック」と、はしゃいだ声で訊いた。
「好調よ」わたしは答えた。
「まさか今夜のディナーを取り消すためにかけてきたんじゃないだろうね」
「いえ、いえ」わたしは彼を安心させた。「わたしが自分で調べるよりも、あなたに頼ん

たけうな警察にわかりそうなことがあるので、それをお願いしようと思って」

「なんだい？」

「ノンドリー・ノッリーって男からあなたのボスに電話がかかってきたことがないかどうか、調べてもらいたいの。それから、あなたが調べてること、彼には知られないようにしてね」

「きみ、まだ死んだ馬を鞭打ってるのかい」彼は少々いらだちを含んだ声で訊いた。

「わたしはまだ誰も削除してないわ、ラルフ。あなたさえも」

「しかし、警察が犯人を逮捕したじゃないか」

「まあね。あれが正しければ、おたくのボスはシロだわ。踏んだり蹴ったりの一週間を送った女を慰めるためだと思ってよ」

「わかった」彼は承諾したが、あまりうれしそうではなかった。「しかし、殺人犯の捕え方については、警察だってきみに負けないぐらいの知識を持ってるってことを、信じてもらいたいね」

わたしは笑った。「そういってくれるのはあなた一人じゃないわ……ところで、今朝ピーターの父親が殺されたことはご存じ？」

「なんだって！」彼は叫んだ。「どうしてそんなことに？」

「じつは、撃たれたの。あいにくドナルド・マッケンジーは拘置所のなかだけど、ノース

・ショアにだって、今回の責めを負うべき麻薬密売人が何人かいるでしょうよ」

「ピーターの死が今度の事件にも関係してると思ってるの？」

「家族のなかの二人が一週間内に相次いで殺されて、しかも、それが単なる偶然のなせるわざだとしたら、想像力の限界を超えてるわ」

「わかった、わかった」ラルフはいった。「きみの主張はようくわかった――皮肉な口の利き方はよせよ……ヤードリーの秘書に訊いてみるから」

「恩に着るわ、ラルフ、じゃあ今夜ね」

保険金支払手形、マスターズがセイヤーにいった遠回しの脅迫ともそうでないともとれる言葉。たいした収穫ではないが、追ってみる価値はある。パズルのそのほかの断片は、マグローと、マグローがシュマイセンを知っているという事実だ。もし、ここでマグローとマスターズを、あるいはマスターズとシュマイセンを結びつけることができれば……シュマイセンに関する調査も、ラルフに頼んでおけばよかった。いや、頼むのは今夜でもいいだろう。マグローとマスターズが共謀して、内容まではわからないけれど何かをやっていたと仮定しよう。二人が頭の切れる男なら、電話をかけあうさいに本名を名乗るようなことはしないだろう。マグローのところの悩殺的な秘書でさえ、動かぬ証拠があれば彼を警察に密告するかもしれない。しかし、二人が一杯やりながら、ひそかに会っていた可能性ならありそうだ。ループのなかと、ナイフグラインダーズ本部の近くにある酒場を片っ

誰かちゃんと二人が一緒のところを見かけた者がいないか、確かめてみることにしよう。あるいは、サンヤーとマグローの組み合わせでもいい。写真が何枚か必要で、どこに行けばそれが手に入るかを思いついた。

電話帳で番号を調べている最中に、キャロルがやってきた。「ジルは寝てるわ」わたしは彼女にいった。「夕方までぐっすり寝てくれるといいけど」

「ちょうどいいわ」キャロルは答えた。「昔のカルテを全部持ってきたの。診療所だといつも忙しすぎて、新しいデータを書き加えてる時間がないけど、今日はちょうどいい機会だから」

肺気腫をわずらっている彼女の母親のことや、この近辺を悩ませている放火魔が見つかるかどうかについてしばらくしゃべってから、わたしは電話にもどった。

マリ・ライアスンはトランシコン事件が発覚したあとで、わたしにインタビューを申しこんできた《ヘラルド・スター》の犯罪担当記者である。署名入りの記事を書いていて、その多くはすぐれたものだ。昼休みが近づいていたので、社会部に電話したときは彼がいるかどうか危ぶまれたが、わたしにも運が向いてきたようだった。

「ライアスンです」彼は受話器に向かって、よく響く低音でいった。

「V・I・ウォーショースキーよ」

「へえ、きみか」彼は頭をすばやく回転させ、難なくわたしのことを思い出した。「今日

はおもしろい話でも聞かせてくれるのかい」
「今日は無理。でも、今週中には聞かせてあげられるかもしれない。それには助けが必要だけどね。写真が二枚」
「誰の写真？」
「ねえ、いまここであなたに打ち明けても、わたしがちゃんとした証拠をつかむまで、2＋2はいくつなんて新聞に書かないって約束してくれる？」
「まあね。現在進行中らしいその事件に、きみがどこまで迫ってるかによりけりだね」
「アンドリュー・マグローはおたくの重要リストのどれかにのってる？」
「ああ、やつは永遠の本命馬さ。しかし、いまのところ、やつにからむ事件はひとつも起きてない。もう一人は誰？」
「ヤードリー・マスターズって名前の男。エイジャックスの部長で、〈慈悲の十字軍〉の寄附名簿とかそういったもののファイルに、何か出てると思うんだけど」
「マグローがエイジャックスと関係あるっての？」
「電話でくどくどいうのはやめてよ、マリ。エイジャックスはナイフグラインダーズとはいっさい取引してないわ」
「ふうん、すると、マグローとマスターズ個人が関係してるわけか」彼はさらに食い下がった。

「何よ、〈二十の扉〉でもやってるつもり？」わたしはいらいらしながらいった。「写真が二枚必要なの。証拠が挙がったら、間違いなく話すから。トランシコンのときだって、ちゃんと話してあげたでしょ、違う？」

「じゃ、こうしよう――昼めしすんだ？　よし、一時間以内に写真を持ってくから――一枚でもあればだけどさ――〈フィオレッラ〉で会おう。そこでビールでも飲みながら、きみの脳みそをつつくとしよう」

「上出来よ、マリ、感謝する」わたしは電話を切って腕時計を見た。一時間あれば、市庁舎に寄ってスミス&ウェッスンを登録できる。ふたたび《どうしてあなたを忘れられよう（キオ・ミ・スコルディ・ディ・テ）》をハミングしはじめた。「六時ごろもどるけど、夕食は外ですませるって、ロティにいっといてね」出かけにキャロルに声をかけた。

CamScannerでスキャン

12　酒場をはしご

市庁舎の仕事熱心な職員たちに渡された申込用紙、手数料、不可解な指示、さらにはその指示を繰り返すよう求められたことへの怒りなどのおかげで、予想以上に時間をとられた。約束の時刻はとっくに過ぎていたが、弁護士の事務所に寄って、ピーター・セイヤーのアパートメントで見つけた保険金支払手形のゼロックス・コピーを預けることに決めた。わたしの弁護士はものに動じないドライな人物で、二、三日以内にわたしの身に何かあったら手形をマリ・ライアスンに渡すように、というわたしの頼みを、まばたきひとつせずに引き受けた。

屋外のテーブルからシカゴ川が見渡せる、感じのよいレストラン〈フィオレッラ〉にようやくたどり着いたとき、マリはすでに二杯目のビールを飲み終えるところだった。エリオット・グールドを赤毛にしたような大男で、わたしが近づくのを見て、面倒くさそうに手を振った。

高いマストの帆船が一隻、川面をすべって行った。「ほら、あの船一隻のために、この

川のはね橋全部を上げなきゃならない。ひでえもんだ、なあ」そばまできたわたしに、彼はいった。

「あら、ちっぽけな船一隻でミシガン・アヴェニューの交通を全部止めてしまえるなんて、ちょっと感動的じゃないの。もちろん、自分が川を渡らなきゃならないときに、橋がはね上がっちゃうのは困るけど」これはあまりにもしばしば起きる現象だ。車を運転する者たちは、すわってひそかに怒りをたぎらせながら待つ以外に、方法がない。「橋のひとつがはね上がってるときに、殺人事件が起きた例はないかしら――誰かが怒り心頭に発して、橋の番人を撃ったとかなんとか」

「まだないね」マリが答えた。「あったら、きみんとこへすぐインタビューに行くよ。飲物、何にする?」

わたしはビールはあまり好きではない。白ワインを頼んだ。

「ご注文の写真、持ってきたぜ」マリはフォルダーを投げてよこした。「マグローはよりどりみどりだったが、マスターズのほうは一枚しか見つからなかった。ウィネッカで撮ったやつで、市から何かの表彰を受けてるとこだ。新聞にはのらなかったけど、全身の四分の三がかなりうまく撮れてるだろ。二枚コピーしといた」

「ありがとう」といって、わたしはフォルダーをひらいた。マスターズの写真はよく撮れていた。合衆国ボーイ・スカウトのイリノイ支部長と握手しているところだ。その右側に、

まじめくさった顔つきの、彼の息子とおぼしきユニフォーム姿の若者が映っていた。写真は二年前のものだった。

マリが持ってきたマグローの写真は五、六枚あった。一枚は連邦裁判所の外で撮ったもので、彼が財務省の役人トリオの前へ喧嘩腰で歩いて行くところだ。もっと楽しい場面を撮ったものもあり、九年前に初めてナイフグラインダーズの委員長に選ばれたときの、祝賀パーティでの彼が写っていた。しかし、わたしの目的に一番ぴったり合うのは、本人が気づかないうちに撮られたらしいクローズアップの一枚だった。おだやかな表情だが、何か一心に考えこんでいる。

わたしはそれをマリのほうへ差し出した。「これ、最高ね。どこで撮ったの」

マリはにやっとした。「恐喝と組合に関する上院の公聴会さ」

どうりで考えこんでいるように見えるはずだ。

給仕が注文を聞きにやってきた。わたしはトマトソースのペンネを頼み、マリはミートボール・スパゲティにした。このところ澱粉質の摂りすぎなので、筋肉がうずこうがうずくまいが、ジョギングを再開する必要がありそうだ。

「さてと、シカゴで一番の美人探偵、V・I・ウォーショースキーさん、これらの写真がどうしたっていうんだい」マリは両手をテーブル上で組み、わたしのほうに身を乗り出して訊いた。「殺されたピーター・セイヤーがエイジャックスで、いや、もっと詳しくいう

と、昔から家族ぐるみのつきあいをしてきたマスターズ氏の下で働いていたって記事を読んだ覚えがあるわ。それから、彼が死んでからどっと出まわった何千行もの記事のどこかに、彼のガールフレンドがあの可憐なすてきなアニタ・マグローか、有名な組合指導者アンドリュー・マグローの娘だと書いてあったのも覚えている。きみはいま、両者の事情をわかっている。その二人が共謀してセイヤーの息子を、そしておそらくは父親までも死に追いやったのだ、と解釈してもいいのかい？」

わたしは真剣な表情で彼を見た。「真相はこうなのよ、マリ。マグローは大物資本家どもに対して、病的ともいえる憎悪を抱いている。それを知らぬうら若きわが娘、経営者との接触からつねに保護されてきたその娘が、資本家側の人間であるばかりか、シカゴきっての裕福な実業家の息子でもある若者との結婚を真剣に考えていると知ったとき、彼は自分のなすべきことはただひとつ、若者を葬り去ることだと決心した。異常な心理状態になっていて、ついでにジョン・セイヤーも始末してしまおうと決めた。その目的はただ一―」

「みなまでいうな」マリがいった。「あとは自分で作れる。マグローとマスターズのどっちかがきみの依頼人？」

「ここのお昼、おごってよ、マリ――間違いなく必要経費にできるわ」

給仕がわたしたちの料理を運んできて、昼食どきのビジネス街のレストラン特有のせっ

かちでぞんざいなやり方で、それをテーブルに投げ出した。わたしはあわてて写真を引っこめて、危機一髪のところでそれらをスパゲティのソースから救い出し、わたしのパスタにチーズを散らしはじめた。チーズたっぷりが好きなのだ。

「依頼人はいるの？」マリはミートボールをフォークで突き刺しながら訊いた。

「ええ、いるわよ」

「しかし、その正体は明かさないってわけか」わたしは微笑を浮かべ、肯定のしるしにうなずいた。

「マッケンジーがセイヤー二世の殺害犯だってこと、きみは信じる？」マリが訊いた。

「わたし、本人と話したこともないのよ。でも、マッケンジーが息子を殺したとすると、いったい誰がセイヤー一世を殺したのか不思議でならないわね。同じ家庭内の二人の人間が同じ週に、まったく無関係の理由で、無関係の人間によって殺されたという考え方は、気に食わないわ。確率の法則に反してるもの。あなたのご意見は？」

彼はエリオット・グールド風の大きな微笑を浮かべた。「じつはさ、最初に事件のニュースが入ったあとで、マロリー警部補に会って話を聞いたんだが、盗難のことは一言もいってなかったぜ。ところで、死体を発見したのはきみだったね。どうだろう、あのアパートメント、家捜しされたように見えた？」

「盗られたものがあったかどうか、正直いってなんとも答えられないわ。そこに何がある

べきか、わたしにはわからないんだもの」

「ついでに訊くけど、そもそもなんの用事であそこへ?」マリはさりげなく尋ねた。

「郷愁よ、マリ――わたし、シカゴ大の学生だったでしょ。だから、なつかしい場所がどんなふうに変わったか、見たくてたまらなくなったの」

マリは笑い出した。「オーケイ、ヴィク、きみの勝ちだ。いろいろ訊いたけど、怒らないでくれ。いいね」

わたしも笑い出した。そんなことは平気だった。パスタを食べるのをやめた。料理を残すというわたしの不人情なおこないが原因で、インドの子供たちが死んでいるわけではない。

「あなたの興味を惹きそうなことが見つかったら、知らせてあげるわ」といった。

マリはわたしに、今年のカブスはいつごろ沈むと思うかと訊いた。いまのところはがんばっている――首位に二・五ゲーム差だ。

「ねえ、マリ、わたしは人生にほとんど幻想を持たない人間よ。カブスのことは、そのわずかな幻想のひとつにしておきたいの」わたしはコーヒーをかきまわした。「でも、八月の第二週あたりでしょうね。そちらのご意見は?」

「うーん、いまは七月の第三週だろ。あと十試合ってとこかな。マーティンやバックナーじゃ、チームを引っぱってく力はないよ」

わたしは悲しく同意した。野球の話で昼食を終え、伝票がくると割り勘にした。
「ひとついっておくことがあるわ、マリ」
彼はわたしを凝視した。わたしは吹き出しそうになった。彼の態度の変わりようがあまりに顕著だったから。いまの彼は獲物のあとを追うブラッドハウンドそっくりだ。
「わたし、手がかりらしきものをひとつ持ってるの。それが何を意味するのか、なぜ手がかりと呼べるのかはわからない。でも、それのコピーをわたしの弁護士に預けてきたわ。万一、わたしが殺されるか、ある程度の期間行動できなくなった場合には、それをあなたに渡すように指示してあるの」
「なんだい、そりゃ?」マリが訊いた。
「あなた、探偵になるべきよ、マリ。次から次へと質問してくるし、追跡にとりかかるとやたら張り切るんだもの。ひとつだけ教えてあげる。アール・シュマイセンがこの事件のまわりをうろちょろしてるわ。あなたが紳士的すぎて、いうのを遠慮してた、目のまわりのこのみごとな黒あざも、じつは彼がくれたものなの。わたしの死体がシカゴ川に浮かんで流れてくのも、あり得ないことじゃないわね。一時間おきぐらいにオフィスの窓から外を見て、確かめてみるといいわ」
マリは驚いた顔もしなかった。「あなた、知ってたの?」わたしは訊いた。
彼はにやっとした。「誰がドナルド・マッケンジーを逮捕したか、知ってるかい?」

「ええ、フランク・カールスンよ」

「じゃ、カールスンは誰の部下？」彼は訊いた。

「ヘンリー・ヴェスプッチ」

「それじゃ、ここ何年かヴェスプッチのケツをかばってきたのは、誰だか知ってる？」

わたしは考えてみた。「ティム・サリヴァン本部長？」と、当て推量でいってみた。

「賞品はキューピー人形です」マリはいった。「そこまでわかったのなら、サリヴァンが去年フロリダで一緒にクリスマスを過ごした相手が誰だか教えてあげよう」

「ええっ、うそ！　アールじゃないわよね」

マリは笑い声を上げた。「正解。アール・シュマイセンご本人さ。あの連中と遊びまわる気なら、用心の上にも用心を重ねたほうがいい」

わたしは立ち上がり、ショルダー・バッグにフォルダーを突っこんだ。「感謝するわ、そういってくれたのはあなたが初めてじゃないのよ。写真、どうもありがとう。何かあったら知らせるわね」

レストランと舗道を隔てる柵を乗りこえようとしたとき、背後から、大声で何か尋ねているマリの声が聞こえてきた。彼が息を切らしながら近づいてきたのは、わたしが川岸からミシガン・アヴェニューに上がる階段をのぼりきった、ちょうどそのときだった。「弁護士にいったい何を渡したのか、教えてくれよ」と、あえぎながらいった。

わたしはにこっと笑った。「さよなら、マリ」といって、ミシガン・アヴェニューを走るバスに乗った。

わたしは闇夜に鉄砲と形容するしかないような計画を立てていた。マグローとマスターズが共謀しているものと仮定した。そして、二人がどこかの場所で会っていることに期待をかけた。すべての用を電話や手紙ですませている可能性はある。しかし、マグローは政府の盗聴装置や郵便物の没収を警戒しているかもしれない。では、二人がときどき会っていたものと仮定しよう。相手と直接会って取引するのが好きな人間かもしれない。バーで会ったのではないだろうか。バーだとしたら、それは二人のオフィスのどちらかに近い店ではないだろうか。もちろん、二人のどちらかに関わりのある区域から、できるだけ離れた場所で会った可能性もある。しかし、そもそもわたしの計画全体が、闇夜に鉄砲の連続を土台にしているのだ。市の全域をしらみつぶしに捜索する手段を持たないわたしとしては、自分の手帳にもうひとつ仮定をつけ加えて、二人が会っていて、会った場所がバーなら、そのバーが二人の職場の近くにあることを望むしかない。こんな計画では、網に引っかかる獲物はないかもしれないが、これがわたしに思いつけるすべてだった。明日の夜の急進的な女たちの集会で、アニタに関して何か聞き出せるかもしれないことに、より多くの望みをかけていた。それまでのあいだ、忙しく動きまわっている必要がある。

エイジャックスのガラスと鋼鉄製の高層ビルは、ミシガン・アヴェニューとアダムズ通

りの交差点にそびえている。ループでは、ミシガンが一番東の通りになる。通りを隔ててシカゴ美術館があり、数々の噴水や花壇を配したグラント公園が湖まで広がっている。わたしはラサール通りのフォート・ディアボーン信託銀行を西の境界線と定めて、エイジャックスの二ブロック南にあたるヴァン・ビューレン通りから、三ブロック北のワシントン通りまでを調べることに決めた。なんとも勝手な決め方だが、この区域内のバーをまわるだけでも、けっこう忙しいだろう。必要な場合には、捨て鉢な気分で捜索区域を広げればいい。

南行きのバスで美術館を過ぎ、ヴァン・ビューレンまで行ってそこで降りた。いまから調べなくてはならない広大な区域のことを思ったとき、高層ビルの谷間を歩く自分がひどくちっぽけに感じられた。無数のバーテンダーから答えをもらうために、いったい何杯ぐらいの酒を飲まなくてはならないのだろう。もっと上手なやり方があるのかもしれないが、わたしの心に浮かんだ方法はこれしかなかった。自分で思いついた方法に基づいて調査するしかない。ピーター・ウィムジイ卿（ドロシイ・セイヤーズ創作の名探偵）がわたしの家にいて、完璧に筋の通った答えを考えてくれるわけではないのだから。

肩をいからせ、ヴァン・ビューレン通りを半ブロック歩いて、最初に通りかかったバー〈スポット〉に入った。念入りな作り話をさんざん考えたあげく、結局は、真実に近いものが一番いいだろうと決めた。

〈スポット〉は貨物列車の車掌車のような造りの、暗くて狭い酒場だった。西側の壁ぎわにブースが並び、東側には端から端までの長いカウンターがあって、あとはブースの客の注文を訊くのが仕事の、金髪に染めた、ずんぐりしたウェイトレスの動きまわる余地が残されているだけだった。

わたしはカウンターにすわった。バーテンダーがグラスを洗っていた。昼食の客はほとんど帰ったあとだ。頑固な酒飲み連中が二、三人、わたしからずっと離れたところにすわっている。ブースのひとつでは、二人連れの女性がハンバーガーとダイキリの昼食を終えるところだった。バーテンダーはわたしの注文を訊きにくる前に、最後のグラスをゆすぎ終えるまで几帳面に彼の仕事を続けた。わたしは格別急いでもいない女のふりをして、ぼんやり目の前を見つめていた。

ふだんならビールは飲まないが、一日中バーめぐりをするとなると、注文するのに最適なものはたぶんビールだろう。ビールなら酔うことはあるまい。いや、すくなくとも、ワインや蒸留酒ほど早くはまわらないだろう。

「生ビールちょうだい」

バーテンダーはビア樽のコックのところへ行って、グラスを淡黄色の液体と泡で満たした。それを持って彼がもどってきたとき、わたしはフォルダーを引っぱり出した。「この二人が飲みにきたのを見かけたことはない?」と訊いた。

彼は難しい表情になった。「お客さん、誰なんです？　おまわりかなんか？」
「ええ」わたしはいった。「この二人がここで会ってるのを、見たことはないかしら」
「そういう質問なら、ボスを呼んだほうがよさそうだ」彼が声を張り上げて、「ハーマン！」と呼ぶと、店内の一番遠い端にあるブースで、ポリエステルのスーツ姿のいかつい男が立ち上がった。わたしは店に入ったとき、その男に気づかなかったのだが、いまはもう一人のウェイトレスが同じブースにいるのも見てとれた。二人は昼食どきの騒々しい混雑のあとで、遅い昼食をとっているところだった。
いかつい男は、カウンターの奥にいるバーテンダーのところへやってきた。
「どうした、ルーク？」
ルークはわたしのほうへぐいと頭をひねった。「ご婦人が訊きたいことがあるそうで」彼はグラスのところにもどり、それらをレジの両側へピラミッド形に注意深く積み重ねていった。ハーマンがわたしのそばにきた。がっしりした顔は手ごわい感じだが、卑劣には見えなかった。「どういうご用でしょう？」
わたしはもう一度写真を引っぱり出した。「この二人の男が一緒にここへ飲みにきたことがあるかどうか、教えてもらいたいの」と、感情を交えない声でいった。
「法的な理由があって訊いてるのかね」
わたしはバッグから私立探偵の許可証をとりだした。「わたしは私立探偵よ。大陪審の

審理がおこなわれてて、証人と陪審員のあいだに共謀の疑いが出ているの」そういって、彼に許可証を見せた。

　彼は許可証をざっと見て、何やらつぶやき、わたしに投げて返した。「うん、確かに探偵さんだ、間違いない。しかし、その大陪審の話ってのは聞いてないね。この男だったら知ってる」マスターズの写真を軽く叩いた。「エイジャックスの人だ。そうちょくちょくくるわけじゃなくて、まあ一年に三回ってとこだが、おれがこの店をやるようになってからずっとそのペースだ」

　わたしは何もいわずに、ビールを一口飲んだ。きまりが悪くて喉がからからにかわいたときは、何を飲んでもおいしく感じるものだ。

「もひとつ無料で教えとくと、もう一人の男は一度もきてないぜ。すくなくとも、おれがここで店を始めてからはな」彼はけたたましい笑い声を上げ、カウンター越しに手を伸ばしてわたしの頬を軽く叩いた。「いいんだよ、クッキーちゃん、あんたの話が嘘だなんていってやしないからさ」

「ご親切ね」わたしはそっけなくいった。「ビール、おいくら?」

「店のおごり」彼はまたしても大声で笑い、身体を揺すぶりながら、食べかけの昼食をすませようと通路をもどっていった。わたしは水っぽいビールをもう一口飲んだ。それから、ルークのためにカウンターに一ドル置いて、ゆっくり歩いて酒場を出た。

ヴァン・ビューレン通りをさらに歩き、〈シアーズ〉のシカゴ本社を通りすぎた。通りの反対側にはファストフードの店がたくさんあったが、次のバーが見つかったのは、さらに一ブロック歩いてからだった。バーテンダーはぼうっとした顔で写真をながめて、ウェイトレスを呼んだ。彼女は両方の写真を疑わしげに見てから、マグローの写真をとった。

「どっかで見たような顔だわ」といった。「テレビかなんかに出てる人?」わたしは、そうではない、この店で彼を見たことはないか、と訊いた。彼女は、見た覚えはないが、自信を持っていいきれるわけでもないといった。マスターズのほうはどうだろう。やはり見た覚えはないが、店には大勢のビジネスマンが飲みにくるし、灰色の髪とビジネス・スーツの男たちはしばらくたつと、心のなかで全部ごっちゃになってしまう、とのことだった。

わたしはカウンターに一ドル紙幣を二枚、一枚はウェイトレスに、もう一枚はバーテンダーへのつもりで置いて、表通りを歩きはじめた。

「テレビに出てる人?」というウェイトレスの質問が、もうすこしましな口実をこしらえるヒントになった。次に入ったバーでは、マーケット・リサーチをやっている者だと前置きして、テレビ視聴者の注目度を調べているのだと述べた。〝この二人が一緒のところを、どなたか見た覚えはありませんか〟この方法は前よりも多くの関心を集めたが、結果はまたしても空振りに終わった。

このバーではテレビで野球中継をやっていて、いまは四回裏、四対〇でシンシナティ・

レッズがリードしていた。ビットナーがシングル・ヒットを打ち、手に汗握る盗塁をやって二塁でアウトになるのを見てから、わたしは店を出た。その午後は試合の大半を切れぎれに見ながら、全部で三十二軒のバーをまわった。カプスは六対二で負けた。わたしは自分の領域をほぼ完全に調べ上げた。マグローを漠然と記憶している店が二軒ばかりあったが、それはたぶん、この何年かのあいだに彼の写真が何回も新聞に出たせいだろう。ジミー・ホッファ（トラック運転手の組合であるティムスターのもと委員長。汚職にからんで失踪）の写真を見せたって、大部分の人間はたぶん、なんとなく見覚えがあるとしかいわないだろう。別の一軒では、マスターズをエイジャックスの人間の一人として見覚えていたし、〈ビリーズ〉というバーでは彼の名前と肩書きまで知っていた。しかし、どちらの店も、マグローが一緒にいるのを見た記憶はないといった。突っけんどんな店も何軒かあって、そこから答えを得るには賄賂と脅迫を組み合わせなくてはならなかった。無関心な店もあった。〈スポット〉のように、支配人がいなければ決断できない店もあった。しかし、わたしの二人組が一緒のところを見かけた店は一軒もなかった。

ミシガン・アヴェニューの二ブロック西にあたるワシントン通りとステート通りの交差点にたどり着いたときは、すでに六時をまわっていた。五軒目の酒場からあとは、注文したビールに口をつけることさえやめてしまったが、汗ばみ、気が滅入ると同時に、身体全体が軽くむくんでいるような気がしていた。八時には〈エイハブ〉でラルフと食事の約束

だ。午後の仕事はこれでおしまいにして、まずは帰って汗を洗い流すことに決めた。

ステート通りからウォバッシュ・アヴェニューに至る通りの北側は、マーシャル・フィールド（シカゴ最大のデパート）に占領されている。わたしの街並みの記憶に誤りがなければ、ワシントン通りのミシガンに近いところに、もう一軒バーがあったような気がする。それはまた別の日にすればいいだろう。ステート通りの地下鉄の階段を降りて、アディスン通りに向かうB列車に乗った。

夕方のラッシュ・アワーはまだピークが続いていた。座席が見つからず、結局はフラートン・アヴェニューまで立ち通しだった。

ロティのアパートメントにもどると、浴室に直行して冷たいシャワーを浴びた。浴室を出てから、ゲストルームをのぞいた。ジルはもうベッドにいなかったので、脱いだ服を引出しに突っこんで、カフタンを着た。ジルは居間の床に腰を降ろして、三歳か四歳と思われる、ばら色の頬に黒い髪の二人の子供と遊んでいた。

「ただいま、ハニー。よく眠れた？」

ジルはわたしを見上げて、笑顔になった。顔色がずいぶんよくなっているし、以前よりはるかにくつろいでいる様子だ。「お帰りなさい」といった。「ぐっすり寝たわ。一時間前に起きたばかり。この子たち、キャロルの姪なの。今夜はこの子たちのお守りを頼まれてたそうなんだけど、ロティがキャロルを説き伏せて、ここにきて、自家製エンチラーダ

な作ってもらうことにしたの。おいしいんだって」

「おいしいのよ」二人のおちびさんが合唱した。

「まあ、すてきね。わたし今夜はもう一度出かけなきゃならないから、残念ながら食べられないけど」

シルはうなずいた。「ロティがそういってたわ。探偵の仕事が残ってるの？」

「まあね、そんなとこ」

ロティが台所から大声で呼んだので、ただいまをいうために台所へ行った。キャロルがガスレンジのところで忙しく立ち働いている最中で、ちらっと振り返って、わたしに明るい笑顔をよこした。ロティはテーブルにすわり、永久不変のコーヒーを飲みながら、新聞に目を通していた。目を細めてわたしを見た。「今日の午後の探偵稼業はあまり楽しくなかったようね、どう？」

わたしは笑った。「そうなの。収穫ゼロで、聞き込みをやるのにビールをしこたま飲まなきゃならなかったわ。ビールの臭いがプンプンしてる。今夜のデート、キャンセルできればいいのに」

「じゃ、そうなさい」

わたしは首を振った。「あまり時間がないような気がするの。たぶん、今日の二度目の殺人のせいだわ。多少頭がふらついても——なにしろ、今日はすごく長い一日だったし、

CamScannerでスキャン

すごく暑かったから——やめるわけにはいかないわ。ディナーの席で吐いたりしないことを祈るだけよ。そうでなくても、今夜のデートの相手はわたしにうんざりなんだもの。もっとも、こちらが気絶かなんかすれば、彼、自分のほうが強いと感じて保護本能をそそられるかもしれないけど」わたしは肩をすくめた。「ジルはずいぶん元気になったようね、そう思わない？」

「ほんとにそう。ぐっすり眠ったのがよかったのね。名案だったわ、あの子をしばらくでもあの家から遠ざけることにしたのは。帰ってきたときに、あの子とすこし話してみたのよ。ずいぶんお行儀のいい子で、泣き言も愚痴もいわないけど、母親が親らしい感情を持ってないのは明らかかね。それから、姉に至っては——」ロティは表情に富んだしぐさを見せた。

「そうね、同感。だけど、永久にあの子を預かるわけにはいかないわ。それに、昼のあいだ何をさせとけばいいの？　わたしは明日もまた出かけなきゃならないし、あの子を一緒に連れて行けるような用事じゃないのよ」

「じつはそのことなんだけど、ずっと考えてたの。あの子がローザとトレイシー——ほら、キャロルの姪たち——と遊んでるのを見て、キャロルとわたしで思いついたことがあるの。ジルは子供たちの扱いが上手だわ——自分から相手を引き受けたのよ。こっちが頼んだわけじゃないのに。落ちこんでるときは、赤ちゃんっていいものよ。柔らかいし、あれこれ

らうるさく訊かないし、抱きしめられるものね。昼間、あの子に診療所へきてもらって、子供たちの世話をしてもらってはどうかしら。あなたも今日の朝見たと思うけど、子供っていつもそこらじゅう駆けまわってるものでしょ。母親は病気のときでも子供から目を離すことができない。それから、赤ちゃんの一人が病気になった場合、ママがその子を診察室に連れて入ってるあいだ、ほかの子の面倒は誰が見ればいいの？」

わたしはそれについてしばらく考えてみたが、不都合な点はどこにも見当たらなかった。「本人に訊いてみて」といった。「確かに、いまのあの子にとって一番いいのは、何か仕事を持つことね」

ロティは立ち上がり、居間へ行った。わたしもついて行った。わたしたちはしばらく立ったまま、床の上の三人の少女をながめていた。三人とも何がそんなに忙しいのかわからないが、とにかくひどく忙しそうだ。ロティは少女たちの横にしゃがんで、自由に動きまわった。わたしは背景へと引っこんだ。ロティの話すスペイン語は完璧で、その言葉で一分ほど幼い少女たちに話しかけた。ジルは尊敬の目で彼女を見つめていた。

それから、ロティはしゃがんだ姿勢で楽にバランスを保ったまま、ジルのほうを向いた。「小さな子の面倒を見るのがとっても上手ね。子供たちの世話をした経験があるの？」

「六月に、近くの小さなデイ・キャンプで指導員をやりました」そういって、ジルはすこし赤くなった。「でも、それだけです。ベビー・シッターとか、そういう経験はぜんぜん

「あのね、わたし、ちょっと思いついたことがあるのよ。それであなたの意見を訊きたいの。ツィクはあなたのお父さんとお兄さんが殺された理由を探るために、四六時中留守にしなきゃならないの。それでね、あなたがここにいるあいだ、診療所でわたしの手伝いをしてくれるととっても助かるんだけど」ロティは自分の考えをざっと説明した。

ジルの顔が輝いた。「でも、いいのかしら」と、真剣にいった。「あたし、なんの訓練も受けてないのに。子供たち全員が泣くとかなんかしはじめたら、どうしていいかわからなくなるかも」

「あら、そうなったら、あなたの腕と忍耐力を試す絶好のチャンスじゃない」ロティはいった。「引出し一杯のロリポップを使って、わたしもすこしは助けてあげられるわ。歯に悪いかもしれないけど、涙には効果てきめんよ」

わたしはディナー用の服に着換えようと思って、寝室に入った。ジルはベッドを整えていなかった。シーツがくしゃくしゃだった。わたしはそれを引っぱって伸ばし、心の平静をとりもどすためにほんのしばらく横になろうと思った。

次に気づいたのは、ロティがわたしを揺り起こそうとしていることだった。「七時半よ、ヴィク。出かけなくていいの？」

「わっ、大変！」わたしはあわてた。眠気で頭がぼうっとしている。「ありがと、ロテ

ィ」ベッドから飛び降りて、大急ぎで鮮やかなオレンジ色のサンドレスを着た。スミス&ウェッスンをバッグに突っこみ、セーターをつかんで、ジルに「行ってくるね」と声をかけながら、表に飛び出した。気の毒なラルフ。エイジャックスのことで彼の知恵を借りるために、いくつものレストランで待ちぼうけを食わせるなんて、ひどい虐待だ。

レイク・ショア・ドライヴを南へ向かったのが七時五十分、そして、レストランのあるラッシュ通りに入ったのが八時ちょうどだった。わたしの偏見のひとつに、車を駐めるときに金は払わないという主義があるが、今夜は、路上駐車できる場所を捜して時間を浪費している余裕はなかった。〈エイハブ〉の向かいにある駐車場の係員に車を預けた。店のドアをくぐりながら腕時計を見た。八時八分。ぎりぎりセーフ。一時間寝入ったせいか、まだ頭がぼうっと重いが、とにかくそれだけでも眠れたことがうれしかった。

ラルフが入口のところで待っていた。挨拶がわりに軽くキスしてから、わたしの顔を点検するためうしろへ下がった。「間違いなくよくなっている」と認めた。「それに、歩き方も元にもどったじゃないか」

給仕長がやってきた。月曜の夜は比較的すいていて、すぐさま、わたしたちをテーブルに案内してくれた。「お客さまの給仕はティムがいたします」といった。「お飲物はいかがなさいますか」

ラルフはジン・トニックを頼んだ。わたしはソーダ水にした。ビールを飲んだ上にスコ

ッチというのは、どうもぞっとしない。

「離婚して都心部に引っ越す利点のひとつは、豪華なレストランだね」ラルフはいった。

「ここには二回ほどきてるけど、ぼくの家の近くにもレストランはいっぱいある」

「家はどこなの？」わたしは訊いた。

「エルム通り、ここからそんなに遠くない。家具つきで、家政婦のサービスもついている」

「便利ね」かなりの金がかかるに違いないと思った。彼の収入はどれくらいだろう。「奥さんへの離婚手当も含めると、すごいお金じゃない」

「よしてくれよ」彼は苦笑した。「こっちに越してくるときは、エイジャックスの周囲を除いて市内のことなんか何も知らなかったし、気に食わない部屋を長期契約で借りるのはいやだった。そのうち、コンドミニアムでも買おうと思ってる」

「話は変わるけど、マグローがマスターズに電話してきたことがあるかどうか、調べてくれた？」

「そりゃもう、及ばずながらやりましたよ、ヴィク。やっぱりぼくのいったとおりさ。そんな電話は一回もかかってない」

「まさか、本人に訊いたんじゃないでしょうね」

「とんでもない」ラルフの陽気な顔が怒りで曇った。「きみの頼みを頭に叩きこんで、部

長の秘書にこっそり訊いただけだよ。もちろん、秘書がそれを部長に報告しないという保証はできないけどさ。この問題はこれで片づいたんじゃないの」

わたしも少々腹立ちを覚えたが、顔には出さないようにした。保険金支払手形をどうしてもラルフに見せたかった。

ティムがわたしたちの注文を訊きにやってきた。わたしはポーチト・サーモン（鮭のオーブン焼）を、ラルフはスキャンピ（小エビのフライ料理）を頼んだ。二人でサラダバーへ行き、わたしはそのあいだに、ディナーを盛り上げるための無難な話題を探した。食事が終わるまで、手形を見せるつもりはなかった。

「ぼくの離婚のことはずいぶんしゃべったのに、きみに結婚の経験があるのかどうか、まだ一度も聞いてなかったね」ラルフがいった。

「あるわ」

「で、どうなったの？」

「ずいぶん昔の話よ、きっと。二人とも結婚に対する心構えができてなかったんだわ。現在、彼は弁護士として活躍中で、ヒンズデイルに住んでて、家族は奥さんと小さな子供三人」

「いまでも会うことはある？」ラルフは知りたがった。

「ううん、それに彼のことなんか考えもしない。でも、新聞にしょっちゅう名前が出てる

わた。クリスマスにカードを送ってきたわ。わたしが子供たちとヒンズデイルのことを知ってるのはそのためよ。暖炉の前で子供たちが甘ったるい笑顔を見せてる、やけにべたべたした写真だったわ。それを送ってきたのが自分の生殖能力を証明するためなのか、それともわたしが失ったものを見せつけるためなのか、よくわからないけど」

「失って残念だと思ってる？」

怒りが募ってきた。「わたしが夫と家庭を持つことに憧れてるかどうかを、遠回しに訊くつもりなの？　ディックと別れて残念だなんてもちろん思ってないし、意のままにできる三人の子供がいないことを悲しむ気持ちもないわ」

ラルフはびっくりした表情を見せた。「落ち着けよ、ヴィク。ディックの家庭とごっちゃにせずに、家庭を持たないのを残念がることはできないのかい？　ぼくだってドロシーと別れて残念だとは思わない——だからって、結婚はこりごりだとも思ってない。それから、自分の子供たちが恋しくないとしたら、男としては失格だ」

ティムが料理を運んできた。鮭には風味豊かなピメント・ソースがかかっていたが、感情が高ぶったわたしにはそれを心ゆくまで味わうだけの余裕がなかった。無理に笑みを浮かべた。「ごめんなさい。子供のいない女はぶどう抜きのウェルチジュースみたいなものだと考える人の前では、ついむきになってしまうの」

「おやおや、頼むからぼくに八つ当たりしないでくれ。ぼくが保護者みたいな態度をとっ

て、ギャングを追っかけるきみを止めようとしたからって、家でおとなしくメロドラマを見て、洗濯してるべきだと思ってるわけじゃないからね」

わたしは鮭をすこし食べながら、ディックのことと、短くて不幸だった結婚生活を思い出していた。ラルフはわたしを見つめ、その表情豊かな顔にはわたしを心配する心と、かすかな不安があらわれていた。

「最初の結婚がこわれた理由は、わたしの自立心が強すぎたせいなの。それから、あなたもこのあいだの夜気がついたと思うけど、わたし、家事はさぼりっぱなしなの。でも、一番の問題はわたしの自立心。強烈な縄張り意識とでもいうのかしら。そうねえ――どう説明すればいいかなあ――」わたしは笑顔を作った。「説明するのは難しいわ」言葉を切り、二、三分のあいだ、皿の料理に注意を集中した。下唇をかんで、話の続きを始めた。「女友達なら、うんと親しい相手が何人かいるわ。だって、みんな、わたしの縄張りを荒らそうとしないもの。ところが、男性が相手だと、必ずというか、しばしばというか、自分の立場を守るために戦わなきゃいけないような気にさせられるの」

ラルフはうなずいた。わかっているのかどうかこころもとないが、興味は覚えたようだ。わたしは鮭をまたすこし食べて、ワインをすこし飲んだ。

「ディックのときは、さらにひどかったわ。どうしてあんな男と結婚したのか、自分でも不思議なくらい――それは彼が白人のアングロ・サクソン集団を代表していて、わたしも

ああ、クリスマスにカードを送ってきたわ。わたしが子供たちとヒンズデイルのことを知ってるのはそのためよ。暖炉の前で子供たちが甘ったるい笑顔を見せてる、やけにべたべたした写真だったわ。それを送ってきたのが自分の生殖能力を証明するためなのか、それともわたしが失ったものを見せつけるためなのか、よくわからないけど」

「失って残念だと思ってる？」

怒りが募ってきた。「わたしが夫と家庭を持つことに憧れてるかどうかを、遠回しに訊くつもりなの？　ディックと別れて残念だなんてもちろん思ってないし、意のままにできる三人の子供がいないことを悲しむ気持ちもないわ」

ラルフはびっくりした表情を見せた。「落ち着けよ、ヴィク。ディックの家庭とごっちゃにせずに、家庭を持たないのを残念がることはできないのかい？　ぼくだってドロシーと別れて残念だとは思わない――だからって、結婚はこりごりだとも思ってない。それから、自分の子供たちが恋しくないとしたら、男としては失格だ」

ティムが料理を運んできた。鮭には風味豊かなピメント・ソースがかかっていたが、感情が高ぶったわたしにはそれを心ゆくまで味わうだけの余裕がなかった。無理に笑みを浮かべた。「ごめんなさい。子供のいない女はぶどう抜きのウェルチジュースみたいなものだと考える人の前では、ついむきになってしまうの」

「おやおや、頼むからぼくに八つ当たりしないでくれ。ぼくが保護者みたいな態度をとっ

CamScannerでスキャン

て、ギャングを追っかけるきみを止めようとしたからって、家でおとなしくメロドラマを見て、洗濯してるべきだと思ってるわけじゃないからね」

　わたしは鮭をすこし食べながら、ディックのことと、短くて不幸だった結婚生活を思い出していた。ラルフはわたしを見つめ、その表情豊かな顔にはわたしを心配する心と、かすかな不安があらわれていた。

「最初の結婚がこわれた理由は、わたしの自立心が強すぎたせいなの。それから、あなたもこのあいだの夜気がついたと思うけど、わたし、家事はさぼりっぱなしなの。でも、一番の問題はわたしの自立心。強烈な縄張り意識とでもいうのかしら。そうねえ――どう説明すればいいかなあ――」わたしは笑顔を作った。「説明するのは難しいわ」言葉を切り、二、三分のあいだ、皿の料理に注意を集中した。下唇をかんで、話の続きを始めた。「女友達なら、うんと親しい相手が何人かいるわ。だって、みんな、わたしの縄張りを荒らそうとしないもの。ところが、男性が相手だと、必ずというか、しばしばというか、自分の立場を守るために戦わなきゃいけないような気にさせられるの」

　ラルフはうなずいた。わかっているのかどうかこころもとないが、興味は覚えたようだ。わたしは鮭をまたすこし食べて、ワインをすこし飲んだ。

「ディックのときは、さらにひどかったわ。どうしてあんな男と結婚したのか、自分でも不思議なくらい――それは彼が白人のアングロ・サクソン集団を代表していて、わたしも

CamScannerでスキャン

心の片隅でその仲間になることを望んでたからじゃないかって、ときどき思うこともあるけど。とにかく、わたしのような人間にとって、ディックは最低の夫だった。クロフォード＝ミードの弁護士だったの。巨大な超一流の法律事務所なんだけど、ご存じない？ そしてわたしのほうは、国選弁護士会に所属する新進気鋭の弁護士だった。わたしたちが出会ったのは、弁護士会の会合だった。わたしの自立心旺盛なところが原因で、ディックはわたしに恋をしたと思いこんだの。あとから考えてみると、彼がその自立心を挑戦ととったのが、恋の原因だったように思えてならないんだけど。やがて、それを叩きつぶすことができないと知って、あの人、ひどく腹を立ててたわ。

そのうち、わたしは国選弁護士会で仕事をすることに幻滅を覚えるようになった。腐敗しきった組織だった。正義のために弁護するんじゃなくて、考えてるのは法律上の屁理屈をこねまわすことばかり。そんなとこは脱け出そうと思ったけど、それでもまだ、法律技術上の点数かせぎじゃなくて、自分の正義感に従って仕事をしているという気持ちになれる仕事をしたいと思っていたわ。国選弁護士会をやめて、さてこれからどうしようと迷っていたとき、一人の女の子がわたしを訪ねてきて、盗みの疑いをかけられた兄を助けてほしいって頼んだの。有罪としか考えられない状況だったわ。大企業のスタジオからビデオ一式を盗み出した疑いをかけられてて、彼には手段も機会もそのほかのものも揃ってたけど、わたしは事件を引き受け、誰が真犯人かを突き止めて、彼の無実をはっきりさせたの

よ」

わたしはワインをさらに飲んで、鮭をつついた。ラルフの皿は空になっていたが、彼は手を振ってティムを遠ざけた——「ご婦人がすむまで待ってくれ」

「でね、そのあいだずっと、ディックはわたしが家庭の主婦として落ち着くのを待ってたの。国選弁護士会をやめることで悩んでたころは、ずいぶん励ましてくれたけど、それも結局は、わたしが仕事をやめて家庭に引きこもり、法曹界のはしごをよじのぼっていく彼を、そばで声援することを望んでたからだってわかったの。事件を引き受けたとき——といっても、そのときのわたしにとってそれは事件ではなくて、女の子をわたしのところによこした女性への義理にすぎなかったけど——」（その女性がロティだった）こうしたいろんなことを考えてから、かなりの歳月が流れたわけで、わたしはいま、思わず笑い出していた。ラルフが怪訝な顔をした。

「じつはね、わたし、自分の任務をすごく重大に考えて、ついには倉庫の搬出口で一晩明かすことになってしまったの。結局はそれが事件の転機になったんだけど。同じ夜に、クロフォード＝ミードが奥さんたち同伴の盛大なカクテル・パーティをひらくことになってたわ。わたしはドックへこっそり出かけてからパーティ会場にまわろうと思って、カクテル・ドレスを着て出たんだけど、知らないうちに時間がたってしまって、ディックはパーティをすっぽかしたわたしを、どうしても許そうとしなかった。それが原因で、わたした

ち別れることになったの。当時はずいぶん苦しんだけど、いま思い返してみると、あの夜のことはなんともばかげていて、つい笑いたくなってしまう」

皿を脇へ押しやった。魚は半分食べただけだが、どうも食欲が湧かなかった。「問題は、いまのわたしが銃声をすこし怖がるようになったってことね。ほんというと、子供を二人持って、中流の家庭生活を送ってみたいと思うことがときどきあるのよ。でも、それは神話よね。家族が和気藹々としてて、お金が充分にあってというような、コマーシャルに出てくるみたいな生活を送ってる人は、ほとんどいない。わたしが憧れてるのが神話で、現実じゃないってことは、よくわかってるわ。ただね、自分の選択が間違ってたんじゃないかと思うと、とても怖いの。あるいは——そうねえ、どう表現すればいいのかしら。もしかしたら、家でメロドラマを見てるべきかもしれない。もしかしたら、自分の人生にとって一番いいことをやっていないのかもしれない。だから、人がそれを遠回しに指摘しようとすると、わたしはその人たちの頭をかみちぎってしまうのよ」

ラルフがテーブル越しに手を伸ばして、わたしの手を握りしめた。「きみはすばらしいよ、ヴィク。ぼくはきみの生き方のほうが好きだ。ディックなんて最低だね。そいつのせいで、われわれ男性に見切りをつけちゃだめだよ」

わたしは笑顔になって、彼の手を握り返した。「わかってるわ。でも——わたしは腕利きの探偵で、これでもけっこう名前が通ってるのよ。それに、これは主婦業と両立させる

のが簡単な仕事じゃないわ。忙しいのはときたまだけど、夢中で何かを追っかけてるときに、夕食をどうすればいいのかわからなくて家でいらいらしてる人のことを思い出して、注意をそらされたりするのはいやなの。あるいは、アール・シュマイセンに殴られたからって、大騒ぎされるのもごめんだわ」

ラルフは空になった彼の皿を見下ろして、何か考えながらうなずいた。「なるほどね」と、にやっと笑った。「〝子供と郊外族〟の部はすでに経験ずみで、きみの成功に横から声援を送る男を見つけることだって、もちろんできるんだよ」

ティムがデザートの注文を訊くためにもどってきた。わたしは〈エイハブ〉自慢の、アイスクリームのリキュールがけを選んだ。魚は食べ残したのだし、とにかく節制を続けるのはうんざり。ラルフも同じものにした。

「だけど、今回のアール・シュマイセンみたいな事件は、慣れるまでにかなりかかると思うな」ティムがふたたび姿を消してから、ラルフはつけ加えた。

「損害査定をやるのだって、危険なんじゃない？」わたしは訊いた。「わたしの想像だけど、詐欺行為が発覚するのをあんまり喜ばない不正な保険金請求者に、ときどきはぶつかるんじゃないかしら」

「そりゃあるよ」彼は認めた。「しかし、不正な保険金請求を立証するのは、きみが思ってるよりも大変なんだ。特に事故の場合が難しい。保険金の分け前につられて、立証不能

の怪我――たとえばレントゲン写真に出ない背中の筋の痛みなんかな、喜んで証言する悪徳医者は大勢いるからね。
　ぼく自身が危険な目にあったことは、まだ一度もない。水増し請求であることにこちらが気づき、気づいたことを相手も悟るが、どちらの方向へも証明する手立てがないときはどうするかというと、ふつうは、法廷闘争になった場合にかかる額よりもかなり低めの示談金を、現金で相手に渡すことにしている。それで向こうも引き下がる。訴訟というのは保険会社にとって、ひどく高いものにつくんだ。陪審は請求者側の肩を持つことにほぼ決まってるからね。だから、詐欺といっても、まわりで思うほどショッキングな出来事じゃないんだ」
「その件数はどれぐらい？」
「そうだな、誰もが保険会社は詐欺をやる連中に不労所得を渡すために存在している、と思っている。結局は高い保険料率となって必ずはね返ってくることが、詐欺師どもにはわかってないんだ。しかし、金を巻き上げられる割合がどの程度かとなると、断言はできないな。現場で働いてたころは、二十件か三十件に一件は詐欺じゃないかって気がしてた。ただね、膨大な件数を扱うから、一件一件を徹底的に検討するのはどうしても無理なんだ。集中的に調べるのは高額のやつだけさ」
　すでにティムがアイスクリームを運んできていて、それは罪深いといえるほどおいしいか

CamScannerでスキャン

った。わたしは皿の底から最後のかたまりをすくい上げた。「このあいだ、アパートメントで、保険金支払の手形が落ちてるのを見つけたのよ。エイジャックスの手形で、カーボン・コピーだったわ。はたして本物かしら」

「きみが？」ラルフは驚いた。「どこで見つけたの？　きみのアパートメント？」

「いえ、じつをいうと、セイヤーの息子のアパートメント」

「いま持ってる？　見てみたいな」

わたしは床のバッグをとり、ジッパーつきの脇ポケットから紙片を出してラルフに渡した。彼はそれをしげしげと見た。最後にいった。「確かにうちの手形のようだ。あいつ、こんなものを持ち帰ってどうするつもりだったんだろう。保険金支払ファイルを持って帰ることは、いっさい禁じられてるのに」

彼はそれをたたんで札入れにしまった。「これはオフィスにもどしておくよ」

わたしはあわてなかった。ゼロックスのコピーをとるという先見の明があったことを、喜んだだけだった。「請求者については知ってる？」と訊いてみた。

彼はもう一度手形を引っぱり出して、名前を見た。「さあ、どう発音するかもわからない。しかし、この州における最高の保険金が支払われているところをみると、一時的、あるいは永久的な完全労働不能のケースに違いない。となると、この人物についてはかなり詳しいファイルがあるはずだ。この手形、どうして油でべとべとしてるんだい？」

CamScannerでスキャン

「ああ、床に落ちてたせいよ」わたしは曖昧に答えた。

ティムが勘定書を持ってきたとき、わたしは割り勘にすべきだと主張した。「こういう食事ばかりしてると、いまに離婚手当か家賃のどちらかを払いきれなくなるわよ」

彼はようやく、割り勘を承知した。「ところで、家賃が払えなくてアパートメントから追い出される前に、ぼくの住まいを見ておきたいと思わない？」

わたしは笑った。「もちろんよ、ラルフ。ぜひ見たいわ」

13 ザヴの傷痕

ラルフの目覚ましが六時半に鳴り出した。わたしは薄目をあけてちらっと時計を見てから、枕の下に頭をうずめた。ラルフがすぐあとからもぐりこもうとしたが、枕で両方の耳をしっかり覆って、彼を撃退した。ラルフが小競り合いのおかげで、すっかり目がさめてしまった。わたしはベッドに起き上がった。「どうしてこんなに早いのよ。七時半に出勤しなきゃならないの？」

「ぼくには早くないよ、ベイビー。ダウナーズ・グローヴに住んでたころは、毎朝五時四十五分起きと決まっていた――いまなんて贅沢なものさ。それに、ぼくは朝が好きなんだ。一日のうちで最高の時間じゃないか」

わたしはうめいて、ふたたび横になった。「そうね、わたし、よくいうのよ、神さまは朝が大好きだったに違いないって。だって、こんなにたくさん朝をお創りになったんだもの。コーヒー持ってきてもらえない？」

彼はベッドから出て、腰をかがめた。「かしこまりました、ミス・ウォーショースキー。

笑顔でお給仕を」

笑い出さずにはいられなかった。「あなたがこんなに朝早くから張り切るのなら、わたし、朝ごはんは北にもどって食べることにしようかしら」足で勢いよく弧を描いてベッドを降りた。アールと彼の手下どもに出会ってから今日が四度目の朝で、痛みはほとんどなかった。明らかに、ふだんの鍛練のおかげだ。そろそろ再開したほうがいいだろう。病人だからという口実で習慣を捨ててしまうのは、たやすいことだ。

「食事ぐらいお出ししますよ」ラルフがいった。「豪華版ではないけど、トーストならあるから」

「あのね、じつはわたし、今朝は食事の前にランニングをやりたいの。五日もさぼったままだし、がんばって続けないと、たちまち坂を転げ落ちてしまうわ。それに、ロティの家に十代のお客さまを連れてきてるから、その子がどうしてるか見に行かなくては」

「十代の男の子たちを連れこんで、けしからんバカ騒ぎか何かをやらかすんじゃないかぎり、ぼくはいっこう気にしない。今夜、ここにもどっておいでよ」

「うーん、たぶんだめだわ。今夜はある会合に出る予定になってるし、たまにはロティやわたしの友達と一緒に過ごしたいから」わたしは依然として、ラルフのしつこさが気になっていた。わたしを監視するつもりだろうか。それとも、初めて女に夢中になって、追いかけまわそうとする、孤独な男なのだろうか。ジョンとピーター・セイヤーの死にマスタ

ーズが関係しているなら、彼の片腕といわれ、彼のもとで三年間仕事をしてきた男も関係していると考えられないことはない。

「会社に出るのは毎朝早いの？」わたしは訊いた。

「病気でないかぎりはね」

「先週の月曜日もそうだった？」

彼は不審そうにわたしを見た。「たぶんね。どうしてそんなことを——そうか。ピーターが殺された日か。いや、忘れてた。あの朝はそんなに早く出てないんだ。ピーター・セイヤーのアパートメントまで出かけて、ヤードリーが彼を撃つあいだ、あいつの身体を押さえつけてたから」

「ヤードリーのほうはあの朝、時間どおりに出勤してた？」わたしは食い下がった。

「ぼくは部長の秘書じゃない！」ラルフはどなった。「部長はいつも同じ時間に出てくるとはかぎらない。朝食会だの、くだらん用事だののがいろいろあるんだ。それにぼくだって、ストップウォッチ片手に部長のご到着を待ち構えてるわけじゃない」

「わかった、わかったわ。そう怒らないで。あなたがマスターズを清廉潔白の権化みたいに思ってることは知ってるわ。だけど、彼が法に触れることをやってるとすれば、あなたに、信頼すべき右腕であるあなたに、助けを求めてくるかもしれないでしょ。あなただってヤードリーがほかの誰かに、あなたほど有能じゃない誰かに頼るようなことがあったら、

おもしろくないはずだわ、そうでしょ」

彼は表情を和らげ、大声で笑い出した。「とんでもないことをいう人だ。きみが男なら、そんなたわごとをいったら無事にはすまないぞ」

「わたしが男なら、こんなとこに寝てやしないわ」わたしはいい返した。片腕を伸ばして彼をもう一度ベッドに引きずりこんだが、この男は月曜の朝何をしていたのだろうという疑問が、まだ心にひっかかっていた。

ラルフは小さく口笛を吹きながら、シャワーを浴びに行った。わたしはカーテンをあけて表をのぞいた。大気がうっすらと黄色味を帯びていた。まだ早朝だというのに、街は太陽にかすかに焼かれているように見える。束の間の涼しさは過ぎ去った。暑苦しい汚染された気候がまたしばらく続きそうだ。

シャワーを浴び、服を着てから、テーブルでラルフと一緒にコーヒーを飲んだ。彼のアパートメントは大きなワンルーム型で、間仕切りによって一部が人目につかない食事コーナーになっている。台所は以前はクロゼットだったに違いない。ガスレンジと流しと冷蔵庫がきちんと並び、立ち働く余地も残されているが、椅子ひとつ置けないほどの狭さだ。見映えのしない部屋ではない。大きなカウチが入口のドアと向かいあい、それと直角に、どっしりした肘掛椅子が窓から離して置いてある。前に何かで読んだのだが、床から天井までの窓のある部屋で暮らす人間は、家具を窓から離して置くそうだ。ガラスのすぐそば

だと、墜落するような錯覚を起こすのだろう。椅子の背と、軽やかなカーテンがかかった窓のあいだには、たっぷり二フィートの間隔があった。椅子の布地とカーテンは明るい花柄で統一されている。最初から家具のついた部屋としては、なかなか趣味がいい。

　七時半にラルフは立ち上がった。「支払請求書の呼ぶ声が聞こえるんでね」と弁解した。

「明日連絡するよ、ヴィク」

「待ってるわ」わたしは答えた。なごやかな沈黙のなかで、一緒にエレベーターに乗り、階下に降りた。ラルフは車のところまで送ってくれた。駐車できる場所がレイク・ショア・ドライヴの近くにしかなかったのだ。「ダウンタウンまで乗っていかない？」と訊いてみた。彼はエイジャックスまでの一マイル半を歩くのを毎日の運動にしているからといって、断わった。

　車で走り去る途中、通りを行く彼の姿がバックミラーに映った。蒸し暑い気候にもかかわらず、さっそうとした歩きぶりだった。

　ロティの家にもどったときはまだ八時だった。彼女は台所でトーストとコーヒーの朝食をとっていた。ジルは飲みかけのミルクのコップを前に置いて、卵形の顔を表情豊かに輝かせながら、生き生きとしゃべっていた。無邪気ではつらつとしたジルを見て、わたしは老けこんだ退廃的な気分になった。ひそかにしかめっつらをした。

「おはよう、みなさん。外はひどい暑さよ」

CamScannerでスキャン

「おはよう、ヴィク」ロティはおもしろがっている表情でいった。「気の毒ね、一晩中仕事に追われてたなんて」
わたしはふざけ半分に彼女の肩をどやしつけた。ジルが、「ほんとに一晩中仕事をしてたの？」と、真剣な心配そうな声で訊いた。
「嘘よ。ロティだって知ってるのよ。ちょっと仕事してから、友達のところに泊めてもらったの。ゆうべは楽しかった？　エンチラーダ、おいしかった？」
「すごいの、最高よ！」ジルは夢中でいった。「キャロルが七つのときからお料理してたって、知ってた？」くすっと笑った。「あたしなんか、役に立つことはひとつもできないのに。アイロンかけもだめだし、スクランブルエッグの作り方だって知らない。キャロルったらあたしに、うんとお金持ちと結婚したほうがいいっていうのよ」
「あら、お料理やアイロンかけの好きな人と結婚すればいいじゃない」わたしはいった。
「ねえ、今夜、スクランブルエッグの作り方を練習してみたら？」ロティが提案した。
「あなた、今夜はうちにいるの？」と、わたしに訊いた。
「夕食、早めにしてくれる？　七時半に、シカゴ大学で人と会う予定だから――アニタを見つけるのに協力してくれるかもしれない人と」
「練習してみる、ジル？」ロティが訊いた。
ジルは難しい顔をした。「お金持ちと結婚する計画を立てようかな」ロティとわたしは

笑い出した。「ピーナツ・バターのサンドウィッチはどう？」ジルは提案した。「それだったら作ったことあるから」

「わたしがフリッタータ（オムレツ）を作ってあげる、ロティ」わたしは約束した。「あなたとジルとで、帰りにほうれん草と玉ねぎを買ってきてくれるなら」

ロティは顔をしかめた。「ヴィクは料理の腕はいいけど、散らかし屋なのよ」と、ジルにいった。「四人分の簡単なディナーなら、三十分でこしらえるけど、台所をきれいにするには、あなたとわたしが徹夜しなきゃならないわ」

「ロティ！」わたしは反論した。「フリッタータで？　約束するわよ――」しばらく考えてから笑い出した。「約束はやめた。会合に遅れるとまずいから。ジル、後片づけやっといてね」

ジルは不安そうにわたしを見た――あたしが夕食作るのをいやがったから、怒ってるの？

「あのね」わたしはいった。「完璧である必要はないのよ。たとえあなたが癇癪を起こそうと、ベッドを整えるのをさぼろうと、夕食の支度を断わろうと、ロティとわたしはあなたが大好き。わかった」

「そりゃそうよ」ロティがおもしろそうに同意した。「ヴィクとつきあいはじめてこれで十五年目だけど、ベッドを整えるところは一度も見たことないもの」

ジルはそれを聞いて笑顔になった。「今日も探偵に出かけるの？」

「そうよ、ノース・サイドまで。干し草のなかの針を捜しに行くの。一緒にお昼を食べたいけど、わたしの時間割がどうなるかわからない。でも、お昼ごろに診療所へ電話するわ」

わたしはゲストルームに入って短パンとTシャツに着換え、ランニング・シューズをはいた。準備用のストレッチ体操を半分までやったところに、ジルが入ってきた。筋肉が虐待に耐えかねてこわばっていたため、ふだんよりゆっくり慎重に進めていたところだった。ジルが入ってきたとき、わたしは軽く汗をかいていたが、それは努力の結果ではなくて、後遺症的な痛みのせいだった。ジルは立ったまま、しばらくわたしを見つめていた。「あなたのいる前で着換えてもかまわない？」と、ようやく訊いた。

「いいわよ」わたしはうめき声で答えた。「一人きりのほうが——気楽だと——いうんでなきゃ」上体をまっすぐに起こした。「お母さんに電話しておいたら？」

ジルはいやな顔をした。「ロティも同じことといってた。あたし、家出娘になって、ここに居すわろうって決めたのに」彼女はジーンズをはき、男物サイズのシャツの一枚を着た。

「このうち、大好き」

「物珍しいだけよ。いまに自分ちのプライヴェート・ビーチが恋しくなるわ」わたしは彼女をさっと抱きしめた。「でも、ロティの家には好きなだけいてかまわないのよ」

彼女はそれを聞いて笑った。「わかったわ。ママに電話する」

「わっ、えらい。行ってきまーす、ロティ」わたしはそう叫んで、玄関を出た。シェフィールド・アヴェニューは湖から約一マイル離れている。湖まで走ってから、八ブロック南に下がってディヴァーシー・アヴェニューに出て、そこから家にもどれば、ほぼ四マイルのコースになる。筋肉をほぐすという目的と、蒸し暑い気候という原因があるため、ゆっくりしたペースで走った。ふだんなら一マイルを七分半で走るところだが、今朝は九分ぐらいかけることにした。ディヴァーシーに出たところには滝のような汗が流れ、足もとがふらふらしていた。ペースを落として北に向かったが、疲れがひどすぎて、周囲の車の流れに注意を向けるゆとりはなかった。湖の散歩道を離れたとき、一台のパトカーがわたしの前で停まった。助手席にマゴニガル部長刑事がすわっていた。

「おはよう、ミス・ウォーショースキー」

「おはよう、部長刑事さん」わたしは答えながら、息を整えようとした。

「マロリー警部補から、あなたを見つけるよう命じられたものですから」マゴニガルが車から降りてきた。「昨日、ウィネッカの警察から警部補のところに電話があったんです。あなたが警察をまんまとだまして、セイヤー邸に入りこんだとかいう話でしたが」

「あら、そう？」わたしはいった。「郊外と都市部の警察がそこまで仲良く協力してるのを見ると、うれしくなるわ」足の筋肉がこわばるのを防ぐために、身体を二、三回折り曲げて、手を足の爪先につけた。

てるんです」
「連中はセイヤーの娘のことを心配してます。母親と一緒に自宅にいるほうがいいと思っ
「思いやりがあるのね。ドクター・ハーシェルのところへ電話して、本人にそういえばい
いのに。それがわたしを尾けてきた理由？」
「それだけじゃないです。ウィネッカの警察がやっと、狙撃犯人の車を目撃した人物を見
つけ出しましてね、もっとも、狙撃そのものを目撃したわけじゃないですが」マゴニガル
は一息ついた。
「え、本当？　逮捕に踏みきるだけの確認がとれたの？」
「残念ながら、目撃者がわずか五歳なんです。その坊や、死ぬほど怯えてましてね、両親
が弁護士や護衛をわんさとつけて隔離してます。シェリダン・ロードの脇の溝で遊んでた
らしくて、その遊びは本当は禁じられてるのに、親たちがまだ寝てたものだから、内緒で
外へ出てったわけです。溝に入った理由ってのは結局、そこが立入禁止区域だったから。
何やら得体の知れん遊びを始めて、まあ、子供なんてそんなものでしょうが、ダース・ベ
ーダーか何かに忍び寄ってるつもりでいたら、そのときに車が見えたわけです。大きな黒
い車がセイヤーの家の前に駐まってた。今度はそっちに忍び寄ろうと決めたとき、助手席
に男の姿が見えて、坊やを死ぬほど震え上がらせた」
マゴニガルはわたしが話についていけるようにと、一息入れた。そして、次の言葉を注

意深く強調した。「ようやくしゃべってくれましたよ――何時間も話しあって、坊やを召喚することも、ニュースを公表することも決してしないと、両親に繰り返し約束したあとでね――怖かったのは快傑ゾロにつかまりそうになったからだっていうんです。なぜゾロなのか。男の顔に何か傷痕のようなものがあったようです。坊やにわかってるのはそれだけ。傷を見て、ぶったまげて、命からがら逃げ出した。男に気づかれたかどうかはわからない」

「有望な手がかりのようね」わたしは丁重に意見を述べた。「大きな黒い車と、顔に傷痕のある男を見つけてきて、その男に快傑ゾロを知ってるかって訊けばいいのね」

マゴニガルは鋭くわたしを見た。「われわれ警官だって根っからの間抜けじゃないんです、ミス・ウォーショースキー。両親や弁護士たちとの約束がある以上、法廷に持ち出すことはできません。それに、証言自体あまり効力はないんです。ただ、ゾロというのが――ほら、ゾロのしるしってのは大きなZですからね、警部補とわたしは考えたんですよ、あなただったら顔に大きなZの傷痕のある男を知ってるんじゃないかって」

顔が引きつるのを感じた。アールの手下のトニーがそういう傷を持っている。わたしは首を横に振った。「知るわけないでしょ」

「その種の傷を持つ男は、そうやたらといるもんじゃありませんよ。トニー・ブロンスキーではないかと、われわれはにらんでます。トニーは七、八年前に、やつに女をとられそ

うになって逆上したザヴって男に、そんな感じの傷をつけられましてね。最近はアール・シュマイセンの手下になってるらしい」
「そう?」わたしはいった。「アールとわたしは社交界の友人どうしじゃないのよ、部長刑事さん――彼のお仲間のことだって全部は知らないわ」
「いえね、警部補はあなたにも知らせといたほうがいいと考えたんです。セイヤーの娘を預かってて、その子の身に何かあったら、あなたが死ぬほど悔やむに違いないっていってましたよ」彼は車にもどった。
「警部補さんはすばらしいドラマ感覚をお持ちね」わたしは彼の背後から叫んだ。「深夜のテレビで《刑事コジャック》の再放送の見すぎよ。わたしがそういってたって、伝えてちょうだい」
マゴニガルの車は走り去り、わたしは残りのコースを歩いてもどった。運動する意欲を完全に失っていた。ロティとジルはすでに出かけたあとだった。熱いシャワーをゆっくり浴びて足の筋肉をほぐしながら、マゴニガルの伝言について考えてみた。アールがジョン・セイヤー殺しに関係していたことは、そう意外でもない。しかし、ジルが本当に危険にさらされているのかどうかが気になった。もしそうなら、ロティとわたしのところにいるほうが、危険が大きいのではないか。タオルで身体を拭いて、体重を計った。二ポンド減っていた。澱粉食品ばかり立て続けに食べていたことを思えば、驚くべき結果だ。

オレンジジュースを絞ろうと思い、台所へ行った。わたしのそばにいることでジルに危険が及びかねない場合もあることに気づいた。わたしを徹底的にやっつける必要があるとアールが判断したら、ジルは彼にとって申し分ない人質になるだろう。急に寒気を覚えた。

わたしのやっていることは、まったく成果を上げていない――セイヤー殺しが成果と呼べるなら話は別だが。マグローをマスターズ、もしくはセイヤーと結びつける線は見つかっていない。アニタについてはまったく手がかりがない。何か提案してくれる可能性のある唯一の人物はマグローだが、彼は口をつぐんだままだ。だったらどうして、初めにわたしを訪ねてきたりしたのだろう。

衝動的に、電話帳をひらいてナイフグラインダーズの番号を調べ、ダイヤルをまわした。交換手がミルドレッドにつないでくれた。わたしはこちらの名前を名乗らずに、マグローと話したいといった。会議中でお呼びできませんとの返事だった。

「重大な用なんです」わたしはいった。「アール・シュマイセンと、ジョン・セイヤーに関することだと伝えてください」

ミルドレッドはそのまましばらく待つようにといった。わたしは指の爪を調べた。やすりをかける必要がある。ようやく電話がカチッと鳴って、マグローのしゃがれ声が電話口に出た。

「もしもし、どういうご用件です？」彼が訊いた。

「V・I・ウォーショースキーです。セイヤーを殺せってアールに命じたのはあなた？」

「何を寝ぼけたことをいってるんだ？　よけいなお節介はやめろといったはずだ」

「そっちが最初にわたしを引きずりこんだくせに、マグロー。これはお節介じゃないわ。さあ、答えて、セイヤーを殺せってアールに命じたのはあなた？」

彼は無言だった。

「アールの手下の一人がセイヤーを撃ったのよ。セイヤーの名前を最初に出してきたのはあなただった。理由は曖昧にぼかしたわね。最初から、彼を事件に引きずりこむつもりだったの？　アニタに容疑がかかるかもしれないのを恐れて、セイヤーの名前が確実に容疑者リストにのるように、仕向けるつもりだったの？　それからどうなったの――彼が密告しそうになったんで、用心のため、アールに彼を殺すことを命じたわけ？」

「ウォーショースキー、わたしはテープをまわしてるんだ。あと一言でもいまみたいな言いがかりをつけたら、法廷で会うことになるぞ」

「やめるべきね、マグロー。残りのテープも押収されるかもしれないわ」

彼は受話器を叩きつけた。わたしの気分はすこしもよくならない。

大急ぎで着換えたが、スミス&ウェッスンをショルダー・ホルスターに入れる前に、念入りに点検をおこなった。アールがわたしを取るに足りない相手だと思いこみ、こちらが真実を充分に暴いて、彼のとるいかなる行動をも手遅れにしてしまうまでそう思い続けて

くれることに、わたしは変わらぬ期待をかけている。しかし、危ない橋を渡るつもりはなく、裏口からアパートメントを出て、車のところへ行くのに一ブロック遠まわりした。どこにも怪しい人影はなかった。

ループのパーめぐりはいったん中断して、ナイフグラインダーズ界隈をまわることにした。必要なら、明日またループにもどればいい。北へ向かう途中で、診療所に寄った。朝早い時刻なのに、待合室はすでに満員だ。一時間も待っている人々の悪意に満ちた視線のなかを、わたしはふたたびくぐり抜けた。

「ロティと話したいんだけど」挨拶抜きでキャロルにいった。彼女はわたしの顔をちらっと見て、診察室のロティを呼んできた。わたしは何が起きたのかを早口に説明した。「ジルを動転させたくないけど」と、わたしはいった。「ここで、地雷の上にすわってるような気分でいるのもいやなの」

ロティはうなずいた。「そうね、でも、連中がセイヤーの邸からあの子を連れ出さないって保証はできる?」と訊いた。「あの子が格好の人質になると判断すれば、どこにいようと手に入れるんじゃないかしら。わたしたちが考えなきゃならないのは、あなたじゃなくてジルの心の安らぎよ。それに、あと二日はこちらで預かるほうがいいと思うわ。とにかく父親の葬儀の日まではね。ジルが母親に電話したのよ。葬儀がおこなわれるのは金曜日ですって」

「ええ、でもね、ロティ、わたしこの仕事をすごく急いでるの。このまま調査を続けなきゃいけないし、ジルの護衛はできないのよ」

「そうねえ」彼女は眉を寄せ、それから明るい表情になった。「キャロルの弟がいいわ。すごい体格で、傷痕なんかもあるけど、性格のいい子よ、イリノイ大学で建築学をやってる学生なの。あの子ならきっと、悪漢どもを見張りにきてくれるわ」ロティがキャロルを呼ぶと、キャロルは問題に熱心に耳を傾け、ジルが危険だと聞かされて両手を上げたが、ポールなら喜んで助太刀にくるだろうと同意した。「ちょっと見は、頭の悪い乱暴者って感じなの」といった。「中身とは大違い、だって、ほんとはすごく思いやりがあって、頭がいいのよ」

それで満足するしかなかったが、わたしは不安だった。できることなら、すべてが片づくまで、ジルをウィスコンシンあたりへ遠ざけておきたい心境だった。

北へ向かい、ナイフグラインダーズの周辺を車でまわって、本日のルートを決めた。このあたりには、ループほど多くのバーはない。二十ブロック四方を選び、車を使ってまわることに決めた。今日の午前中は、バーでどのような悪意を招くことになろうとも、飲むのはやめるつもりだった。昼前にビールと顔を合わせるのはまっぴらだ。スコッチだってお断わりだ。

自分で定めた区域の西の端からハワード通りの高架鉄道線路に沿って、調査を始めた。

最初の店〈クララ〉ではあまりにうらぶれた外観に、入ろうかどうしようか決心がつきかねた。マスターズみたいに好みのうるさい男が、こんなぼろ店に入るとは思えない。その反面、こういう店こそ彼の望む場所だともいえる。マスターズがこんな店にくるなんて、誰も思わないだろう。肩に力を入れ、ドアを押して、蒸し暑い大気のなかから薄暗がりに入って行った。

正午までに、九本の空くじを引き、自分が思いついたアイディアは、貴重な時間をどんどん浪費するだけのじつにくだらないものではなかったかと思いはじめていた。この界隈のバーはすべてまわるつもりだが、ループにもどって二度目の挑戦をする気力は失せていた。診療所に電話を入れた。キャロルの弟がきていて、ジルにのぼせ上がり、七人ほどの幼児を遊ばせる手伝いをしているという。わたしはロティに、しばらくここを離れられそうにないので、ジルに謝っておいてほしいと頼んだ。

湿気を含む汚染された熱気に、わたしは息苦しさを覚えはじめていた。店の外へ出るたびに、熱気の力で地面に押しつけられるような気がした。バーに漂うすえたビールの臭いが吐き気を誘った。入った店には必ず、哀れを誘う連中が二人か三人スツールに根を生やして、まだ午前中だというのにちびちびやりながら、一杯、また一杯とグラスを重ねていた。ダウンタウンで見つけたのと同じさまざまな敵意、無関心、協力に出会ったが、写真に反応を示す人間にも、やはりめぐり会うことはできなかった。

CamScannerでスキャン

ロティに電話したあとで、昼食をとることにした。いまいるのは、シェリダン・ロードからそう遠くないところだった。そちらへ歩いて行くと、ブロックの端に上品な感じのステーキ・ハウスが見つかった。バーでの昼食はやめにして、ほっとした思いで熱気から逃れて店内に入った。〈ハイ・コラール〉という名のその店はこぢんまりしていて、清潔で、おいしそうな料理の匂いにあふれ、すえたビールとは歓迎すべき対照をなしていた。三分の二ほどのテーブルが埋まっていた。ふっくら肥えた中年の女性がメニューを抱え、明るい笑顔を浮かべて近づいてきて、隅のテーブルへ案内してくれた。吐き気がおさまってきた。

小さめのサーロイン・ステーキ、ドレッシング抜きのサラダ、それにジンフィズの大を頼んで、料理が運ばれてくると、ゆっくり時間をかけて食事した。この店を雑誌《シカゴ》に紹介する者はいないだろうが、料理はあっさりといい味にできていて、わたしの心を充分にほぐしてくれた。コーヒーを頼んで、それにもゆっくり時間をかけた。一時四十五分、のんびりしすぎたことに気づいた。「〝さあ、きたれ〟と義務が差し招くとき、〝わたしが行きます〟と若さが老いに答える」自分を元気づけるように、そうつぶやいた。テーブルに二ドル置き、伝票を持ってレジへ行った。ふっくらした女主人が金を受けとるために、レストランの奥から飛んできた。

「とってもおいしかったわ」

「お気に召されて何よりです。このあたりは初めてですか」

わたしはうなずいた。「たまたま通りかかって、おたくの看板に誘われたの」ふと思いついて、いまは四隅が手垢に汚れてしわくちゃになってしまったフォルダーを引っぱり出した。「この二人、一緒にここにきたことはないかしら」

彼女は写真を手にとってながめた。「ああ、ありますよ」

信じられない。「確かなの？」

「間違えっこないですよ。もっとも、法廷へ出ろっていわれたら困りますけどね」彼女の愛想のよい顔がわずかに曇った。「法律に関係した話だったら――」彼女は写真をわたしのほうに押しもどした。

「とんでもない」わたしはあわてていった。「すくなくとも、あなたに迷惑がかかるようなことじゃないわ」とっさに、もっともらしい話を作りだすことはできなかった。「誰かが召喚状を送ってきても、あたしはどっちの男も見てませんからね」彼女はしつこく繰り返した。

「ううん、ここだけの話なの。ぜったい口外しないわ。この二人、いつごろからここにきてるの？」わたしは誠意と説得力に満ちた声であるよう願いつついった。

「どういう問題なんです？」彼女はまだ疑っている。

「父親の認知訴訟なの」ふっと心に浮かんだことを、即座に口に出してしまった。自分の

耳にさえばかげて聞こえたが、彼女は表情を和らげた。

「なるほど、そんな物騒な話じゃないんですね。確か五年ぐらい前からですわ。ここはうちの亭主がやってるレストランで、二人で始めて十八年になるんです。常連の方たちのお顔はほとんど覚えてますよ」

「この人たち、よくくるの？」

「いえ、年に三回ぐらい。でも、この商売を長いことやってますと、お客さまの顔は自然に覚えるようになるものです。それから、こちらの人」彼女はマグローの写真を軽く叩いた。「よくおみえになりますよ。通りの先にある大きな組合の人じゃないかしら」

「まあ、本当？」わたしは如才なくいった。セイヤーの写真を出した。「この人はどう？」と訊いた。

彼女はそれをながめた。「見たような顔だけど」といった。「うちへこられたことはありませんね」

「そう。もちろん、あなたの名前をよそで出すようなことはしないわ。それから、とってもおいしいお昼をごちそうさま」

目もくらむような熱気のなかへ足を踏み出して、わたしはめまいを覚えた。自分の幸運が信じられなかった。探偵をやっていると、ときたまこうした幸運にめぐり会うことがあり、自分はやはり正しく善き側にいる、慈悲深き神の御心が自分を導いてくれている、と

思うようになる。ついにやった！　マスターズをマグローに結びつけた。そして、マグローはシュマイセンを知っている。小枝は大枝に生え、大枝は木に生え、木は丘に生えている。ヴィク、あなたは天才よ——わたしは自分にいった。唯一の疑問は、何がこの二人の男を結びつけているかということだ。それはわたしがピーター・セイヤーのアパートメントで見つけた、例のすてきな保険金支払手形に違いない。しかし、どんなふうに？

公衆電話を見つけ、ラルフにかけて、彼がギエルチョフスキーのファイルを捜してくれたかどうか確かめようとした。彼は会議中だった。いえ、伝言は結構です。あとでかけなおします。

疑問はほかにもある。セイヤー、マグロー、マスターズはどういう関係なのか、しかし、その答えを見つけるのはさほど困難ではないだろう。金を、それもたぶん課税対象外の金を作るなんらかの方法を中心に、すべてが回転していたのだろう。とすれば、マスターズの隣人であり、良き友人であり、銀行の専務であるセイヤーが登場してくるのもうなずける。セイヤーならおそらく、わたしには想像もつかない一ダースの異なる方法で、不正な金の出所を隠すことができただろう。セイヤーがマネー・ロンダリングをやっていて、息子のピーターにそれを知られたと仮定しよう。マグローがシュマイセンに命じて、ピーターを殺させる。セイヤーはやがて、自責の念に耐えきれなくなる。「こんなことに関わり合うのはもうごめんだ」という——相手はマスターズか、それともマグローか？　そこで

彼らはアールを使って、彼も消してしまう。

落ち着いて、ヴィク、車に乗りこみながら、自分にいいきかせた。とりあえず、事実がひとつ見つかっただけのこと。マグローとマスターズが知りあいだという事実が。しかし、なんとすばらしい、意味深い事実だろう。

リグレー球場では五回の裏に入ったところで、カブスがフィラデルフィア・フィリーズを手玉にとっていた。スモッグにおおわれた、人を無気力にする大気が、なぜかカブスに強壮剤のような効きめをもたらしたのだ。誰もがぐったりしているのに、カブスは八対一でリードしていた。キングマンが三十四号ホーマーを打った。骨休めに球場へ寄って試合の残りを見ようかとも思ったが、結局はその考えをきびしく退けた。

診療所にもどったのは二時半だった。通りに面した部屋は、午前中よりもさらに混雑がひどくなっていた。小さなウィンドー・エアコンが暑さと室内を埋めた人間たちを相手に奮戦して、敗北を喫していた。わたしが部屋に入ると同時に奥のドアがあいて、そこから顔がのぞいた。〝頭の悪い乱暴者〟とはまさにぴったりの表現だ。わたしは部屋を突っ切った。「あなたがポールね」と、握手の手を出しながらいった。「わたし、ヴィクよ」

ポールは笑顔になった。信じられないような変化が起きた。目に鋭い知性がうかがわれ、粗野どころかむしろハンサムに見えた。わたしは一瞬、ジルは恋をするほど大人になっているだろうかと考えた。

「すべて平穏無事ですよ」彼はいった。「もちろん、赤ん坊は別だけど。こっちへきて、ジルの様子見てみませんか」

わたしは彼について奥へ入った。第二診察室にあったスチール製のテーブルは、ロティがよそへ運び出していた。この狭いスペースにジルがすわりこんで、二歳から七歳までの子供たち五人を遊ばせていた。重大な危機に対処する人間のような、重々しい表情が浮かんでいた。わたしはひそかに笑みをもらした。隅のバスケットで赤ちゃんが眠っていた。わたしが入っていくと、ジルは顔を上げて、いらっしゃいといったが、その微笑はポールに向けられていた。これはよけいな混乱の種になるのだろうか、それとも役に立つのだろうか。

「どう、調子は？」わたしは訊いた。

「最高よ。騒がしくて手がつけられなくなると、ポールが大急ぎでキャンディをとりに行ってくれるの。子供たちが味をしめて、しじゅうがなり立てるようになるんじゃないかと、それだけが心配だわ」

「二、三分、手が離せない？　すこし質問したいことがあるの」

彼女は心配そうに子供たちをながめた。「行っといでよ」ポールが快活にいった。「ぼくが交代するから。どっちにしても、きみは長いことお守りしすぎたもの」

ジルは立ち上がった。子供たちのなかの小さな男の子が抗議した。「行っちゃだめ」と、

腕白らしい大きな声でいった。「さてと、何してたんだっけ？」

「いいの、いいの」ポールはそういって、ジルのいた場所に器用にしゃがんだ。

わたしはジルを連れてロティのオフィスに入った。「堂に入ったものじゃない。ひょっとすると、夏のあいだここにいてほしいって、ロティに頼まれるかもよ」

彼女は赤くなった。「そうしたいな。ほんとにいてもいいのかしら」

「もうひとつの件さえ解決すれば、いけない理由は何もないわ。あなた、アニタのお父さんに会ったことはある？」

彼女は首を横に振った。わたしは写真の束を出して、マグローが写っているのを引き抜いた。「この人がそうよ。あなたのお父さんと一緒のとこか、または家の近所にいるとこを、見た覚えはない？」

ジルはしばらくのあいだ、写真をじっとながめた。「一度も見たことないわ。アニタとはぜんぜん似てないのね」

わたしはしばらく黙りこんだ。どんな言い方をすればジルを傷つけずにすむのかと、迷いつづけていた。「ミスタ・マグローとミスタ・マスターズが、共同で何か悪いことを企んでたんじゃないかと思うの——詳しい内容まではわからないけど。あなたのお父さんも、なんらかの形で協力してたみたい。ただ、お父さん自身は協力してることに気づかなかっ

たんでしょうね」じつをいうと、このとき不意に思いついたことがあった──セイヤーが彼らの仲間だったのなら、ピーターはまず父親を問いつめたのではないだろうか。「ピーターが死ぬ一週間か二週間前に、お父さんと喧嘩したのを覚えてない？」

「ううん。だって、ピーターは七週間ずっと家に帰ってなかったもの。兄さんとパパが喧嘩したとすれば、きっと電話を使ったんだわ。たぶん、オフィスでかけたのかもしれないけど、家では一度もそんなことなかったわ」

「いいわ、わかった。それじゃ、もうひとつの質問にもどるわね。お父さんが連中の企みをどの程度知ってたか、どうしても知る必要があるの。参考になりそうなことを何か思い出せない？　お父さんとミスタ・マスターズ、二人きりで書斎に閉じこもって、長時間話し合ったりしなかった？」

「してたわ。でも、それはいろんな人がする──してたことよ。パパは大勢の人と仕事をしてて、みんなしょっちゅう家にきて、仕事の話をしてたから」

「なるほど、じゃお金のことを訊こうかな。ミスタ・マスターズがお父さんにお金をたくさん渡したことはなかったかしら。あるいは、その逆とか」

ジルはまごついたように笑って、肩をすくめた。「そういうことになると、ぜんぜんわかんない。パパが銀行に勤めてたとか、偉い人だったとか、そういうことは知ってるけど、どんな仕事をしてたのかはあんまり知らないし、お金のことなんて何ひとつ知らない。ほ

んとは知ってなきゃいけないのね。うちがお金持ちで、おじいさまとおばあさまから莫大な信託財産をもらったことは知ってるけど、パパのお金のことはなんにも知らない」

それは特に驚くべきことでもない。「もしもあなたに、ウィネッカへもどってお父さんの書斎を調べて、マグロー、あるいはマスターズ、あるいはその両方の名前を記した書類があるかどうか確かめてほしいって頼んだら、あなたどう思う？　不正直で下劣な人間になったような気がするかしら」

彼女は首を振った。「それが役に立つのなら、やってみる。でも、ここを離れるのはいや」

「そう、困ったわね」わたしは同意した。腕時計を見て時間を計算した。「どっちにしても、今夜の食事までに片づけてしまうのは無理ね。明日の朝一番に出かけたら？　そうすれば、赤ちゃんのラッシュ・アワーに間に合うように、診療所にもどってこられるから」

「そうね」彼女はうなずいた。「一緒にきてくれない？　だって、あたし車も何も持ってないし、またここにもどってきたいし、あっちへ帰ったら、みんなが家にいなさいってうるさくいうに決まってるもの」

「もちろん行くわよ」明日の朝までに邸が警官でごったがえすことは、たぶんないだろう。

ジルは立ち上がり、保育室へもどった。彼女が母親気どりの声で、「あらあら、次は誰の番？」といっているのが聞こえてきた。わたしは思わずにやっと笑い、ロティのドアに

首を突っこんで、帰って一眠りすると告げた。

CamScannerでスキャン

14　夜の熱気の中で

十時に大学婦人連盟の集会に向かった。三時間ぐっすり眠ったおかげで、気分は最高だった。フリッタータは大成功――ずっと昔に母から教わった料理で、これに数多くの乾杯と、ポールの作ったサラダと、ポールの温かなほめ言葉が加わった。彼はボディガードの任務には泊まりこみも含まれていると判断して、寝袋を持ってきていた。あなたが横になれる場所はダイニング・ルームしかないわよ、とロティが彼に警告した。「そこから出てこないでね」とつけ加えた。ジルは大喜びだった。彼女がポールをボーイフレンドとして家に連れ帰ったときの姉の反応が、目に見えるようだ。

涼を求めて多くの人が戸外に出ている気だるい夕方で、南へ車を走らせるのは楽だった。いまは夏の一日のなかで、わたしが一番好きな時刻だ。その匂いと雰囲気のなかに、子供のころの不思議な魅力を呼びさます何かがある。

車を駐める場所はキャンパスのなかに難なく見つかり、会合が始まる時刻すれすれに集会室にすべりこんだ。ワーク・パンツと大きすぎるTシャツ、あるいは、ブルージーンズ

の脚を切りとって縫い直した、縫い目が表に出ているスカートなどを身に着けた女性が、一ダースばかり集まっていた。わたしはジーンズをはき、拳銃を隠すために大きなだぶだぶのシャツを着ていたが、それでも、その装いは室内にいるほかの誰よりもエレガントだった。

ゲイル・シュガーマンがいた。わたしが入って行くと、気づいて声をかけてくれた。「この人――」ほかの女性たちも話をやめて、こちらを見た。

「あら、集会を覚えててくれたのね」ゲイルは言葉につまり、照れくさそうな顔をした。「あなたの名前、忘れちゃった――イタリアの名前よね、そういってたの覚えてるわ。とにかく、この人とは先週コーヒー・ショップの〈スウィフト〉で会ったの。集会のことを話したから、きてくれたのよ」

「あなた、新聞記者じゃないでしょうね」女性の一人が訊いた。

「いいえ」わたしは落ち着いて答えた。「ここで学位をとったのよ、いまではかなり古い学位になってしまったけど。このあいだ、ここにきてハロルド・ワインシュタインと話をしたときに、ゲイルと出会ったの」

「ワインシュタインですって」別の一人が鼻を鳴らした。「あの男、ワークシャツを着て資本主義を罵倒して、それですっかり過激派気どりよ」

「ほんと」もう一人が同意した。「あたし、あいつの〝大労組対大企業〟を受講してたん

た。フォードが四〇年代にUAW（全米自動車労働組合）との戦いに敗れたときに、弾圧に対する大きな闘争が勝利をおさめたんだってのが彼の意見よ。こっちが、女は大企業ばかりじゃなくて、組合からも同じように締め出されてるってことをいおうとしたら、あいつ、そんなのは弾圧じゃない、現代の社会的風潮を反映しているにすぎない、ですって」
「そんなこといったら、すべての弾圧が正当化されちゃうじゃない」短いカーリー・ヘアの、太った女がいった。「たとえば、スターリンの強制労働収容所は一九三〇年代のソヴィエトの風潮を反映していた、となるわよね。シェランスキー（スパイ罪などでシベリアの収容所に送られた。八〇年代にアメリカの学生たちの支援を受けた）が追放されて重労働させられたのだって、そうだわ」
コーヒー・ショップでゲイルと一緒だった、やや年嵩の、やせた、肌の浅黒い女メアリが大声を上げて、グループの秩序をとりもどそうとした。「今夜の予定は何もありません」といった。「夏のあいだは出席者がすくなすぎて、講演を頼んでも盛り上がりませんから。床の上で輪になって、グループ討議をしてはどうでしょう」彼女は煙草をくわえ、頬をへこませて深々と煙を吸いこんでいた。疑惑の目でこちらを見ているような気がしたか、わたしの神経がぴりぴりしているだけかもしれなかった。
　わたしはいわれるままに床に腰を降ろして、膝を抱えた。わたしのふくらはぎの筋肉は繊細なのだ。あとの女性たちも、いかにもまずそうなコーヒーをとってきて、だらだらとすわった。わたしは部屋に入るときに、煮出しすぎのコーヒーをちらっと見ていたので、

同志の一人であることを証明するためにそんなものを飲む必要はあるまいと判断した。

二人を除く全員がすわると、メアリが順番に自己紹介してはどうかと提案した。「今夜は新しい人が二人きてるから」といった。「わたしは、メアリ・アナスドーター」それから右側の、女が大労組から締め出されていると抗議した女のほうを向いた。わたしに順番がまわってきたので、こういった。「V・I・ウォーショースキーです。みんなからヴィクって呼ばれてます」

全員が自己紹介を終えたとき、一人が興味ありげにいった。「あなた、イニシャルで通してるの、それとも、ヴィクが本名?」

「呼び名よ」わたしはいった。「ふつうはイニシャルを使ってるわ。弁護士として働きはじめたんだけど、同僚や相手方の男性弁護士っていうのは、わたしのファースト・ネームを知らないときのほうが横柄な態度に出ないものだってことに気づいたの」

「いい点突いてるわね」そういって、メアリは集会の主導権をとりもどした。「今夜は、イリノイ州の共進会でERA（男女平等修正条項）のブースをどの程度手伝えるか、確かめておきたいの。NOW（全米女性機構。ウーマン・リブの代表的組織）の州支部は毎年ブースを出して、ちらしを配ってるわ。今年はもっと手のこんだことをやる計画で、スライド・ショーを予定してて、例年よりも人手がいるらしいの。八月四日から十日までの一週間のうち、一日かそれ以上スプリングフィールドまで出かけて、ブースとスライド・ショーを手伝ってほしいんだって」

「車をよこしてくれるの？」カーリー・ヘアの太った女が訊いた。

「車の件は、ボランティアが何人ぐらい集まるかで決まると思うわ。わたしは行くつもりよ。あと何人か参加してくれる人がいるのなら、みんなでバスで行きましょう。そんな長い時間乗るわけじゃないし」

「泊まるとこはどうすんの？」誰かが訊いた。

「わたしは野宿よ」メアリが答えた。「でも、あなたたちはNOWのメンバーに当たってみれば、ホテルで相部屋させてもらえるんじゃないかしら。本部のほうへ問いあわせてあげる」

「NOWの連中と行動するのって、なんか苦手だわ」腰のあたりまで髪を伸ばした、ばら色の頬の女がいった。Tシャツに胸当てつきのつなぎを着ている。その顔は安らぎにあふれたヴィクトリア時代の既婚婦人のようだ。

「どうして、アネット？」ゲイルが訊いた。

「あいつら、女性の社会的地位だとか、結婚と離婚と子供の養育における不公平っていうような、本当に大事な問題には見向きもしないで、大政党をバックにした政治家連中をのほほんと支持してるだけだもの。子供の養育に関してちっぽけなことをひとつだけ公約する候補者を支持して、選挙参謀に女が一人もいないことや、妻は家にすわって夫の出世を支えているプラスチックのマネキン人形にすぎないって事実に、目をつぶってるんだわ」

「根本にある政治的・経済的不平等を解決しないかぎり、社会正義を手に入れることはできないのよ」確かルースという名前の、頑丈そうな女性がいった。「その上で、政治問題に取り組めばいいんだわ。掘り返す道具も持たずに、男女間の根本的な弾圧を根絶やしにしようったって、できっこないわ。法律がその道具を代表してるのよ」

これは古くからの議論で、その起源は六〇年代後半の過激な女権拡張運動の発生にまでさかのぼる。賃金の平等、法的権利の平等に集中すべきか、それとも、方向を変えて、社会全体を新しい性的価値観を持つものに変化させようとすべきなのか。メアリは十分のあいだ、好き勝手に議論を続けさせた。それから、こぶしで床を叩いた。

「NOWについての合意を求めてるわけじゃないわ。ERAについてもね」といった。

「わたしはただ、スプリングフィールドに行ってくれるメンバーの数を知りたいの」

ゲイルが予想どおり最初に手を上げ、ルースがそれに続いた。ワインシュタインの政治学を分析していた二人も行くことを承知した。

「あなたもどう、ヴィク？」メアリがいった。

「ありがと、でもだめだわ」わたしは答えた。

「ここにきた本当の目的を、そろそろ話してくれない？」メアリは鋼鉄のような声でいった。「確かにあなたはシカゴ大の卒業生かもしれないけど、なつかしいキャンパスの政治運動を点検するだけの目的で、火曜の夜の討論集会にやってくる人なんかいやしないわ」

「政治運動のほうはあんまり変わってないけど、あなたの意見は図星ね。わたしがここにきたのは、アニタ・マグローを見つけるためよ。ここに集まった人たちのことはよく知らないけど、ここが彼女の出入りしてたグループだそうね。だから、このなかの誰かがアニタの居所を教えてくれるんじゃないかと期待してるの」

「だったら、出てって」メアリが怒りをこめていった。女たちは無言でわたしをじわじわと取り囲んだ。わたしは彼女たちの敵意を、物理的な力のごとく肌で感じとった。「わたしたち全員、警察にしつこくつきまとわれたわ――あいつら、今度は、女のおまわり（ピッグ）をこの会合にもぐりこませて、わたしたちの一人からアニタの居所を訊き出そうって魂胆だったのね――わたしたちが売るべき情報を持ってると思ったのね。わたしはそんなもの知らない――このなかの誰かが知ってるかどうかも知らない――それでも、あんたたち刑事（ピッグス）はあきらめようとしない、そうね？」

わたしは動かなかった。「わたしは警察の者でもないし、新聞記者でもないわ。あなたたち、警察がピーター・セイヤー殺しの罪をアニタにかぶせるために、彼女を捜しまわってるとでも思ってるの？」

「当然でしょ」メアリが鼻息荒くいった。「あいつら、ピーターが女と手当たり次第に寝てたんでアニタが嫉妬したんじゃないかとか、彼女に金を贈るって遺言書を彼が作ってたんじゃないかとか探ろうとして、さんざん嗅ぎまわったのよ。いいこと、お気の毒だけど

――帰ってあいつらにいっといて。こんなことしたら、ただじゃすまないって」
「それよりも、別のシナリオを披露したいわ」わたしはいった。「聞きたくもない。さあ、出てって」
「ふざけんじゃないよ」メアリがいった。
「聞いてくれるまで動かないわ」
「あたしがつまみ出してやろうか、メアリ」アネットが訊いた。
「やってごらん」わたしはいった。「でも、わたしが誰か一人でも怪我させたら、あなたたちはなおさら怒り狂うことになるし、わたしだっていうべきことを聞いてもらうまでは、ぜったいに出て行きませんからね」
「わかったわよ」メアリが腹立たしげにいった。時計をとりだした。「五分あげる。それがすんだら、アネットがつまみ出すわよ」
「ありがとう。わたしの話はすぐすむわ。質問があれば、あとで補足するから。
昨日の朝、ピーターの父親のジョン・セイヤーが自宅の前で射殺されたの。警察では、殺し屋のしわざだとにらんでるけど、証拠をつかむことができない。わたしの意見では、といっても警察は認めてくれないんだけど、その同じ殺し屋が先週の月曜日にピーター・セイヤーを撃ったんじゃないかと思うの。
それじゃ、なぜピーターは撃たれたのか。答えは、絶大な権力を持つ腐敗しきった組合指導者にとっておそらくは命とりになるであろう事実を、彼がつかんだからよ。何をつか

んだかは不明だけど、たぶん不正な財政取引に関係したことじゃないかしら。彼の父親と、それからピーターのアルバイト先の上司も、その取引の仲間だった可能性があるの」

　わたしは両足を伸ばし、そらせた身体を手で支えた。全員が無言だった。「これはすべて推測よ。いまのところ、法廷で使えるような証拠は何もないけど、人間関係と反応を観察して手に入れた証拠があるわ。わたしの推測が正しければ、アニタ・マグローの生命は大きな危険にさらされていることになる。ピーター・セイヤーは彼が殺される原因となった秘密をアニタに打ち明けていた、そして先週の月曜日にアパートメントに帰って、彼の死体を見つけた彼女は、恐怖に駆られて逃げ出した、と考えるのが一番自然ね。でも、アニタが生きてて、その秘密を——どういう秘密かわからないけど——自分一人の胸にしまっておく以上、それを守るために二度までも人殺しをした男たちが、彼女を殺すのをためらうはずはないわ」

「ずいぶんいろいろ知ってるのね」ルースがいった。「記者でもおまわりでもないのなら、どうやって首を突っこんだの」

「私立探偵だからよ」冷静に答えた。「わたしの現在の依頼人は、父親が殺されるのを目撃して怯えきっている、十四歳の少女なの」

　メアリはまだ怒りをくすぶらせていた。「ふん、やっぱりおまわりじゃないの。誰があんたに給料を払おうが変わりゃしないわ」

「とんでもない」わたしはいった。「天と地ほども違うわ。わたしに命令できるのは、警官、市会議員、局長といった階級組織じゃなくて、わたし自身だけよ」

「あなた、どういう証拠を握ってるの?」ルースが訊いた。

「先週の金曜の夜、二人のセイヤーを始末した犯人と思われる殺し屋の親分にあたる男に、半殺しの目にあわされたわ。その男はね、事件から手を引けってわたしを脅したの。そいつを雇った人物が誰なのか、立証はできないけど、見当はついてるわ。その人物、あちこちの大物犯罪者と親しくしてる共犯者から、殺し屋の名前を教えてもらったのね。その人物はピーターが夏休みのアルバイトをしてた会社の上司だった男よ。それから、もう一人のほう、つまり暗黒街に顔の利くほうが、ピーターの上司と一緒にいるところを人に見られたってこともわかってる。お金の件ははっきりわかったわけじゃなくて、ただの推測。あの一味は女とのスキャンダルで傷つくような連中じゃないし、スパイ行為は現実離れしてるもの」

「麻薬はどう?」ゲイルが訊いた。

「違うと思うわ」わたしはいった。「ただ、いずれにしろ、人を殺してまで隠し通そうというのが、不正な収入源であることは確実だわ」

「はっきりいうわよ、ヴィクだか、V・Iだか、何が本名だか知らないけど、あなたの話、あたしには納得できない。アニタの生命が危険だなんて、信じない。でも、あたしの意見

に不賛成で、アニタの居所を知ってる人が誰かいるのなら、遠慮なくこの人に密告するといいわ」

「もうひとつ訊きたいことがあるんだけど」ルースがいった。「仮にわたしたちがアニタの居場所を知ってて、あなたに教えたとしたら、それがアニタにとってどういうプラスになるの？――あなたのいってることがすべて真実だとしたら」

「密約の内容がわかれば、誰が殺人犯かという決定的な証拠をたぶん握れると思う」わたしはいった。「それが早ければ早いほど、殺し屋がアニタを襲う可能性が低くなるわ」

誰ももう何もいわなかった。わたしは二、三分待った。アネットがわたしを放り出そうとするのを心の隅で期待していた。誰かの腕をへし折ってやりたかった。過激派の連中は思いこみが激しい。そして、過激派の学生たちは、孤立と尊大さも兼ねそなえている。気晴らしのために全員の腕をへし折ってやりたいぐらいだ。しかし、アネットは動かなかった。そして、誰一人としてアニタの居所を教えてくれなかった。

「気がすんだ？」メアリはこけた頬をゆがめて薄笑いを浮かべ、勝ち誇ったようにいった。

「時間をさいてくれて感謝してるわ」わたしはいった。「気持ちを変える人があるかもしれないから、わたしの電話番号の入ってる名刺を、コーヒーの横にすこし置いて行くわね」わたしは名刺を置き、部屋を出た。

どうしようもなく滅入った気分で、家に向かって車を走らせた。ピーター・ウィムジイ

卿なら、部屋に入るなり過激派全員を魅了して、よだれを流させるだろう。私立探偵だと明かすことは決してあるまい。気の利いた会話を始めて、知りたいことをすべて聞き出し、そのあと、レズビアン自由基金へ二百ポンド寄付するだろう。

猛スピードでカーブを切ってレイク・ショア・ドライヴへ左折し、車体が傾いて危うく転倒しそうになる感触に、無謀な喜びを味わった。このときだけは、誰に止められようとかまわなかった。五十七丁目からマコーミック・プレースまでの四マイルを三分でぶっとばした。何者かが尾けてきていることに気づいたのはそのときだった。

この区域の制限時速は四十五マイルで、わたしは八十を出しているというのに、ドライヴへ入ったときにもうひとつの車線をうしろから走っていたのと同じヘッドライトが、こちらのバックミラーに映っていた。急ブレーキを踏んで、外側車線に移った。もう一台の車は車線こそ変えなかったものの、やはりスピードを落とした。

いつから尾行されていたのだろう。そして、なぜ？　アールがわたしを吹き飛ばす気なら、彼には無限の機会があり、人手と金を尾行に無駄遣いする必要はない。ひょっとすると、アパートメントを出たあとわたしがどこで寝泊まりしているのか、わからないのかもしれないが、その可能性も低いような気がする。応答サービスがロティの電話番号を知っているのだし、番号がわかれば、電話会社に問いあわせて住所を突き止めるのは簡単だ。もしかしたら連中はジルを狙っていて、わたしが彼女をロティのところへ連れて行った

ことに気づいていないのかもしれない。車線変更もせず、不意に出口へ向かったりもせずに、ゆっくり、ふつうに運転した。わたしの連れは中央車線にいて、あいだに二、三台の車を置いて離れずついてくる。ダウンタウンに入って照明が明るくなるにつれて、相手の車がはっきり見えるようになった。グレイの中型セダンのようだった。

連中がジルをつかまえれば、わたしを事件から遠ざけるための強力な武器を手に入れたことになる。わたしが事件に手を出しているなどと、アールが思っているはずはないのだが。わたしをさんざん脅し、わたしのアパートメントを荒らし、警察に圧力をかけてドナルド・マッケンジーを逮捕させた。わたしにわかっているかぎりでは、ジョン・セイヤーの死にもかかわらず、マッケンジーは刑務所に放りこまれたままだ。ひょっとすると、わたしを尾行すれば、彼らがピーター・セイヤーの部屋で見つけそこね、わたしのアパートメントでも見つけられなかった紙片の行方がわかると思ったのかもしれない。

〝行方がわかる〟という語句がわたしの頭のなかでカチリと鳴った。そうか！ 連中が興味を持っているのはわたしでも、ジルでも、あの支払手形でもない。わたしと同じくアニタ・マグローを捜し求め、わたしを尾行すれば彼女の行方がわかると思っているのだ。わたしが今夜キャンパスへ行くことを、連中はどうやって知ったのだろう。いや、知らなかったのだ。わたしを尾けてあそこまできたのだ。わたしはアニタを見つける手がかりのそのまた手がかりをつかんだことを、マグローに告げた。それをマグローが誰かに話したの

だ。相手はシュマイセンか、それともマスターズか。マグローが実の娘を窮地に追いこむとは思えない。きっと、信頼できると思っている人物に打ち明けたに違いない。しかし、まさかマスターズではあるまい。

わたしの推論が正しいとすれば、連中に臆測を続けさせるにかぎる。連中のほうでわたしが何か知っていると思いこんでいるかぎり、わたしの生命は十中八、九安全だ。ドライヴを離れてダウンタウンに入り、七色の水を夜空へ高々と噴き上げているバッキンガム噴水の横を通りすぎた。夜のショーを見ようと、見物人が押し寄せていた。そのなかに紛れこもうかとも思ったが、成功の確率はあまり高くなさそうだ。ミシガン・アヴェニューまで出て、コンラッド・ヒルトン・ホテルの向かい側に車を駐めた。車のドアをロックし、落ち着いて通りを渡った。ガラスのドアを入ったところで足を止めて表をながめ、グレイのセダンがわたしの車の横へ駐まるのを見てほくそ笑んだ。車のなかの連中がどうするかを見届ける手間は省き、ホテルの長い廊下を抜けて、八丁目に面した裏口へ急いだ。

ホテルのこの部分には航空会社のチケット・オフィスが並んでいて、そこを通りすぎようとしたとき、「空港バスの最終案内を申し上げます。オヘア国際空港行直行バスです」と、ドアマンが叫んでいるのが聞こえた。考える暇も、立ち止まってうしろを見る暇もなく、わたしは笑い声を上げる小人数の客室乗務員グループの前に割りこんで、バスに飛び乗った。グループの連中はわたしのあとからのんびりと乗ってきた。係員が乗客数を確認

して下車してから、バスは動き出した。角を曲がってミシガン・アヴェニューに出たとき、通りを見まわしている男の姿が目に入った。たぶんフレディだろう。

バスは重たげにループを横切って、十二ブロックばかり北のオンタリオ通りへと進み、わたしはうしろの窓から不安な監視を続けたが、どうやら、フレディの血のめぐりの悪い頭では、わたしがバスに乗った可能性までは思いつけなかったようだ。

オヘアに着いたのは九時半だった。バスを降りたわたしは空港ビルを支える巨大な柱のひとつの陰に身を隠したが、グレイのセダンは見当たらなかった。歩き出そうとして、ひょっとすると別の車を使っているかもしれないと思い、二度三度と繰り返して走ってくる車はないかとあたりを見まわし、車内にシュマイセン一味の誰かがいはしないかと、乗っている連中の顔に目をこらした。十時になるころようやく、安全と判断して、ロティの家にもどるタクシーをつかまえた。

運転手にいって、ロティの通りの角でタクシーを降りた。それから、片手を拳銃のそばに置いたまま、彼女の建物の裏通りにある狭い路地に入った。出会ったのは、ビールを飲みながらろれつのまわらない舌でしゃべっている、十代の男の子三人のグループだけだった。

ロティがノックに気づいてなかに入れてくれるまで、裏口のドアを数分間叩き続けなくてはならなかった。濃く黒い彼女の眉が驚きに吊り上がった。「非常事態？」と訊いた。

「ダウンタウンでちょっとね。もしかしたら、誰かが表で見張ってるかもしれない」
「ジルを?」
「ううん、違う。あの連中、わたしをマークしてればアニタ・マグローの居所がわかると思ってるんだわ。わたしがアニタのところへ行かないかぎり、または向こうが先に彼女を見つけないかぎり、わたしたちが攻撃を受ける心配はないと思う」わたしはいらいらと頭を振った。「だけど、そうもいってられないわね。わたしがアニタの居所を知ってると向こうが思ってるのなら、連中、ジルをさらって譲歩を要求してくるかもしれないもの。アニタがどこにいるのか、今夜はわからなかったわ。あの生意気な過激派の女たち、一人ぐらいは彼女の居場所を知ってるに違いないのに、英雄気どりで、おまわり(ピッグス)との大闘争に勝ったと思いこんでて、こんりんざいしゃべろうとしない。始末に負えないったらありゃしない」
「なるほど、わかるわ」ロティが真剣にいった。「あの子をうちに置いとくのはまずいかもしれないわね。あの子とポール、テレビで映画を見てるわ」彼女はそうつけ足して、居間のほうへ頭をねじった。
「車をダウンタウンに置いてきちゃった」わたしはいった。「大学からの帰り、誰かが尾行してきたから、ループでまいてやったの――オヘア行きのバスに乗ってね――尾行を振り切るにはずいぶん時間と費用のかかる方法だったけど、うまくいったわ。

明日、ジルがわたしと一緒にウィネッカまで出かけて、父親の書類を調べてくれることとになってるの。あの子だけそのまま家に残ったほうがいいかもしれないわね」

「寝ながら考えましょ」ロティがいった。「ポールは護衛役に大張り切りだけど、機関銃を持った男たちが相手じゃ歯が立たないわね。それに、建築学科の学生だから、あまり授業をさぼるわけにもいかないでしょうし」

わたしたちは居間にもどった。ジルはソファベッドの上で丸くなって、映画を見ていた。ポールは腹ばいに寝そべり、二、三分おきに彼女を見上げていた。ジルは自分の与える効果に気づいていないようだが（男の子を征服したのは今回が初めてとみえる）、その顔は満足に輝いていた。

わたしは電話をいくつかかけるために、客用寝室に入った。ラリー・アンダースンは、わたしのアパートメントの修理が完了したといった。「あのカウチ、もういらないだろうと思ったから、仲間の一人に家へ持って帰らせたぞ。それから、ドアだけどさ――友達に大工やってるやつがいてね、そいつんとこに、どっかの大邸宅かなんかからはずしてきたっていう、樫の木のドアがあるんだ。もしよかったら、きみんちにそれをとりつけて、内側に何個か安全錠をつけてやるってさ」

「ラリー、お礼の言葉もないぐらいよ」わたしは大感激だった。「喜んでお願いするわ。ところで、今日はどうやって戸締まりしたの？」

「ああ、釘を打ちつけといた」彼は快活に答えた。ラリーとわたしは何年も前に一緒に学校へ通った仲だが、彼はわたしより早く、そしてひどく落ちこぼれてしまった。二、三分雑談してから、電話を切って、次にラルフにかけた。

「わたしよ、シャーロック・ホームズ」わたしはいった。「保険金支払ファイルの調子はいかが？」

「ああ、上々さ。夏は大勢の連中が外をうろうろするんで、事故には事欠かない。家でおとなしくしててくれればいいけど、家にいたらいたで、芝刈機で足なんか刈ったりするから、やっぱりわが社は支払いを迫られることになる」

「あの手形、ファイルにもどすのに手こずらなかった？」わたしは訊いた。

「それがだめなんだ、ファイルが見つからなくて。しかし、当人の口座を調べてみた。この男、とびきりすてきな事故にあったらしい――わが社は四年前からずっと、この男のところへ週一度の小切手を送り続けてる」彼は小さく含み笑いをした。「今日はヤードリーの顔を穴のあくほどながめて、二重殺人の犯人に見えるかどうか確かめるつもりでいたのに、今週いっぱい休暇をとってる――セイヤーの死がよほどこたえたんだね」

「へえ、そうなの」わたしが見つけたマスターズとマグローをつなぐ環のことを、彼にわざわざ話す気にはなれなかった。わたしの意見が正しいか正しくないかで彼と議論するのは、もううんざりだ。

「明日の晩、食事しない?」ラルフが訊いた。

「木曜日にしましょうよ」わたしはいった。「明日の晩は空けときたいの」

受話器を置いたとたん、ベルが鳴った。

「ドクター・ハーシェルです」わたしはいった。わたしの大好きな新聞記者、マリ・ライアスンからだった。

「たったいま、トニー・ブロンスキーがジョン・セイヤー殺しの犯人じゃないかって密告があった」

「え、ほんと？　記事にするつもり?」

「まあ、暗黒街がからんでることを、ぼかして書く程度にしようと思ってる。くさいというだけで、証拠はないしさ、現行犯でつかまったわけでもないだろ。うちの法務部の判断だと、やつの名前を出せば訴えられる危険があるそうだ」

「ニュースを横流ししてくれてありがとう」わたしは礼儀正しくいった。

「親切で電話したわけじゃないぜ」マリがいい返した。「じつはさ、スウェーデン流の鈍いやり方ながら、ブロンスキーはシュマイセンの手下だってことがひらめいたんだ。おれたち、昨日、シュマイセンの名前が事件のあっちこっちに顔を出してるって点で意見の一致をみたよね。やつの魂胆はなんだい、ヴィク？　どうして、地位のある銀行家とその息子を殺したりするんだ?」

「さあね、見当もつかないわ、マリ」といって、わたしは電話を切った。

居間にもどり、ロティ、ジル、ポールと一緒に《ナバロンの要塞》の残りを見た。気分が落ち着かず、いらいらする。台所に行ってブランディをたっぷり注いだ。ロティのところにはスコッチはない。ブランディ以外は何もない。ロティが物問いたげにわたしを見たが、何もいわなかった。

真夜中近く、映画が終わりかけたころに電話が鳴った。ロティが彼女の寝室で電話に出て、心配そうな顔でもどってきた。台所へついてくるようにと、無言の合図を送ってよこした。「男よ」と、低い声でいった。「あなたがいるかって訊いたわ。いると答えたら、電話を切ってしまった」

「ついにきたわね」わたしはつぶやいた。「でも、いまはじたばたしても仕方がない……わたしのアパートメント、明日の夜には住めるようになるんだって。向こうへ帰って、この火薬樽をおたくからとりのぞくことにするわ」

ロティは首を振り、口もとをゆがめた独特の笑いを浮かべた。「遠慮はいらないのよ、ヴィク――いずれあなたに全米医学協会をやっつけてもらおうと、期待してるんだから」

ロティはジルを遠慮なくベッドに追いやった。ポールが彼の寝袋から這い出した。わたしは彼が重いクルミ材のダイニング・テーブルを壁ぎわに寄せるのを手伝い、ロティは彼女のベッドから枕を持ってきて、そのあと彼女自身も寝室に引っこんだ。

その晩は暑苦しかった。レンガ造りの、壁の厚いロティの建物は気候の最悪の部分を閉め出していたし、台所とダイニング・ルームの換気扇はどうにか眠れる程度に空気を動かしていた。しかし、それでも空気がうっとうしく感じられた。Tシャツのままソファベッドに横になり、汗をかき、すこしうとうとして、目をさまし、寝返りを打ち、またうとうとした。ついには頭にきて、起き上がった。何かしたかったが、することなどありはしない。明かりをつけた。三時半だ。

ジーンズをはいて、コーヒーをいれるために忍び足で台所へ行った。白い磁器にセットしたフィルターから液体がしたたり落ちるあいだ、何か読むものはないかと居間の本箱を見まわした。夜の夜中には、どの本もいずれ劣らず退屈そうに見える。ようやく、ドーフマンの『十七世紀のウィーン』を抜き出し、コーヒー・カップをとってきて、ぱらぱらとページをめくりながら、三十年戦争のあとに猛威をふるったペストや、数多くの死者が埋められたことにより、現在グラーベン（墓（グレイヴ））と呼ばれている通りなどの話を読んだ。その身の毛もよだつ話は、わたしのいらいらする気分にぴったりだった。

換気扇のうなりのなかで、ロティの部屋から電話の鳴る音がかすかに聞こえてきた。ジルが寝ている客用ベッドの横の電話は切ってある。ロティにかかってきたに違いない――産気づいた母親か、血を流している十代の子供だろう。しかし、わたしはとにかく神経を張りつめてすわり、薄い棒縞の木綿のローブをはおったロティが彼女の部屋から出てきた

ときも、なぜか驚かなかった。
「あなたによ。ルース・ヨンカーズって人」
わたしは肩をすくめた。心当たりのない名前。「起こしちゃってごめん」といいながら、短い廊下を通ってロティの部屋に入った。この夜の緊張のすべてが、未知の女からの予期せぬ電話を待つことに向けられていたような気がした。電話はロティのベッド脇の、小さなインドネシア風テーブルにのっていた。ベッドに腰を下ろし、受話器に向かって話しかけた。
「もしもし、ルース・ヨンカーズです」ハスキーな声が答えた。「今夜のUWUの集会であなたと話した者です」
「ああ、あのときの人」わたしは冷静に答えた。「覚えてるわ」集会の最後にいろいろと質問をよこした、頑丈そうなずんぐりした若い女性だ。
「集会のあとで、アニタに話をしました。あなたをどこまで信用していいのかわからなかったけど、彼女には知らせておくべきだと思ったから」わたしは息を呑み、沈黙を続けた。
「彼女、先週、わたしのとこに電話してきて、ピーターの――いえ、ピーターを見つけたことを打ち明けたの。彼女の居所を誰かに教えるときは、その前にかならず彼女に相談するようにって約束させられたわ。実の父親にも、警察にも教えちゃだめだって。どことなく――無気味な感じだった」

「わかるわ」わたしはいった。
「ほんと？」ルースは疑わしげに訊いた。
「あなた、アニタがピーターを殺したと思ったんでしょ」わたしは相手を安心させる口調でいった。「そして秘密を打ち明ける相手に選ばれたことを、ひどく重荷に感じていた。アニタを裏切りたくないけど、殺人事件に巻きこまれたくもない。だから、あの約束に頼れることになって、ほっとしたのね」
ルースは笑いまじりの小さな溜息をつき、それが電話の向こうから薄気味悪く響いた。
「ええ、ご推察のとおりよ。あなた、あたしが思ってたより頭がいいのね。アニタ自身の身が危険だなんて、夢にも思わなかった——だから、あんなに怯えた声だったのね。それはともかく、わたし、彼女に電話したわ。五、六時間話をしたの。あなたの名前は聞いたことがないっていってアニタがいうから、あなたを信用していいかどうか、二人でずっと議論を続けたのよ」ルースは言葉を切り、わたしは沈黙を続けた。「信用するしかないと思う。それがとことん議論して出した結論なの。もしそれが本当なら、本当に彼女を狙ってるギャングがいるのなら——ずいぶん現実離れした話のような気がするけど、アニタはあなたのいうとおりだっていってるわ」
「アニタはどこにいるの？」わたしはおだやかに尋ねた。
「ウィスコンシンよ。わたしが案内する」

「だめ。住所を教えて。わたし一人で捜すから。わたし、ずっと尾行されてるから、あなたと落ちあおうとすれば危険が倍増するわ」

「だったら、住所を教えるのはお断わりよ」ルースはいった。「アニタとの約束では、わたしがあなたを連れてくことになってるから」

「あなたはいいお友達ね、ルース、おまけに、重荷を背負ってくれた。でも、アニタを狙ってる連中があなたが彼女の居場所を知ってることに気づいて、彼女の秘密のほうも知ってるんじゃないかと疑い出したら、今度はあなたの生命が危険にさらされる番なのよ。危険な橋を渡るのはわたしにまかせなさい――それがわたしの商売なんだから」

さらに数分間いい争ったあげく、ルースはとうとう説き伏せられた。アニタが最初に電話をよこしたあとの五日間、ルースはすさまじい緊張を強いられていたわけで、ほかの人間にそれを肩代わりしてもらえて喜んでいた。アニタはミルウォーキーの北西にある小さな町、ハートフォードにいる。カフェでウェイトレスをやっている。赤い髪を短く切って黒く染め、ジョディ・ヒルと名乗っているとのこと。いますぐ発てば、そのカフェが朝食のために開店する時刻に、彼女をつかまえることができるだろう。

電話を切ったときは四時を過ぎていた。三時間のあいだみじめに寝返りを打つかわりに八時間ぐっすり眠ったあとのような、さわやかで身の引き締まる気分だった。

ロティは台所にすわり、コーヒーを飲みながら本を読んでいた。「ロティ、心からすま

ないと思ってるわ。ただでさえ睡眠時間が足りない人なのに、でも、この事件もいよいよ大詰めに近づいたようよ」

「まあ、よかった」ロティは本にしおりをはさんで、それを閉じながらいった。「失踪した女の子？」

「そう。いまの電話はその友達からで、彼女の住所を知らせてきたの。いまからわたしがしなきゃならないのは、誰にも見られずにここを抜け出すことだけ」

「その子、どこにいるの？」わたしは返事をためらった。「あなた、わたしはシュマイセンが使ってるちんぴら連中よりずっと手ごわい専門家たちから、尋問されたことだってあるのよ。それに、ほかに知ってる者がいたほうがいいと思うけど」

わたしは苦笑した。「仰せのとおりね」彼女に住所を告げて、さらにつけ加えた。「問題は、ジルをどうするかだわ。明日――あら、もう今日ね――ウィネッカまで出かけて、彼女の父親がマスターズとマグローのつながりを説明する書類を残してないかどうか、調べるつもりでいたの。そのつながりは、たぶんアニタが教えてくれると思うわ。でも、ジルを向こうへ帰しておいたほうが、わたしは安心なの。ダイニング・テーブルの下のポール、ジル、そして赤ん坊たちという組み合わせを見てると、どうにも落ち着かなくて。ジルが夏の終わりまでこっちにもどって暮らしたいというなら、もちろんそうさせるわ。今回のごたごたが片づきしだい、わたしのところで暮らせばいいんだもの。でも、ここしば

「だめ。住所を教えて。わたし一人で捜すから。わたし、ずっと尾行されてるから、あなたと落ちあおうとすれば危険が倍増するわ」
「だったら、住所を教えるのはお断わりよ」ルースはいった。「アニタとの約束では、わたしがあなたを連れてくことになってるから」
「あなたはいいお友達ね、ルース、おまけに、重荷を背負ってくれた。でも、アニタを狙ってる連中があなたが彼女の居場所を知ってることに気づいて、彼女の秘密のほうも知ってるんじゃないかと疑い出したら、今度はあなたの生命が危険にさらされる番なのよ。危険な橋を渡るのはわたしにまかせなさい——それがわたしの商売なんだから」
さらに数分間いい争ったあげく、ルースはとうとう説き伏せられた。アニタが最初に電話をよこしたあとの五日間、ルースはすさまじい緊張を強いられていたわけで、ほかの人間にそれを肩代わりしてもらえて喜んでいた。アニタはミルウォーキーの北西にある小さな町、ハートフォードにいる。カフェでウェイトレスをやっている。赤い髪を短く切って黒く染め、ジョディ・ヒルと名乗っているとのこと。いますぐ発てば、そのカフェが朝食のために開店する時刻に、彼女をつかまえることができるだろう。
電話を切ったときは四時を過ぎていた。三時間のあいだみじめに寝返りを打つかわりに八時間ぐっすり眠ったあとのような、さわやかで身の引き締まる気分だった。
ロティは台所にすわり、コーヒーを飲みながら本を読んでいた。「ロティ、心からすま

ないと思ってるわ。ただでさえ睡眠時間が足りない人なのに、でも、この事件もいよいよ大詰めに近づいたようよ」

「まあ、よかった」ロティは本にしおりをはさんで、それを閉じながらいった。「失踪した女の子？」

「そう。いまの電話はその友達からで、彼女の住所を知らせてきたの。いまからわたしがしなきゃならないのは、誰にも見られずにここを抜け出すことだけ」

「その子、どこにいるの？」わたしは返事をためらった。「あなた、わたしはシュマイセンが使ってるちんぴら連中よりずっと手ごわい専門家たちから、尋問されたことだってあるのよ。それに、ほかに知ってる者がいたほうがいいと思うけど」

わたしは苦笑した。「仰せのとおりね」彼女に住所を告げて、さらにつけ加えた。「問題は、ジルをどうするかだわ。明日――あら、もう今日ね――ウィネッカまで出かけて、彼女の父親がマスターズとマグローのつながりを説明する書類を残してないかどうか、調べるつもりでいたの。そのつながりは、たぶんアニタが教えてくれると思うわ。でも、ジルを向こうへ帰しておいたほうが、わたしは安心なの。ダイニング・テーブルの下のポーチ、ジル、そして赤ん坊たちという組み合わせを見てると、どうにも落ち着かなくて。ジルが夏の終わりまでこっちにもどって暮らしたいというなら、もちろんそうさせるわ。今回のごたごたが片づきしだい、わたしのところで暮らせばいいんだもの。でも、ここしば

らくは——家に帰すことにしましょうよ」
ロティは唇をすぼめ、コーヒー・カップのなかを数分のあいだじっと見つめた。ようやく、彼女はいった。「そうね。あなたのいうとおりだわ。あの子、ずいぶん元気になってる——自分に好意を示してくれる穏やかな人たちに囲まれて、二晩ぐっすり寝たんだもの——家族のもとに帰っても、たぶん大丈夫よ。わたしも賛成。ずっとポールと一緒にいるのは刺激的すぎるわね。楽しくてたまらないだろうけど、こんな狭苦しいとこにいたんじゃ、刺激が強すぎる」
「ダウンタウンのコンラッド・ヒルトン・ホテルの向かいに、わたしの車が置いてあるの。自分でとりに行くわけにはいかないわ。だって、監視されてるから。明日ポールにとりに行ってもらって、ジルを家まで送り届けてもらってはどうかしら。わたしは明日の夜ここにもどって、さよならをいって、あなたにわずかばかりの私生活を返すことにするわ」
「わたしの車を使ったら?」と、ロティがいってくれた。
わたしは考えこんだ。「どこに駐めてあるの?」
「表よ。通りの向かい側」
「ありがとう。でもわたし、誰にも見られずに抜け出さなきゃならないの。この住まいが監視されてるかどうかはわからないけど、あの連中、アニタ・マグローをつかまえようと必死でしょ。それにさっき、わたしがここにいることを確かめるために、電話までかけて

きたじゃない」

ロティは立ち上がり、台所の明かりを消した。ゼラニウムの吊鉢と薄い紗のカーテンに身を隠して、窓の外をのぞいた。「誰も見えないわ……ポールを起こそうか。わたしの車に乗って、このブロックを二、三周してもらうの。それで誰も尾けてこなければ、裏の路地であなたを拾ってもらう。あなたがポールを降ろす」

「そりゃまずいわ。あなたたち、通りをすこし行ったところで、車が使えなくなっちゃうし、ポールが歩いてもどってきたときに、表で誰かが見張ってたら、変だって気づくわよ」

「ヴィク、困った人ね。あなたらしくないわ、屁理屈ばかり並べ立てて。わたしたち、車が使えなくなるわけじゃないわよ――あなたのがあるんだもの。二番目については――」

彼女はしばらく考えこんだ。「そうだ！　ポールを診療所で降ろせばいい。そこで朝まで寝てもらうの。キャロルかわたしが泊まりこまなきゃならないときのために、ベッドがひとつ置いてあるから」

わたしは笑った。「屁理屈はこれ以上思いつけそうにないわ、ロティ、ポールを起こして、やってみましょう」

ポールはすぐさま機嫌よく起きてきた。計画を説明すると、大乗り気で引き受けてくれた。「表をうろついてるやつがいたら、ぶちのめしてやろうか」

「やりすぎよ、あなた」ロティが愉快そうにいった。「注目を集めすぎるようなまねは慎

んでね。シェフィールド・アヴェニューをまっすぐ行くと、アディスンとの交差点を越えたところに終夜営業のレストランがあるから、そこから電話をちょうだい」
わたしたちはポールが一人でこっそり着換えられるように、彼のそばを離れた。二、三分すると、左手で黒い髪を角ばった顔からかき上げ、右手で紺のワークシャツのボタンをかけながら、彼が台所にやってきた。ロティが車のキーを渡した。わたしたちはロティの暗い寝室から、表の通りを見守った。ポールが車に乗りこんでスタートさせても、襲いかかる者はいなかった。走り出した車を追う者の姿もなかった。
わたしは居間にもどって、きちんと服を着た。スミス&ウェッスンに弾丸をこめ、それをショルダー・ホルスターにおさめるわたしを、ロティは黙って見ていた。わたしは仕立てのよいジーンズをはき、リブ編みのニットシャツの上にブルゾンをはおった。
およそ十分後に、ロティの電話が鳴った。「警報解除」ポールはいった。「だけど、家の前に誰かいる。路地へ車を入れるのはやめとくよ――そいつが裏へまわるかもしれないから。通りの北側にまわって、路地の入口で待ってる」
わたしはこれをロティに伝えた。彼女はうなずいた。「地下室から出たらどうかしら。なかから直接降りて行けるるし、ドアの外は階段やごみバケツで隠れてるから」ロティはわたしを連れて降りて行った。わたしは全身の神経を張りつめていて、極度の緊張状態にあった。階段の吹抜けについている窓から、空が白みはじめて夜明け前の薄墨色へ変わって

ゆくのが見えた。時刻は四時四十分、アパートメントは静まり返っている。遠くでサイレンの音がするが、ロティの通りを走る車は一台もない。

明かりをつけたら通りの側の窓から光が洩れてしまうので、それを避けるために、ロティは懐中電灯を持ってきていた。それを下に向けて階段を照らし、わたしに足もとを確かめさせてから、すぐに消した。わたしは彼女のあとを忍び足で降りていった。一番下まで降りると、彼女はわたしの手首をつかんで、自転車や洗濯機のあいだを縫って進み、外に通じるドアのデッドボルトをゆっくりと静かにはずした。錠がはずれた瞬間、カチッと小さな音がした。彼女はそのまま数分待って、それからドアを引いてあけた。油を差した蝶番のおかげで、ドアは音もなく地下室のなかへ引き寄せられた。わたしはクレープゴム底の靴でそっと地下室を出て、階段をのぼった。

ごみバケツの陰から路地の様子をうかがった。二軒向こうの、路地の南端にある建物の裏側の壁に、フレディがもたれてすわっていた。どうやら眠っているらしい。

わたしは足音を忍ばせながら、階段を降りてもどった。「十分だけここで待ってて」と、ロティの耳もとでささやいた。「緊急脱出路が必要になるかもしれないから」ロティは無言でうなずいた。

階段の一番上で、もう一度フレディの様子を確かめた。あの男に狸寝入りするだけの知恵があるだろうか。右手を銃の握りにかけたまま、ごみバケツの陰から隣の建物の暗がり

へ移動した。フレディは身動きもしない。壁にぴったりはりついて、わたしはすばやく路地を遠ざかった。なかほどに達するやいなや、足音を殺して全速力で駆け出した。

CamScannerでスキャン

15 組台の乙女

ポールは約束どおりの場所で待っていた。なかなか頭がいい。路地から見えないところに車を駐めている。わたしは助手席に乗りこみ、ドアを閉めた。「やばかった？」彼はエンジンをかけて舗道の縁石から離れながら訊いた。

「ううん、でも路地で男が居眠りしてるのが見えたわ。診療所に着いたらロティに電話してくれる？　ジルをアパートメントに一人にしちゃいけないって。警察に頼めば、診療所まで護衛してくれると思うわ。マロリー警部補に電話してそう頼むようにって、ロティに伝えてちょうだい」

「了解」感じのいい若者だ。診療所までの短い道のりを、あとは無言で走った。わたしは彼にわたしの車のキーを預け、車がどこにあるかをもう一度繰り返した。「濃紺のモンザよ」

「幸運を祈ってる」彼は豊かな声でいった。「ジルとロティのことは心配しないで。ぼくがちゃんと守るから」

「ロティのことはぜんぜん心配してないわ」わたしは運転席のほうへ移動しながらいった。「自分の身は自分で守れる人だもの」サイドミラーとバックミラーの角度を調節して、クラッチを踏んだ。ロティが乗っているのは小型のダットサン、彼女に似て実用的で飾り気のない車だ。

アディスン通りをケネディ高速に向かって走りながら、背後の道路に監視の目を光らせたが、追手の気配はなかった。太陽がのぼってふたたびスモッグに変わる前のうっとうしい夜の湿気を含んで、空気はじっとりしていた。東の空が明るくなりつつあり、わたしはがらあきの道路をかなりのスピードで飛ばしていった。高速道路の交通量もすくなく、郊外を通って北行きのミルウォーキー有料道路までの道を、四十五分で走り抜けた。

マニュアル・シフトに不慣れなため、ギアを一段低くして走りはしたが、ロティのダットサンは運転しやすかった。FMラジオがついていたので、イリノイの州境をかなり越えるまでWFMTを聴き続けた。そのあとは受信状態がだんだん悪くなってきたので、スイッチを切った。

ミルウォーキーのバイパスに着いたのは、明るい朝の光のあふれる六時だった。ハートフォードへ行くのは初めてだが、その三十マイル東にあるミシガン湖畔の町ポート・ワシントンだったら、何度も出かけたことがある。確か同じ道を行けばいいはずだ。ただし、ミルウォーキーの北二十マイルの地点まで行ったら、東ではなく西に折れて、ルート60に

入らなくてはならない。

六時五十分、ハートフォードの大通りに入り、〈ロナのカフェ・家庭料理〉の向かいにあるハートフォード・ファースト・ナショナル銀行の前で、ゆっくりと車を停めた。心臓が早鐘のように打っていた。シートベルトをはずして、車を降り、両脚を伸ばした。走行距離は百四十マイルをわずかに切っている。それを二時間十分で走った。悪くはない。

ハートフォードは美しい氷堆石の地帯にあって、ウィスコンシン州の酪農の中心地になっている。ここには船外発動機を作るクライスラーの小工場もあるし、丘の上にはリビーの罐詰工場も見える。しかし、町の金の大部分は酪農から得られるもので、人々は早起きだ。ドアの上の文字によれば、〈ロナ〉は五時半にオープンするらしく、七時にはほとんどのテーブルがふさがっていた。ドアの横の自動販売機で〈ミルウォーキー・センティネル〉を買って、奥に近い空いたテーブルにすわった。

一人のウェイトレスがカウンターの客たちの注文を訊いていた。もう一人がテーブル席全部を受け持っていた。皿を山のようにかかえて、奥のスウィング・ドアをあわただしく出入りしている。短いカーリー・ヘアが黒く染めてあった。アニタ・マグローだ。

彼女はオーバーオールを着た頑丈そうな男たち三人がコーヒーを飲んでいるテーブルに、ホットケーキ、目玉焼き、トースト、ハッシュドポテトを並べ、わたしの隣のテーブルにすわっている濃紺のオーバーオール姿のハンサムな若い男のところへ、目玉焼きを運んで

きた。過労気味のコーヒー・ショップのウェイトレス全員に共通の投げやりな表情で、わたしのほうを見た。「すぐにまいります。コーヒーは？」

わたしはうなずいた。「ゆっくりでいいわ」と、新聞を広げながらいった。オーバーオールの男たちがハンサムな男をからかっている。彼は獣医で、あとの男たちは彼に家畜を診てもらっている農家の人間のようだ。「あんた、みんなに一人前だと思ってもらいてえもんで、その髭生やしてんだろ、先生」彼らの一人がいった。

「いいや、FBIの目をくらますためさ」獣医が答えた。アニタはわたしにコーヒーを運んでくる途中だった。その手が震えて獣医の服にコーヒーをこぼしてしまった。赤くなって、謝りはじめた。わたしは席を立って、コーヒーがそれ以上こぼれないうちに彼女からカップをとりあげた。若い男のほうは気さくにこういった。「いいんだよ、身体中にぶっかけりゃ、それだけ早く目がさめる——まだ熱々のやつだったら特にいいね。ほんとだよ、ジョディ」腕の濡れた部分を彼女がナプキンで不器用に押さえると、さらにつけ加えた。「今日この衣装にこぼされそうなもののうちじゃあ、こいつが一番上等だ」

農民たちはその言葉に大笑いし、アニタはわたしの注文を訊きにやってきた。わたしはポテト抜きのデンヴァー風オムレッツと、グラハムブレッドのトーストと、ジュースを注文した。農村に入っては農民の食べ方に従え。獣医は卵とコーヒーをたいらげた。「さあて、牛どもの呼ぶ声が聞こえるぞ」というと、テーブルに金を置いて出ていった。ほかの客た

ちも徐々に帰りはじめた。七時十五分――一日が始まる時刻。農民たちにとっては、これが朝の乳しぼりと町での用事とのあいだの、短い休憩時間なのだ。彼らは二杯目のコーヒーを飲みながらぐずぐずしている。しかし、アニタがわたしのオムレツを運んでくるころには、食事客のいるテーブルは三つに減り、カウンターには一握りの客が残っているだけとなった。

わたしはオムレツの半分をゆっくり食べて、新聞の単語をひとつ残らず読んだ。客は絶え間なく出入りしている。わたしは四杯目のコーヒーを飲んだ。アニタが勘定書を持ってきたとき、その上に五ドル置いて、さらにその上にわたしの名刺をのせた。そこにはあらかじめこう書いておいた。〝ルースに聞いてきました。通りの向かいに駐めてある緑のダットサンのなかで待ちます〟

表に出て、パーキング・メーターに料金を入れ、車に乗った。クロスワード・パズルを解きながらさらに待つこと半時間、ようやくアニタがあらわれた。彼女は助手席のドアをあけ、何もいわずに腰を降ろした。わたしは新聞をたたんでうしろの座席に置いてから、彼女にじっと目を向けた。わたしが彼女のアパートメントで見つけた写真には、厳密にいうと美人ではないが、若い娘にとっては美しさ以上の武器ともいえる生気に満ちあふれた、笑顔の娘が写っていた。いまの彼女の顔はこわばり、やつれていた。写真をもとに警察が彼女を見つけ出すことは、とうてい無理だろう。二十歳よりもむしろ三十歳に近く見える。

睡眠不足、恐怖、そして緊張が彼女の若い顔に不自然なしわを刻んでいる。本物の赤毛に特有の、えもいわれぬクリーム色の肌に、黒髪は不似合いだった。

「どうしてハートフォードを選んだの？」わたしは訊いた。

アニタは驚いた顔をした。まるで予期せぬ質問だったのだろう。「ピーターとあたし、去年の夏にワシントン郡の共進会でここにきたんです——面白半分に。あのカフェでサンドウィッチを食べて、それを覚えてたから」彼女の声は疲労でかすれていた。わたしのほうを向いて早口にいった。「あなたを信用したい——あたし、誰かを信用せずにはいられないの。ルースにはわからないわ——人を——人を撃つような連中のことは。ほんというと、あたしだってわかってないけど、でも、ルースよりは知ってるつもりよ」彼女は陰気な微笑を浮かべた。「これ以上こんなとこに一人ぼっちでいたら、気が変になってしまう。でも、シカゴへはもどれない。助けが必要なの。あなたにその力がないとしても、密告してあたしを撃たせるつもりだとしても、あるいは、ルースをだましてあたしの居所を聞き出した利口な女の殺し屋だとしても——あたしにはわからない。一か八かやってみるしかない」両手をあまりにきつく組みあわせているため、その関節は白くなっていた。

「わたしは私立探偵よ」わたしはいった。「先週、あなたを見つけてほしいとあなたのお父さんから依頼を受けて、かわりにピーター・セイヤーの死体を見つけたの。週末に入って、お父さんは調査を中止するようにいってきたわ。いったいどういう意味なのか、わた

しなりに推理したつもりよ。わたしが事件に首を突っこんだ経過はだいたいこんなところね。あなたがかなり危険な立場にいることについては、わたしも同感。それから、わたしが密告した場合は、二人とも無事じゃすまないわ。ところであなた、ここに永久に隠れてるわけにはいかないのよ。事件に片をつけて、あなたを隠れ家から解放してあげるだけの腕力と、機敏さと、頭脳とを、このわたしは持ってるつもりよ。苦しみを癒す力はわたしにはないし、これからもいろんな苦しみが待ってるだろうけど、あなたが堂々と威厳を持って生きていけるように、シカゴへ、あるいはあなたが望む土地ならどこへでも、連れて行ってあげられるわ」

アニタはうなずきながら考えこんだ。人々が舗道を行きかっている。まるで金魚鉢のなかにいるような気分だ。「どこかにゆっくり話せる場所はないかしら——もうすこし広々したところ」

「公園があるわ」

「いいわね」その公園はルート60をミルウォーキーに向かってすこしもどったところにあった。わたしは道路から見えないところにダットサンを駐め、園内を流れて向こう岸にあるクライスラー工場の裏塀との境界線となっている小さな川の岸辺に降りて、二人で腰を降ろした。暑い日だが、この田園地帯までくると、空気は澄んでいてかぐわしい。

「さっき、威厳を持って生きるというようなことをいわれましたね」アニタは川を見つめ、

口もとを苦々しい笑いにゆがめながらいった。「そんなこと、あたしには二度とできそうもないわ。ピーターの身に何が起きたかを知ってしまったんだもの。ある意味では、彼を殺したのはあたしだともいえるわ」

「どうしてそんなことというの?」わたしはやさしく訊いた。

「あなた、彼の死体を見つけたの。とっさに何があったかを悟ったわ。あたしもそうなの。四時に帰ってきて、ピーターを見つけたっていったでしょ。あたしもそうなの。前後の見境をなくして逃げ出してしまった。どこへ行けばいいのかわからなくて——ここにきたのは次の日だったの。メアリのところに一晩泊めてもらって、それからここにきたの。連中がどうしてあたしを待ち伏せしてなかったのか理解できないけど、帰ればつかまることはわかってたわ」アニタはしゃくり上げた。肩と胸を震わせて激しい嗚咽をもらしている。「威厳なんて!」と、かすれた声でいった。「そんなものいらない! 一晩でもいいからぐっすり眠りたい」わたしは何もいわずに、じっと彼女を見守っていた。二、三分すると、アニタはすこし落ち着いた。「どこまで知ってるの」と訊いた。

「確かなことはあまり知らない——立証できることって意味よ。でも、ある程度推理してみたわ。はっきりわかってるのは、あなたのお父さんとヤードリー・マスターズが密約を結んでるってこと。どういう密約かはわからないけど、あなたのアパートメントでエイジャックスの支払手形を見つけたわ。たぶん、ピーターが持ち帰ったものね。そこでわたし

は推理したの。その密約は支払手形と関係がありそうだって。あなたのお父さんがアール・シュマイセンと知りあいだってことはわかってるし、それから、誰かが何かを必死に捜し求めて、最初はあなたのアパートメントにそれがあると思いこみ、次に、わたしがそれを持ち帰って自分の部屋に隠したものと思いこんだこともわかってるわ。連中は必死にそれを追い求めて、ついには両方のアパートメントを家捜しした。そこでまた推理、連中が捜していたのは保険金支払手形、家捜しをおこなったのはシュマイセンか、彼の手下の一人じゃないかしら」

「シュマイセンって、殺し屋なの?」アニタはかすれた、緊張した声で訊いた。

「うーん、最近はなかなか品行方正よ。自分で人を殺すことはないけど、殺しをやらせるためのちんぴらを雇ってるわ」

「すると、あたしの父がその男に頼んでピーターを殺させたのね」アニタは口もとをゆがめ、涙の乾いた険しい目で、挑むようにわたしを見つめた。これこそ、彼女が夜ごとうなされてきた悪夢だったのだ。眠れなかったのも道理だ。

「さあ、わからないわ。わたしの推理をもうひとついうわね。お父さんはあなたを愛してるわ、わかるでしょ。いまごろはきっと気も狂わんばかりよ。お父さんはあなたの生命を故意に危険にさらしたわけじゃないのよ。それからピーターを故意に撃たせたわけでもない。きっとこうよ、ピーターがマスターズを問いつめた、マスターズは狼狽してあなたの

お父さんに電話した」わたしは一息ついた。「これは愉快な話じゃないし、あなたにこんなことというのはとてもつらいの。でも、あなたのお父さんはお金と引換えに人を始末するような連中を知っている。荒っぽい業界の荒っぽい組合でトップの座にのし上がった人だもの、そういう連中と知りあいにならざるを得なかったのよ」

アニタはわたしのほうは見ずに、疲れた表情でうなずいた。「知ってるわ。過去にはそんなこと知りたいとも思わなかったけど、でもいまは知ってしまった。やっぱり、あたしの——あたしの父がそのシュマイセンて男の名前を彼に教えたのね。あなたがいいたいのはそれなのね」

「ええ。マスターズは始末したい相手の名前を、お父さんには話さなかったに違いない——ある人物に秘密を嗅ぎつけられたので始末しなきゃならない、と告げた程度じゃないかしら。あなたのお父さんの行動を説明するには、そう考えるしかなさそうだもの」

「どういう意味？」彼女はたいして興味もなさそうに訊いた。

「お父さんは先週の木曜日にわたしを訪ねてきて、偽の名前を使い、偽の話をする一方で、わたしがあなたを見つけることを望んでいた。そのとき、お父さんはピーターの死を知っていて、あなたが失踪したものだからうろたえてたのよ。あなた、お父さんに電話して、ピーターを殺したのはお父さんだと責めたてたんでしょ、違う？」

彼女はふたたびうなずいた。「弁解の余地のない愚行だったわ。あたしは怒りと、恐怖

と、そして――そして悲しみで動転してたの。その悲しみは、ピーターだけじゃなくて、わかるでしょ、父と、組合と、あたしがすばらしいもの、戦う価値のあるものと信じて育ってきたすべてのものに対して、感じた悲しみだった」

「そうね、そうだったでしょうね」アニタがそれ以上何もいわなかったので、わたしは先を続けた。「お父さんは最初のうち、何が起きたのか気づかなかった。二、三日してからようやく、ピーターとマスターズを結びつけて考えた。そして、マスターズがピーターを殺させたのだと悟った。それから、あなたの身が危ないことも悟った。お父さんがわたしをお払い箱にしたのはそのときだったんだわ。わたしにあなたを見つけられては困るわけね。だって、とにかく、誰にもあなたを見つけてほしくなかったんだもの」

彼女はふたたびわたしを見た。「そのとおりよ」と、相変わらずの疲れた声でいった。「確かにそう。でも、それで事態が好転するわけじゃないわ。父は人殺しのお膳立てができる人間だし、ピーターのときだって父がお膳立てしたのよ」

わたしたちは何もいわずにじっとすわって、二、三分のあいだ川の流れを見つめていた。やがて、アニタはいった。「あたし、組合のなかで大きくなったのよ。母はあたしが三つのときに死んだの。兄弟は一人もいなくて、父とあたし――あたしたち、とても仲がよかった。父は英雄だったわ。何度も乱闘騒ぎを起こしたことは知ってるけど、でも、やっぱり英雄だった。父が喧嘩しなきゃならないのはボスたちが悪いからだ。父が連中をやっつ

けることさえできれば、アメリカ全土が働く男女にとってもっと住みやすい場所になるだろう、と思いながら大きくなったの」アニタはふたたび陰気な笑みを浮かべた。「まるで子供向けの歴史の本みたいなお話ね。確かに子供向けの歴史だったわ。組合での父の地位が高くなるにつれて、お金がたくさん入ってくるようになった。シカゴ大学——あたしがずっと憧れてたとこだった。父はそういって、あたしを大学へ行かせてくれた。車だって、頼めば買ってもらえた。労働者階級の英雄にそんなにお金が使えるわけはないって、うすうす感じながらも、わたしはそれを脇へ押しのけたわ。〝パパには資格があるんだ〟って自分にいい聞かせてね。そして、ピーターと出会ったときに思ったの——かまうものか、セイヤー一家は父が夢に見たこともないほどのお金を持ってて、しかもそれは働いて得たお金じゃないのよ、って」アニタはここでまた沈黙した。「あたし、そうやって自分を納得させてたのね。それから、シュマイセンのような男たち。うちにはそういう連中が出入りしてるわ——しょっちゅうじゃないけど、ときどきね。あたしがそれを信じようとしないだけ。新聞にギャングの記事が出て、そのギャングがうちにきて父親と酒を飲んだことのある男だとしたら？　耐えられないわ」彼女は頭を振った。「ピーターはオフィスからアパートメントにもどってくる毎日だった。お父さんへの親孝行のつもりで、マスターズのとこでアルバイトしてたの。あの人、莫大な財産てものにうんざりしてたわ——それはあたしたちが恋に落ちる前からのことだったけど、彼のお父さ

んはあたしのせいだと思ってたみたい。ピーターは彼の人生にとってほんとに価値のあることをしたいと願ってたの――それが何か、彼にはまだわからなかったけど。でもいちおう、親孝行のために、エイジャックスでのアルバイトを承知したのよ。うちの父はそんなこと知らなかったんでしょうね。あたしからも話さなかったし。ピーターの話はあまりしなかったの。あたしが大物銀行家の息子とつきあってるのを、父が快く思ってなかったから。それと、父には清教徒的なとこがあって、あたしがピーターとああいう暮らしをしてるのをすごくいやがってたの。だから、さっきもいったように、父の前ではピーターの話はしないことにしてたのよ。

それはともかく、ピーターは組合の大物何人かの名前を知ってたわ。だって、恋をすればお互いにそういうことを知るようになるもの。あたしはフォート・ディアボーン信託の頭取が誰かを教わった。ふつうだったら、そんなこと知るはずないのにね」

話はすらすらと進みはじめていた。わたしはもう何もいわず、アニタが話しかけている風景の一部に自分を変えた。

「ええと、ピーターはマスターズの下で、どちらかといえば退屈な仕事をしていたわ。経理部のなかで無理にこしらえたような仕事だった。予算担当責任者の指示に従うようにいわれてて――彼、その人のことは好きだったわ――頼まれた仕事のひとつに保険金支払手形の記録を支払ファイルと照合する作業があったの。一致してるかどうか確かめるわけね。

ジョー・ブローはファイルによると一万二千ドルの支払いしか受けられないはずなのに、一万五千ドルも受けとっている、というふうに。会社の人たち、その仕事はコンピュータのプログラムにやらせてたんだけど、プログラムにどこか故障が起きたらしくて、ピーターに人間の手によるチェックを頼んだの」彼女は笑った。その笑いはじつはすすり泣きだった。「ねえ、エイジャックスのコンピュータ・システムが優秀だったら、ピーターは死なずにすんだはずよ。ときどきそう考えて、プログラマーを片っ端から撃ち殺してやりたくなる。もう手遅れだけど。ピーターは金額の一番大きな分から始めたわ。無数のファイルがあるんだもの。毎年三十万件の労働者補償の保険金請求が寄せられるんだけど、適当に抜き出して調べればいいとだけいわれてたの。そこで、莫大な金額の分から調べはじめたわけ——長期間続いている完全労働不能の保険金請求からね。最初は楽しかったみたい。だって、いろんな人の身に何が降りかかったかがわかるんだもの。そしてある日、彼はカール・オマリーあてに振り出された手形を見つけた。めったにないコンベヤー・ベルトの事故で右腕を失い、脚が不自由になった、完全労働不能のケース。たまに起きるのよね、そういう事故が——ベルトにはさまれて、機械に巻きこまれる。身の毛のよだつ話だわ」

わたしは同意を示してうなずいた。

アニタはわたしの前方を見つめるのをやめ、わたしに視線を向けて話しはじめた。「ところが、じつは事故なんか起きてなかったの。カールは父の右腕といわれている副委員長

の一人で、あたしが物心つく以前から、あたしの人生の一部だった人なの。あたしは彼をカールおじさんて呼んでるのよ。ピーターはそれを知ってたものだから、住所を家に持って帰ってきた。それは間違いなくカールの住所だった。カールはあなたやあたしと同じように、ぴんぴんしてるわ。事故にあったことは一度もないし、組立てラインから離れてもう二十三年になるわ」

「なるほど。どう解釈すべきかあなたにはわからなかったけど、お父さんには尋ねなかった、そういうことね？」

「ええ、何を訊けばいいのかわからなかったの。どういうことだかさっぱりわからなかった。あたし、カールおじさんが架空の事故をでっち上げたんだと思って、ピーターと冗談半分にその話をしたわ。でも、彼はやがて頭をひねりはじめた。そういう人なの、わかるでしょ、物事はとことん突きつめて考えないと気のすまない人。そこで、委員会のほかのメンバーについても調べてみた。すると全員が損害塡補の請求をしてたってわけ。全部が全部、完全労働不能のケースじゃないし、永久不能のケースでもないけど、とにかく、ひとつ残らずかなりの額の請求だったの。ぞっとするような事実よね。じつは、うちの父の分もあったのよ。それであたし怖くなって、父には何も話せなくなってしまったの」

「ジョゼフ・ギエルチョフスキーも委員会のメンバーだったの？」わたしは訊いた。

「そうよ、副委員長の一人で、三〇五一支部っていって、カリュメット・シティにあるす

ごく勢力のある支部の支部長をやってる人。知ってるの？」

「わたしが見つけた保険金支払手形に、その名前があったのよ」連中が害のなさそうなその小型のダイナマイトをわたしの手に握らせまいとした理由を、わたしは理解することができた。それを求めてわたしのアパートメントを荒らしまわったのも無理はない。「そこで、ピーターはマスターズに話そうと決心したのね？　マスターズが一味だなんて知らなかったのね？」

「ええ、それにピーターは真っ先にマスターズに話すのが当然だと思ってた。次にどうすればいいのか、二人ともよくわからなかったの——ほんとはうちの父に話すべきだったのね。でも、あたしたちはマスターズに知らせるべきだと考えた」彼女の青い目は顔のなかで、恐怖をたたえた暗い水たまりのように見えた。「そのあとどうなったかというと、ピーターはマスターズにすべてを打ち明け、マスターズは彼に、重大な問題だからきみと内密に話しあいたい、ことによると州保険庁に訴える必要があるかもしれないって答えたの。それを聞いてピーターが、喜んでと答えると、マスターズは月曜日の朝、出社前にきみのとこへ寄るからといった」彼女はわたしを見つめた。「妙な話、そうでしょ？　妙だと気づくべきだった。経理部長がそんなことをするはずないし、話があればオフィスでするのがふつうだって気づくべきだった。あたしたち、ピーターが彼と家族ぐるみのつきあいをしてるからだとしか思わなかったの」彼女は川の流れに視線をもどした。「あたしもその場

にいたかったけど、用事があったの。政治学部の教授の一人に頼まれてリサーチしてる最中だったの」

「ハロルド・ワインシュタイン？」あてずっぽうにいってみた。

「ええ、あたしのこと、ずいぶん詳しく調べたのね。とにかく、あたしは八時半に向こうへ行く約束だったし、マスターズがくるのは九時ごろの予定だったから、ピーターを残して出かけたの。あたしが彼を置き去りにしたんだわ、そうよね？ ひどい女、どうしてあんな用事がばかみたいに大切に思えたのかしら。どうしてピーターのそばにいなかったのかしら」いま、アニタは泣いていた。涙をこらえて肩を震わせるのではなく、本物の涙を流していた。両手に顔を埋め、泣きじゃくっている。自分がピーターを置き去りにして死なせたのだ、自分のほうが死ねばよかったのだ、犯罪者の友人に囲まれているのは自分の父親で、彼の父親ではないのだ、と繰り返しいい続けた。わたしは数分のあいだ、彼女の気のすむようにさせておいた。

「よく聞いて、アニタ」わたしは鋭い声ではっきりいった。「一生のあいだ、この事件のことで自分を責め続けても、そりゃかまわないわ。だけど、あなたがピーターを殺したわけじゃない。見捨てたわけでもない。罠にかけたわけでもない。あの場に居あわせれば、あなたまで一緒に殺されてしまって、事件の真相は永遠に明るみに出なかったかもしれないのよ」

「真相なんてどうだっていい」アニタは泣きじゃくった。「真相はあたしが知ってる。世間がそれを知ろうが知るまいが、そんなのどうだっていいわ」

「世間が何も知らずにいたら、あなたの命はないわよ」わたしは容赦なくいった。「そして、次に例のファイルを点検して、あなたとピーターの知った事実を知ることになる善良な若者、あるいは娘さんも同じように殺されるのよ。これが腐りきった事件だってことはわかってるわ。あなたが地獄や、さらに多くのものをくぐり抜けてきて、これからもっと大きな不幸にあうだろうってこともわかってる。でも、わたしたちが行動を起こしてこの件に決着をつけるのが早ければ早いほど、あなたの傷が癒えるのも早くなるのよ。くよくよ考えこむ時期が長びくほど、傷は耐えがたいものになるでしょう」

アニタはすわったまま両手で頭を抱えていたが、すすり泣きは静まっていた。しばらくしてからまっすぐにすわりなおして、ふたたびわたしの顔を見た。顔は涙に濡れ、目は充血していたが、緊張の表情がすこし和らぎ、彼女自身のデスマスクのような様子は薄れて、これまでより若々しい顔になっていた。「あなたのいうとおりね、あたし、人との関わりを恐れないようにって、育てられてきたのに。でも、父を相手にそんなことするなんて、あたし耐えられない」

「わかるわ」わたしは穏やかにいった。「わたしの父親は十年前に亡くなったの。一人っ子だったわたしは、父ととっても仲良しだった。あなたが感じてるに違いないことが、わ

たしにはわかるわ」
彼女は黒のレーヨンに白のエプロンという、趣味の悪いウェイトレスの制服を着ていた。エプロンで鼻をかんだ。
「誰が手形を現金にしてたの？」わたしは訊いた。「記名人になってる人たち？」
彼女は首を振った。「まったくわからない。手形を直接現金に換えるわけじゃないから。誰かが銀行に手形を持ってくと、銀行は本人の口座があることを確認してから、保険会社に対してその口座へ小切手を送るよう伝えるの。手形がどこの銀行宛てになってるかを知る必要があるけど、その情報はファイルにはのってなかったわ――手形のカーボン・コピーがあっただけ。オリジナルが彼らの手もとにあるのか、主計部にまわったのか、それともどこかよそにあるのか、あたしにはわからない。そして、ピーターは――ピーターはマスターズに無断で調査を進めることをためらってたの」
「ピーターの父親の役割はなんだったの？」わたしは訊いた。
そう訊かれて、アニタは目を見張った。「ピーターのお父さん？　あの人は無関係よ」
「関係してたはずよ。このあいだ殺されたんだもの――月曜日に」
彼女の頭が前後にふらっと揺れて、吐きそうな顔になった。「ごめん」わたしはいった。「いきなりこんなことといいだすなんて、軽率だったわ」アニタの肩に腕をまわした。それ以上何もいわなかった。しかし、マスターズとマグローが手形を現金に換えるのを、セイ

ヤーが助けていたに違いないと思った。ナイフグラインダーズの連中がほかにも何人か関係しているかもしれないが、委員会の面々とそのような積立金を分けあうことはまずないだろう。第一、こうした秘密を多くの人数が知れば、たちまち世間に広まってしまう。マスターズ、マグロー、そしてたぶん、ファイルに本物の診断書を添えるための医者。セイヤーが彼らのために口座を作る。なんのための口座か知らないし、質問もいっさいしない。しかし、マスターズたちはおそらく、毎年のようにセイヤーに付け届けをしていただろうし、息子の死因を究明すると彼がいきまいたものだから、彼にナイフを突き立てたのだろう。一味である以上、処刑するのは当然というわけだ。満足すべき推理だとわたしは思った。ポールとジルはセイヤーの書斎で何か見つけただろうか。ルーシーは二人のうちどちらかを懐に入れてくれただろうか、と心のなかで考えた。一方、アニタのことも考えてやらなくてはならなかった。

わたしたちはしばらく黙ってすわっていた。アニタは自分一人の思いにひたって、いまのやりとりを整理していた。やがて、こういった。「気が楽になるわ、ほかの誰かに聞いてもらうと。そんなに辛くなくなったわ」

わたしは低い声で同意を示した。アニタは自分の滑稽な衣装を見下ろした。「あたしったら、こんな格好して！ ピーターが見たらきっと——」言葉が震えてとぎれ、すすり泣きに変わった。「あたし、ここから出ていきたい。ジョディ・ヒルでいるのはもういや。

シカゴにもどれるかしら」
　わたしは考えてみた。「どこへ身を隠すつもり？」
　彼女はしばらく考えこんだ。「困ったわ。ルースとメアリをこれ以上巻きこむわけにいかないし」
「そのとおりよ。単にルースとメアリのためだけじゃなくて、わたしがゆうべUWUの集会場所まで尾行されたせいもあるわ。シュマイセンはおそらく当分のあいだ、メンバーの何人かに監視をつけるでしょうね。それから、いいこと、今回の事件が完全に片づくまで、家に帰るわけにはいかないのよ」
「わかってます」アニタはうなずいた。「ただ――とっても辛い――ここにきたのは、ある意味では賢明だったけど、いつだって肩越しにうしろを振り返ってばかりいて、心のなかに浮かぶ本当の思いを人に打ち明けることもできなかった。お客さんたち、ボーイフレンドはいるのかって、いつもあたしをからかうのよ。あのやさしいドクター・ダンみたいに。ほら、あたしが今朝コーヒーをこぼした人。でも、あたしにはピーターの話ができないから、みんな、あたしのこと、よそよそしい子だと思ってるの」
「あなたをシカゴへ連れて帰ることはできると思うわ」わたしはゆっくりいった。「でも、何日か閉じこもってなきゃだめよ――わたしがすべてを片づけるまで……保険金詐欺の全貌をおおやけにしてもいいんだけど、網にかかるのはあなたのお父さんだけで、マスター

ズのほうはうまく逃げてしまうかもしれない。だからほかのすべてを公表する前に、マスターズがいい逃れできないよう、共犯関係を立証しておきたいの。わかる?」アニタはうなずいた。「オーケイ、だったら、あなたがシカゴのホテルに泊まれるように手配するわ。あなたが泊まってることを誰にも知られないようにしてあげる。外出はできないわよ。でも、監禁生活で完全に頭がおかしくなってしまうのを防ぐために、信用できる人間にせっせと寄ってもらって、話し相手になってもらう。それでいいかしら?」

彼女はむずかしい顔をした。「選択の余地はなさそうね。とにかく、シカゴにもどれる、あたしがなじんできたものの近くへ行ける……ありがとう」遅まきながらつけ加えた。

「こんな愚痴っぽい言い方するつもりじゃなかったのに——あたしのためにしてくださったあらゆることに、心から感謝しています」

「いまはパーティの礼儀作法で頭を悩ませてるときじゃないのよ。感謝してほしくて、こんなことしてるんじゃないもの」

わたしたちはゆっくり歩いて、一緒にダットサンまでもどった。小さな昆虫が草のなかをぶうんと飛びまわり、小鳥は尽きることのないメドレーを続けている。小さな子を二人連れた女性が公園にきていた。子供たちは土を掘り返すのに余念がない。女性は本を読みながら、二、三分おきに顔を上げて子供たちを見ていた。木の根元にピクニック・バスケットがもたせかけてある。横を通りすぎたとき、女性が、「マット! イヴ! おやつに

しない？」と叫んだ。子供たちは一目散に走ってきた。かすかな羨望の念が湧くのを感じた。よく晴れた夏の日、逃亡者を警官やギャングからかくまう代わりに、わが子を連れてピクニックに出かけたら、きっと楽しいだろう。

「ハートフォードですませておくべき用事はあって？」わたしは訊いた。

アニタは首を振った。「〈ロナ〉に寄って、やめるっていうだけよ」

レストランの前に車を駐め、彼女がなかに入っていったあいだに、角の電話ボックスから《ヘラルド・スター》に電話した。もう十時近くだったので、ライアスンは彼のデスクにいた。

「マリ、二、三日のあいだ大事な証人をかくまってくれたら、最高に楽しいニュースを教えてあげる」

「どっからかけてんだ？」彼は訊いた。「まるで北極点にいるみたいに聞こえるぜ。証人って誰？　マグローの娘？」

「マリ、あなたの頭って鋼鉄の罠みたいに鋭いのね。わたしが求めてるのは約束、必要なのは協力よ」

「協力ならいつだってしてるだろ」マリは文句をいった。「どっさりと。まず、きみにあの写真を渡してやった。それから、きみの弁護士から書類を巻き上げたかったけどさ、きみが死んだって噂を流すようなまねは差し控えた」

「マリ、いまこの瞬間、この地球上に頼りにできる人間がもう一人いるのなら、そちらへ乗り換えたい気分だわ。でも、あなたはすごい特ダネにありつけるとにらんだら、ぜったい買収されない人だしねえ」

「わかりましたよ」彼は承知した。「なんなりとお申しつけください」

「ご立派。わたしがいるのはウィスコンシン州のハートフォード、アニタ・マグローも一緒よ。アニタをシカゴに連れて帰って、この事件が無事に片づくまで厳重に包んでおきたいの。つまり、誰にも居所を知られてはならないって意味。連中に知られたら、あなた、彼女の死亡記事を書くことになるわよ。わたしは目下、彼らの注目の的だから、直接あの子を連れて帰るわけにいかない。そこでどうするかっていうと、ミルウォーキーまでアニタを連れてって列車に乗せるから、あなたにユニオン駅まで迎えに出てもらいたいの。出迎えたら、そのままホテルへ連れてって。ループからうんと離れてて、シュマイセンの息のかかった小利口なベルボーイがアニタの入ってくるのを見て、二たす二はいくつなんて計算を始めることのないようなホテルがいいわ。できる?」

「たまげたよ、ヴィク、きみは何をやらせても、控えめってことを知らない人だね。よし、引き受けた。特ダネってなんだい？　彼女の身が危険な理由は？　シュマイセンが彼女のボーイフレンドを始末したのかい？」

「マリ、はっきりいっときますけどね、事件が完全に解決する前にいまの話の一部でも記

事にしてごらんなさい、あなたの死体がシカゴ川から引きあげられることになるわよ。死体をそこへ投げこむのはこのわたし」

「《シティ・オブ・シカゴ》を出し抜こうと待ち構えている一紳士として、名誉にかけて約束いたします。列車が到着するのは何時？」

「知らない。ミルウォーキーからまた電話する」

受話器を置いたとき、アニタはすでに店からもどってきて、車の横で待っていた。「やめるっていったら、店の人たち、ちょっぴり不服そうだったわ」といった。

わたしは笑った。「じゃあ、帰る道々、そのことを気に病んでらっしゃい。そうすれば、悩みごとを忘れてしまえるわ」

16 保険金請求の代価

シカゴ行きの列車を待って、ミルウォーキーで一時半まで時間をつぶさなくてはならなかった。わたしはアニタを駅に残して、彼女のジーンズとシャツを買いに出かけた。駅の洗面所で顔や手を洗って着換えをすませた彼女は、いままでよりも若く健康そうになった。いやらしい黒のヘアダイを落としてしまえば、ずっとかわいくなるだろう。自分の人生はもうおしまいだと思っていて、いまのところ確かに、彼女の人生は光り輝いてはいないようだ。でも、まだたったの二十歳。いずれは立ち直る。

マリは駅まで迎えに行って彼女をホテルへ連れていくことを承知した。リッツに決めたという。「二、三日身を隠すつもりなら、居心地のいいホテルのほうがいいだろ」と説明した。「ホテル代は《スター》紙ときみとで折半にしよう」

「ご親切ね、マリ」わたしは冷淡に答えた。彼にわたしの応答サービスへ電話してもらい、名前抜きで〝イエス〟または〝ノー〟だけの伝言を残してもらうことに決めた。〝ノー〟は出迎え、あるいはホテル送りのさいに不都合が生じたので、わたしが彼のもとへ急がな

くてはならないという意味。わたしはホテルの近くへは決して行かないつもりでいる。日に二回、マリが食料と世間話をたずさえてアニタを訪ねる予定になっている――アニタがルーム・サービスを呼ぶことも、わたしたちとしては避けたかった。

列車がホームを出るが早いか、わたしは有料道路へ、そしてシカゴへ車を向けた。すでに、ほぼすべての手がかりが集まった。問題はマスターズがピーター・セイヤーを殺したという証拠が挙げられないことだ。殺しを命じたという証拠が。もちろん、マスターズがピーターと会う約束をしていたというアニタの話が、それを裏づけている。しかし、証拠がない。ボビーに逮捕令状をとってもらい、手錠を持ってシカゴの有力企業の部長のもとへ出かけてもらうに足る証拠が、何ひとつないのだ。結局はわたしが巣のなかを飛びまわって、スズメバチがわたしを刺しにくるのを待つしかなさそうだ。

有料道路をそれてエデンズ高速道路に向かう途中、ジルが家に帰っているかどうか、そして、父親の書類のなかから何か捜し出したかどうかを確かめるために、ウィネッカまで遠回りした。ウィロー・ロードのガソリン・スタンドで車を停めて、セイヤーの家に電話した。

電話に出たのはジャックだった。はい、ジルは帰っていますが、新聞記者の方とはお話しできません。「新聞記者じゃないわ」わたしはいった。「V・I・ウォーショースキーよ」

「きみと話をさせることは、なおさらできない。きみはセイヤーの義母をさんざん苦しめたんだぞ」

「ソーンデイル、あなたみたいにおバカな最低男は見たことがないわ。ジルを電話に出してくれないなら、五分以内にそちらへ行くわよ。ジルへの電話をとりついでくれる人間が見つかるまで、ぎゃんぎゃんわめき立てて、近所中を悩ませてやるから」

彼はすさまじい音を立てて受話器を叩きつけた。電話がまだつながっているところをみると、叩きつけた場所はテーブルの上だったらしい。二、三分後に、ジルの澄んだ高い声が聞こえてきた。「ジャックになんていったの？」くすくす笑った。「あんなに怒った顔、見たことないわ」

「あら、近所の人たち全員をごたごたに巻きこんでやるって、ちょっと脅しただけよ」わたしは答えた。「もっとも、近所の人たち、巻きこまれてないとはいえないわね。警察の連中が一軒残らず訪ねてまわって、質問をしてるだろうから……ウィネッカまでは無事だった？」

「ええ、もちろん、わくわくしちゃった。ポールが警察に頼んで診療所まで送ってもらったのよ。ロティはいやがったけど、彼、ゆずらなかったの。それから彼があなたの車をとりに出かけて、あたしたち、サイレンの音と一緒に診療所を出発したのよ。マゴニガル部長刑事がすっごく、すっごく、かっこよかった」

「それは何より。国内戦線の状況はどう？」

「ええ、上々よ。ママはあたしを許すことにしたけど、ジャックはいやらしいぺてん師みたいな態度をとりつづけてる。あたしのためにママがとっても、とってもいやな思いをしたんだって、ねちねち繰り返すの。あたしがポールにお昼を食べてってってって頼んだら、ジャックは彼のこと、ごみ集めの人か何かみたいに扱うのよ。あたし頭にきちゃったけど、ポールは慣れてるよっていってくれたわ。ジャックなんか大っ嫌い」ジルはそう締めくくった。

この激しい言葉に、わたしは思わず笑い出した。「偉い！　ポールはすてきな男性よ——支持する価値はあるわ。お父さんの書類に目を通すチャンスはあったかしら」

「ええ、あったわ。もちろん、ルーシーがかんかんになっちゃった。でも、あたし、ロティになったつもりで、ルーシーのことなんか頭っから無視してやった。何を捜し出せばいいのか、よくわかんなかった」ジルはいった。「でも、表にミスタ・マスターズとミスタ・マグローの名前が書いてある書類がひとつ見つかったわ」

わたしは突然、大きな危機をくぐり抜けて、無事に反対側へ出たかのような、完璧な心の安らぎを味わった。気がつくと、電話に向かって笑いかけていた。「よくやったわね」といった。「なんの書類だった？」

「わかんない」ジルは自信なさそうに答えた。「とってきて、ここで読み上げましょう

か」

「それが一番のようね」わたしは賛成した。彼女は受話器を下に置いた。わたしは小声で歌いはじめた。あなたはなあに、ねえ、書類さん？　洗濯屋さんのどんな札？

「ゼロックスのコピーよ」電話口にもどってきたジルがいった。「一番上に、パパがインクで日付を入れてるわ——一九七四年三月十八日。次にこう書いてある。〝信託契約。末尾署名者ヤードリー・リーランド・マスターズ、およびアンドリュー・ソロモン・マグローはここに、下記の者のために権限に基づいて、本口座に振込まれるすべての金員について信託上の責任を付与されるものである〟」〝信託上の〟のところでジルはつっかえた。

「それから名前がずらっと並んでるの——アンドリュー・マグロー、カール・オマリー、ジョゼフ・ギエルー——だめ、発音できない。名前は全部で——ええと——」小声で数えているのが聞こえた。「——二十三。そのあとにこうつけ加えてあるわ。〝および、私の副署の下に随時追記されるその他の名前〟それからパパの名前と、パパが署名するためのスペース。これがあなたの捜してたもの？」

「それがわたしの捜してたものよ、ジル」わたしの声は、カブスがワールド・シリーズに優勝したことを告げるときと同じくらい、静かで落ち着いていた。

「この書類、どういう意味なの？」ジルが訊いた。ジャックとルーシーを打ち負かした喜びから、そろそろさめかけていた。「パパがピーターを殺したって意味？」

「いいえ、ジル、違うのよ。お父さんはお兄さんを殺してなんかいないわ。その書類が意味してるのは、お兄さんが見つけた卑劣な陰謀を、お父さんが最初から知ってたってことなの。お兄さんはそれを見つけたために殺されてしまったの」

「そうだったの」彼女は二、三分のあいだ黙りこんだ。「誰が兄さんを殺したかわかったの？」しばらくしてから、彼女は訊いた。

「ええ、たぶん。あなたはおとなしくしててね、ジル。家にじっとして、それから、ポール以外の人間とは出かけないように。明日かあさってには会いにいってあげる――それまでにはきっと、何もかも片づいてるわ」わたしは受話器を置こうとして、書類を隠すよう注意しておかなくてはと思った。「あ、ジル」といったが、電話はすでに切れていた。まあいいや、と思った。そこに書類があることに誰かが気づけば、とっくの昔に捜しにきているはずだ。

あの書類が意味しているのはこうだ――マスターズは誰の名義を使ってでも、偽の保険金支払請求をおこなうことができる。次は彼とマグローとで手形を、あるいは請求に関連したいかなるものをも現金化することができる。その金を彼らの信託口座に入れ、それをセイヤーが表向きだけチェックしていた。じつをいうと、彼らがなぜわざわざ本名を使ったのか、わたしには不思議でならなかった。なぜ架空の人物にしなかったのだろう――そのほうがごまかしやすいのに。そうしていれば、ピーター・セイヤーとその父親はいまも

生きていただろう。もしかすると、あとになって偽名を使いはじめたのかもしれない。契約書に書かれた名前の完全なリストに目を通して、それらをナイフグラインダーズの名簿と照らしあわせる必要がありそうだ。

もうじき四時。アニタがそろそろシカゴに着いている時刻だ。応答サービスへ電話したが、〝イエス〟か〝ノー〟かの伝言を頼んだ者は一人もいなかった。わたしは車にもどり、イーデンズ高速へ引き返した。市内に向かう車の列はのろのろ運転だった。車線の二つが工事中のため、ラッシュ・アワーは悪夢と化していた。わたしは憤慨といらだちを覚えながら、虫の這うような速度でケネディ高速に入った。といっても、次の予定があったわけではない。いらだっていただけだ。次にどうすべきかがわからない。偽の保険金支払手形の件を暴くことも、もちろんできる。しかし、アニタにも指摘したように、マスターズはいっさい知らないと突っぱねるに違いない。ナイフグラインダーズが完璧な診断書を添えてでっち上げただけだというだろう。保険金支払係は事故にあった者たちの身体をじっさいに見るのだろうか。わたしにはわからない。ラルフに話をして、今日わかったことを説明し、マスターズを詐欺行為に確実に結びつける法的な根拠があるかどうか、確かめたほうがいいかもしれない。しかし、それでも充分とはいえない。マスターズを殺人と結びつけることが必要なのだ。なのに、方法が浮かばない。

アディスンの出口を降りたときはすでに五時半になっていて、そのあとさらに、悪戦苦

闘しながら市街地を通り抜けなくてはならなかった。ようやく、穴ぼこだらけだが車はあまり通っていない狭い横丁へ逃げこんだ。ロティの家があるシェフィールド・アヴェニューに出ようとしたとき、両手を広げて罠に飛びこんでいくことになりかねないと気づいた。アディスンの角に終夜営業のレストランを見つけて、ロティに電話を入れた。
「まあ、ヴィク」ロティが出た。「聞いてよ、あのゲシュタポがついに厚かましくも、このアパートメントに押し入ったのよ。連中の目的があなたか、ジルか、マグローって娘さんか、それはわからないけど、とにかくここまでやってきたの」
「わあ、ごめん、ロティ」わたしは胃が重く沈むのを感じた。「心からお詫びするわ。被害の程度は？」
「ううん、それは大丈夫——錠だけよ。ポールがいまここで修理してくれてる。わたしが腹が立ってならないのは、理不尽さなの」
「ほんとね」良心の呵責に責められながら、わたしは答えた。「被害にあったものはひとつ残らず、わたしのほうで責任もって修理させてもらうわ。いますぐ荷物をとりに寄って、そこを引き払うことにする」
わたしは電話を切り、一か八か罠に飛びこんでみようと決めた。わたしがもどってきたことをシュマイセンに知られるとしても、かえってそのほうがいいのではないか——ロティをこれ以上危険にさらすことはできないし、家宅侵入の被害にあわせるわけにもいかな

い。彼女の建物めざして通りを走り抜け、通りに潜んでいるかもしれない狙撃手にはほとんど注意を向けないことにした。見知った顔はひとつもなく、階段を駆け上がるわたしに銃をぶっぱなす者もいなかった。

ポールが玄関のところにいて、ねじまわしでドアに安全錠をとりつけていた。角ばった顔がひどくけわしい。「ひでえ連中だね、ヴィク――ジルの身も危険なんじゃないかなあ」

「それは大丈夫よ」わたしはいった。

「でもさあ、あっちまで行って様子見てこようかと思うんだ」

わたしは笑みをもらした。「うん、それもよさそうね。でも、用心なさい、わかった？」

「平気平気」ハッとするほど魅力的な微笑が浮かんだ。「しかし、あの義兄って野郎から守ってやればいいのか、殺し屋から守ってやればいいのか、わかんなくなるよ」

「あら、両方やればいいのよ」わたしはアパートメントに入った。ロティは奥にいて、裏口のドアの金網をつけなおそうとしていた。熟練した医師の指を持つ女性にしては、あきれるぐらい不器用だ。彼女から金槌をとりあげて、手早く仕事をすませた。彼女のほっそりした顔はきびしくこわばり、口は一直線に結ばれている。

「あなたがポールに警告してくれたおかげで、マゴなんとかって部長刑事さんに診療所ま

た送ってもらえて、ほんとによかったと思ってるわ。あのときはあなたにもポールにもあきれてしまったけど、あのおかげでジルの命が助かったのよね」怒りのせいで、彼女のウィーン訛りはとても強かった。わたしは彼女がジルの身の危険をおおげさに考えすぎていると思ったが、その点について議論するつもりはなかった。彼女と二人でアパートメントをくまなく見てまわったが、何の被害もなかったことに同意しないわけにはいかなかった。高値で売りさばけるものも混じっているはずの医薬品の見本ですら、盗まれていなかった。

アパートメントを調べてまわるあいだじゅう、ロティは罵りの言葉を次から次へと吐き続け、わたしには話せないドイツ語がそこに数多く登場しはじめた。わたしはロティを落ち着かせるのをあきらめて、うなずいたり、低い声で同意を示すだけにしておいた。部屋に入ってきたポールがようやくそれを中断させた。玄関ドアはもう大丈夫、ほかに何かすることはありますか、と訊いてくれた。

「いいえ、あなた、もういいわ。ジルのところへ出かけて、彼女をしっかり守ってあげなさい。あの子に危害が及んだら大変だわ」

ポールは熱っぽくうなずいた。わたしに車のキーを返してくれて、シェヴィはアーヴィング・パーク・ロードをすこしはずれたセミナリー・アヴェニューに置いてあるといった。彼に車を預けっぱなしにしておこうかと思ったのだが、やはりいつでも使えるようにしておいたほうがいい。夜のあいだに何が起きて、行動の必要に迫られるかわからない。

ラリーに電話して、わたしのアパートメントが住めるようになったかどうか確かめてみた。大丈夫だった。新しい錠をあける鍵は一階の住人に預けてあるという。二階のミセス・アルヴァレスより、わずかに友好的な感じだったとのこと。
「さてと、修繕はすべて完了よ、ロティ。やっと家に帰れるわ。昨日のうちに帰って、ドアに釘を打ちつけてでも寝ればよかった。ごめんね。そうすれば、こんなふうに荒らされずにすんだのに」
ロティの口もとが独特のあざけるような微笑にゆがんだ。「バカね、いいのよ、ヴィク、怒りの嵐はおさまったわ。吹きやんだ。いまは一人ぼっちになるのがすこし憂鬱なだけ。二人の子がいなくなったら、きっと淋しいわね。一緒にいるととっても楽しいんだもの……訊くのを忘れてたわ、ミス・マグローは見つかった？」
「わたしも話すのを忘れてた――見つかったわよ。そうだ、彼女が無事新しい隠れ家に落ち着いたかどうか、確かめてみなきゃ」応答サービスへ電話を入れた。例の辛抱強い一団の報告が返ってきた。はい、誰かから電話があり、〝イエス〟という伝言を頼まれました。名前は聞いていませんが、意味はわかるはずとのことでした。わたしは事務所あての電話を、自宅の番号へ転送してくれるように頼んだ。この二、三日、やたら動きまわっていたおかげで、ケリー・ガールに事務所の整頓を頼むのを忘れてしまったが、事務所のドアはいちおう板でふさいである。あそこへ行くのは明日に延ばそう。

ラルフにも電話したが、誰も出なかった。会社にもいなかった。外で食事？　これは焼きもち？　「ロティ、じゃあね。この二、三日、あなたの生活に割りこませてくれて、どうもありがとう。あなた、ジルに強烈な印象を与えたわ。自宅のメイドが文句をいおうとしたんだけど、あの子、〝ロティになったつもりで〟メイドを黙殺したんですって」

「あまりいい考えとはいえないわ――わたしを手本にするなんて。ほんとに可愛い子ね。郊外族のエリート意識にまるで毒されてないんだから、たいしたものよ」彼女はソファベッドに腰かけて、わたしの荷造りを見守っていた。「これからどうするつもり？　殺人犯の正体を暴くことはできるの？」

「梃子を見つけなきゃ」わたしはいった。「誰が犯人かはわかってる――じっさいに拳銃を撃った人間て意味じゃないわよ。それはたぶん、トニー・ブロンスキーって男だろうけど、ひょっとすると、シュマイセンの手下の一人って可能性もあるわ。わたしがいってるのは、弾丸が発射されるのを望んだ人間のこと。それが誰かはわかってるけど、証拠がないの。でも、犯罪の内容がどういうものか、どんなふうにおこなわれたかは、すでにつかんでるわ」キャンヴァス地のバッグのファスナーをしめた。「わたしに必要なのは梃子、ううん、楔かしら」ロティに話しかけるというより、むしろ、自分に対するひとりごとだった。「この男に小さな裂け目を入れるための楔。その男が加わらないかぎり詐欺行為は不可能、と立証できれば、そいつの悪事を暴くことができるんだけど」

わたしは片足をベッドにのせて立ったまま、スーツケースをうわの空で軽く叩きながら考えこんだ。ロティがいった。「もしわたしが彫刻家だったら、あなたの像を彫るところだわ——よみがえった復讐の女神(ネメシス)。きっと何か方法が見つかるわ。顔にそう出てるもの」爪先立ってキスしてくれた。「通りまで送るわ。誰かがあなたを狙い撃ちしたら、出血多量に陥る前にわたしが手早く縫いあわせてあげる」

わたしは笑った。「ロティ、あなたってすばらしい人ね。ぜひとも修繕をお願いするわ」

彼女はセミナリーの角まで送ってくれたが、通りに人影はなかった。「あのマゴなんとかって部長刑事さんのおかげよ」といった。「パトカーでこの界隈を繰り返しまわってるんだわ、きっと。ヴィク、でも、やはり気をつけてね。あなたには母親はいないけど、わたしはあなたのことを娘のように思ってるんだから。あなたの身に何かあったら、耐えられないわ」

「ロティ、それじゃメロドラマよ」わたしは抗議した。「年寄りじみたことはいわないで」ロティは完全にヨーロッパ風のやり方で細い肩をすくめて、皮肉っぽい笑みを浮かべたが、わたしが通りを自分の車に向かって歩いていくあいだ、その目は真剣だった。

17　エルム通りの決闘

ラリーと彼の友人の大工はわたしのアパートメントをきれいに修復してくれた。パネルに花々を彫刻した扉はまさに傑作だった。大工が安全錠を二個とりつけてくれていて、鍵を差しこむとなめらかに静かにまわった。なかに入ると、あたりはこの数ヵ月間絶えてなかったほどどみごとに輝いていた。週末の破壊の跡はどこにも残っていない。ずたずたにされたカウチはラリーが運び出したが、椅子何脚かと予備のテーブルを移動させてその空間が埋めてあった。台所のテーブルの中央に請求書が置いてあった。二人の二日分の手間賃が時給八ドルの計算で、計二百五十六ドル。扉、錠、取り付け料が三百十五ドル。小麦粉、砂糖、豆、スパイス類の補充分と、ベッド用の新しいクッションの代金が九十七ドル。まずまずの料金だ。しかし、誰がわたしに探偵料を払ってくれるのだろう。ジルに頼んで、彼女の信託基金が満期になるときまで、母親から借金してもらおうか。

宝石箱を調べにいった。どういう奇跡か、破壊者たちはわたしの母のわずかな宝物を持ち去っていなかったが、これからは銀行の貸金庫に預けることにして、次の侵入者のため

に残しておかないようにすべきだと思った。ラリーは割れたヴェネチアン・グラスのかけらを捨ててしまったらしい。残しておくよう頼めばよかったが、しかし、そんなことをしても仕方がない。どうせ元にはもどせない。残りの七個は作りつけの陶器用飾り棚で最高の座を占めていたが、それを見るたび、胃のあたりに重いものを感じないではいられなかった。

もう一度ラルフに電話してみた。今度は四回目の呼出音で彼が出た。「どうしたんだい、ミス・マープル」彼は訊いた。「モリアーティ教授を追っかけて、明日まで帰ってこないと思ってたのに」

「予想外に早く教授が見つかってね。いえ、じつをいうと、ピーター・セイヤーの死によって守り抜かれた秘密を、ついに探り出したの。ただし、それを守り抜こうとしたのはピーターじゃないけど。あなたに渡した保険金支払手形のこと、覚えてる？　ファイルは見つかった？」

「いや。じつは紛失ファイルの調査係にまわしたんだが、見つからなかった」

「やっぱりね、それ、ぜったい見つからないわよ。ジョセフ・ギエルチョフスキーが何者か知ってる？」

「なんのつもり？　二十の扉？　あと二十分したら、客がくるんだけど、ヴィク」

「ジョゼフ・ギエルチョフスキーはナイフグラインダーズ組合の副委員長よ。この二十三

年間、一度も組立てラインに立ったことのない人物。彼の自宅を訪ねてごらんなさい。あなたと同じく健康そのものの彼がそこにいるから。あるいは、ナイフグラインダーズの本部を訪ねて会うこともできるわ。保険金の支払いなんかまったく必要とせずに、元気に働いて給料をもらってるわよ」

一瞬、沈黙があった。「その男が詐欺をやって、労働者補償の支払いを受けてるっていうの？」

「違うわ」

「冗談はよしてくれ、ヴィク、健康でありながら損害塡補の手形を受けとってるとすれば、詐欺を働いてることになるじゃないか」

「違うわ」わたしは繰り返していった。「もちろん、手形は詐欺だけど、それを受けとってたのは彼じゃないの」

「へえ、じゃ、誰なんだ？」

「おたくのボス」

ラルフは受話器に向かってわめき散らした。「きみはマスターズに難癖ばかりつけるんだね、ヴィク、もううんざりだ！　あの人はね、まことに尊敬すべき業界で大きな尊敬を受けている企業の、もっとも尊敬される人物の一人なんだ。そんなことに関わっているなどとほのめかす気なら——」

「ほのめかしてるんじゃないわ、はっきりわかってるの」わたしは冷静にいった。「ギエルチョフスキーとそのほかすくなくとも二十二名の健康な人間あてに振り出された手形を現金化するための信託預金口座というか、とにかく、手形を使って支払いを受けるために必要なものを、彼とナイフグラインダーズ組合の委員長であるアンドリュー・マグローが、彼ら自身を共同受託人として設定したってことがわかってるのよ」

「どうしてきみにそんなことがわかるんだ？」ラルフはすさまじい怒りをこめていった。

「それはね、ある人物が電話でわたしに信託証書のコピーを読んでくれるのを、ついさっき聞いたところだから。それから、マスターズとマグローがナイフグラインダーズの本部近くで会ってるとこを、何回も目撃した人物も見つけてあるわ。それから、マスターズがピーター・セイヤーと会う約束をしてたこともわかってる――ピーターのアパートメントで、彼が殺された日の朝九時にね」

「それでもぼくは信じない。ヤードリーの下で働くようになって三年目、その前も十年間、同じ組織で働いてきたんだ。きみが探り出したことにはいずれも――本当に探り出したのならね――別の説明がつけられるに決まっている。信託証書なるものはきみがその目で見たわけじゃない。それから、マグローと食事をするとか、酒を飲むとか、そういったことがあってもおかしくない。たぶん、何かの保障範囲とか、支払請求とかについて、確認をとってたんだろう。そういうのはしょっちゅうやることだ」

わたしはもどかしさのあまり、金切り声でわめきたい気分だった。「いまの話の真偽を確かめにマスターズのところへ行くときは、その十分前にわたしに知らせてちょうだい、いいわね。そうすれば、わたしが駆けつけてあなたを救うのにちょうど間にあうから」

「ぼくが自分のボスに向かって、彼に関するそういう噂に耳を傾けたことを打ち明けて、自分の出世の道を閉ざすとでも思ってるのなら、どうかしてるよ」ラルフはわめいた。

「じつをいうと、あと何分かしたら当人がここにくる予定なんだ。部長にそんな話をするほどぼくが間抜けじゃないってことは、楽に保証できる。もちろん、あのギエルチョフスキーの手形が詐欺ならば、それで多くの説明がつく。その件だけは彼に話すからね」

頭の上で髪が逆立つような気がした。「なんですって。ラルフ、あなたの純真さときたら、まったく信じられないわ。どうしてマスターズが訪ねてくるの?」

「きみにそんなことを訊く権利はないんだぜ」彼はどなった。「まあ、話すだけは話してやるよ。きみがあの手形を見つけて、大騒ぎを始めたんだからな。あれぐらい高額の請求になると、営業所の査定係を通さずに本社が直接扱うことになっている。ぼくは今日、担当者たちのところをまわって、誰がそのファイルを扱ったか訊いてみた。覚えのある者は一人もいなかった。これだけ高額のファイルを長年にわたって扱っている者がいれば、忘れるわけがない。どうにも合点がいかなかったんで、今日の午後、部長に電話したついでに——今週ずっと欠勤でね、ぼくが日に一度、自宅へ電話を入れることになってるんだ——

――そのことを話してみた。

「ええっ、なんてことを！　すべてぶちこわしじゃないの。マスターズは、それは重大な問題だっていったんでしょ、違う？　そして、今晩別の用事で市内へ出かけなきゃならないから、ついでにあなたのところへ寄って話しあいたいっていったのね。そうでしょ？」

わたしはかっかしながらいった。

「ああ、そうさ、そのとおり」彼はどなった。「さあ、行方不明になった誰かのプードルでも捜しに出かけて、損害査定部をかぎまわるのはやめることだ」

「ラルフ、すぐそっちへ行くわ。ヤードリーが入ってきたら、入ってきたらすぐ、わたしがくるっていうのよ。そしたら、あなたのろくでもない寿命が二、三分は延びるかもしれない」わたしは彼の返事も待たずに、乱暴に受話器を置いた。

腕時計を見た。七時十二分。マスターズは二十分以内にやってくる。ほぼ二十分以内とすると、彼が到着するのは七時半ごろ、もしかしたらもう二、三分早いかもしれない。運転免許証、拳銃所持許可証、私立探偵許可証を、いくらかの金とともに尻ポケットに突っこんだ――こんなときに財布は持ちたくない。銃を点検。ジャケットのポケットに余分の弾丸を入れる。ランニング・シューズにはきかえるのに、四十五秒無駄にしてしまった。油を差した新品のデッドボルトをロックして、階段を一度に三段ずつ駆け降りた。車までの半ブロックを十五秒で走る。車のギアを入れ、レイク・ショア・ドライヴに向かう。

なぜきょうは、シカゴのろくでなしどもが一人残らず外に出ているのだろう、そしてなぜ、ベルモント・アヴェニューにこんなに大勢集まってきたのだろう、と腹立ちまぎれに考えた。それからなぜ、こちらが交差点に差しかかるたびに信号が変わり、黄色になったとたん、前を走るくそじじいは信号を渡ろうとしなくなってしまうのだろう。いらいらとハンドルを叩いたが、車の流れはいっこうに速くならない。警笛を鳴らし続けたが、それも無駄だった。自分を落ち着かせるために、何回か深呼吸した。ラルフ、あなたはバカよ。この二週間に二人の人間を殺害させた男に、自分の命を差し出すなんて。マスターズが名門校出身を示すネクタイをしめていて、あなたが彼のチームに属しているというだけの理由で、彼が犯罪に手を染めるはずはないと考えるなんて。わたしはバスの横をかすめて、シェリダン・ロードまで信号にひっかからずに走り続け、ドライヴの入口に着いた。七時二十四分。スピード違反者たちを速度違反取締り装置から守ってくれる守護神に祈りを捧げて、モンザのアクセルをいっぱいに踏みこんだ。七時二十六分にドライヴを出て、ラサール通りに入り、それと平行に走る裏通りを使ってエルム通りに向かう。七時二十九分、ラルフの建物の隣にある消火栓のそばに車を乗り捨てて、なかへ駆けこむ。

この建物にはドアマンがいない。二十四のボタンを矢継早に押した。数人がインターコムから、「どなた?」とがなり立てたが、誰かがブザーを押してわたしを入れてくれた。いかに多くの押し込みがこの方法でおこなわれようとも、相手が誰かを確かめもせずにア

パートメントの建物に入れてやる知恵足らずの間抜けは、つねに何人か存在する。エレベーターが降りてくるまでに一世紀か二世紀かかった。しかし、いったん降りてくると、あっというまに十七階までわたしを運んでくれた。廊下を走ってラルフのアパートメントへ急ぎ、スミス&ウェッスンを握りしめてドアをがんがん叩いた。

　ドアがあいた瞬間、壁にぴたりと身体をつけ、アパートメントの床に転がって銃を突き出した。ラルフが呆然とわたしを見ていた。「いったい何をやらかすつもりだ？」といった。室内にはほかに誰もいない。

「いい質問ね」わたしはそういって起き上がった。

　呼鈴が鳴り、ラルフはブザーを押しにいこうとした。「きみ、帰ってくれてもかまわないぜ」といった。わたしは動かなかった。「せめて、そのいまいましい銃はしまってくれよ」わたしは拳銃をジャケットのポケットに入れたが、銃を握った片手は離さなかった。

「ひとつだけ、わたしのいうことを聞いて」わたしはいった。「ドアをあけたら、その陰に隠れて。戸口に立っちゃだめ」

「このろくでなしの、バカ女――」

「バカ女なんていったら、あなたの背中を撃つわよ。ドアをあけたら、それを楯にして、そのけちな身体を隠すのよ」

　ラルフはわたしをにらみつけた。二、三分後にノックの音が聞こえると、彼はまっすぐ

CamScannerでスキャン

に玄関へ行き、ドアをあけて、わざと自分の身体がドアの枠のなかにすっぽりおさまる位置に立った。わたしはドアと平行の壁ぎわへ移動して、身をこわばらせた。銃声は響かなかった。

「いらっしゃい、ヤードリー。おや、どうしたんです?」と、ラルフがいっていた。

「この子は近所のお嬢さんで、ジル・セイヤー。それから、こっちはわしと一緒にきてくれた友人たちだ」

わたしはぎくっとして、ドアのところへ行き、顔をのぞかせた。「ジル?」

「きてたの、ヴィク?」澄んだかぼそい声がわずかに震えた。「ごめんなさい。ポールから電話があって電車でくるっていうから、駅まで迎えにいこうと思って、町のほうへ歩きはじめたの。そしたら、ミスター——ミスタ・マスターズが車であたしを追い越してから停まって、乗せてってくれるっていったの——それで——それであたし、あの書類のこと訊いて、そのまま無理やりここまで連れてこられたの。ごめんなさい、ヴィク。何もしゃべっちゃいけなかったのね」

「いいのよ、ハニー」といいかけたわたしを、マスターズがさえぎった。

「ほう、きみもきてたんだね。もうすこししたら、きみと、ジルが敬愛してやまない例のウィーンのドクターを訪ねようと思っていたのだが、おかげで出かける手間が省けたよ」

マスターズはわたしが抜いた銃を見て、しゃくにさわる笑みを浮かべた。「わしがきみな

ら、その銃は片づけるだろう。ここにいるトニーはやたら弾丸(たま)をぶっ放したがる男でね、きみだって、ジルの身に何かが起きるのを見るのはいやだろう」

トニー・ブロンスキーがマスターズのうしろから部屋に入ってきていた。彼と一緒にいるのはアールだ。ラルフは夢からさめようとする人間そっくりに、しきりと頭を振っていた。わたしは拳銃をポケットにしまった。

「この子を責めちゃいかん」マスターズはわたしにいった。「しかし、そもそもはきみがこの子を巻き添えにしたのが悪いんだ。マーガレット・セイヤーからこの子が帰ってきたと聞いたとたん、家族の誰にも知られずにこの子と話をする方法はないものかと考えた。その矢先に当人がシェリダンを歩いてたんだからね、願ってもない幸運さ。しかし、この子から話を訊き出すにはかなり手こずった。そうだね、ジル」

彼女の顔の横側に、無残な傷がついているのが見えた。「やるじゃない、マスターズ」わたしはいった。「幼い少女をぶちのめしてるときが、一番気分がいいようね。おばあさんと一緒のときのあなたを見てみたいものだわ」確かに彼のいうとおりだ。ジルをロティの家に連れていき、マスターズとシュマイセンが誰にも知られまいとしていた事柄を教えてしまったわたしは、やはり軽率だった。しかし、自分への非難はあとまわしにしよう——いまはそんなことをしている暇はない。

「このあま、片づけやしょうか」トニーが幸福に目をぎらぎらさせ、Z字形の傷痕をまる

で生傷のように紅潮させながら、荒々しくいった。

「まだだ、トニー」マスターズが答えた。「女がどこまで知ってるのか、そして誰に話したのかを訊き出さんことには──きみもだ、ラルフ。このポーランド女をこんなとこまで引きずりこむとは、なんとも残念な話だ。ぎりぎりの必要に迫られないかぎり、きみを撃つつもりはなかったんだが、こうなった以上、やらねばならんようだ」彼はシュマイセンのほうを向いた。「アール、こういうことにかけては、わしよりもきみのほうが経験豊富だ。こいつらを始末する一番いい方法はなんだね」

「ウォーチョスキーのあまの拳銃をとりあげるこった」アールがきいきい声でいった。「次にこいつと男をカウチに並んですわらせる。トニーが両方に狙いをつけられるようにな」

「聞こえたかね」と、マスターズがいった。わたしに近づいてきた。

「いかん」アールが甲高く叫んだ。「その女に近づいちゃいかん。銃は床に捨てさせるんだ。トニー、ガキに銃を向けろ」

トニーは彼のブローニングをジルに向けた。わたしはS&Wを床に落とした。アールがきて、それを片隅へ蹴とばした。ジルの小さな顔は血の気を失い、ひきつっていた。

「カウチへ行け」マスターズがいった。トニーは相変わらず銃でジルを狙っている。わたしはカウチに近づき、腰を降ろした。カウチは堅くて、その点だけはありがたかった──

すわっても身体が沈まないからだ。体重を両方の足にかけた。「歩け」アールが甲高い声でラルフに命じた。ラルフは呆然としていた。細かい汗の粒が顔をおおっている。わたしの横にすわるために近づいてくる途中で、厚い絨毯に足を取られてよろめいた。

「ねえ、マスターズ、あなたの作ったこの汚水だめ、臭くてたまんないわ。蓋をしようと思ったら、シカゴ中の人間を片っ端から殺してまわらなきゃならないわよ」わたしはいった。

「ほう、そう思ってるのかね。きみ以外に誰が知っているというのだ」彼は相変わらず、しゃくにさわる笑みを浮かべている。わたしの手は彼の下顎を砕いてやりたくてむずむずした。

「ふん、《スター》紙がかなりつかんでるわ。わたしの弁護士も。それから、ほかにも二、三人。あなたが新聞社の記者全員を撃ち殺したら、いくらここにいるちびのアールでも、警官たちを買収することはできなくなるわね」

「ほんとなんですか、ヤードリー」ラルフが訊いた。口を突いて出た声が、しわがれた、ささやくような声だったので、彼は咳払いをした。「そんなこと信じません。ヴィクから話を聞いたときだって、信じられなかった。あなたがピーターを撃ったなんて、嘘ですよね」

マスターズは優越感に満ちた小さな笑い声を上げた。「むろん嘘だとも。ここにいるト

ニーが撃ったのだ。ただ今夜と同じように、わしも一緒に行く必要があった。トニーを建物内へ入れるためにな。それから、アールも従犯者としてついてきた。ふつうは、アールは顔を出さんのだが、なあ、アール？　しかし、わしらとしてはあとあといかなる脅迫も受けたくないのでな」

「それは名案ね、マスターズ」わたしは彼をほめた。「アールのお尻があんなにブヨブヨなのは、ここ何年も後生大事にかばってきたからなのよ」

アールは真っ赤になった。「あばずれめ、そんな口叩きやがると、トニーがてめえを撃つ前に、もういっぺんこっぴどくぶちのめしてやる！」彼はきいきいわめいた。

「いうじゃない、アール」わたしはマスターズを見た。「アールみずから人を殴ったことは、一度もないのよ」と、説明した。「タマがないせいだろうと思ってたけど、先週、その考えは誤りだとわかったわ、そうでしょ、アール」

アールはわたしの狙いどおりに、こちらに突進してきたが、マスターズが彼を引きもどした。「落ち着け、アール、この女はおまえを挑発してるだけだ。あとで好きなように料理するがいい。こいつがどこまで知ってるのか、そしてアニタ・マグローがどこにいるのかを、こっちが訊き出したあとでな」

「そんなの知らないわ、ヤードリー」わたしは明るくいった。

「はったりはよせ」彼はそういうと、身をかがめてわたしの口もとを殴りつけた。「きみ

は今朝早く姿を消した。シュマイセンの命令で路地を見張っていた役立たずは眠りこけ、きみはそのすきに脱け出した。だが、わしらは、きみが昨夜のUWUの集会で会った娘どものうち何人かに質問をして、このトニーが連中の一人を——説得して、アニタがどこへ逃げたかをしゃべらせたのさ。しかし、正午にウィスコンシンのハートフォードに着いてみると、アニタは消えていた。そして、レストランの女がきみの人相をくわしく話してくれた。その女、姉さんがジョディ・ヒルを連れもどしにきたと思ったようだ。さあ、アニタはどこなんだ」

アニタをせき立て、一刻も早くハートフォードを離れようという気にさせた衝動に、わたしは無言で感謝の祈りを捧げた。「あなたたちの計画には、ジルが見つけた信託証書の原本に書かれてた二十三の名前のほかにも、多くの名前が使われたに違いない」わたしはいった。「一人あたり週に二百五十ドルとしても、シュマイセンのような男を雇う料金にもなりゃしないもの。二十四時間ぶっとおしで、わたしに監視をつけてたでしょ。すごい料金だったんじゃないの、マスターズ」

「トニー」マスターズがさりげなくいった。「娘をぶってくれ。思いきり」

ジルは息をのんだが、悲鳴は抑えつけた。たいしたものだ。みごとな勇気。「その子を殺してごらん、マスターズ、わたしを止めるものはなくなってしまうわよ。あなたもドジなことやってるわね。トニーがジルから銃を離した瞬間に、ジルは床にころがってあの大

きな椅子の陰に隠れ、わたしがトニーに飛びかかって、首の骨をへし折ることになる。それから、トニーがジルを殺したときも、結果は同じ。だから、いいこと、あなたたちがジルを痛めつけるとこを見るのはいやだけど、そんなことをすれば、そっちだって武器を使いはたすことになるのよ」

「いますぐウォーチョスキーのあまを殺しちまえ」アールがわめいた。「どうせてめえは、遅かれ早かれ殺される運命よ」

マスターズが首を横に振った。「マグローの娘の居所を訊き出すのが先だ」

「いい考えがあるわ、ヤードリー」わたしは提案した。「ジルとアニタを交換しない？　あなたがこの子を表に出して家に帰してくれたら、アニタの居所を教えるわ」

マスターズはそういわれて考えこみ、愚かにも一分を無駄にした。「わしのことをよっぽどのバカだと思ってるのか。ジルを解放すれば、警察を呼ぶに決まっている」

「もちろん、大バカだと思ってるわ。かつてディック・トレイシーがいみじくもいったように、悪党はみんなバカよ。あのいんちき口座に保険金を払いこませるためのいんちき請求者を、あなた何人ぐらい抱えてるの」

マスターズはまたしても、うわべだけの愉快そうな笑い声を上げた。「そうだな、現在は三百人近くかな。国内のさまざまな地区に分散させてある。あの信託証書はすっかり時代遅れだが、ジョン・セイヤーは人数がどこまで膨れ上がったかを確認するために、わざ

わざ原木を引っぱり出して調べるようなまねは、一度もしなかった」
「口座を黙認することに対して、彼はどんな報酬を得ていたの？」
「わしは小癪な口を利く女の質問に答えるために、ここにきたのではない」ヤードリーは相変わらず愛想よく、相変わらず穏やかにいった。「きみがどこまで知っているかを知りたい」
「そうね、どっさり知ってるわ」わたしは答えた。「有罪の証拠となるあのファイルを持ってピーター・セイヤーが訪ねてきたあと、あなた、マグローに電話してアールの名前を教えてもらったんでしょ。誰を始末するつもりかマグローに話さなかったものだから、マグローはピーターの死を知って狼狽した。あなたは彼をのっぴきならない立場に追いこんだわけね。彼はあなたが銃を持ってわが子を捜してることを知りながらも、共犯証言をすることができない。というか、それだけの勇気が出ない。だって、あなたのところへプロの殺し屋を送った以上、事前従犯になるんだもの。次へいきましょうか。あなたはセイヤーに、ピーターが殺される原因となった犯罪に彼も一枚加わっていたのだと告げ、息子の死の調査を打ち切るよう説得した。無理やり調査を続けさせれば、セイヤーの家名に傷がつくだろうし、彼も銀行での地位を失うことになるだろうといって。セイヤーは二日のあいだその残忍なニュースと戦ったあげく、このままではとても生きてゆけないと決心して、あなたに電話をかけ、息子の死の共犯者にはならないと告げた。そこであなたはここにい

るすてきなかわいいトニーに命じて、次の朝、セイヤーが州検事のところへ出かける前に射殺させてしまった」わたしはトニーのほうを向いた。「昔に比べて腕が落ちたわね、トニーちゃん。セイヤー邸の外で待ち伏せしてたあなたを目撃した人物がいるのよ。その目撃者は現在護衛つき――あなたが機会のあるうちに、つかまえておかなかったからよ」

　シュマイセンの顔がまたもや赤くなった。「目撃者がいたのに、気づかなかったってのか」その甲高い声が出せるかぎりの大声を上げて、きいきい叫んだ。「大バカ野郎、いったいいくら払ってやったと思ってんだ？　ど素人がほしいときはな、おれはそこらの通りから引っぱってくるんだよ。それに、フレディのやつときたら。金もらって見張りに立っといて――誰も見かけなかった？　てめえら、そろいもそろって役立たずの能なしだ！」

シュマイセンは腹立ちまぎれに、そのぶよぶよの小さな腕をポンプのように上下に振っていた。わたしはラルフを盗み見た。顔が真っ赤だ。ショックを受けたのだろう。いまのわたしにはどうすることもできない。ジルが小さな笑みを見せた。わたしの伝えようとしたことを理解したのだ。トニーが銃を振り上げた瞬間に、彼女は椅子の陰へ転がりこむだろう。

「わかった？」わたしは吐き捨てるようにいった。「こうへまばかりやらかしたんじゃ、死体をあと三つ積み重ねたところで、あんたたち、助かりっこないわ。前にいったでしょ。アール、ボビー・マロリーは木偶の坊じゃないって。彼の縄張りで四人の人間を殺して無

事に逃げおおせると思ったら、大間違いよ」
アールはにたにた笑った。「おれはまだ一度も、殺しの罪をかぶったことはないんでね、ウォーチョスキー、知ってんだろ」
「ウォーショースキーよ、ろくでなしのドイツ人さん。ポーランドの笑い話がどうしてあんなに短いかご存じ？」わたしはマスターズに訊いた。「ドイツ人にも覚えられるようにって配慮よ」
「いい加減にしろ、ウォーチョスキーだかなんだか知らんが」マスターズがいった。部下の社員たちに聞かせるときのような、いかめしい声だった。「マグローの娘がどこにいるか白状しろ。きみの考えてるように、ジルはいずれ殺される運命だ。わしはそんなことはしたくない。赤ん坊のころから知ってる子だからな。だが危険をおかすわけにはいかん。まあ、ひとつだけきみに選択のチャンスをやろう。トニーにこの子を殺させるとき、一発きれいに撃たせてそれで終わりにしてもいいし、きみの見ている前でこの子をレイプさせて、それから殺してもいい。マグローの娘がどこにいるか白状すれば、この子に屈辱を味わわせずにすむんだぞ」
ジルは真っ青だった。灰色の目が顔のなかで大きく黒く見える。
「まあ、すごいわね、ヤードリー」わたしはいった。「あなたがた男性的な殿方を見てると、ほんとにうっとりするわ。あなたが命令すれば、トニーがその子を犯すっていうの？

彼が拳銃を持ち歩いてるのはなぜだと思う？　立たないからよ。一度も立ったことがないの。だから、手に大きなペニスを握りしめて歩いてるのよ」

わたしはしゃべりながら両手を脇に降ろして、カウチの上で突っぱった。トニーが顔を紅潮させ、喉の奥で未開人のような叫びを上げた。わたしのほうを向いた。

「いまよ！」わたしは叫び、ジャンプした。ジルは肘掛椅子の陰に飛びこんだ。トニーの弾丸は大きくはずれ、わたしは一息で彼に飛びかかると、銃を持った彼の手に、骨が砕けてしまいそうな強烈な空手チョップを見舞った。トニーは激痛に悲鳴を上げ、ブローニングを落とした。わたしが身体をひねると同時に、マスターズが銃をとろうと突進してきた。わたしは床を蹴ってすべりこみをやったが、彼のほうが一瞬早くたどり着き、すさまじい勢いですわりこんだ。立ち上がりながら、ブローニングをわたしに向けて振りまわし、わたしは思わず二、三歩うしろへ下がった。

トニーが撃った銃の音がラルフを正気づかせていた。カウチにすわったまま電話のほうへにじり寄って受話器をとる彼の姿が、わたしの目の端に映った。マスターズもそれに気づき、向きを変えるなり彼を撃った。マスターズが向きを変えたわずかな瞬間に、わたしは床に伏せて部屋の隅へ転がり、スミス&ウェッスンをつかんだ。マスターズがこちらを向いてわたしを撃とうとした刹那、わたしが彼の膝を撃った。彼は痛みに不慣れだ。驚きの混じったすさまじい苦悶のうめきを上げて、床に倒れた。乱闘に加わっているようなふ

りをして背後で跳びはねていたシュマイセンが、銃をとろうと飛び出してきた。わたしは彼の手を狙って撃った。練習不足で弾丸はそれたが、シュマイセンはとにかくうしろへ飛びのいた。

わたしはトニーにスミス&ウェッスンを突きつけた。「カウチにすわって。さあ」涙が彼の頬を伝っていた。右腕が妙な具合に垂れている。わたしが尺骨をへし折ったせいだ。

「あんたたち、ごみくずよりも汚らしい連中だわ。三人まとめて撃ち殺したらせいせいするわね。州の税金の節約にもなるし。一人でもあの銃に手を出そうとする者がいれば、殺してやる。アール、あんたのでぶでぶの身体を、カウチのトニーの横まで運びなさい」彼は母親からいきなりお尻をぶたれた二歳の子供そっくりに見えた。顔全体がぐしゃぐしゃにゆがんでいて、いまにもわっと泣き出しそうだ。しかし、トニーの横へ移動した。わたしはカウチの二人に銃口を向けたまま、ブローニングを拾った。マスターズは絨毯に血を流している。動く気配はまったくない。「警察はこの銃が気に入るでしょうね」わたしはいった。「ピーター・セイヤーを撃った弾丸はこの銃から発射されたに違いないもの。そうでしょ、トニー」

ジルに声をかけた。「まだそこで生きてる、ハニー?」

「ええ、ヴィク」彼女のかぼそい声がした。

「よかった。じゃあ、出てきて、わたしがいまからいう番号へ電話をかけてね。警察を呼

んで、ここにあるごみを持ってってもらわなくちゃ。それから、ロティにも電話したほうがいいわね。ここに呼んでラルフを診てもらうの」ロティが腕をふるう余地が、彼のなかにいくらかでも残っていることを祈った。彼はぴくりとも動かないが、わたしがそばへ行くことはできない。部屋の向こう端に倒れているため、そこまで行くにはカウチと電話台が邪魔なのだ。

うずくまっていた肘掛椅子の陰からジルが出てきた。きゃしゃな卵形の顔はまだ蒼白で、身体がすこし震えている。「わたしのうしろまできて、ハニー」わたしは彼女に命じた。「それから、二回深呼吸して。あと二、三分したら、気を楽にして、身体のなかから何もかも吐き出しちゃってかまわないけど、いましばらくはしっかりしててちょうだい」

ジルはマスターズが血を流して倒れている床から顔をそむけて、電話のところへ歩いていった。わたしはマロリーのオフィスの番号を教え、彼を呼び出してもらうように命じた。今日はもう帰ったそうよ、と彼女が報告した。彼の自宅の番号を教えた。「マロリー警部補はいらっしゃいますか」澄んだ礼儀正しい声で、彼女は尋ねた。彼が電話口に出ると、わたしはジルに電話機を持ってくるように、しかしぜったいわたしの前へは出ないようにといった。

「ボビー？　ヴィクよ。イースト・エルム通り二〇三番地からかけてるの。そばにアール・シュマイセンと、トニー・ブロンスキーと、ヤードリー・マスターズっていうエイジャ

ックスの人間がいるわ。マスターズは膝の骨を砕かれてるし、ブロンスキーは尺骨を折られてる。それから、ピーター・セイヤーを撃つのに使われた銃もここにあるわよ」

マロリーは受話器に向かって、こっちの鼓膜が破れそうな大声でがなり立てた。「こいつは何かの冗談かね、ヴィッキー」

「ボビー、わたしは警官の娘よ。こんな冗談はぜったいいわない。イースト・エルム通り二〇三番地。部屋番号は一七〇八。あなたがくるまで、三人を殺さないよう我慢してるわ」

18 血は黄金よりも濃し

時刻は十時、小柄な黒人の看護師が、「本来ならお入れするわけにいかないんですけど、あなたがみえるまで患者さんが眠ろうとしないものですから」といった。わたしは彼女のあとから、ラルフが寝ている病室へ入っていった。その顔には血の気がほとんどなかったが、灰色の目には生気がよみがえっていた。ロティは傷口の手当てにあざやかな腕前を発揮し、パサヴァント病院の外科医はロティの処置をそこなうことなく包帯をとりかえただけであった。ロティは自分でもいっているように、数多くの銃創を手がけてきたのだ。

ポールはロティと一緒に、あたふたとラルフのアパートメントに駆けつけてきた。ポールがウィネッカに着き、ルーシーを力ずくで押しのけて邸内に入ったのは、マスターズがジルを拾った二十分ほどあとのことだった。彼は邸からまっすぐロティのところへ行った。二人はわたしに電話をかけ、ジルの行方不明を知らせるために警察にもかけたが、幸いなことにロティの家の電話のそばに待機していた。

二人が到着すると、ジルは泣きながらポールの腕に飛びこみ、ロティは独特のしぐさで

頭を振ってみせた。「いい考えがあるわ。この子をここから連れ出して、ブランディを飲ませてやって」それから、血を流して部屋の隅に倒れている意識不明のラルフに注意を向けた。弾丸は彼の右肩を撃ち抜き、骨と筋肉をめちゃめちゃにしながらも、反対側へきれいに抜けていた。

いま、わたしは病院のベッドに横たわる彼を見下ろしている。彼は左手でわたしの右手をとって、弱々しく握りしめている。かなり麻酔が効いているようだ。わたしはベッドに腰かけた。

「ベッドから離れてください」小柄な看護師がいった。

わたしは疲れ果てていた。地獄へ失せろといってやりたかったが、さんざんな目にあったあげくまたもや病院を相手に戦うことになるのでは、たまったものではない。立ち上がった。

「あやまるよ」ラルフはややろれつのまわらぬ舌でいった。

「気にしないで。結果的に見れば、ああなるのがたぶん一番よかったのよ。どうすればマスターズの尻尾がつかめるか、わからなくて困ってたんだもの」

「いや、しかし、きみのいうことを聞くべきだった。きみがまともにものをいってるなんて、ぼくには信じられなかった。たぶん、心の奥底では、きみの探偵商売をまじめに受けとってなかったんだね。お遊びだと思ってたんだ。ドロシーの絵のように」

わたしは何もいわなかった。

「ヤードリーはぼくを撃った。ぼくは彼の下で三年も働いてたのに、彼の正体が見抜けなかった。きみは彼に一度会っただけで、ああいう男だってことを見抜いてしまった」言葉は不明瞭だが、その目は屈辱と怒りに燃えていた。

「そんなふうに自分を責め続けるのはおやめなさい」わたしは穏やかにいった。「チームの一員になるのがどういうことか、わたしにもわかってる。チームメイトが、味方のクォーターバックがそんなことするなんて、夢にも思わないわよね。わたしは外部の人間だったから、別の角度から見ることができたのよ」

彼はふたたび黙りこんだが、わたしの指を握る手に力が加わったところをみると、眠ってはいないらしい。やがて彼はいった。「ぼくはきみをずっと愛してたんだ、ヴィク、だけど、きみはぼくを必要としていない」彼の口もとがゆがみ、彼は涙を見られまいとして横を向いた。

喉がこわばり、わたしは一言も言葉が出せなかった。「そんなことない」といおうとしたが、はたしてそうなのかどうかわからなかった。わたしは涙をこらえ、咳払いした。

「マスターズを捕えるためにあなたを利用しようなんて、そんな気はなかったわ」わたしの言葉は耳ざわりでしゃがれていた。「あなたが好きだったのよ、ラルフ」

彼はかすかに頭を振った。そのとたん、苦痛に顔をゆがめた。「それじゃ、同じとはい

えない。つきあっても、どうにもなりゃしないよ」
わたしは身を切られるような思いで彼の手を握りしめた。「そうね。どうにもならないわね」こんなに泣きたい気分でなければいいのにと思った。
わたしの指を握った彼の手から、次第に力が抜けていった。眠ったようだ。小柄な看護師がわたしをベッドから追い立てた。わたしは一度も振り返らずに病室を出た。
このまま家に帰り、酒を飲んでベッドにもぐりこむか、酔いつぶれるか何かしたい気分だったが、マリに記事を提供する仕事が残っているし、アニタを監禁状態から救い出す仕事も残っている。パサヴァント病院のロビーから、マリに電話を入れた。
「きみのことがそろそろ心配になりかけてたんだぜ、ヴィク」彼はいった。「シュマイセン逮捕のニュースがたったいま入ってきて、それから、警察に詰めてるおれの助手から、ブロンスキーとエイジャックスの部長がクック郡の警察病院に収容されたって、知らせてきたとこなんだ」
「そうよ」わたしはぐったり疲れていた。「事件はほぼ片づいたわ。アニタが隠れ家から出てきても、もう大丈夫。いまから迎えに行って、父親のところへ連れていくわ。あの二人、いずれは会わなきゃならないのなら、早いほうがいいと思うの」しゃべれるようになるが早いか、マスターズがマグローを密告することは間違いないし、わたしとしても、マロリーより一足先に彼に会っておきたかった。

「オーケーよ」マリがいった。「リックのロビーで待ちあわせて。向こうの家へ行く途中で事件の話を聞かせてくれ。そのあと、頑なで老練な組合活動家が実の娘と再会する感動的な場面を、何枚か撮ることにする」

「りょうかい、マリ。ロビーで待ちあわせて、だいたいのあらすじだけは話してあげる。でも、ダンがあなたに一緒にきてほしいといったら、きてもいいけど、期待はしないで。だけど、記事のほうは心配しないで。あなたの特ダネが街中をあっといわせるのよ」

わたしは電話を切り、歩いて病院を出た。いずれ、わたしの口からボビーに一部始終を話さなくてはいけないだろう。救急車がきたとき、わたしはロティとラルフと一緒にあの場を去り、てんてこまいのマロリーは玄関を出るわたしに、「きみの話を聞かなきゃならん！」とどなることしかできなかったのだ。今夜はボビーと話をする気分にはなれなかった。ジルはもう大丈夫。それが唯一の慰めだ。しかし、かわいそうなアミタは——それでもわたしには、警察が駆けつける前に、彼女を父親のところへ連れていく義務がある。

病院からリックまでは、わずか四ブロックだった。夜は澄みわたって、暖かく、わたしを抱きしめてくれる。いまのわたしには母親が必要で、母なる夜は闇の腕でわたしを包んでくれる親しい仲間のように感じられた。

エレガントで粋なリックのロビーは、地下と一階に浮かんでいる。豊かな雰囲気がわたしの気分をいらいらさせた。わたしのほうも、ここにはあまりそぐわないようだ。ト

昇するエレベーターの鏡を張った壁面に、ジャケットとジーンズを血で汚し、髪には締も入れていない、だらしない自分の姿が映っていた。マリを待ちながら、ホテルの警備員が飛んでくることを半ば覚悟していた。マリと警備員は同時にやってきた。

「恐れ入りますが、マダム」男は礼儀正しくいった。「一緒にいらしていただけませんか」

マリが笑い出した。「ごめん、ヴィク、けど、その格好じゃ無理もない」彼は警備員のほうを向いた。「ぼくはマリ・ライアスン、《スター》紙の記者だ。この人はV・I・ウォーショースキーといって、私立探偵をしている。二人でおたくの泊まり客を迎えにきただけだから、すぐに出てくよ」

警備員は難しい顔でマリのプレス・カードを見てから、うなずいた。「わかりました。マダム、お差し支えなければ、フロント近くでお待ちいただけませんでしょうか」

「いいですとも」わたしは丁重に答えた。「おたくの宿泊客の大部分は、血といったら、ふつうのタルタル・ステーキに含まれてる以上のものは見たこともないんでしょうね……そうだわ、ミスタ・ライアスンがミス・マグローを連れにいってるあいだに、顔と手を洗わせてもらえない？」

警備員はほっとした表情で、支配人のオフィスにある個人用の洗面所へわたしを案内した。

わたしは一番ひどい汚れをこすり落とし、顔を洗った。洗面台の上の戸棚に櫛があっ

たので、髪を整えた。全体として、ずっと見栄えがよくなった。リッツにふさわしい姿ではないかもしれないが、入ったとたんにつまみ出される人間ではなくなった。

ロビーにもどると、アニタがマリと一緒に待っていた。疑わしげな表情でわたしを見た。

「もう危険はないって、マリがいうんだけど」

「そうよ。シュマイセンも、マスターズも、シュマイセンの用心棒も、みんな逮捕されたわ。お父さんも逮捕されるだろうけど、その前に話をしておきたくない？」マリの目がぽかんとあいた。わたしは彼がしゃべり出すのを防ぐために、その腕に手をかけた。

アニタはしばらく考えこんだ。「ええ」ようやくいった。「今日、何度も何度もそのことを考えたの。あなたのいうとおりね――あとに延ばせば延ばすほど辛くなる」

「おれも一緒に行くよ」マリがいった。

「だめ」アニタはいった。「こないで。新聞にすべてをさらけ出すのはいやなの。話はあとでヴィクから聞いてちょうだい。でも、これだけは記者の人たちに遠慮してもらいたいの」

「わかったわね、マリ」わたしはいった。「今夜もっと遅い時刻に、わたしをつかまえるといいわ――どこがいいかな。そうだ、ダウンタウンのいつものバーにいるから」

アニタとわたしはエレベーターに向かった。「どこのバー？」彼がうしろから追いかけてきて尋ねた。

CamScannerでスキャン

「フェデラルとアダムズの角にある〈ゴールデン・グロー〉よ」
わたしはタクシーを頼んで自分の車までもどった。ロビーの張り番をするために残された警官だろうが、仕事熱心なのがいて、車のフロント・ガラスに駐車違反のチケットを貼りつけていた。消火栓をふさいだかどで罰金二十ドル。警察は奉仕し、そして保護する。
疲れがひどすぎて、車の運転と話を同時にするのは無理なような気がした。ハートフォードとここの往復三百マイルを走ったのはまだ今朝の話で、おまけに昨夜はほとんど眠っていない。いまになってすべての後遺症が出はじめている。
アニタは彼女個人の悩みに気をとられていた。父親が住むエルムウッド・パークの家までの道順をわたしに説明したあとは、黙ってすわったまま、窓の外をながめていた。わたしは彼女に好意を持っていたし、深い共感も抱いていたが、精根尽き果てたいまは、手を差しのべて彼女に何かを与えることはできなかった。
ループから西の郊外へ延びるアイゼンハワー高速道路に入り、五マイルばかり走ったところで、アニタが口を利いた。「マスターズはどうなったの？」
「わたしとラルフ・デヴローを消し去るために、金で雇った手下を連れて乗りこんできたわ。ジル・セイヤーをつかまえて——あの子を人質に使ったの。わたしは苦心の末に殺し屋に飛びかかってそいつの腕を折り、マスターズの足を使えなくしてやった。ジルは無事よ」

「ほんと？　あの子、とってもいい子なの。あの子の身に何かあったら、あたし、辛くてやりきれなかったと思うわ。ジルに会ったことはある？」
「ええ、二、三日一緒に暮らしたのよ。たいした子だわ、あなたのいうとおり」
「ピーターにそっくりなの。母親は着るものと全身美容のことしか頭にないすごく自己中心的な人だし、姉は木の登場人物として誰かがこしらえたんじゃないかと思うような、ちょっと信じられない存在。でも、ジルとピーターはどちらも――どちらも……」彼女は言葉を捜し求めた。「……自分に自信を持ってて、でも、世の中にもしっかり目を向けてるわ。ピーターにとっては、あらゆることがつねに興味の的なの――いえ、的だった――なぜそういうことが起きるかとか、どうやって問題を解決するかとか。どんな人とでも仲良くなろうとした。ジルもよく似てるわ」
「あの子、どうやらプエルト・リコの男の子に恋してるみたい。ウィネッカではまだしばらく大騒ぎが続くでしょうね」
アニタが小さくくすっと笑った。「きっとそうだわ。あたしのときよりひどいわよ――あたしは労働組合の指導者の娘だったけど、すくなくとも黒人やスペイン系ではなかったもの」しばらくしっと黙りこんだ。やがてこういった。「この一週間で、あたしの人生はすっかり変わったわ。というか、さかさまにひっくり返ったような気がするわ。あたしの人生はすべて組合を中心に動いてたの。ロースクールに進んで、組合の弁護士になるつも

りでいたの。いまは——それが一生を捧げる価値のあることだとは思えなくなった。大きな空虚な穴があいてるの。何で穴をふさげばいいのか、あたしにはわからない。それに、ピーターもいない——あたしは組合とピーターを同時に失ってしまった。先週は恐ろしさが先に立って、それに気づく暇がなかったの。いまようやく気がついたわ」
「そうね、わかるわ。しばらくはその状態が続くわよ。人と死別した悲しみはなかなか癒えないもので、いっきに消し去ることはできないわ。わたしも父が死んで十年になるけど、折りに触れて、父を亡くした悲しみが続いてることを思い知らされるような出来事にぶつかるし、悲しみの一部はいまもまだ胸のなかに残ってるわ。一番辛い部分はそう長くは続かないものよ。でも、続いてるあいだは無理に忘れようとしないことね——悲しみと怒りは押しのけようとすればするほど、処理するのに時間がかかるものだわ」
アニタはわたしと父の生活について、もっと話を聞きたがった。郊外へ出るまでの残りの道中を、わたしはトニーの話をするのに費やした。父の名前がアールの雇った間抜けな殺し屋と同じだとは、妙なものだ。わたしの父は、わたしのトニーは、いくぶん夢見がちなところがあり、理想主義者で、警察にいた長い年月のあいだ、一度も人を撃ったことのない男だった——宙に向かって威嚇射撃をしたことはあるが。トニー・ウォーショースキーのために殺された人間は一人もいない。ボビーにはそれが信じられなかった。わたしははっきり覚えている。トニーの死が迫っていたころのことだ。ある晩二人は話をしていた。

ボビーはあのころ、夜になると始終きてくれて、そして、警察にいたあいだに何人の人間を殺したかと父に訊いたのだ。トニーは人に怪我をさせたことすらないと答えた。

沈黙が二、三分続いたあとで、わたしはずっと頭を悩ませていた小さな疑問を思い出した。「偽名のことなんだけど、訊いていいかしら。お父さんが初めてわたしのところにきたとき、あなたのことをアニタ・ヒルっていったわ。ウィスコンシンでのあなたは、ジョディ・ヒルと名乗ってた。あなたを危険から遠ざけておくためにしては、あまり利口とはいえない偽名をつけたものね。でも、どうして二人ともヒルって名前を使ったの?」

「まあ、共謀したわけじゃないのよ。でもジョー・ヒル（アメリカの労働運動指導者）は昔からずっと、あたしたちの憧れの英雄だったの。あたしは無意識にジョディ・ヒルって名前を思いついたの。父もたぶん同じ理由で、その名前を選んだんじゃないかしら」

高速道路の出口に着き、アニタが詳しい道順を説明しはじめた。家の正面で車を停めたとき、彼女はしばらく何もいわずにじっとすわっていた。やがて、こういった。「一緒に入ってって頼むべきかどうか迷ってたの。でも、きてもらうのが本当ね。今回のいろんな出来事の出発点――というか、あなたが巻きこまれたそもそもの出発点こそ、父があなたを訪ねたことだったんだもの。それに、事件が終わったことを父があなたの話抜きで信じてくれるかどうか、あたしには自信がないの」

「いいわよ」わたしたちは連れ立って家のほうへ歩いていった。玄関の外に男が一人すわ

っていた。
「ボディガードよ」アニタがわたしにささやいた。「あたしの記憶にあるかぎり、父はいつもボディガードをつけてたわ」大声で彼女は呼びかけた。「ただいま、チャック。あたしよ、アニタ——髪を染めたの」
男は不意を打たれて驚いた。「お嬢さんは姿をくらましちまって、何者かがピストル片手にお嬢さんを捜しまわってるって話だったが。大丈夫ですかい？」
「ええ、大丈夫、ぴんぴんしてるわ。父はいる？」
「はい、家んなかにお一人で」
わたしたちは家に入った。広い敷地に建てられた、こぢんまりした平屋だった。アニタはわたしを案内して居間を通り抜け、床が一段低くなったファミリー・ルームへ出た。アンドリュー・マグローがテレビを見ていた。わたしたちの足音を聞きつけて振り向いた。一瞬、短い黒髪のアニタが誰なのかわからない様子だった。次の瞬間、飛び上がった。
「アニー？」
「そうよ、あたし」彼女は静かにいった。「ここにいるミス・ウォーショースキーがパパの依頼どおり、あたしを見つけてくれたの。ヤードリー・マスターズを撃って、アール・シュマイセンに雇われた殺し屋の腕を折ってくれたわ。三人ともいまは留置場。だから、もうなんでも話せるのよ」

「本当か」彼は訊いた。「きみがブロンスキーの腕をへし折り、マスターズを撃ったというのか」

「そうよ」わたしはいった。「でも、いいこと、あなたの災難はまだ終わっちゃいないのよ。マスターズはある程度回復するが早いか、しゃべり出すに決まってるもの」

彼はがっしりした四角い顔に不安を浮かべて、わたしからアニタへ視線を移した。「おまえ、どこまで知ってるんだ？」やっとそれだけ訊いた。

「かなり知ってるわ」アニタは答えた。彼女の声には敵意はなかったが、よそよそしくて、話しかけている相手のことをあまり知らないし、知りたいと望んでいるかどうかもわからない人間がしゃべっているような声だった。「あたしが知ってるのは、パパが不正な保険金請求でお金をせしめるために、組合を隠れみのにしてたってこと。それから、ピーターがそれに気づいて、ヤードリー・マスターズのとこへ相談に行ったってこと。マスターズはそのあとパパに電話して、パパから殺し屋を紹介してもらったんでしょ」

「待ってくれ、アニー」わたしが以前に聞いた腹立たしげなどなり声とはずいぶん違う、低い切迫した口調で、彼はいった。「信じてくれ、ヤードリーから電話があったとき、わたしは相手がピーターだとは知らなかった」

アニタは部屋の入口で足を止めたまま、シャツ姿で立ち上がった父親を見下ろしていた。わたしは脇に退いた。「わかってないのね」アニタの声がかすかに震えた。「関係ないわ。

相手が誰かを知ってたかどうかなんて、関係ない。問題なのは、パパが組合を詐欺に利用してて、マスターズが殺し屋を必要としたとき、パパが殺し屋と知りあいだったってこと。パパがピーターを平然と撃たせるはずのないことは、あたしにもわかってる。でもね、あんな結果になったのは、パパが殺し屋に人を射殺させる方法を知っていたせいなのよ」

彼は無言のまま考えこんでいた。「うん、わかっている」ようやく、さっきと同じ低い声でいった。「おまえの死体を見せられ、娘の命を奪ったのが自分であることを痛感させられるのではないかと思いながら、十日間もここにじっとすわりこんでいたわたしに、それがわからなかったとでも思うのか?」彼女は何もいわなかった。「聞いてくれ、アニー。おまえと組合――それがこの二十年間、わたしの人生のすべてだった。十日のあいだ、その両方を失ったと思いこんでいた。いま、おまえはもどってきた。組合のほうはあきらめるしかないだろう――なのに、おまえのことまであきらめて、やっていけというのか?」

わたしたちの背後では、テレビの画面に映った甘ったるい笑顔の女が、どこかのシャンプーを買うようにと、しきりにこの部屋に向かって勧めていた。アニタは父をじっと見つめていた。「昔と同じにはなれないわ、そうでしょ。あたしたちの生活、土台から崩れてしまったのよ」

「わたしを見るんだ、アニー」彼はざらついた声でいった。「この十日間ろくに寝てないし、食事もしていない。どこかでおまえの死体が発見されたというニュースが流れるのを

待ちながら、テレビばかり見ていた……マスターズの一歩先を行けると思ったわたしは、ここにいるウォーショースキーに、おまえを見つけてほしいと依頼した。しかし、あの連中はおまえが姿を見せしだい、おまえを始末する気でいるのだとわかって、依頼をとり消さねばならなくなった」

彼はわたしを見た。「きみの推理は正しかった――ほとんどすべての点で。セイヤーの名刺を使ったのは、きみの心にやつのイメージを植えつけるためだった。愚かなことだ。わたしがこの一週間にやったことは、すべて愚かだった。アニーの身が危ないと知ったとたん、わたしは度を失い、狂おしい衝動に引きずられて行動してしまった。きみに腹を立ててたわけじゃない、わかってくれ。きみがアニーを見つける前に手を引いてくれることだけを、神に祈ってたんだ。アールがきみを見張っているとすれば、きみがやつを娘のところへまっすぐ案内することになるからな」

わたしはうなずいた。

「ギャングなんかと知りあいになったのが、間違いのもとだったのかもしれない」彼はアニタに話しかけた。「しかし、つきあいが始まったのはずっと昔のことだった。おまえが生まれる前のことだ。あの連中と関わりを持ったが最後、逃れることはできん。ナイフグラインダーズは当時、相当な荒くれ者の集団だった。おまえがいまのわれわれを荒っぽいと思ってるのなら、あのころの姿を見せてやりたいよ。一方、大手の工場主どもは、われわれ

われを殺して組合を閉め出すために、全員がごろつき連中を雇っていた。われわれのほうも、組合を認めさせるためにギャングを雇った。ただ、一度関わりを持つと、用心棒を追い払うことはできなくなる。手を切りたければ、ナイフグラインダーズを脱けるしかない。だが、わたしにはそれができなかった。わたしは十五のとき、組合の職場委員になった。おまえの母親に会ったのは、ウェスタン・スプリングズ刃物工場でピケを張ったときで、あれはハサミをねじで止める子供だった。組合はわたしの命だった。そして、シュマイセンのような連中は組合につきものの汚点だったんだ」

「でも、パパは組合を裏切ったのよ。マスターズと共謀して偽の請求を始めたときに、組合を裏切ったんだわ」アニタはいまにも泣き出しそうだった。

「そう、おまえのいうとおりだ」彼は髪を手でしごいた。「たぶん、わたしがいままでにやったなかで一番愚かなことだろう。ある日、コミスキー公園でマスターズがわたしに近づいてきた。何者かがわたしを指し示して彼に教えていた。何年も捜し続けていたのだろう――手口を思いついたものの、保険金支払手形をやつのもとへ送る外部の人間が必要だったからね。

わたしの目には金しか映らなかった。足もとを見る気にはなれなかった。もし見ていれば……昔聞いた何かの話に似ているな。確かギリシャ人だったと思うが、強欲な男がいて、神々に贈り物をせがんだという――手に触れたものすべてが黄金に変わるようにといって。

困ったことに、こうした神々は人間を苦しめるようにできている。つねにこちらがねだったものを与えてくれるが、それは結局、こちらの望みには合わないものなのだ。うん、この男もわたしと似ている。男には命よりも大事な娘がいた。しかし、足もとを見ることを忘れた。男の手が娘に触れたとき、娘も黄金に変わってしまった。それがわたしのやったことだ、そうだろう？」

「ミダス王ね」わたしはいった。「でも、彼は悔い改め、神々は彼を許して、娘を生き返らせてくれたわ」

アニタは態度を決めかねている様子で、父親を見つめた。彼はきびしい顔からいっさいの虚飾をはぎとり、懇願するように視線を返した。マリが彼の特ダネを待っている。わたしは別れの挨拶はしなかった。

訳者あとがき

月日のたつのは早いものだ。『サマータイム・ブルース』の初版が早川書房から拙訳で出版されたのが一九八五年だから、サラ・パレツキーと彼女の探偵V・I・ウォーショースキーが日本に紹介されたときから、すでに四分の一世紀が過ぎたわけだ（ちなみに、原作 ***Indemnity Only*** のアメリカでの出版は一九八二年）。

わたし自身も翻訳の仕事を始めてすでに三十年、奇しくも同じ一九八二年に最初の訳書『アニー』を出している。以後、翻訳者生活の大部分をV・Iと共に送ってきたことになる。

シリーズを三作目まで訳したとき、突然、自分の目でシカゴを見たくなった。V・Iのシリーズにはシカゴの街がリアルに描かれている。ミシガン湖、レイク・ショア・ドライヴ、エルと呼ばれる高架鉄道、V・Iが車で走りまわる市内や郊外のさまざまな風景。シカゴの地図を広げて、V・Iが車で走る道筋をたどりながら翻訳作業を進めるうちに、わ

ナーヴァスなかで、シカゴへ行きたいという思いが膨らんでいった。

そこで、大好きなシカゴを訪れ、サラ・パレツキーにもインタビューしたいと思い、エージェントを通して了解をもらった。生まれて初めてのアメリカにワクワクしつつ、まずはニューヨークに到着したが、ここでいきなりめげた。ニューヨーカーの早口英語がさっぱり理解できない。レストランで出される料理がすべて大盛り。わたしにしては珍しく、対人恐怖症と自信喪失状態に陥り、回復の兆しもないままシカゴへ移動。シカゴの料理はさらに大盛りだった。ピザを頼むとチーズが毛布に見えた。サラダの皿はバケツに見えた。よけい自信が失せた。

パレツキーと会う約束の日の前夜は、もうパニック。何を質問すればいいの？　気むずかしい人だったらどうしよう？　インタビューなんて大それたことを考えなきゃよかった、と後悔しきり。軽い吐き気が続いていた。

でも、翌日、約束の時刻にホテルのロビーに迎えにきてくれたパレツキーは、装いも雰囲気もふんわりした人で、ガチガチに緊張していたわたしを優しく包みこんでくれた。自宅にお邪魔してインタビュー。しどろもどろで質問すると、こちらの意図を的確に察して、懇切丁寧な答えを返してくれるので、涙が出るほどありがたかった。インタビューを無事終了すると、不思議なもので、吐き気も消えた。

今回、『サマータイム・ブルース〔新版〕』を出すにあたって、かつて自分が訳した文章

を読み返しているうちに、そのときのことも含めて、二十五年間の出来事があれこれとなつかしく思いだされた。

だが一方、この四半世紀で世界が大きく変わったことを実感させられた。

まずはテクノロジーの進歩。本書にはパソコンはほとんど登場しない。依頼人への報告書は、IBMからダイレクトメールがきているが、ヴィクは興味を示さない。依頼人への報告書は、母親の形見であるオリヴェッティのタイプライターで打っている。携帯はもちろん持っていない。シリーズの最近の作品がパソコンと携帯抜きでは成り立たないことを思うと、隔世の感がある。

二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件以来、アメリカ社会は変貌を遂げ、探偵として働くヴィクの身辺にも暗い影が忍び寄っている。テロ事件のあとのアメリカを舞台としたシリーズ十一作目『ブラック・リスト』では、FBIによる盗聴や尾行に苛立つヴィクの姿が鮮明に描きだされている。

そうした最近の作品に比べると、『サマータイム・ブルース』には古き良き時代のハードボイルド小説の雰囲気が色濃く漂っていて、読んでいても、なんとなくホッとさせられる。やくざの親分に徹底的に痛めつけられたり、事務所や自宅を荒らされたりして、ヴィクがハードな状況に置かれていることは事実だが、この時代の彼女には、尾行を恐れて携帯の電源を切る必要も、スパイもどきの隠密行動をとって姿をくらます必要もなかった。

閉塞を強いられている女性のフラストレーションを発散させているような痛快な雰囲気は、当時のアメリカ社会に受け入れられたのだろう。

しかし、出版の世界が変わっても、ヴィクの本質は変わっていない。本書で颯爽とミステリの世界に登場した彼女は、四半世紀たってもなお、身体を張って巨悪に立ち向かい、弱者に寄り添う優しさをもち、ウィットに富んだ会話で読者を魅了しつづけている。シリーズの途中で、さまざまにトーンダウンした時期もあったように思うが、最近の作品では元気なヴィクに戻ってくれて、こちらもホッとしている。翻訳者として、今後も彼女と仲良くつきあっていきたいと願っている。

二〇一〇年十月

解説

文芸評論家
池上冬樹

海外ミステリの分野で女性探偵もののブームが起きたのが、八〇年代後半である。ブームという一過性の言葉ではなく、これが常態といえるほど、女性探偵ものの隆盛はその後も続き、現在に至っているのだが、その女性私立探偵小説のブームの火付け役であり、牽引者が、アルファベット・シリーズでおなじみのスー・グラフトンであり、本書のサラ・パレツキーであった。

だが、この二人を語る前に、七〇年代の私立探偵もののブームを語らなくてはいけないだろう。このブームによりハードボイルド・ミステリの書き方、またはヒーロー（ヒロイン）像が大きく変化したからである。

一九七〇年代のアメリカでは、ハメット／チャンドラー／ロス・マクドナルドといった古典的なハードボイルド作家に対抗して、独自のハードボイルド・ヒーローが輩出した。

六〇年代の学生運動やヒッピー・ムーヴメント、公民権運動の高まりやヴェトナム戦争反対の動きなどをうけて、おもにアンチ・ヒーローたちが新世代の作家たちによって生み出されたのである。いわゆる〝ネオ・ハードボイルド〟（小鷹信光）の時代だ。

たとえば代表的な作家とデビュー作をあげると、ジョゼフ・ハンセンの同性愛の保険調査員が探偵役の『闇に消える』（一九七〇年）、マイクル・Z・リューインの暴力嫌いの市井派探偵が活躍する『A型の女』（七一年）、ビル・プロンジーニの肺ガンの恐怖に怯える探偵が主人公の『誘拐』（同）、ロバート・B・パーカーの先祖返りのマチズモ探偵が正義を遂行する『ゴッドウルフの行方』（七三年）、ローレンス・ブロックのアル中探偵が謎を解く『過去からの弔鐘』（七六年）といった具合に、後に有名シリーズになるものが多数でたのである。

これらネオ・ハードボイルド派の特徴をあげるなら、ヒーローの世俗化であり、私立探偵小説のいっそうの私小説化である。ハードボイルド・ミステリだから謎解きは必要だが、積極的に解かれなくてはいけないミステリではなく、事件を通して人物たちの混乱や対立、さらにヒーローの個人的問題を優先的に語る謎含みの普通小説でも構わなくなった。いちだんと普通小説的な拡がりと面白さが求められるようになった。

そんな男性作家たちの活躍を見ていた女性作家たちも、

説を書くようになった。

お驚くべきことは、訳者の小泉喜美子（大のチャンドラー・ファンでもある）がいうように、〝これはいわゆる本格推理物〟だろう。あるエッセイでマラーは、シリーズをはじめた目的を、〝古典的なパズル・ミステリを用いて、探偵小説の世界にはまったくいないような現代的な女性私立探偵を登場させたかった〟と述べているけれど、結果的には女性探偵の性格よりも謎解きの比重が大きかった。

マラーの『人形の夜』から遅れること五年の一九八二年、女性探偵ものの横綱格になるサラ・パレツキーとスー・グラフトンがデビューを果たした。パレツキーは『サマータイム・ブルース』でV・I・ウォーショースキーを、スー・グラフトンは『アリバイのA』でキンジー・ミルホーン・シリーズをスタートさせた（今日まで続く二大女性作家の名シリーズだ）。もちろんパレツキーやグラフトンの作品にもマラー作品同様に謎解きはあるけれど、それ以上に女性探偵としての徹底した職業意識、社会悪とぶつかってもゆるがない信条、タフな行動力、そして私生活における脇筋が大きく割かれていて読み応えがあった。

この二人が創造したウォーショースキーもミルホーンも、ハメット／チャンドラー／ロス・マクドナルドに代表される、アメリカの代表的なサブ・ジャンルであるハードボイルド・ミステリの伝統の流れをくむものである。つまり卑しき街をひとり行く孤高の騎士の女性版だ。ハードボイルド・ミステリといえば男性作家の専売特許だったものを、女性作

[illegible]

[illegible]

物語は、十月のある夜、銀行の専務と名乗る男が訪れてくる場面から始まる。息子のピーターの恋人[illegible]が行方不明なので探してほしいという。ツィッグが調査を開始すると、ピーターの惨殺死体と出会う。さらに依頼人であるピーターの父親の専務は、オフィスに来た男[illegible]

と別人であることがわかる。依頼人は誰なのか。アニタは無事なのか。そもそも誰が殺したのか。ヴィクは調査を続け、事件の真相に迫る。

舞台は一九八〇年代前半のアメリカ、訳者もあとがきで書いているように、ここ三十年弱で世界ががらりと変わり、とくに生活においてはパソコンと携帯が必需品になっているけれど、この小説に携帯もパソコンもないのに、古さを感じないのは、ヴィクの一人称一視点が生き生きとしているからだろう。ハードボイルドにかかわらず、なんでもそうだが、語り口が生き生きしていないと小説そのものがだめである。

まず、〝夜の空気はねっとりと湿っていた〟という、冒頭のさりげない季節感の描出がいい。そのあとに、よどんだ大気のなかに香水のごとくただよう腐った魚の臭いを嗅ぐあたり、主人公のいる場所と季節、さらにかすかなヒロインの倦怠感が伝わってきて、これもいい。アメリカのみならず海外の小説全体にいえるが、季節感が乏しく、いったいどういう時季で、どのように感じているのかがわからない。たとえ季節や天候が書かれていても、ほとんどがト書きふうの説明で、舞台となる街の雰囲気や主人公の心理まであらわさないのに、パレツキーは至る所で天候や風景を描きながら、探偵が住むシカゴの街の様子と自分の心理状態を間接的に浮かび上がらせる。

いいのは、季節感だけではなく、冒頭の依頼人との対話やそのあとの友人たちの交流をみればわかるように、キャラクターの描きわけも実に巧みである。また、自分がおかれて

いる状況を独白でシニカルに捉え、探偵らしい信条と、さまざまな人生を見てきた観察者の眼差しで、相手を際立たせる手際もいい。てきぱきとした物語の運びも、切れのいいリアルな会話も（デビュー作なのに）練達の域だ。

今回、新鮮に覚えたのは、労働組合の暗部だろうか。日本のマスコミでは労働組合批判はタブーに近かったが、多数の労働組合が支持母体である民主党政権の誕生により、そのタブーもなくなりつつある。本書で描かれる暗黒街と労働組合の癒着といったものも、やくざが巧妙に企業を買収し、フロント企業としてカムフラージュして生きている現状をみれば日本社会でもありうるだろう。

考えてみれば、パレッキーはいつもヴィクを大きな権力と闘わせてきた。ヴィクは権力の壁とぶつかり、格闘することが多い。スー・グラフトンの女性探偵キンジー・ミルホーンの調査するものがわりと地味な事件が多いなか、パレッキーは毎回舞台を変えて、社会的な犯罪のただなかに、ヴィクを没入させていく。本書は暗黒街と労働組合であったが、二作目以降は海運業界の『レイクサイド・ストーリー』（八四年）、カトリック教会の『センチメンタル・シカゴ』（八五年）、医学業界の『レディ・ハートブレイク』（八七年）、化学薬品業界の『ダウンタウン・シスター』（八八年）、不動産業界の『バーニング・シーズン』（九〇年）、会社ぐるみの年金詐欺『ガーディアン・エンジェル』（九二年）、ホームレス救済組織の『バースデイ・ブルー』（九四年）、冤罪と刑務所の『ハード・タ

イム』（九九年）、保険金詐欺の『ビター・メモリー』（二〇〇一年）、9・11以後のアメリカの人種問題とテロリズムの『ブラック・リスト』（〇三年）、故郷の下層社会を描く『ウィンディ・ストリート』（〇五年）、そしてシカゴの政界を舞台にした新作『ミッドナイト・ララバイ』（〇九年／ハヤカワ・ミステリ文庫近刊）に続いている。

このテーマの変遷をみると、一九八五年にデビューしたポスト・ネオ・ハードボイルドの旗手アンドリュー・ヴァクス（『フラッド』『赤毛のストレーガ』）を思いだす。ヴァクスは毎回のように児童虐待をテーマにしていたが、八〇年代後半、翻訳された作品を読んでも、日本人にはもうひとつ実感に乏しかった。それが十数年たって日本でも児童虐待が騒がれるようになり、アメリカ社会の犯罪がいずれ日本でも起こりうることが如実にわかった。

そのことはヴィク・シリーズを振り返ればわかる。医学、不動産、年金、ホームレスと、翻訳されたときはさほど切実に日本の問題として考えられなかったのに、いまではみな身近な問題として迫っている。ヴィク・シリーズが凄いのは、ヴィクにとことん追及させることである。社会問題化している犯罪が多く、問題解決もきわめて困難で、ヴィクの知力と体力の限界を試すようになるのだが、ヴィクはそれを躊躇しない。ひるまない。

本書でも、終盤の第十七章「エルム通りの決闘」を見ればわかるが、敵と対峙しても一歩もひかず、軽口を放ち、相手を挑発し、ときに皮肉をとばして愚弄するなど、とてもし

たたかだ。しかし本書以降、国際紛争によって一層緊張が増し、ザックの職務と良心の葛藤まで試すことがたびたびになる。

ザックはもっともフェミニスト、弱い者たちに味方するヒーローであり、そのために性差別主義者や旧弊な価値観をもつ人物と闘い、ときに傷つきながらも決して屈することなく、体をはって事件の核心へとたどりついていく。そんなときだからこそ、目的が正しいと思い込んだらもう一途だ。そんな、容赦を知らない人だから、つきあっていくのは大変だ。ときとして犯人に劣らぬほど、ザックは正論をはき、対象にからんでいく。その過程における暴力との対峙、犯人・友人・知人との奇妙な関係がこのシリーズの最大の読み所であり、ここに「ハーフデイ・ブルー」以降は、ときに読むのが辛くなるほど、ザックは事件のみならず苦しんで、若者たちとの関係においても苦しみの時代に入っていく。

しかし、だからこそ、この真摯で、ひたむきな生きかたに心が打たれるのだ。生きがたき時代を生きることになり、真っ正面から生き抜いていこうとする一人の女性の姿を、ここまでリアルに描いたシリーズはないだろう。だからこそ貴重であり、ミステリのみならず普通小説としても高く評価され、多くの読者の賛同を得ているのである。

二〇一〇年七月